

紀 要

第 60 集

論 文

研究ノート・報告

郡 山 女 子 大 学

2024-3

論文

目次

1970年代の「農山漁家生活水準調査」に見る農村家庭生活 ー福島県の生活改良普及員・専門技術員の視点からー	知野 愛	3
保育マップ型記録が捉える遊びの構造	安部高太朗 吉田 直哉	19
本来感研究の動向と課題 2	折笠 国康	35
保育者養成における「絵本の読み聞かせ」の自己教育モデルの構成 ～PDCAサイクルと自己調整学習の社会的認知モデルの視座から～	佐々木郁子	47
『音楽的情動調整による保育技法の開発』 ー幼児期の子どもたちへの情動調律応用アプローチー	宇治 和子 横溝 聡子	57
幼稚園教諭・保育士養成校における実習での音楽実技についての考察 ～アンケート調査を通して～	深谷悠里絵 佐々木郁子	73
打楽器奏者による演奏と作曲の一考察 ー黎明期の朝吹英一氏の足跡を辿ってー	會田 瑞樹	93
色を使った造形活動による個性の萌芽について ー学生と幼児が取り組んだモザイク画作品の比較からー	松田 理香	113
福島県内の非山林に生育するコシアブラの放射性セシウム濃度	武地 誠一 金子依里香 郡司 尚子 影山 志保	129

Articles

CONTENTS

Life of Farming Families as Seen in the "Survey of Living Standards of Farming and Fishing Communities" in the 1970s: From the Perspective of Fukushima Prefecture's Extension Workers of improvement of living conditions and Technical Specialists CHINO Ai	3
The Structure of Play as Captured by Activity Map Recordings Kotaro Abe Naoya Yoshida	19
The Trend and Issues of Research on Sense of Authenticity 2 Kuniyasu Orikasa	35
Composition of the Self-education Model of "Picture Book Reading" in Childcare Provider Training : From the Perspective of the PDCA Cycle and the Social Cognitive Model of Self-Regulated Learning Ikuko Sasaki	47
Development of childcare techniques using musical emotional regulation Kazuko Uji Toshiko Yokomizo	57
A Study of Practical Music Skills in Practical Training at Kindergarten Teachers and Childcare Workers Training Schools ~ Through a Questionnaire Survey ~ Yurie Fukaya Ikuko Sasaki	73
Consideration of performance and composition by percussionist —About the pioneer, Eyichi Asabuki— Mizuki Aita	93
Confirmation of the emergence of individuality through modeling activities using color : Comparison of mosaic works created by students and children Rika Matsuda	113
Radiocesium Contamination in Koshiabura (Eleutherococcus sciadophylloides) grown in the Non-forestland in Fukushima Prefecture Seiichi Takechi Erika Kaneko Naoko Gunji Shiho Kageyama	129

1970年代の「農山漁家生活水準調査」に見る農村家庭生活

— 福島県的生活改良普及員・専門技術員の視点から —

Life of Farming Families as Seen in the "Survey of Living Standards of Farming and Fishing Communities" in the 1970s: From the Perspective of Fukushima Prefecture's Extension Workers of improvement of living conditions and Technical Specialists

知 野 愛

CHINO Ai

This paper examines the specifics of farm household life in the 1970s through the contents, results, and evaluation of the "Survey of Living Standards of Farmers and Fishermen," and discusses the thoughts of the extension workers of improvement of living conditions and technical specialists who were involved in the survey. Although what was revealed was only a part of farmer's life, many of the points made in the agricultural extension journal are also pertinent to current issues. The survey attempted to measure quality of life through scientific indicators. Some of the "Life Improvement Groups" worked on how to improve the low standard items in the survey results. The extension workers and technical specialists pointed out that it is a mistake to think that material wealth is the true wealth of home life.

はじめに

戦後農村の生活改善普及事業において、1972(昭和47)年度に「農山漁村地域生活水準診断調査及び向上対策事業」が開始され、福島県では翌1973年に「農山漁家生活水準調査」が実施された。

その調査結果と評価等は「農友」昭和50年12月号に掲載されているが、福島県では「農山漁家生活水準調査」という調査名であるため、本稿ではこの表記を用いる。

調査実施の1973(昭和48)年は、10月から第一次オイルショックが始まった年であり、当時の国民生活白書のテーマは「日本人の暮らしとその質」(1973年)、「不安の時代の克服のために」(1974年)、「変わる生活・変わる世代」(1975年)、「暮らしを見直し、新しい豊かさを求めて」(1977年)と続き、全国的に「真の生活の豊かさ」とは何かと問い直した時期であった。

1971年からは減反政策が本格化したということであり、当時の「農業白書」には「専業農家は全戸数の2割以下になった」とあるように兼業農家が非常に増加していたという背景がある¹。

本稿では、前述の「農友」特集記事を中心に取り上げ、生活改良普及員(生改)や専門技術員(専技)²が当時の農家生活状況をどのようにとらえ、生活の豊かさをどう考えていたかを当時の記述から抽出し考察する。当時危機感をもって語られたことは、現在の私達の直面している問

題でもある。現在の生活を問い直す上での示唆を得ることを目的とする。以上がこの研究に取り組む意義である。

1. 先行研究の検討

高度経済成長期の生活改善普及事業や生活水準調査に関する先行研究については次の通りである。

市田(岩田)知子(1995)³は、「生活改善普及事業の理念と展開」において、「昭和40年から10年間生活改善課長を務めた矢口光子もまた、生活を総合的に『診断』することの大切さを強調した。それは急激な経済成長の中で物質的豊かさが最優先されることへの危惧の念、あるいは自殺や離婚の増加に見られるような社会的不安増大への危惧の念と結びついていた」と述べている⁴。また、「生活改善普及事業の目的は、今後も変わることなく、農家の生活水準(経済、時間、労働、空間、物質)および生活環境を引き上げることであり、その方法は教育的手段によることとして続けられる」、「生活改善の対象は農村生活であり、農村婦人ではない。従ってたんなる婦人問題として取り扱うのではなく、生活水準をひきあげるところに主眼があるはずである」という矢口の言葉を紹介している⁵。

天野寛子(2001)⁶は、「農山漁村地域生活水準調査」は「1972・1973年度に28県、1974年度に17県の調査が実施された全国的な生活診断である」こと、このような大規模な調査が実施された理由は、「兼業収入を含む農家所得が上昇する中で『農家生活』が崩壊しつつあるのではないかという当時の生活改善課の問題意識にある」ことを指摘し、矢口生活改善課長のまえがきの言葉を紹介している。「生活水準の概念も一般に定着しておらず、生活水準は何をもって測るかということが課題となっているのが実情である」と。また「『家庭生活が明るく仲良く健康的に』ということが全面的に打ち出されており、男女の平等や、女性の個人としての権利や地位向上は問題にされていない」と指摘している。

その他に、生活改善普及事業に関する研究は多くの蓄積がありそれらに依るところが大きい。本稿では、福島県の生活改良普及誌「農友」を中心的資料として、福島県での「農山漁家生活水準調査」の実施状況や内容と結果、特にその結果を生活改良普及員・専門技術員がどう考えたのかに焦点をあてる。それを通して農家生活の当時の状況を知るとともに、普及職員達が何を問題視していたのかを明らかにすることを目的とする。なお、調査名称に漁家も含まれているが、本稿では漁家については浜通りのいわき農業改良普及所の記述に漁家戸数が登場するものの、ほとんどが農家を対象に論じることとなる。

2. 研究の方法

主な資料は「農友」昭和45年～54年分である。「農友」は、1911(明治44)年から2003(平成15)年、第1030号まで続いた月刊誌であり、福島県農業総合センター所蔵の貴重な資料である。

発行は福島県農友会であり、会の前身は、1899(明治32)年に発足した福島県農事講習同窓会である。

1911(明治44)年から発刊したが、正確には月刊誌となったのは1916(大正5)年4月からである。第二次世界大戦中は一時休刊、戦後復刊し、1969(昭和44)年から、農業改良普及誌として編集されるようになった。平成14年度に改良推進員制度が廃止されるようになった影響を受け、本誌購読部数が大幅に減少したこともあり、平成15年12月号通巻1030号で廃刊となった。

3. 結果

(1) 生活改善普及事業の中での本調査の位置づけ

福島県のその当時の生活改良普及員重点活動事項をみると、「生活設計の樹立(1971～1975年)」、「家事作業の分担(1971～1974年)」、「労働の適正化推進(1974年～)」を目標に掲げ⁷、暮らしの見直しが図られ「生活設計」⁸の考え方を浸透させようとしていた。

福島県の生活改善普及活動を時期ごとの特徴をまとめたものが表1である。⁹

1965年頃からは、農業事情の急激な変化により農村の生活が複雑多岐になり生活圏が拡大した。そして「主婦の過剰労働の軽減と労働の適正化」や「子供の家庭教育の充実」や「快適で楽しみの多い民主的な家庭生活の実現」という目標も掲げられていた時期であった。1975～1983年は、専業農家と兼業農家や非農家の混住化が進み、村落の社会的機能が低下した。そのような背景の中で1972(昭和47)年以降に本調査は全国的に実施され、福島県では1973(昭和48)年に実施されたということになる。

表1 福島県の生活改善普及活動の経過

	年	特徴	内容
1	1948(S23)～ 1950	カマド改善期	この時期のカマドは煙突もロストルもなく熱効率が悪く非衛生的だったためカマド改善を進めた。
2	1951～ 1957	グループ育成 期	集落の中で生活改善を実行しようとする地縁的集団、また既成集団の中に生活改善実行グループを育成するための活動が展開された。生活改善模範部落を設置し濃密指導活動を進めた。
3	1958～ 1964	家事作業合理 化期	各地に生まれた多数のグループを核として波及効果を狙って活動を展開した。家族の健康維持、家庭生活の合理的運営、家族関係の民主化等の問題が多く取り上げられる。合理化としては、台所の能率的設備器具の整備、働き方の工夫、家事作業の機械化(電気製品の活用)の指導。家庭生活の計画化としては、家計簿の記帳、日用品の共同購入、生活時間の計画化。家族関係の民主化では家族会議、嫁と姑との話し合い等を指導した。

1970年代の「農山漁家生活水準調査」に見る農村家庭生活

4	1965～ 1974	住宅改善期	農業事情の急激な変化が、農村の生活を複雑多岐にし生活圏の拡大をもたらした。生活改良普及員の活動体制は、地域担当と広域担当に機能分担した。市町村、農協、保健所などと協力する連携活動が多くなった。主婦の過剰労働の軽減と労働の適正化、子供の家庭教育の充実、快適で楽しみの多い民主的な家庭生活の実現、若者にも魅力のある生活環境づくり等。
5	1975～ 1983	連帯性助長期	専業農家と兼業農家や非農家の混住社会化が進み、村落の社会的機能が低下。生活環境整備が都市部に比べて著しく立ち遅れていることが重要な問題となった。
6	1984～ 1988	むらづくり推進期	兼業化、混住化の進展に伴い地域住民の意識変化がみられ、連帯性の欠如により地域の問題が顕在化した。生活単独課題から農業との複合課題、地域づくり課題へと変化した。地域特産物の開発熱が盛んになり全県下の市町村で地域独特の農産物加工品の掘り起こしや付加価値づくりに取組む。生活改善グループの活躍が目立った。

出典 福島県・福島県農業改良普及職員協議会編(1988)「普及事業 40 年の歩み」より作成

(2)「農山漁家生活水準調査」の背景

先行研究の検討で触れたが「農林省が1969年度から2カ年計画で農山漁村生活改善研究会に研究費を助成し、学識経験者をもって構成する調査研究委員会によって作成された生活指標をもとに、1972・1973年度に28県、1974年度に17県」の調査が実施され、実施に先立ち調査研究委員会で生活指標が検討されたことが天野(2001)¹⁰に書かれている。そこでの指標構成は、第1分野(身体的必要)①栄養、②保健、③労働と休養、④住居、第2分野(精神的必要)⑤余暇、⑥教育・教養、⑦生計、第3分野(快適、能率を加えた必要)⑧生活環境・生活の運営、⑨生活態度-人間関係の9指標であった。

全国的な調査報告については、農林省農蚕園芸局普及部生活改善課『農山漁村地域生活水準診断調査及び向上対策事業報告書』(1975)と『同報告書(第二分冊)』(1976)があるが、本稿では福島県での実施内容とそれに対する評価を「農友」を通じて農家の人々に対し生活改良普及員や専門技術員がどう情報発信したかという点に焦点をあてる。

福島県実施の「農山漁家生活水準調査」の指標は、前述の指標とほぼ同内容であるが(表2参照)、順序が一部異なる。①栄養、②保健、③労働と休養、④住居～災害に対する住まいと宅地の安全性～、ここまでは一致しているが、⑤生計～生計の安定～が先になり、⑥余暇～主婦の余暇時間の量と過ごし方～、⑦教育・教養と続き、⑧生活環境・生活の運営～家事労働の能率化～、⑨人間関係の順である。

当時の状況について『普及事業40年の歩み』に元専門技術員N.Kさん「懐しい追憶」という手記があるが¹¹、「高度経済成長の進行によって都市への人口流出、農業労働力の高齢化、農業後継者の不足、農村地域の環境や混住化等の問題が発生し、(昭和)40年後期からの生産調整と、農家、農村地域の現象に対応するため普及の課題も活動の手段方法も大変難しく」なっていた。

市田(岩田)(1995)¹²によれば、「農業基本法及び高度経済成長以降、生活改善普及事業が対象とする農家の生活が豊かになり、一部には生改は要らないという『生改不要論』も唱えられ」

ていた。そのような時期だったことを踏まえて以下に見ていく。

(3)「農山漁家生活水準調査」の目的と内容、実施主体、回答者数

農林省「昭和48年度協同農業普及事業年次報告書」には専門技術員の活動内容の一つとして「農山漁村地域生活水準診断調査及び向上対策事業等」各種事業実施についての指導援助とあるが(実施県数の記載なし)、昭和49年度同報告書には生活改善特別事業の一つとして同事業名が記され「継続18県及び新規19県において実施」とある。昭和50年度同報告書では「継続19県」と記されている。昭和49年度・50年度報告書に目的が記載されており、「最近の農業及び農村社会の著しい変化に伴う農山漁村地域生活の態様を的確には握(ママ)し、生活上の諸問題及び地域差を明らかにするとともに今後の生活改善の推進に資するため」調査を実施するとある。また、調査結果から判明した地域の生活諸問題については、「市町村及び関係機関と協力してその対策を樹立した」とある。¹³

福島県の農業普及誌「農友」(昭和50年12月号)によれば、本調査は1972(昭和47)年の「農山漁村地域生活水準診断調査及び向上対策事業」開始に伴い全国的に実施したもので、福島県では昭和48年県内全市町村のうち464集落、4,500戸の農家を対象に、県や各自治体、関係諸機関が協力して実施された。ちなみに当時本県の生活改良普及員の人数は54名(農業改良普及員276名)、専門技術員13名、普及所21カ所であった(昭和49年現在)¹⁴。

その結果と評価等について同誌では、「農家のくらしをはかる－農家生活の現状と対策－」と題して特集を組み、県農業改良課の専門技術員K.S.さんが「農家生活の現状－農山漁家生活水準調査結果より－」、田村農業改良普及所のS.H.さんが「激動する農家の姿をみて」、いわき農業改良普及所のK.U.さんが「くらしの向上をめざして」と題して報告している。続く事例紹介は、北福島地区農業(生活)改良推進員協議会副会長のI.T.さん「わが家の生活を見つめる」、安達郡本宮市の農業(生活)改良推進員H.M.さん「私の生活とグループ活動」、会津若松市農政課「わが市の農業生活をこう考える」、最後に福島大学教育学部岡村益教授が「農家生活の今後のあり方－生活水準調査結果におもう－」を載せている。

岡村氏によれば、1971(昭和46)年と翌年に過疎問題を考える際に(「過疎地域集落再編成基準設定等調査報告」)、「農村地域生活指標策定報告書」に基づいて調査したということであり、ここで使用した「家庭における個別指標と地域におけるそれとに分けて」考えるという枠組みを本調査でも用い、「個別指標を精選して使い易くして」実施したということがわかる。岡村氏は「生活水準¹⁵の言葉は(中略)今回のような意味に用いられ全国的に調査が行なわれたのはかなり画期的なこと」だったと述べている。

調査項目と個別指標、水準値については表2の通りである(農家と地域とに分けて記載されているが、本稿では地域の指標は記載せず農家の指標のみ記載した)。評価の方法は水準値で

1970年代の「農山漁家生活水準調査」に見る農村家庭生活

示し、1.000～0.500(良い)、0.499～0.000(やや良い)、-0.001～-0.499(あまり良くない)、-0.500～-1.000(悪い)という区分である。

表2 調査内容(項目と個別指標、水準値)

項目	個別指標	
	農家	水準値
1 栄養	(栄養的にみた食料摂取の状態) (1) 蛋白性食品の摂取 (2) 緑黄色やさい果物の摂取 (3) 油脂類の摂取	-0.067
2 保健	(健康状態と保健対策の状態) (1) 家族の病床に就いた日数(年間1人当たり平均) (2) 家族の健康診断受診率 (3) 便所の種類	0.122
3 労働と休養	(労働時間・労作業装備・睡眠時間・寝具の状態) (1) 忙しい時の睡眠時間 (2) 敷ぶとんの使用枚数 (3) 生活行動に応じた装備	0.104
4 住居	(住宅の安全性と家族の居住関係) (1) 災害に対するすまいと宅地の安全性 (2) 個室の確保 (3) 居間の確立	0.371
5 生計	(生計の安定) (1) 収入と日常生活費 (2) 各種保険の加入 (3) 預貯金高(すぐに引きだせる)	0.196
6 余暇	(自由時間の量とその使い方・状態) (1) 余暇時間の量(主婦が実質的に自由に使える時間) (2) 月間の休日(主婦) (3) 余暇のすごしかた	0.032
7 教育・教養	(子供の教育と一般教養に対する態度) (1) 子供に対する教育態度 (2) 教養についての積極的態度(主婦)	-0.022
8 生活環境・生活の運営	(生活環境の快適度、生活運営の効率度) (1) 家事労働の能率化 (2) 快適な居住 (3) 効率的な生活運営	-0.100

9 人間関係	(家族の民主的状態) (1) 家族がともに生活する日数 (2) 家族の決定権と個人の自由度 (3) 家族の民主化	0.551
--------	---	-------

水準値(1.000～0.500 良い、0.499～0.000 やや良い、-0.001～-0.499 あまり良くない-0.500～-1.000 悪い)

出典 「農友」1975(昭和50)年12月28日。水準値は表紙裏の図を参照(地域の指標は省略)

(4) 県農業改良課専門技術員K.S.さん「農家生活の現状」

ここでは3及び5以降の項目について専門技術員や生活改良普及員がどのように説明しているかに注目する。なお、市町村ごとの比較も記載されているが本稿では触れない。

専門技術員K.S.さんは本調査の責任的立場にあったと思われ、最初に調査の目的や内容などを説明している。目的は、生活を「量と質の両面から見て、生活の実態はどうかをとらえると同時に、今後の生活改善の方向を見い出すため」と書いている。県内全市町村のうち464集落、4,500戸の農家を対象に、関係機関の協力を得て実施したということである。

問題意識を次のように書いている。「農家のくらしは豊かになったといわれていますが、本当に豊かになったのでしょうか。家も立派になり、自動車、カラーテレビも入り、物や金が豊富になり、一見豊かになったように見えますが、これが本当の意味での豊かな生活でしょうか」¹⁶

調査内容を表にしたもの(表2を作成するにあたり引用)を示した後で、項目別に細かな質問に対する回答数などを挙げて説明している。具体的には次の通りである。

【労働と休養】0.104(やや良い)

睡眠時間を「7.5時間以上いつもとっている」が14%、「6.5～7.5時間が6日以上続く」28.4%、「5日まで続く」が44%という結果に対し、「十分な睡眠を取れない状態にあり主婦の忙しさがうかがえる」と書いている。この点については、2020年「国民生活時間調査」¹⁷の平均睡眠時間が女性7時間6分(男性7時間20分)と比較すればそれほど短くはないが、当時としては「生活時間に計画性を持ち、十分な休養を取る等常に健康で働けるように、気をくばる必要」があり7.5時間以上充分に睡眠を取るべきと考えられていたようである。

【生計～生計の安定～】0.196(やや良い)

生命保険の加入92.1%をはじめ、「年金、健康保険、火災保険等共に90%以上の家が加入しており、「不時の災害に対する準備」はできていると評価している。

【余暇～主婦の余暇時間の量とすごし方～】0.032(やや良い)

1カ月の休日数は4日以上が「42%もあるが」、定期・不定期の別では圧倒的に不定期が多いことに触れ、「(天候に左右されるのはやむを得ないが)出来るだけ作業の計画をたて、計画的に休日がとれるように改善する必要」があると指摘している。

主婦が毎日自由に使える時間は1～2時間が一番多く30%、3時間以上も25%であった。

余暇の過ごし方として毎日することは「テレビを見る」が96.5%、「新聞・本を読む」が51.1%、「小鳥や犬・猫の世話をする」が21.8%の順で多く、1か月に1～2回は「編物や手芸をする」が30.0%と最も多く、年に1～4回は「温泉やヘルスセンターへ行く」が74.5%と圧倒的に多く、「名所・旧跡巡りをする」が25.0%だった。

【教育・教養】-0.022(あまり良くない)

「家庭におけるしつづけを積極的に行うか」では、「行なう」が59.6%、「行わない」が40.4%という点について「教育は学校に任せておけば良いと思っているのか、人間形成の大事な面がおろそかになり、非常に問題」だと述べている。

「主婦自身の教養」については、「毎日必ず新聞に目を通すか」という問いに対し「通す」(37.7%)より「通さない」(62.3%)が多い点や、「図書館を利用しているか」という問いでは「している」(3.9%)よりも「していない」(96.1%)が圧倒的に多い点などを挙げ、「自分の教養を身につけるという点について積極性に欠ける」と指摘している。

【生活環境・生活の運営～家事労働の能率化～】-0.100(あまり良くない)

寝室に押入れ等がない家が41.7%、「適切な収納場を1人1.8m(間口)以上持っているか」に対し「ない」が53.7%もあることについて、「整理整頓上問題がある」と指摘している。

また、「炊事場と食事場の高さが同じか」に対して「違う」(48.3%)が約半数あることに関して「炊事に余分な労力が使われるため能率的に作業が出来るよう改善する必要がある」と述べた。

効率的な生活運営という面では「1日の生活時間表(計画)を持っているか」に対し「持っている」が16.3%と非常に少なく、「家計簿をつけているか」に対して「つけている」(39.2%)と少ない点を挙げ、「ほとんどの家で無計画の生活をしているようです。子供の教育のこと、老後の生活のこと等さきのことを考えると場あたりの生活では不安がつのるばかり」であり「安心した生活を送るためにも長期にわたった生活設計」の必要性を強調した。

【人間関係】0.551(良い)

家族がともに生活する日数について、「年間9割以上の日数は一緒に暮らすか」という問いに対して「一緒に暮らす」が90.7%と多く、「週3日以上家族そろって夕食をするか」に対しても「する」が92.1%と多い。「家族のための家庭行事をするか」に対しては「する」が76.0%と多いということを指摘している。

家族の決定権と個人の自由度では、「金額の高いものを買う時よく話し合うか」は「よく話し合う」が94.3%と高く、「家を新築、増改築をする時よく話し合うか」は「よく話し合う」が93.9%、「進学・職業・配偶者を選ぶ時よく話し合うか」も93.4%と高く、家族での話し合いは「良くなされており」と評価している。

また、「家族全員におのおの自由になれる時間があるか」に対して「ある」84.9%、「家族全員におのおの自由にくつろげる場所があるか」に対して「ある」81.6%と高いことについて、民主化が

進んでいるように見えると述べている。

・家族の民主化

「入浴の順序は」に対して「その時の都合の良い順序」(71.3%)が最も多く「お父さんや、年上の順」(28.7%)は比較的少ない。「買い物等の他に親子そろって外出することが年何回あるか」に対して「2回以上ある」(51.6%)が「0～1回まで」よりも多く、「夜8時頃からのテレビで主婦が見たいものを見られるか」に対して「いつもあるいは時々見られる」が88.6%と多い。以上の点について、専門技術員のK.S.さんは「民主化がすすんでいるように見える」と述べるが、「しかし入浴の順序はお父さんや、年上からというのもまだ30%近く」あるということも指摘している。

【まとめ】

専門技術員K.S.さんは最後に、「たしかに主婦の地位は向上しましたが、その反面主婦の役割のおろそかさが目立っています。金がすべてを左右するような、金さえあれば生活が豊かになるようなそんな錯覚を持っている主婦が非常に多い」と述べ、「子供に対しても学校教育面には関心があっても大事な人間形成につながる家庭教育がおろそかであったり、その他健康管理のおそまつさ、農業に対する無関心さ、生活運営や生活の計画性に至るまでまったく欠ける」と「これからの農家主婦の能力として期待されることは、生活の価値の正しい認識と、生活の目標を持つこと」と述べ、「これらをマスターしてこそ本当の意味での生活水準の向上が図れる」と結んでいる。

そして、収入増加が「生活の豊かさ」に直結すると考えて家庭生活を省みない主婦(家庭をもつ女性)を批判している。家庭生活を軽んじていないか、子育て(人間教育)をおろそかにしていないか、家族の健康管理(農業の害も含めて)、生活運営に計画性をもっているかという点は現在にも通じる問いである。ただし、それが主婦だけに求められたことを表現しており、当時の性別役割分業意識の強さを感じさせる。先行研究の天野寛子(2001)¹⁸が指摘していた点、すなわち「男女の平等や、女性の個人としての権利や地位向上は問題にされていない」という指摘に該当すると思われる。

(5)生活改良普及員S.H.さん(田村農業改良普及所)「農山漁家生活水準調査を実施して～激動する農家の姿をみて～」

最近の農家生活が豊かになったと言われる理由は、どこの家にも自家用車があり農作業を機械化し能率的で作業が楽になったこと、カラーテレビ・冷蔵庫・洗濯機などの電化製品を購入する家庭が増えたこと、電子レンジの購入も増え、食べ物がよくなり、農家の所得が都市勤労者並みになってきたこと、デラックスな住宅を新築しているなどが挙げられるが、「あたかもこれ以上改善点がないかのように受け止められ、私も普及員としていったい何をすべきなのか?」と記している。

続いて、この調査を実施して考察した点を4点挙げている。

- ①食事のバランスがとれていない。油類の摂取不足(87%)、緑黄色野菜の摂取不足(76%)
- ②時間的余裕がなく計画性がない。定期的な休日がない(70%)、主婦の自由時間は1日2時間未満(50%)である。
- ③健康的な住宅環境でない。浴室・便所は住宅の外にあり不衛生である(89%)。
- ④計画的な生活運営がされていない。生活時間の計画や家事分担などがされていない(85%)。その背景として次の6点を指摘している。
- ①農機具や耐久消費財を無計画に導入するため家計費が十分確保できず十分な食費が確保出来ない。
- ②農家自身が野菜を作らず買って食べている。
- ③お金のかかった食事がよい食事であるという誤った判断をしている。
- ④手作りの良さを忘れている。
- ⑤現金収入が必要になり出稼ぎ日稼ぎに出ようになり「農作業はもちろん、精神的にも主婦は過重になっている」。
- ⑥主婦が時間的に余裕がなく「主婦として当然果たさなければならない役割」すら果たせない状況にあり、週休二日制の普及が進んでいるにもかかわらず、(農家に)定休日がないのは残念だ。

総じて言えることは、高度経済成長の波に経済基盤の出来ていない農家がのみこまれ、諸問題を抱えており、農家の生活は決して良くなっていないと指摘した。最後に、「よりよい農家生活実現のために」次の4つの提案をしている。

- ①農家経済安定のために営農設計と生活設計を立てること。
- ②農家の主婦は、グループやサークル活動を通し問題解決の積極的態度を養う。
- ③農村環境をよくする。住宅改善、住みよい村づくりなど、指導会や巡回相談所を開く。
- ④余暇を楽しみ休養する工夫をする。農協婦人部の「昼寝運動」は効果的である。

(6)生活改良普及員K.U.さん(いわき農業改良普及所)「農山漁家生活水準調査を実施して～くらしの向上をめざして～」

いわき普及所では、管内全集落287集落、農漁家総数15,481戸(うち漁家576戸)の中から39集落390戸を対象に、無作為抽出法で調査を実施したという。

調査を実施してみて、良かった点と問題点を次のように指摘した。

- ①9項目(栄養・保健・労働と休養・住居・生計・余暇・教育教養・生活環境と生活の運営・人間関係)の調査により今まで考えてみなかった農家生活の問題点や生活意識志向等を知ることが出来た。

- ②今まであまり知らなかった集落の生活概況を知り得た。
- ③調査の手法や統計数字の処理の仕方に苦労したが、調査結果をまとめる一連の作業を学んだ。
- ④今まで接触の少なかった関係諸機関や他団体の助言を受け、新しい知識を増やし視野が広がった。
- ⑤管内の生活水準を知り、指導課題の選定や対象への接し方、資料作成等を根拠に基づいて行うようになり、自信がついた。

評価が低かった項目については、改善と向上を目指して努力目標を立てた。①学習会・集会に進んで参加し知識技術を高め、②住まい方を工夫して快適な生活環境づくりをし、③緑黄色野菜を計画栽培して健康な食生活を目指す。

調査を通して感じた問題点は、①農家主婦の生活意識の変化がある。「満たされなかった時代の農村生活の幻影が、無意識の中につきまとっていないか」という疑念がわいた。②他の関係機関団体と比べて私達は視野が狭くなっており考え方が偏っているのではないか。③漁村集落(沿岸漁業)は山間集落よりも問題点が多かった(睡眠時間不足など)。④市街地近郊集落では、恵まれた生活条件のため、健康診断(任意・定期ともに)の受診率が低かった。

そして、K.U.さんは水準値が低かった6項目を取り上げ、それぞれに対して援助を受ける機関や利用する事業その他について、調査後の実施計画を立てている。

例として、最も低かった「教育・教養」の「家庭運営と学習の仕方」「子供の人間形成と家庭教育」については、翌昭和49年度に市社会教育課や県教育事務所の農村婦人教育事業や生活教室の利用などの計画を立てている。また、生改(生活改善)グループや生改推進員らの活動を通して、失点が高かった「教育・教養、生活環境と生活の運営、栄養、余暇、保健、生計」を向上させることを計画している。

(7)事例紹介

調査に協力したと思われる農業(生活)改良推進員¹⁹⁾の立場からは次のような二つの事例が紹介された。

①農業(生活)改良推進員協議会副会長のI.T.さん(北福島地区)「事例紹介～わが家の生活をみつめる」

生活水準調査の結果を見て「第一にあがったのは、家計簿の記帳をしない人が多い」「生活に計画性がない」という点であり、「記帳していると野菜の自給や水道電気の節約など工夫が出来非常に役に立つ」ので「若い人に早く記帳の習慣」をつけてもらいたい」という意見を述べた。

また、「機械の使用で省力化され労働時間が減り余暇時間が増えたが、余暇時間に何をするか」といえば「テレビを見る」が多いが、余暇は「休養や教養・趣味の時間にあてるのがよい」のでは

ないかと述べている。

人間関係について、調査では何も問題がないような結果が出たが「嫁と姑の関係はよく話題になる」ことであり、最近は親子の問題も増えている。調査先の農家で、お互いがいたわり合い思いやりがある家庭では円満な家庭生活ができると感じた。お互いに立場を認め合いプライバシーを尊重することが最も大切であるという意見を述べた。

②農業(生活)改良推進員H.M.さんは「私の生活とグループ活動」という文章の中で、この調査実施をグループとして分担し「生活の中味というのは、こんなことで仕組みられているのかと感心」したと述べている。また調査結果をグループで話し合い、以下の改善目標をたてて実行したという。

- ・緑黄色野菜不足解消のため、タネの共同購入や共同育苗の講習会を受け、大豆のタネの交換会をした。土壌や農薬の点で「近代的な野菜作り」を理解していない人が多い。
- ・卵を1日1個自家生産の物を食べる運動の一環として養鶏を取り入れるため、養鶏試験場を見学し技術や基礎知識を身につけることを皆のプロジェクトにした。

(8)会津若松市農政課

「昭和48年に県と共に農山漁家生活水準調査を実施した」と記しており、調査が市町村と連携をとって進められたことが確認できる。調査の結果、水準値が最も低かった「生活環境・生活の運営」では、特に「施設環境の面に問題」があったという。具体的な問題点は、ゴミや危険物が山に捨てられる数が多く非衛生的で危険、主要道路は舗装されているが集落内や集落間の道路は狭く舗装されていない場所が多く、火災報知器や消火器を備えていない家がまだ多く、防火貯水槽のない集落も多い等であった。

今後の対策としては、安全性の確保(通学道路や防火施設の整備、防犯灯の増設)や衛生的な環境確保(ゴミ収集所の設置他)、利便性の確保(道路の舗装・拡張)、文化性の確保(教育施設の整備、グループの育成強化)などを挙げている。

(9)福島大学教育学部教授岡村益氏「農家生活の今後のあり方—生活水準調査結果におもう—」

生活改良普及員や専門技術員ではないが、特集の最後に岡村氏が上記の題名で総括している。最も水準値が高かった「人間関係(家族の民主的状態)」(0.551)については、「この種の質問は事実そのものよりも、応答者の感じ方があらわれることが多いし、極端に言えばタテマエとホネの分離ということも起り易い」と述べ、指標は「家族が共に生活する日数、家族の決定権と個人の自由度」であるが、「この指標では掬い取れない事実が多く、良いというだけでは喜ばず、指標の見直しの必要性は明白である」と指摘している。

他県との比較では、宮城県、岩手県、茨城県、山梨県、兵庫県、山口県、福島県の7県において、農家と地域(非農家)との違いに共通する点を挙げ、農家が地域を上まわっている項目は、保健、労働と休養、人間関係であり、地域が農家を上まわっている項目は、栄養、余暇であることを詳しく説明している。

この調査結果を生かすには、「県レベル、市町村レベルでの行政的対策案の樹立と実施」が必要であり、個々の農家の診断に使うとすれば「主婦の生活構造をよく捉えて、水準向上の隘路は何か、向上の糸口」を見極めることが重要であると指摘し、個別的診断と対策の必要性についても触れている。

また、農家生活は「農政の方向や農業の見通しなしには論ぜられない」のであり、現実には厳しいが、「農業が人間にとってもたらす良さー生物の命をはぐくみ育てるという本質的なよさをかみしめられる生活でありたい。その追求が公害で荒らされた日本人の救いになりうる」と、当時話題になった有吉佐和子『複合汚染』に言及し、「形式的な都市化だけを目標とせず、より人間的な農家生活を創造する工夫を願ってやまない」と述べ、生活水準を都市並みに引き上げることだけを目標としては真の豊かな生活とは言えず、農家生活を創造する工夫が重要というのであった。

4. まとめ

本稿では、「農山漁家生活水準調査」が福島県でどのように実施されたのか、目的や調査項目と内容、その結果について生活改良普及員・専門技術員達がどのように考え伝えたのかを資料調査した結果をまとめ考察した。明らかになったことは農家生活の一端であったが、そこで指摘されていた内容は、現金収入の豊かさを生活の豊かさと錯覚し「真の生活の豊かさ」からかけ離れていくという現在にも通じる問題を指摘するものであった。

生活改良普及員・専門技術員が度々言及していた点は、大まかにまとめると「本当の豊かさとは物質的に豊かになることだけではない。現金収入を得ようとして兼業化し、忙しくなり家庭の機能が果たせなくなったり、子供の教育がおろそかになったり健康を害しては本末転倒といえるのではないか」ということであった。

「農山漁家生活水準調査」は学識経験者からなる調査研究委員会によって作成された生活水準指標をもとに、客観的・科学的に「生活の質を問う」ものであり、調査に協力した人々にとって暮らしを省みる機会となり、生活が多面的に成り立っていることを再認識させるという効果もあった。調査は、市町村や関係諸団体と連携して実施されたことが、農業(生活)改良推進員や生活改善グループ、会津若松市農政課などの報告から裏付けられた。

また、調査後は水準値が低かった項目を課題として取り上げ、その後の活動項目に入れ、課題解決をテーマにとり組んだ生活改善グループがあった。

本調査実施当時の生活改善課課長矢口光子氏の言説に注目すると、「農友」1978(昭和53)年6月号に「農村の本当の暮らしのよさを求めて」という対談記事で、「生活水準・くらしの良さ」について言及している。そこで矢口は「長期に生活水準と高齢者とか子供のことなど家族構成の循環を考えて、生産と生活が循環システムの中にあるということを考えていかないと、環境整備も暮らしをどこまで良くするかということも、答えは出て来ないのではないかと思いますね」と発言している(下線引用者)。高度経済成長を経て都市と農村の生活水準の違いや、都市への人口流出、公害問題などが問題となった時期に「生産と生活が循環システムの中にある」という指摘は重要であり、このような考え方が本調査の基盤としてあったと考えられる。

おわりに

農林省農蚕園芸局生活改善課の指導により実施された「農山漁家生活水準調査」(「農山漁村地域生活水準診断調査」)を通して、福島県内農家の状況の一端を知り、生活改良普及員・専門技術員達が調査結果をどのように考え伝えたのかを考察したが、他県との比較や全国的な位置づけに触れることが出来ず、今後の課題として残った。

本研究を通して筆者が最も示唆を得た事は、生産性向上や物質的豊かさの追求と、家庭生活の充実をはかる(真の生活の豊かさを追求する)ということは対立事項ではなく、循環システムの中にあることを意識して考えることが重要であるという点であり、1970年代のこれらの議論は、現代にも通じる示唆に富む内容だと思われる。

謝辞

資料閲覧に際し福島県農業総合センターや福島県立図書館の方々に大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

脚注・引用文献

- 1 「農友」1975(昭和50)年12月号「特集農家のくらしをはかる～農家生活の現状と対策～」.27-49
- 2 生活改善普及事業に従事する都道府県職員として、専門技術員と生活改良普及員が設置されていた。昭和48年度の人数(全国)は、専門技術員は189人(内訳として専門技術員(1)被服28人、食物43人、住居36人、家庭管理38人、専門技術員(2)普及指導活動(農村生活)44人)。(1)は農家向け生活技術開発のための実験研究と共に生活技術について生活改良普及員の指導援助に当たり、(2)は生活改良普及員の活動方式、関係機関及び団体等との連携のあり方等について指導援助を行った。昭和48年度活動概要の中に「農山漁村地域生活水準診断調査(略)の指導援助」との記述がある。一方、生活改良普及員は、農業改良普及員と共に都道府県が定める農業改良普及所に所属し、農家の生活改善全般について総合的指導を行っている。人数は、割当定数2213人に対し実員2066人、広域担当と地域担当に分けられているが両者を含め、1人当たりの農家担当戸数は平均2,400戸であり、活動限界と考えられる1人1,300～1,500戸を超えていたため、濃密指導地域を選定し、講習会や教室等

- 各種の活動方法を組み合わせて市町村や関係行政機関・団体との連携を図り計画的に指導を行った。生活改善グループ育成も行い、昭和49年3月末現在で約15,000グループあった。(農林水産省ホームページ掲載「昭和48年度協同農業普及事業年次報告書」農林省農蚕園芸局.12-15,35)
- 3 市田(岩田)知子(1995)「生活改善普及事業の理念と展開」農業総合研究第49巻第2号.1-63
- 4 同書.45
- 5 同書.48
- 6 天野寛子(2001)『戦後日本の女性農業者の地位～男女平等の生活文化の創造へ～』ドメス出版126-130
- 7 福島県(1978)『普及事業30年のあゆみ』.58-59
- 8 「生活設計」日本家政学会編(1993)『家政学用語辞典』では「1955年頃から金融機関が家庭の経済資金計画として使用したが、1965年頃からは高等学校の指導要領にもとりあげられ、生活全体のあり方の計画として用いるようになった。生活設計の目的は究極的には個人、家族の幸福の実現と、それとの関連で豊かな社会の出現」にあり「そのためには長期的な見通しと日々の暮らしの関連をはかった段階的な目標が必要」としている。
- 9 福島県・福島県農業改良普及職員協議会編(1988)『福島県農業改良普及事業40周年記念誌 普及事業40年の歩み』.58-59
- 10 天野寛子(2001)『戦後日本の女性農業者の地位～男女平等の生活文化の創造へ～』ドメス出版126-127
- 11 福島県・福島県農業改良普及職員協議会編(1988)『福島県農業改良普及事業40周年記念誌 普及事業40年の歩み』.197
- 12 市田(岩田)知子(1995)「生活改善普及事業の理念と展開」農業総合研究第49巻第2号.2
- 13 農林省「昭和48年度協同農業普及事業年次報告書」.14、農林省「昭和49年度協同農業普及事業年次報告書」.20、農林省「昭和50年度協同農業普及事業年次報告書」.20-21
- 14 福島県・福島県農業改良普及職員協議会編(1988)『普及事業40年の歩み』.30
- 15 「生活水準」：日本家政学会編(1993)『家政学用語辞典』では「生活集団の生活状態の水準で、その実態は指標によって測定される。指標は貨幣的なものと非貨幣的なものに大別でき、政策や社会経済面でのマクロ指標と家庭管理面でのミクロ指標とがある」としている。
- 16 福島県・福島県農業改良普及職員協議会編(1988)『普及事業40年の歩み』.30
- 17 NHK放送文化研究所「国民生活時間調査2020」同研究所世論調査部
- 18 天野寛子(2001)『戦後日本の女性農業者の地位～男女平等の生活文化の創造へ～』.130
- 19 改良推進員は生活改良普及員とは異なる。「福島県は生活改善推進員制度も設けている。設置のおもな理由は、生改普及員の数の少なさであった。その役割は生改普及員の支援、補助にあった」。中間由紀子・内田和義(2022)『戦後日本の生活改善普及事業―「考える農民」の育成と農村の民主化―』農林統計出版.234

保育マップ型記録が捉える遊びの構造

The Structure of Play as Captured by Activity Map Recordings

安 部 高太朗 吉 田 直 哉

Kotaro Abe

Naoya Yoshida

This paper clarifies the structure of play, as captured by the activity map recording technique proposed by Takako Kawabe. Kawabe believes that play develops through children's involvement in play situations. Children convey their images of play to other children through the acts of looking at objects as something else and then pretending. By sharing images of play with other children, the imaginary world of play expands. Members of play groups mutually potentially provide each other with play ideas. Kawabe also sees these relationships among play groups as the context of play. Activity map recording illustrates this play context among play groups on a map and while recording the contexts within the groups.

キーワード：

環境図記録／遊びを中心とした保育／遊びの生態学／河邊貴子

Keywords：

Activity map recording, early childhood education based on situational play, ecology of play, Takako Kawabe

1. 問題の所在と本稿の目的

現代日本の保育方法論において、保育記録は、保育者の省察を促すことによって保育実践を改善するための行為として位置づけられている。保育学の専門辞典においては、保育記録は保育実践の評価・保育者の省察とカップリングされつつ語られている。例えば、『幼児学用語集』は、日々の保育実践に対する省察こそが保育者の専門性形成の要素だとし、保育者による省察を促すものが保育記録だとする。保育者は、自らの記録から「子どもの活動や行為の意味の理解を深める」ことができ、記録を読み解くことで、自分自身の保育行為を改善できるとされる¹⁾。他にも『改訂新版 保育用語辞典』によれば、保育記録は保育実践の中での出来事、子どもの言動、保育者の指導や対応を記し、さらに保育者の反省や評価などを書き留めることで保育実践の改善に資するものだとされる²⁾。いずれの辞典においても保育記録が保育者の省察を触発することがその意義として強調されている。その一方、保育記録の形式については多様なものが紹介される。現状、保育記録の作成の必要性が強調される一方で、どのような形式に則って保育記録を作成するかという判断は、記録の作成者である保育者に委ねられている。それにもかかわ

らず、保育者が多種多様な保育記録の形式からどれを選ぶべきなのか、そのための判断基準は示されていない。結果的に、保育記録の形式については、保育者が多忙な中で保育記録を作成している実態があることを踏まえ、既に慣れている保育記録の形式を惰性的に使用し続けるか、あまり作成に労力がかからないことを重視して選ばれる。多様な作業に忙殺される保育者には、日々保育記録を作成しても、それを見返し活用するだけの余裕がない。このように、日々保育者によって保育記録が、次の保育実践の構想を深めるものとして機能していない実態を指摘し、保育記録の改善を提案しているのが、本稿で注目する河邊貴子³⁾である⁴⁾。河邊は、保育記録に関する学位請求論文「保育記録の機能と役割：保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言」を日本大学に提出し、2011年に博士(教育学)の学位を取得している。その後も河邊は保育記録に関する論文を発表し続けており、保育記録論は彼女のライフワークというべき位置を占めている。

河邊によれば、保育記録とは、ただ保育実践の中の事実を客観的に捉えて記述するものではなく、保育者として子どもにどう関わったかなど「関係性の中でその事柄をどう捉えたかという保育者の解釈を盛り込むことに意味がある」⁵⁾。ここでいう保育者の解釈とは、可視的に捉えられる事実の客観的記録に対立するものであり、記録にとどめようとする場面における子どもの行動に対して、それまでのその子どもとのやりとりから行動の傾向を知り、その延長において意味づける行為である。河邊は、解釈は固定的であってはならないし、常に修正・更新されるものとしながらも、保育者は実践のなかで、その場において子どもが見せる行動の意味を解釈しなければ、保育者としてどのように振る舞うかを決定できないとする。

ただ、河邊は、多くの保育記録には、保育実践のなかで見られる子どもの行為に対して保育者が何をどう解釈したのかが書き残されておらず、それゆえに、保育を振り返るツールとして機能していないと言う。河邊は、保育を子どもの「遊び」を中心に展開するものと捉えているため、保育者には子どもが遊びをどのように始め、遊びの中で何をを目指しているのかを把握したうえで、それに即応する形で保育者が援助することが必要だと考えている⁶⁾。保育者の援助を導く効果を有する保育記録として彼女が提案するのが、「保育マップ型記録」である。

保育マップ型記録とは「保育環境を空間的に鳥瞰し、そこに幼児の遊びの所在と経過をマッピングしていく」保育記録である⁷⁾。そこでマッピングされるのは「遊び」の空間的・時間的展開なのであり、時間と空間の両軸を組み込んだ複合的な記録だと言える。すなわち、河邊は、「遊び」は時間・空間の両軸に沿って時々刻々と変化する流動的なプロセスをたどって展開する一連の活動だと捉え、その展開の発展・延長に対するコミットメントとして、保育者による次なる保育実践の構想が成立すると考えているのである。

本稿の目的は、保育マップ型記録が捉えようとする遊びの構造を明らかにすることである。保育マップ型記録が前提とする河邊の遊び観を明らかにすることで、保育マップ型記録が遊び

をどのように把握しようとするものであるか、すなわち保育記録方法としての保育マップ型記録の独自性が明瞭になってくるからである。

まず本稿は、保育マップ型記録において、子どもの遊びの空間俯瞰的な把握及び子どもの遊びの経時的变化を捉えようとしていた河邊の意図が十分理解されず、保育マップ型記録の独自性が誤解されている現状を指摘する。それによって、保育マップ型記録の特質とメリットを保育者が納得したうえで選択・活用できるようになることに貢献したいと考える。

2. 保育マップ型記録の特質：「環境図記録」からの名称変更に入れられた意図

河邊における「遊び」の構造を明らかにするに先立って、彼女が提案した保育マップ型記録の特質を確認しておきたい。前述のように、河邊には、保育記録について、保育者の多忙な日常のなかで一日ごとの保育記録を作成する時間的猶予がなく、作成された保育記録が読み返されないこともあり、次の保育実践の構想に資するものになってこなかったという問題意識がある⁸⁾。河邊によれば、一日ごとに作成される「日の保育記録」には「翌日の遊びに必要な環境や具体的な援助を導き出せるよう遊びの状態を診断する視点」が必要なのであり、日の記録と指導計画は緊密に関連づけられるべきだとされる⁹⁾。このような問題意識を持つ河邊が、翌日の保育実践を構想し、援助の方向性を見通すために開発した記録方法論が「保育マップ型記録」である。保育マップ型記録は、園の環境図を用意し、子どもが最も遊びに集中している時間帯に「誰と誰がどこで何をしていたか」をマッピングする¹⁰⁾。保育マップ型記録という名称の由来は、この「誰と誰がどこで何をしていたか」という遊びの状況を一枚の地図のなかに書き込むような形式で、同時・並行的に展開する複数の遊びを空間俯瞰的に把握することをその特質としているからである¹¹⁾。

さて、保育マップ型記録は、2008年までは「環境図記録」という名称で提案されていた。なぜ河邊は「環境図記録」から名称を変えるに至ったのか。それは、当初の「環境図記録」という名称を付与したことによって、それが物理的な環境図、すなわち物的環境・人的環境の可視的な配置を、客観的に書き記すものだとの誤解を招いてしまったことを彼女が反省したためである。しかしながら、「保育マップ型記録」へと記録の名称変更ののちも、保育マップ型記録を、環境図記録だと捉えている論者が存在し続けている¹²⁾。

例えば、瀧川光治は、保育マップ型記録を、環境構成図型の記録の一つとして位置づけている。瀧川は、河邊の保育マップ型記録は「子どもたちが環境にどのように関わっているか」を、環境図として記載するものと捉えている¹³⁾。瀧川において、保育マップ型記録は、子どもの環境に対する関与を環境図上にマッピングしていくものとして捉えられている。

渡辺桜は、河邊の保育マップ型記録について、保育の全体状況を俯瞰し、幼児が人的・物的環境とどう関わり、どのような影響を受けているのかを読み取っていくことを可能にする点で

評価できるとしながらも、保育マップ型記録においては保育者が図示されておらず、保育者がどの場でいつ遊び仲間として関わっていったのか、どこからどのように全体の遊び状況を俯瞰していたのかを示されていない点を批判する。渡辺自身は、ビデオ映像を基にしながら、子どもと保育者の様子をマッピングした保育の環境図を活用した園内研究を提案しており、環境図には保育者の位置や保育者のモノ・人・場への関わり方が記されるようにすることが重要だとしている¹⁴⁾。保育マップ型記録への渡辺の批判は、保育者の援助を導くための記録だとされながら、当の保育者がマップ上に表われない点に向けられている。保育者は人的環境であるから、保育環境を示す環境図に保育者が表れないことはありえないと渡辺は捉えているのであろう。ただ、保育マップ型記録においては、保育者が「遊びにかかわりながらどこからどのように全体の遊び状況を俯瞰していたのかを示されていない」と渡辺が論じていることから、渡辺が保育マップ型記録における環境図が、ある特定の時点における複数の遊びの空間的位置のみを客観的に図示したものだと捉えていることが窺える¹⁵⁾。

しかし、河邊が保育マップ型記録で目指しているのは、保育環境図上に、ある特定の瞬間における複数の遊びの位置を単に並列的に書き取ることではない。保育マップ型記録のモデルには、遊びの経時的变化が文字記録として書き取られ、さらに、環境図と遊びの経時的变化を踏まえた次の保育への構想が記される欄が設けられている¹⁶⁾。この点こそ、河邊の「保育マップ型記録」が、物理的・瞬間的な物的・人的環境を描く環境図記録と異なる点である。河邊自身は、子どもや遊ぶ子どもの姿のみならず、「保育者の願い」を記載内容として包含することから、名称を変えたと述べる¹⁷⁾。ここでの「保育者の願い」とは、子どもの行為・言動から、子どもが遊びの何に面白さを感じ、何を経験しているかという子どもの遊びの志向性を踏まえ、保育者が読み取った、子どもに必要だと考えられる経験である¹⁸⁾。

河邊は、どのような形式の保育記録においても、「ただ子どもの姿を羅列するのではなく、そこで自分は何を感じたのかという保育者の思いも記述すること」は必要とする¹⁹⁾。子どもの姿に対して保育者が感じたこと、保育者の思いとは、河邊が保育マップ型記録に記すことを求めた「保育者の願い」のことであるから、保育マップ型記録には保育者の主観的記述が残されることを示している。

河邊によれば、保育マップ型記録は、典型的には次のような形式をとる²⁰⁾。

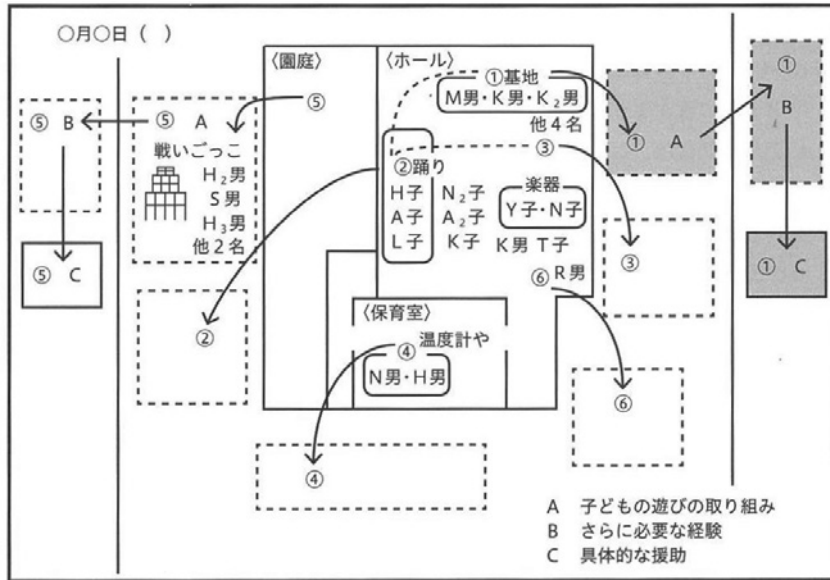


図1 保育マップ型記録(河邊 2020: 77)

図1に示したように、紙面中央に保育環境図を配置し、その周りに三つの文字記録の記入欄が設定されている。すなわち、「誰と誰が何をしているか、どのように遊んでいたか、何を経験しているのか」を詳細に記すA欄、Aを基にして「子どもに経験させたい内容」を記すB欄、「翌日の具体的な援助の方向性を記す」C欄の三欄であり、A→B→Cの順で記入していくことが推奨される²¹⁾。河邊によれば、一つ一つの遊びは独立しているのではなく、「空間時間的に共存しながら展開している」という「共時性」を持つ²²⁾。したがって、A欄には、それぞれの遊びの中で誰と誰が何をしていたかという事実のみならず、他の遊びからどのような影響を受けているのか(あるいは、他の遊びにどのような影響を与えているのか)という、遊び間の相互的な影響関係についての、保育者による主観的な読み取りも書き記される。

河邊は保育マップ型記録が活用できる前提として、クラスでの子どもの遊びが持続的であることを挙げている。保育マップ型記録は「遊びの様子をある場面で切り取るわけだから、遊びがすぐに変わっていくようなときには適用できない」²³⁾。河邊は、遊びが安定して持続することを「空間」と「モノ」と「幼児の人間関係」とが結びついて一つのトポスが形成されること」だとする²⁴⁾。ここで言われる遊びの「トポス」とは、空間とモノと子どもの人間関係が結び付いた場のことであり、遊びのトポスが形成されるというのは、この場に対して遊び場としての意味が与えられることである。河邊は、「幼児は空間にモノを持ち込んで遊ぶが、空間とモノと人の組み合わせによって場に意味が付与される」ことを「場の見立て」と呼んでいる²⁵⁾。遊びのトポスがつくられるとは、子ども同士の間で「場の見立て」が共有され、子どもが互いに遊びの世界

の中に巻き込まれていることを指す。

3. 河邊にとっての保育における遊び

河邊にとっての保育は、遊びを中心に展開する活動過程である。河邊は「保育者からの適切な援助を受けながら、自発的活動としての遊びを中心にした生活のなかで、子どもが必要な経験を積み重ねていくことができる保育」を「遊びを中心とした保育」と定義する²⁶⁾。彼女によれば、子どもが主体的に行動するのは、「子どもの内からの欲求」によって行動が起きる状態、つまり「自己課題」をもって遊びに取り組む状態にある時である²⁷⁾。「自己課題」とは、遊びのなかで子どもがやってみたいと思うこと、遊びのなかで実現させたいと思うことであり、内面的な動機づけである。子どもの内からの欲求とは、子どもが抱く遊びに対する肯定的な感情のことであり、遊びを駆動させる動機である点から「内的動機」とも言い換えられている²⁸⁾。河邊は、保育者に対して「子どもが何に興味をもち、自己課題を内在化させているかを子どもの姿から読み取り、そのうえでどのような援助が可能かを考えるべき」だとする²⁹⁾。保育者による遊びへの援助とは、子どもの自己課題を読み取り、遊びの中で、子ども自身がその課題を達成できるように促すことを指している。河邊は、子どもにとって必要な経験が満たされるような遊びを「充実した遊び」と呼び、次のような共通した特徴を持つとする³⁰⁾。

- ① 1つの遊び(テーマ)に、ある一定期間継続して取り組み、集中している。
- ② (遊びに取り組んでいる)子ども一人一人が遊びのイメージをしっかりとっている。
- ③ 個々の子どもが自分のイメージを遊びのなかで発揮し、遊びに必要なモノや場をつくるために身近な環境に主体的に働きかけている。
- ④ モノや空間の見立ておよび言葉を通して、他児とイメージを共有しながら遊びを展開している。

以上の特徴からは、河邊における充実した遊びとは、複数の子どもの間でなされる相互作用に基づくものであることが分かる。すなわち、個々のイメージがモノや空間を見立てることによって共有され、展開する持続した遊び、つまり、「ごっこ遊び」が、河邊にとっての遊びのモデルなのである。ごっこ遊びは、他者の存在を前提としてなされる演技的活動であり、子どもの個々のイメージが他の子どもと共有され、モノを見立てる行為を繰り返しやりとりするなかで、相互にイメージを深めるというプロセスを経て展開していく。河邊は「海ごっこ」³¹⁾を例にあげ、充実した遊びとしてのごっこ遊びの特徴を「子どもたちは遊びに必要なモノをつくることによって豊かな状況性³²⁾を生み出している」ことだとする³³⁾。「状況性」とは、遊びの状況に埋め込まれているという状態を指す。遊びの状況とは、モノを見立てたり、何かになり切った

りする行為によって触発されるイメージを要素として、子どもが構成する虚構世界のことである。子どもは、自らの遊びにまつわるイメージを、別の子どもと共有することによって、虚構世界を共同的に立ち上げる。その虚構世界のレトリックに沿うように、モノと場、仲間の三項を絡み合わせ、その絡み合いが生じる空間に、子どもたちは自分たちなりの意味を与える。これが繰り返される中で虚構世界は強靱かつ稠密なものへと組み上げられてゆき、遊びは集団的活動として凝集性を高めていく。この一連の過程が生じている事態を、河邊は「状況性」と呼ぶ。

ごっこ遊びに必要なモノをつくることには、子どもが個別のイメージを見立てるためのものを製作すること(例えば、新聞紙を丸めて浮き輪にする)を指すのみならず、そのようなイメージを投影させる身体的な振る舞い(例えば、腕を規則正しく素早くまわすことで「海の中で泳ぐ」ことを示す)をすることも含まれる。必要なモノをつくることで生じる状況性とは、遊びに対する個別のイメージがモノをつくることを媒介にした、イメージを共有した他の子どもと共通の方向で行為するという遊びの状況＝虚構世界が広がり、そのような遊びの状況＝虚構世界を、子どもが自分の住まう世界として受け止め、そこに自己投入し没入しているという状態を指している。

以上のように、河邊における「遊びの状況」とは「あるモノを見立てたり、何かになりきって振りをすることで生まれる虚構世界」である³⁴⁾。そして、そのような「状況」に巻き込まれている状態を「状況性」と言う。河邊は、以下の図2のように、遊びの状況が生まれる過程を循環的構造として捉えている。

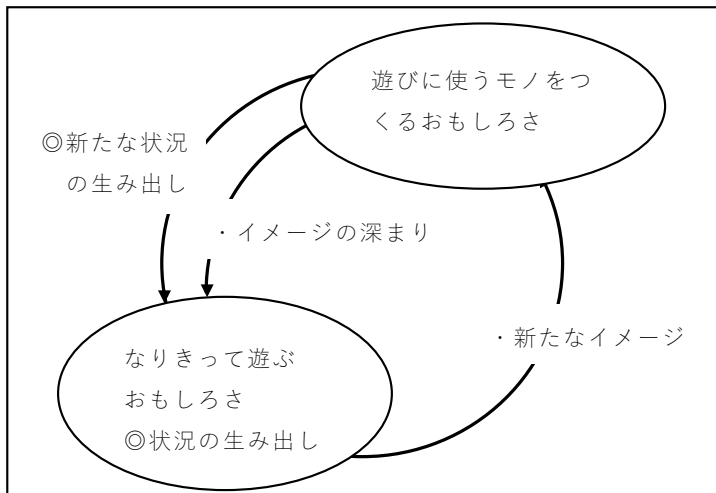


図2 遊びの状況が生まれる循環(河邊 2020 : 31 河邊作成の図を基に引用者作成)

図2は、遊びの状況とは、ある子ども(A)がモノを見立てたり、何かになりきる振りをしたりすることで生じる虚構世界であることを表現している。このとき、別の子ども(B)が、Aが見立てたモノやなりきっている振りを踏まえて、B自身のイメージを投影させた見立てや振り

で応答すると、AとBとの間で新たなイメージができる、すなわち虚構世界が広がる。この虚構世界を成り立たせるA及びBの見立ては、遊びに使うモノをつくり、見立てを支えるモノが付け加えられていくことでより一層精緻で奥行きのあるものになっていくのである。

加えて、河邊は、遊びの充実(遊びが持続しつつ発展すること)について次のように述べていることに注目したい。

先に子どもの育ちに应じた遊びの充実が必要と述べたが、五歳後半にもなると知的好奇心が高まって「面白い」と思ったこと(これを個の遊びの課題と呼ぼう)を追求しようとする持続力も付いてくる。そのうえ、一人で遊ぶのではなく、その遊びの課題を友達と共有し、場やモノを自分達で準備して取り組もうという意欲が高まってくる。遊び課題の追求の面白さとそれを友達と協同して展開していく面白さの二つがうまく絡み合った時、子どもたちは遊びに集中し、主体的にモノにも人にも関わるのである³⁵⁾。

上記での「遊び課題」とは、子どもの興味・関心が向かう対象、つまり、子どもが遊ぶ目的や意味だと考えられるが、河邊はそれが一人の子どもの中に止まるものではなく、友達と共有され、協同的に追求されていくものとしている。河邊によれば、空間・モノ・幼児の人間関係の三者が結び付いて遊びの場として意味が付与された時、遊びは安定して持続するという³⁶⁾。安定して持続する遊びには、「状況」が成立している。遊びの状況とは、子ども個人の遊びに対するイメージがモノを見立てる行為や何かになりきる振る舞いを介してつくられる虚構世界のことであった。さらに、遊びの「状況性」とは、子どもが遊びの状況に埋め込まれていること、すなわち他の子どもとのやりとりの中でそのイメージが共同的に広げられつつ、さらに自分たちの遊びの外部に、他の遊びに熱中している子どもたちの存在を感知しているという状態を表している。河邊において、遊びは、子どもが共に遊びたい仲間と共に遊びの集団をつくることで持続的になる。ある子どもが、モノを見立てる行為を介して個の遊びのイメージを仲間に表示することで生じるのが、遊びの虚構世界＝遊びの状況である。モノを見立てる行為を介して、個のイメージは遊びの集団内で共有されていく。ある子どもの虚構世界としての遊びの状況が別の子どもへと広がり、子どもが遊びの状況に埋め込まれていることを、河邊は遊びの状況性と呼んでいるのである。この遊びの状況性は、遊び集団内に止まらず、その外部に別の遊び集団が存在していることを感知するとき、より一層豊かなものとなるのである。

遊びの状況が生まれ、広がることを、河邊は以下の図3のように捉えている³⁷⁾。

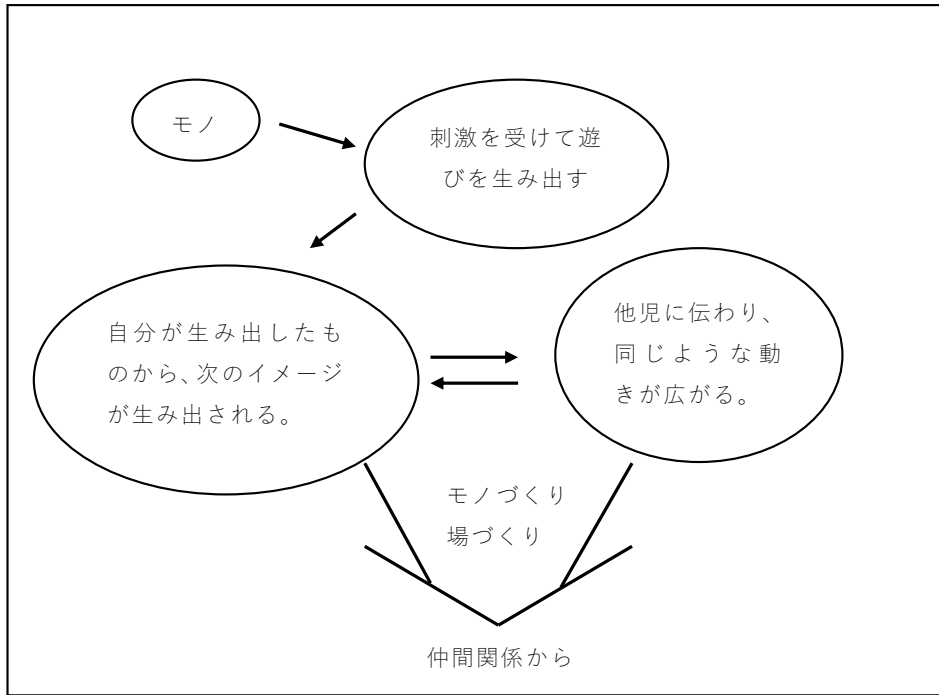


図3 遊びの広がり(河邊 2020 : 46 河邊作成の図を基に引用者作成)

図3において、モノから刺激を受けて遊びが生み出されるとは、子どもがモノを見立て、それに何らかの関与を始めることを指す。例えば、子どもは剣に見立てようと広告紙を丸め、形を整えて、剣の見立てが成り立つようにする。河邊によれば、子どもはモノを何かに見立てると、「行為のイメージが引き出され、遊びへと展開」する³⁸⁾。広告紙を剣に見立てることの例を続ければ、つくった剣を振り回したり、他の子どもを敵だに見なして、その状況に合う名乗りを上げたりする。以上に記したモノから行為のイメージが引き出されることは、個別の子どもの中に留まらない。ある子ども(A)が、丸めた広告紙を「剣」として振り回す様子に呼応する形で、別の子ども(B)が、その状況に応じて同じように広告紙を丸めたものを「剣」に見立てたり、「槍」に見立てたりしながら、最初の子どもの見立てに乗っかってくることがある。AとBの両者の間で、行為のイメージはより一層深められ、そのイメージを支えるために、さらに見立てるモノがつくられたり(例えば、段ボールを盾に見立てる)、遊びのイメージを具体化するように場が設定されることで、遊びとしての行為には緻密な意味づけが与えられ、行為相互の結びつきも緊密なものになっていく(例えば、園庭の築山が対決の場として定められ、そこで決戦が闘われる)。なお、図3の下に「仲間関係から」とあることは、モノづくり・場づくりを通じて、ある子どもと別の子どもとの間でイメージが共有されやすいのは、両者に友達同士であるという関係性が築かれていることが前提にあることが示唆される。

以上に見た遊びの状況性が生じ、持続した遊びを、河邊は充実した遊びだとする。河邊によれば、「充実した遊びは単発に発生して消滅したりはせず、個のイメージが集団に共有され、またそこからイメージが強化されて、新たな個のイメージが生まれながら展開していく」³⁹⁾。このことを表したのが、次の図4である。

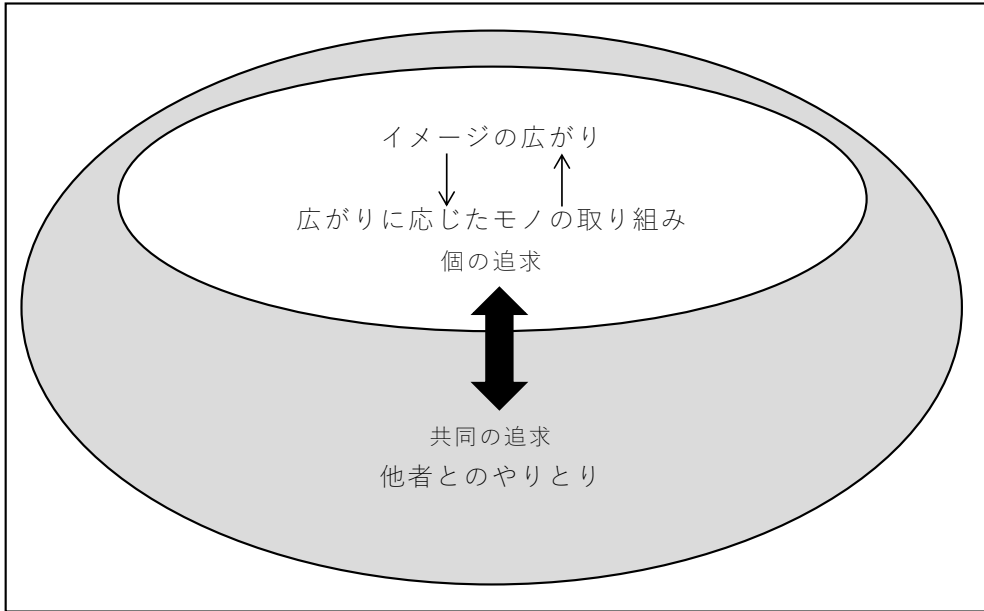


図4 豊かな遊びの展開の要素(河邊 2020：172 河邊作成の図を基に引用者作成)

図4は、個のイメージが遊びの集団に共有されると、集団内におけるやりとりの中で個のイメージが強化され、新たな個のイメージが生まれて展開することを示すものであり、河邊はこれを「イメージの連鎖」と呼ぶ⁴⁰⁾。ある子どもの遊びに対する個のイメージが遊びの集団において共有されると、そのイメージを踏まえて、遊びの集団内の他の子どもとの間でやりとりが生じ、そのやりとりのなかで共同的に遊びのイメージは広げられていく(共同の追求)。やりとりの中で形成される共同的なイメージは、共同的でありながら、そのイメージの獲得は、つねに個に内在する形でなされるという両義的な性格を持つ。遊びの集団内でのイメージの広がり(共同の追求)を踏まえて、再び子どもは自らのイメージを遊びの集団に共有されたイメージを前提にして厚みのあるものにしていく。さらに、その厚みを帯びたイメージを、子ども集団の中での振る舞いに反映させていくことによって、そのイメージは他児へと伝播し、他児にとってのイメージをも強化していく。このように、相互的な行為のやりとりによって、お互いのイメージが強化され、それらのイメージが遊びの行為によって連鎖し、互いのイメージが自分なりに濃密なものになっていく過程こそが、遊びを展開させる原動力であると河邊は捉えているのである。

加えて、河邊は、遊びの集団内のみならず、別の遊びの集団からの視線が、個人の遊びにおける行為に影響を与えうることに注意を促している。河邊によれば、「子どもは別の遊びをしているようでありながら、しっかりアンテナをはって、近くの遊びの情報を自分のなかに取り込んでいる」のであり、「遊びは互いに影響を受け合っている」⁴¹⁾。ただし、別の遊びの集団からの影響は、意識的・明示的に与えられるものではなく、遊びは、空間・時間的に共存しながら「目には見えないつながり」を持って展開する⁴²⁾。「目には見えないつながり」とは、「情報」を意識せずに受け止め合うことだと言い換えられている。ここでの「情報」とは、遊びとして、何を、どのように見立て、いかに振る舞っているかに関する感覚のことだと考えられる。つまり、子どもは、隣で何をして遊んでいるのか、そこがどういう遊びの状況にあるのか(子どもがモノを見立てること・なりきって振る舞うことから、どのような虚構世界が生じているのか)を、意識的に見て取るわけではないにしても、感じ取っている。そこから、新しい遊びのイメージが、空間と、子ども個人の内的イメージとして、潜在的にため込まれていくことになるのである。そして、このような半意識的ともいえる遊び間の「つながり」は、双方向、さらには多方向に形成されうる。

遊びの集団同士に「目には見えないつながり」があるというのは、複数の遊び集団が一つの遊び集団へと統合されていくことを意味するものではない。「場所が離れている遊びでも見えないつながりをもつ」⁴³⁾。このことと、図4に示した、他の子どもとのやりとりの中で、個の追求としての遊びのイメージの強化が生じていることを重ねて考えるならば、遊びの集団間の「目には見えないつながり」が生じていることは、潜在的な遊びの「状況性」の生成だと見なせる。河邊は、ある子どもがモノを見立てたり、何かになりきる振りをしたりすることで自身のイメージを別の子どもの示すことから虚構世界＝遊びの状況が生み出され、そのような遊びの状況に埋め込まれながら遊んでいることを、遊びの「状況性」と呼んでいた⁴⁴⁾。つまり、河邊は遊びの集団内の状態に言及する際に「状況性」という語を使っている。

ただ上記のように、彼女は、遊びの集団同士においても「目には見えないつながり」があると指摘し、これが遊びの状況に影響を与える可能性を示唆している。このような、遊び集団間で、潜在的に遊びの課題となるイメージがため込まれつつある事態は、〈遊び集団間の状況性〉と呼べるのではないだろうか。ただし、いずれの場合も「状況性」は、必ずしも保育者の目に見えるものではない。遊び集団内の遊びの「状況性」は、子どもが、友人・モノと空間の三者を結び付けて遊びの場としての意味を生成すること、遊びの状況＝虚構世界に子どもが埋め込まれていることである。遊び集団内の遊びの「状況性」は、遊びの集団のなかでの子ども同士のやりとり(モノを見立てる行為や何かになりきる振る舞いの応答)から捉えられる。

それに対して、遊び集団間の(潜在的な)遊びの状況性を読み解くには、それぞれの遊びの集団が、空間的にどのような位置関係にあるかという点をおさえることが有効である。河邊は保

育マップ型記録を、ある遊びが「他の遊びと空間的にどのような関係にあり、どのような関係をもちながら展開するかが視覚的にとらえやすい」記録として提案してきた⁴⁵⁾。保育マップ型記録は、遊び集団内の遊びの状況性と、遊び集団間の遊びの状況性をオーバーラッピングさせながら記録することを目指す記録方法なのである。

4. まとめ：保育マップ型記録における二重の「状況性」の可視化

保育マップ型記録が捉える子どもの遊びとは、「ごっこ遊び」に代表される演技的活動をモデルとしており、子どものイメージが共有・連鎖されることで生じる虚構世界＝遊びの状況に子どもが自己投入し、埋め込まれていることを特徴とする。子どもは、遊びのイメージを、モノへの見立てを媒介とした行為によって、他の子どもと共有する。ある子どものモノを見立てる行為を踏まえて、別の子どもが自らのイメージを、他者のイメージと重ね合わせるように、同じモノに対する見立てを、行為として表現することで応答するという相互行為を蓄積することによって、遊びの集団の凝集性は高まっていく。河邊にとっての遊びとは、子どもが、他の子どもと共に、遊びのイメージを共有させ合いながら、そのイメージに合うようにモノの使い方を案出したり、場を意味づけたりすることで展開していくのである。子どもは、遊びの中で他の子どもと共有されるモノへの見立てを前提とした行為を介したやりとりを行うことによって、子ども個人の内的イメージが深められていく。河邊において、以上に記した遊びの状況性は、遊びの集団内に止まらないものであった。

河邊は、遊びの集団間においても、遊び課題が互いに潜在的にため込まれる関係があることに着目している。河邊が「他の友達の遊びを潜在的に自分の遊びに取り込んでいる」と言っているのは、子どもは、一つの遊びの集団の中で、見立てたモノを媒介とした相互行為を積み重ねていく中で、他の子どもとイメージを共有しながら遊んでいる最中にも、他の遊び集団が何をやっているか、他の遊び集団にいる子どもから自分がどう見られているのかを（意識的にではないにしても）感知しているということである⁴⁶⁾。いわば、遊びの集団間で、遊び課題を探り合う潜在的な視線が交わされている。この視線は明示的なものではないが、遊び集団を違える子ども同士の間「見る－見られる」という関係性が生じていることを示すものである⁴⁷⁾。河邊は明示的に述べているわけではないが、この遊び集団間に生じる関係性をも、遊びの状況性として捉えられる。だからこそ、保育マップ型記録においては、遊びの集団間の相互的な位置関係が可視化されることが重視されているのである。

附記

本稿は、2023年度日本子ども社会学会奨励研究基金の助成（安部高太郎・吉田直哉「現代日本における保育記録方法論と保育理念としての子ども像の関連性の解明」）を受けた研究成果の一

部である。

謝辞

『遊びを中心とした保育：保育記録から読み解く「援助」と「展開」』（改訂第2版）からの図・記録の転載に関しては、著者である河邊貴子氏並びに萌文書林の許諾を得ました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 小田豊・山崎晃監修：幼児学用語集, 111頁, 北大路書房, 2013.
- 2) 谷田貝公昭編集代表：改訂新版 保育用語辞典, 357頁, 一藝社, 2019.
- 3) 河邊貴子は、1957年、東京に生まれる。1981年に東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程(幼児教育学)を修了している。大学院時代は小川博久に師事し、小川の影響を受けて幼児教育の現場で働くことを決意したという。実際に大学院修了後、12年間東京都の公立幼稚園にて勤務し、1993年から97年までは都立教育研究所幼児教育研究部にて指導主事を務めている。1999年より立教女学院短期大学助教授に着任、2006年に聖心女子大学文学部教育学科に異動、2023年現在、同大学教授である。
- 4) 河邊貴子：保育記録の機能と役割：保育構想につながる「保育マップ型記録」の提言, 1頁, 聖公会出版, 2013.
- 5) 河邊貴子：同上, 5頁.
- 6) 河邊貴子：同上, 8頁以下.
- 7) 河邊貴子：明日の保育の構想につながる記録のあり方：「保育マップ型記録」の有用性, 保育学研究, 46(2), 111頁, 2008.
- 8) 河邊貴子：同上, 110頁.
- 9) 河邊貴子：同上, 111頁.
- 10) 河邊貴子：総論 保育記録の書き方, 保育の友, 69(5), 17頁, 2021.
- 11) 河邊貴子：前掲 2008, 111頁.
- 12) 吉村香は、河邊について、保育者が保育実践を記録に残すのに有効な形式として保育マップ型記録を提起したと言及する文脈で「環境図を用いるなど、記録の枠組みを保育者が考案し、より主体的に記録作成に臨むべきこと」を河邊が一貫して提唱していると述べており、保育マップ型記録の特徴が環境図を用いることにあるとの認識を示している(吉村香：保育者の語りに表現される省察の質, 保育学研究, 50(2), 73頁, 2012.)。高辻千恵は、河邊の保育マップ型記録が「子どもたちの日々の遊びの様子を俯瞰的に捉える視点と、それを踏まえた保育者の願いや次の構想をも包含しうる記録」だと述べている(高辻千恵：計画に基づく省察と評価, 保育のいとなみ：子ども理解と内容・方法, 318頁, 東京大学出版会, 2016.)。ただ、高辻の「保育者の願いや次の構想をも包含しうる」という記述からは、保育マップ型記録の中核は、やはり環境図にあると認識されていることが推察される。保育士養成課程で使用されるテキストを見ても、保育マップ型記録が保育環境を記録するものだと認識されていることが分かる。例えば、『最新 保育士養成講座』第9巻では、保育記録の形式の一つとして、文章だけではなく、図や画像を入れることで視覚的に伝わりやすい記録があることを述べる文脈で、河邊の保育マップ型記録に言及し、「保育室等の保育環境を俯瞰的に図式化した保育

- 環境図に保育記録を書き込む」形式だと紹介されている(『最新 保育士養成講座』総括編纂委員会編：保育専門職と保育実践：保育実習／保育内容の理解と実践, 149頁, 全国社会福祉協議会, 2019.)。つまり、保育マップ型記録の記録対象は、保育環境だとされているのである。
- 13) 瀧川光治：指導計画づくりに生かすための保育記録のあり方(1)：先行文献の整理を中心に、教育総合研究叢書, 4, 61頁, 2011.
 - 14) 渡辺桜：集団保育において保育課題解決に有効な園内研究のあり方：従来の保育記録と保育者の「葛藤」概念の検討をととして, 教育方法学研究, 39, 45頁以下, 2014.
 - 15) 渡辺桜：同上, 43頁以下.
 - 16) 河邊は、保育マップ型記録とは「保育環境を図にした様式に、遊びのかたまりをマッピングし、そこで展開されている遊びの様子と子どもたちの経験を記述するもの」だとし、その特徴を「遊びの志向性を空間的に捉えようとしている点にある」とする(河邊貴子：明日の保育に生きる「日の記録」のあり方：遊びを読み取る視点の必要性, 保育学研究, 47(2), 140頁, 2009.)。
 - 17) 河邊貴子：前掲2008, 119頁.
 - 18) 河邊貴子：同上, 116頁.
 - 19) 河邊貴子：総論 保育記録の書き方, 保育の友, 69(5), 15頁, 2021 a.
 - 20) 河邊貴子：遊びを中心とした保育：保育記録から読み解く「援助」と「展開」(改訂第2版), 77頁, 萌文書林, 2020.
 - 21) 河邊貴子：同上, 77頁.
 - 22) 河邊貴子：前掲2008, 116頁.
 - 23) 河邊貴子：前掲2020, 77頁.
 - 24) 河邊貴子：前掲2008, 115頁.
 - 25) 河邊貴子：園庭環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開：ウッドデッキの新設をめぐって, 保育学研究 44(2), 143頁, 2006.
 - 26) 河邊貴子：前掲2020, 15頁.
 - 27) 河邊貴子：同上, 21頁.
 - 28) 河邊貴子：同上, 25頁.
 - 29) 河邊貴子：同上, 22頁.
 - 30) 河邊貴子：同上, 27頁.
 - 31) 「海ごっこ」とは次のようなものである。4歳児クラス7月のとある日、プールに入るには肌寒だったが、子どもの気持ちは水遊びに向いていたことから、水着に着替えることになり、水泳ごっこが始まる。保育者が子どもの要望にこたえる形で、新聞紙をドーナツ状に丸めたものを用意すると「浮き輪」として子どもがそれを見立てて、保育室前の廊下を「海」に見立てて泳ぐというごっこ遊びが生じた。この「海ごっこ」は、その後、「水中メガネ」を製作したり、巧技台を「海の家」に見立てて休むという広がりをもった展開をした。
 - 32) ここでいう「状況性」とは、ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーにおける「状況に埋め込まれた学習」を念頭に置いたものである。レイヴとウェンガーにおいて「状況性(状況に埋め込まれているという性質)」とは「知識や学習がそれぞれ関係的であること、意味が交渉(negotiation)でつくられること、さらに学習活動が、そこに関与した人々にとって関心の持たれた(のめり込んだ、ディレンマに動かされた)ものであること」を指しており、「状況に埋め込まれていない活動はない」とされる(レイヴ・ウェンガー：状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加, 佐伯胖訳, 7頁, 産業図書, 1993.)。

- 33) 河邊貴子：前掲2020, 30頁.
- 34) 河邊貴子：同上, 30頁.
- 35) 河邊貴子：遊びの充実を確かなものに, 幼児の教育, 103(11), 5頁, 2004.
- 36) 河邊貴子：前掲2008, 115頁.
- 37) 河邊貴子：前掲2020, 46頁.
- 38) 河邊貴子：同上, 46頁.
- 39) 河邊貴子：同上, 172頁.
- 40) 河邊貴子：同上, 172頁.
- 41) 河邊貴子：同上, 32頁.
- 42) 河邊貴子：同上, 82頁以下.
- 43) 河邊貴子：同上, 84頁.
- 44) 河邊貴子：同上, 30頁.
- 45) 河邊貴子：同上, 84頁.
- 46) 河邊貴子：同上, 37頁.
- 47) 河邊の指導に当たった小川博久は、保育室内のコーナー間において、ある遊びのコーナーにいる幼児が、別の遊びのコーナーにいる幼児に対して「自分たち以外の場に人の気配がし、そこに幼児たちの群れの存在があることを意識すること」が生じ、同様に自分たちのことが別のコーナーにいる幼児に意識されることが生じることを「見る－見られる」関係の成立だとする(小川博久：保育援助論(復刻版), 175頁, 萌文書林, 2010b.)。小川は「見る－見られる」関係について「実際に幼児一人ひとりがお互いに他のコーナーにいる幼児をみているかどうかを問題にしているのではない」としているから、河邊においての遊び集団間における潜在的な遊びの状況性とは、小川のいう「見る－見られる」関係の成立と同様の事態を指していると言える。小川において、コーナー間の「見る－見られる」関係は「コーナー相互がギャラリーという性格をもつことで賑わいを演出している」ことである(小川博久：遊び保育論, 104頁, 萌文書林, 2010a.)。これを踏まえると、河邊は、ある遊び集団が他の遊び集団からの視線を受けることで、その遊び集団におけるごっこ遊び＝演技的活動は、観客の視線を意識することになり、より生き生きと演じることになり、遊びが深まると捉えていると考えられる。

本来感研究の動向と課題 2

The Trend and Issues of Research on Sense of Authenticity 2

折 笠 国 康[※]

Kuniyasu Orikasa

The purpose of this study was to summarize recent studies and research trends related to the "Sense of Authenticity," which is interpreted as an adaptive self-concept, and to examine the direction of research required in the future.

Specifically, the purpose of this study was to examine the relationship and similarity between "Self-Compassion" and "Self-Efficacy" and "Sense of Authenticity". The purpose of this study was also to discuss the relationship and similarity between "Self-Compassion" and "Self-Efficacy" and to provide suggestions that will contribute to the development of research on the "Sense of Authenticity".

はじめに

本来感とは、Gecas¹⁾やSeligman²⁾等を中心とする従来の心理学的な研究において、well-beingが促進されることに貢献する「本来性の感覚(Sense of Authenticity)」「個人的資質(positive traits)のひとつとしての“authenticity”」として扱われてきた自己概念であり、伊藤・小玉³⁾により、他者からの評価によらない自己内価値基準として「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義されたものである。さらに、伊藤・小玉³⁾では、大学生を対象とする研究を行い、自尊感情と類似の概念である本来感が高いほど、抑うつ、不安、人生に対する満足、心理的well-beingに強い影響を与え、自律性に対して正の影響を与えること等について明らかにした。この伊藤・小玉³⁾による示唆は、現在の様々な適応等のかかわる社会的な問題の解決・予防に関する研究を支える知見であることが考えられた。

折笠・庄司⁴⁾では、生徒指導上の諸問題が山積される中学生の適応に焦点を当て、昨今の心理学的研究において適応やwell-beingの指標として用いられるようになっている本来感について、本来感研究の動向と今後の課題について論じられた。具体的には、それまでの本来感に関わる研究を概観し、自尊感情、自己受容、自我同一性など「自分らしさ」「ありのままの自分」をキーワードとする本来感と近接する概念との相違や関連性が検討された。自尊感情との関連として、本来感とは外的基準ではなく自分が自分らしくいることで感じられる自尊感情であり、

※ 郡山女子大学短期大学部 幼児教育学科

Deci & Ryan⁵⁾の本当の自尊感情(True Self-Esteem)、Kernis⁶⁾の最良の自尊感情(Optimal Self-Esteem)と極めて近いものであることが確認され、本来感とは本当の自尊感情と言い換えることも可能であることが示唆された。自己受容との関連としては、自分自身に対する価値判断を外部の基準や他者との比較によって行うのではなく、主観的に個人内の価値基準に重きを置くという意味において、Rosenberg⁷⁾による自分を“これでよい(good enough)”とする真の自尊感情や自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度である本来感と自己受容は近接の概念であると考えることができる(p.90)。自我同一性(Erikson⁸⁾、谷⁹⁾)との関連では、自我同一性と本来感はどちらも「自分らしさ」という言葉で表現されるような自己の感覚を含んでいる点では共通しているが、自我同一性と本来感の相違点としては、自我同一性の中核には社会生活における自己の役割や意味での自己意識・自己概念の確立という認識的な要素があり、本来感はそのような社会的な意味づけを必ずしも必要としない「自分らしさ」という感覚的要素が概念の中核にある点で異なっている。自我同一性とは社会の中において「私は〇〇である」という社会的な文脈において自己が位置づけられていることによる自分らしさの感覚であり、本来感はそのような社会的な文脈を超えて、より直接的に「私は私である」と感じられるものであるとすることで概念的な相違をまとめている(p.90-91)。

また、今後の本来感研究の課題と方向性、学校現場での本来感を育てる指導の方向性、および諸問題の予防解決的な方向性での課題を示し、その後、これらの課題を踏まえ、折笠・庄司¹⁰⁾では、中学生の学校ストレスに対する本来感の低減効果を確認した。さらに、折笠・庄司¹¹⁾では、本来感と随伴性自尊感情の組み合わせの視点から、中学生の本来感と優越感、学校適応感との関連に示唆を与えた。具体的には、中学生の自尊感情を考慮する際には、本来感と優越感両者の組み合わせでとらえることの重要性が示唆された。これらの新たな知見は、中学生にかかわる諸問題の解決や予防に対して一定の貢献をもたらしたと考えられる。

昨今では、磯野・鈴木・山崎¹²⁾や垣内¹³⁾が示唆するように、幼稚園教諭や保育士(以下、保育職従事者)を取り巻く、ストレスフルな状況や業務の多様化や労働環境における諸問題が深刻化しているといった実情がある。こうした保育職従事者の置かれている現状に鑑み、保育職従事者の適応やwell-beingを見据えた知見を得ることにも、本来感研究が果たす役割は大きなものがあると考えられる。そこで、本研究では折笠・庄司⁴⁾に倣い、本来感の定義は伊藤・小玉³⁾に準じ、現在までの保育職従事者にかかわる本来感に関わる研究を概観し、詳細については後述する自己効力感(Self-Efficacy)や自己に対する慈しみであるセルフ・コンパッション(Self-Compassion)など「自分らしさ」「ありのままの自分」をキーワードとする本来感と近接する概念との相違や関連性を新たに確認し、今後の本来感研究に役立つ関係性を整理することを目的とする。また、昨今の保育職従事者と本来感に関わる研究をレビューし、研究の結果や考察を概観することを目的とする。さらに、今後の本来感研究の課題と方向性や、保育職従事者

を取り巻くストレスフルな環境における諸問題の予防解決に貢献する研究の方向性について提言を行うことを目的とする。

I 本来感の近接概念との関連

1 自己効力感(Self-Efficacy)との関連

Gecas¹⁾は、人間が志向する自己についての動機づけ(Self-motive)として3つの感覚、「自尊感情(Self-Esteem)」「自己効力感(Self-Efficacy)」「本来性の感覚(Sense of Authenticity)」に注目し、これらの感覚を感じられていることがwell-beingの促進に貢献することを示した。

これまでの論考を鑑みると、Gecas¹⁾により提示されている3つの感覚の中の「自己効力感(Self-Efficacy)」と本来感との概念や機能としての類似性や関連が予測される。

社会的認知理論(Bandura¹⁴⁾)の枠組みにおいて、危機的な出来事に対応することができる自信は、対処に結び付く行為に役立つ中心的な役割を果たすとされている。自己効力感とは、心理学的には自分の自身に対する能力に対する信頼を表現する概念とされている。Bandura¹⁴⁾は、自己効力感を社会的認知理論の中心的な枠組みを示す概念として捉え、人がある状況で役立つ行動を効果的に行える可能性の認知であることを示唆した。具体的には、庄司¹⁵⁾は、状況に屈せずむしろそれを克服して、よりよい状況に変わるよう努力したり、努力のしかたを変えたり、気分転換してその状況を脱したりすることができる人の存在を示唆した。これらの人は、一般に自尊感情が高く、こうした認知ができる要因として、自分の周辺に起こる事象に対して自己がどのように関与していると認知するかに関わる変数の1つとして自己効力感を取り上げている。また、自己にとって有益なある種のセルフ・コントロールの行動に最も影響を及ぼす要因の1つが自己効力感であることを示唆した。

Bandura¹⁶⁾は、人々はストレスサーへの誤った対処によって身体を消耗し傷つけることを想定し、日常生活の多くの場面で慢性的なストレスサーへの効果的な対処という文脈の中で、自己効力感の生体面における生理学的耐性の増加という効果について示唆した。これは、折笠・庄司¹⁰⁾による、中学生の学校ストレスに対する本来感によるストレス低減効果の示唆と同種の見解であることが考えられる。また、成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田¹⁷⁾は、臨床・教育場面において、ある特定の課題や状況に固有の自己効力感が測定され、その特性の課題や状況における問題を解決するために自己効力感が役立つこと示唆し、同時に臨床・教育場面に限らず広く基礎的なデータの収集が課題であることを論じている。

2 セルフ・コンパッション(Self-Compassion)との関連

萩原・甲田¹⁸⁾等が示すように、近年メンタルヘルス向上に関して、心理学的概念であるセルフ・コンパッション(Self-Compassion)が注目されている。セルフ・コンパッションとは、辛い経験や落ち込んでしまうような状態のときに、自分に対して思いやり慈しみの気持ちを向け

ることである(Neff¹⁹⁾)。また、有光・青木・古北・多田・富樫²⁰⁾は、Neff¹⁹⁾により、セルフ・コンパッションには、自分への優しさと、共通の人間性、マインドフルネスという肯定的な側面と、自己批判、孤独感、過剰同一化という否定的な側面があることを示し、セルフ・コンパッションを高めることで、ネガティブな感情を低減し、ポジティブな感情を高めることの可能性を示唆した。

セルフ・コンパッションの機能的な効果として、水野・菅原・千島²¹⁾は、セルフ・コンパッションは肯定的解釈を経由することで、well-beingに正の影響を及ぼすことを示した。すなわち、セルフ・コンパッションのコーピングとしての機能を明らかにしたと考えられる。また、萩原・甲田¹⁸⁾による、セルフ・コンパッションとwell-beingの関連についてのレビューにおいて、Zessin, Dickhäuser, & Garbade²²⁾では、セルフ・コンパッションとwell-beingには、中程度の相関があり、個人のwell-beingを高めるには、自分に思いやりの気持ちを向けることが重要であることを示した。さらに、セルフ・コンパッションが高いと、失敗は自分自身を成長させるものと捉え、適応的な考えを持ち、自身に対してポジティブな反応を示すとした(p.4)。Rabon, Sirois & Hirsch²³⁾は、大学生を対象とした研究において、セルフ・コンパッションは抑うつ症状との負の相関があり健康的行動と正の相関があることを示した。

以上のように、こうしたセルフ・コンパッションの機能的側面において、前述したように適応的な自己概念として機能することが示されている本来感との類似性や関連が予測される。具体的には、伊藤・小玉³⁾によって示されている大学生を対象とした研究による、本来感による抑うつの低減効果、人格的成長への影響、well-beingの向上等が該当していると考えられる。また、折笠・庄司¹⁰⁾による中学生を対象とした研究による、本来感の学校ストレスの低減効果に関わる知見が該当することが考えられる。

Neff¹⁹⁾、有光²⁴⁾、宮川・谷口²⁵⁾などにより、セルフ・コンパッションと自尊感情との概念的な関連についての示唆がある。有光²⁴⁾は、Neff¹⁹⁾を基にセルフ・コンパッションは自分に対する肯定的認知(self-regard)の源である点において自尊感情との関連性を示した。ここで取り上げられた自尊感情は、他者からの肯定的な評価や、他者よりも自分が優れていることに起因するものであり、Rosenberg⁷⁾や折笠・庄司¹⁰⁾¹¹⁾等が示している随伴性自尊感情であることが考えられる。随伴性自尊感情は、自尊感情の不適応的な部分であるとの見方がなされ、Rosenberg⁷⁾などを中心に適応的な本当の自尊感情とは弁別して考えることの必要性が示唆されている。宮川・谷口²⁵⁾は、セルフ・コンパッションにかかわる先行研究を基に、セルフ・コンパッションと自尊感情の正の相関関係があることを示し、また、セルフ・コンパッションは自尊感情を統制しても精神的健康と関連することや、セルフ・コンパッションは自己愛傾向と関連性が弱いという点で、セルフ・コンパッションが自尊感情とは異なる概念であることを示した(p.71)。

以上のように、こうしたセルフ・コンパッションの概念的側面において、セルフ・コンパッションは、他者との比較や評価によらずに自分らしさの感覚を持つ本当の自尊感情としての意味を持つ本来感との関連が予測される。また、セルフ・コンパッションと本来感との関連を基にする従来にはない研究による知見が、ストレスフルな環境に身を置く保育職の諸問題等、社会的な問題にもなっている事項に対して、新たな知見や示唆を提供できることを可能にすることが考えられる。

Ⅱ 本来感研究の概観

1 教師特有のビリーフと本来感との関連

人はある事象に対して、自身のビリーフを基にした認知の仕方を用いる。そのビリーフを基にした認知の仕方を用いた結果として、その人特有の行動特性や人格を決定づけるものとなる。

河村²⁶⁾は、現実的で論理的であり、絶対主義的でない「できるなら～であるにこしたことはない」というビリーフをラショナル・ビリーフ(rational belief)とし、人の自己実現を促進することに寄与する可能性を示唆した。これに対して、絶対的で教義的な「～ねばならない」とするタイプのビリーフをイラショナル・ビリーフ(irational belief)とし、強迫的な行動・感情に結びつくと考えられる(p.6)ことを示唆した。また、國分²⁷⁾は、人が持つビリーフにおいて、人を不幸にする悪玉のビリーフをイラショナル・ビリーフとしている。

河村²⁶⁾は、小学校教諭には特有のビリーフ(以下、教師特有のビリーフ)が存在することを明らかにした。また、教師特有のビリーフは精神的健康に負の影響を及ぼすと考えられるイラショナル・ビリーフであることを示唆した。また、教師特有のビリーフの強い教師は、日常的教育実践で児童を認知する基準が限定する、コミュニケーション・ユーモアが欠如する、権威的・管理的なリーダーシップをとる傾向が日常の教室でみられることを明らかにした。さらに、教師特有のビリーフの強い教師は、児童に対する対応にも「教師の魅力」の勢力資源が有意に低いことを示した(p.161)。結果として、教師特有のビリーフの強い教師は、児童のスクール・モラールに対する負の影響を与えることを明らかにした。

保育職従事者に関わる知見としては、佐藤・七木田²⁸⁾により幼稚園教諭も小学校教諭と同様に特有のビリーフを持つことが示唆された。教師が教師特有のビリーフを持つ背景として、河村²⁹⁾は、教師が教師特有のビリーフを持つことで、教師自身が不安や葛藤を避けることに役立ち、さらには自分を正当化することにも役立つことを示唆した。つまり、ストレスフルな環境に身を置く教師にとって、教師特有のビリーフを持つことは、せめてもの心の安定を守る自己防衛の一種でもあり、それ故に自分の認知の仕方を規制するということが考えられる。

折笠³⁰⁾では、ストレスフルな環境に身を置くことが予測される幼稚園教諭の持ち合わせる教師特有のビリーフと本来感の関連について検討された。東北地方と関東地方の私立幼稚園と公

立幼稚園の合計16園から回答を得られ、合計115名の回答が分析の対象となった。分析の結果、幼児は規律ある行動をすべきであり、教諭の言うことを素直に従い、社会的な決まりを守らせるためには厳しさも厭わないとの姿勢を持ち、同時に幼稚園教諭の仕事は社会的な価値があるとの教師特有のピリーフをという特徴が示された(p.213)。また、こうした幼稚園教諭特有のピリーフを持つことが本来感に与える影響が検証された。前述したように教師特有のピリーフはイラショナル・ピリーフであることから、教師特有のピリーフを持つことで適応や精神的健康に負の影響が及ぼされることが予測された。しかしながら折笠³⁰⁾では、教師特有のピリーフを持つことで適応や精神的健康の指標でもある本来感に対して負の影響は確認されなかった。幼稚園教諭の仕事は、社会的価値があるとの教師特有のピリーフを持つことで、むしろ適応や精神的健康の指標である本来感に正の影響が及ぼされることが確認された。また、調査対象となった地域では、精神的な健康に負の影響を与えるほどには強くピリーフとして持ち合わせていない可能性や、自らの仕事に対する社会的価値のピリーフは、他のピリーフの精神的健康に及ぼす負の影響を打ち消すほどの効果があることの可能性が考察された。

2 両親の養育態度と本来感との関連

野津³¹⁾は、ストレスフルな状況下でもストレスに負けずに回復する力を持ち、心理的、社会的に良好な状態を維持する自己概念として、近年の心理学研究においてレジリエンスの重要性を示唆している。このレジリエンスという自己概念は、先天的な要因である気質によって規定される資質的レジリエンスと、後天的に獲得しうる獲得的レジリエンスに分類して考えることができる(平野³²⁾)。また、野津³¹⁾は、養育態度に関して安定した家庭環境の重要性を示唆した。具体的には、受容的な好ましい親子関係や養育態度が後天的に獲得し得るレジリエンスを高める要因であることを示唆した。

折笠³³⁾では、保育職従事者の本来感と自己受容、自尊感情、レジリエンスそれぞれの間の有意な中程度の正の相関が確認された。これにより、折笠³⁴⁾では、本来感とレジリエンスの機能や発達、規定要因等についての類似性を予測した。また、レジリエンスは安定した家庭環境や受容的な好ましい親子関係や養育態度といった後天的な要因に規定されるといった知見を基に、良好な両親の養育態度が本来感を規定する要因の1つであることを仮説とした。

折笠³⁴⁾では、両親の養育態度は応答性と統制の二次元から捉え(中道・中澤³⁵⁾)、良好な両親の養育態度を応答性として位置づけた。応答性の定義は中道・中澤³⁵⁾に倣い、「子どもの意図・欲求に気づき、愛情のある言語的・身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」とし、統制の定義は「子どもの意志とは関係なく、親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動」とした。東北地方の短期大学に在籍し、保育士、幼稚園教諭を志望する女子学生266名を対象に回答を求め、合計257名の回答を分析の対象として調査が行われた。分析の結果、本来感に対しては両親の養育態度の応答性から正の影響を確認

することが出来たが、統制からの影響は確認されなかった。これにより、両親の応答的な養育態度は本来感に対して正の影響を与え、両親の統制的な養育態度は本来感に対して負の影響を与えるという仮説は部分的に支持されることとなった(p.63)。

また、折笠³⁴⁾では、両親の養育態度と前述の教師特有のビリーフと関連すると考えられる示唆がある。保育職志望学生の現在併せ持つ統制的な養育態度に対しては、両親の養育態度の応答性からの影響は確認されず、統制からの影響のみが確認された。標準偏回帰係数や決定係数の値も比較的大きく、保育職志望学生の現在の養育態度の統制的要素は、両親による統制的な養育態度に起因するところが大きいとの解釈が可能である。統制的な態度は、その定義から、自他の生き辛さにかかわるイラショナルなビリーフと密接な関連があるとして捉えることができる。つまり、統制的な養育態度は、河村²⁶⁾がその存在を明らかにした教師特有のビリーフに近い概念であるとの解釈が可能である。教師特有のビリーフを強く持つ教師は児童にとって好ましい教育環境にはなにくく、また、両親と同様に教師も児童にとって重要な他者と認知する可能性を考慮すると、将来的にイラショナルなビリーフを持つにいたることが考えられる。

さらに折笠³⁴⁾では、両親からの応答的な養育態度を経験したとしても、統制的な保育所や幼稚園、小中学校で教師特有のビリーフの強い保育者や指導者にかかわることで、応答性が育ちにくくなることが考察された。保育職志望学生の現在併せ持つ統制的な養育態度に対しては、自身が経験した統制の影響が起因するという知見は、河村²⁶⁾を補完し得るものであると考察された(p.64)。

3 自己肯定感と本来感との関連

自己肯定感とは、昨今の心理学的研究で適応に関わる変数として取り扱われることの多い自己概念の1つである。田中³⁶⁾は、自己肯定感を「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」と定義し、本研究でレビューされた先行研究においても自己肯定感の定義は田中³⁶⁾に準じている。定義からも分かるように、自己肯定感は自分らしさの感覚の程度である本来感(伊藤・小玉³⁾)との概念的な類似性が予測される自己概念である。これまでの折笠³⁸⁾39)等の研究においては、自己肯定感と本来感の有意な正の相関が確認された。また、有意な正の相関がありながらも、自己肯定感と本来感との差異についての示唆がなされている。

折笠³⁸⁾では、保育職志望学生の発達段階を考慮し、持ち合わせる恋愛イメージ(大切・必要、刹那的・付加価値、相互関係、独占・束縛、衝動・盲目的、献身的、成長)が、適応的な2つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに与える影響について検討され、恋愛イメージとの関連を基に自己概念である本来感と自己肯定感との共通する特徴や差異についての示唆がなされた。東北地方の短期大学に在籍し、保育士、幼稚園教諭を志望する女子学生245名を対象に回答を求めた。欠損値があるものなど、回答に不備があるものを削除し、合計231名の回答を分析の対象とした。分析の結果、適応的な2つの自己概念である本来感と自己肯定感それ

それに弱いながらも恋愛イメージの「成長」と正の相関が確認された。すなわち、成長の方向に向かった恋愛は不安や不満を感じさせない自己概念を作り出すことと関連することが考えられ、適応的な状態を作り出すために機能すると考えられる本来感や自己肯定感の高さと恋愛イメージの「成長」との関連は妥当なものである (p.30) と考察された。恋愛イメージの「相互関係」「大切・必要」との関連では、本来感との関連は確認されず、自己肯定感との間にだけ関連が確認された。本来感は、伊藤・小玉³⁾により「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義されていることから分かるように、自分自身にかかわる感覚であり、「相互関係」「大切・必要」といった他者との関係性やかかわりとは関連しにくい概念であること (p.30) から、2つの概念的な差異についての考察がなされた。

折笠³⁹⁾では、折笠³⁸⁾に倣い保育職志望学生の発達段階を考慮し、保育職志望の女子学生の被服行動が適応的な2つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに与える影響について検討がなされた。また、被服行動との関連を基に概念として近似であると考えられる本来感と自己肯定感との共通する特徴や差異についての検討がなされた。調査対象者は折笠³⁸⁾と同一の合計231名の回答を分析の対象とした。分析の結果、自己肯定感は衣服といった自分自身にとっての外的な物に依存することで、自身の気分や感情に変化をきたす傾向が見られた。本来感は、「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義されているように、自己内価値基準を大切にしている自分自身にかかわる感覚であることから、本来感では自身の意思によって被服行動を統制しているとの考察がなされた。すなわち、こうした自己内価値基準と自己外価値基準の感覚が、本来感と自己肯定感との概念的な差異を論じる一つの視点であること (p.111) が考察された。

前述のように、ストレスフルな環境に身を置くことが予測される保育現場において、適応的に就業するための視点として、被服行動について意識を持つ上での具体的な視点が示唆されたと考えられる。特に、学生時代にストレス耐性に長けた自己肯定感や本来感といった適応的な自己概念を獲得するためには、被服行動の際に自身の身体的なコンプレックスに意識を向けるのではなく、自身の好きな部位を強調するような意識を育てることの重要性が示唆されたと考えられる (p.112)。

Ⅲ 考察

1 本来感研究のまとめ

以上みてきたように、ストレスフルな環境に身を置くことが予測される保育職の現場において、本来感やそれに近接の自己概念である自己効力感やセルフ・コンパッションが適応的に職務を遂行することに貢献することが考えられる。また、本研究では、「自分らしさ」「ありのままの自分」をキーワードとする本来感と近接する概念である自己効力感 (Self-Efficacy) やセル

フ・コンパッション (Self-Compassion) との相違や関連性を新たに確認し、今後の本来感研究に役立つ関係性を整理することを目的とした。それぞれの関係性について以下のようにまとめられる。

①本来感と自己効力感 (Self-Efficacy) : 本来感は、他者評価や他者比較を必要としない自己内価値基準の本当の自尊感情に近い概念である。自己効力感は、自尊感情が高く、自分の周辺に起こる事象に対して自己がどのように関与していると認知するかといった、自己内価値基準に関わる変数として取り上げられている。また、well-beingの促進に貢献する自己についての動機づけ (Self-motive) として「自尊感情 (Self-Esteem)」「自己効力感 (Self-Efficacy)」「本来性の感覚 (Sense of Authenticity)」の3つの感覚が注視されている。これは、well-beingの促進に貢献するといった視点から、本来感と自己効力感の関係性や関連性を予測させ得るものと考えられる。

②本来感とセルフ・コンパッション (Self-Compassion) : 本来感の機能としては、抑うつつの低減効果、人格的成長への影響、well-beingの向上等が示されている (伊藤・小玉³¹⁾)。また、本来感の学校ストレスの低減の効果が示されている (折笠・庄司¹⁰⁾)。セルフ・コンパッションは、メンタルヘルス向上に関わる心理学的概念であり、セルフ・コンパッションを高めることで、ネガティブな感情を低減し、ポジティブな感情を高め、さらにはwell-beingの促進や、抑うつ症状との負の相関、健康的行動と正の相関が示唆されている概念であり、本来感との関係性や関連性を予測させ得るものと考えられる。

2 今後の課題

本研究では、今後の本来感研究の課題と方向性や、保育職従事者を取り巻くストレスフルな環境における諸問題の予防解決に貢献する研究の方向性について提言を行うことを目的とした。そこで、保育職従事者や保育職志望の学生の本来感に関わる先行研究をレビューし、研究の結果や考察を概観してきた。以下、先行研究から考えられる今後の課題は以下のようにまとめられる。

これまでの折笠・庄司¹⁰⁾¹¹⁾等の本来感にかかわる研究の示唆から、本来感には個人差があり、本来感を独立変数とした場合に、個人が持ち合わせる本来感の高低のレベルにより従属変数に対する影響が確認されている。成田ら¹⁷⁾は、自己効力感のある種の人格特性的な認知傾向とみなし、それを特性的自己効力感 (Generalized Self-Efficacy) と名づけ、特性的自己効力感の個人差の存在を想定した。この特性的自己効力感の個人差に起因して個人の行動全般に渡る影響の可能性を示唆した (p.307)。つまり、これまでの本来感研究による適応に寄与する様々な効果を鑑みると、本来感と自己効力感の概念や機能における類似性を考えるときには、成田ら¹⁷⁾が示した特性的自己効力感との比較検討をすることが望ましいと考えられる。

教師には特有のビリーフがあり、教師特有のビリーフを持つことでストレスフルな環境の中で心の安定を守る自己防衛の一種として自分の認知の仕方を規制するということが考察された。

教師特有のビリーフは不適応的なイラショナル・ビリーフであることから、幼稚園教諭においても本来感に対する負の影響が及ぼされることが予測された。しかしながら、折笠³⁰⁾では、本来感に対して負の影響は確認されず、幼稚園教諭の仕事は「社会的価値がある」との教師特有のビリーフを持つことで、本来感に正の影響が及ぼされることが確認された。自らの仕事に対する社会的価値を強く認知することは、他のビリーフの精神的健康に及ぼす負の影響を打ち消すほどの効果があるのか検証することが今後の課題として考えられる。

折笠³⁴⁾では、本来感とレジリエンスの類似性を基に、両親の養育態度が本来感に与える影響について検討した。その結果、本来感に対しては両親の養育態度の応答性から正の影響を確認することが出来たが、統制からの影響は確認されなかった。しかし、保育職志望学生の現在併せ持つ統制的な養育態度に対しては、両親の養育態度の統制からの影響が確認された。また、統制的な養育態度は、イラショナルなビリーフと密接な関連があることが予測された。これらのことから、両親の養育態度と教師特有のビリーフとの関連性を基に、本来感に与える影響について検証していくことが課題として考えられる。

【引用文献】

- 1) Gecas, V. (1991). The self-concept as a basis for a theory of motivation. In J. A. Howard, & P. Callero (Eds.), *The Self-Society Dynamic*. Cambridge University Press. Pp. 171-187.
- 2) Seligman, M. E. P. (2002). *Authentic Happiness : Using the new positive psychology to realize your potential for lasting fulfillment*. New York : Simon & Schuster, Inc.
- 3) 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討, *教育心理学研究*, 53, 74-85.
- 4) 折笠国康・庄司一子 (2017). 本来感研究の動向と課題, *郡山女子大学紀要*, 53, 85-98.
- 5) Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy : The basis for true self-esteem . In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York : Plenum. Pp. 31-46.
- 6) Kernis, M. H. (2003). Optimal self-esteem and authenticity : Separating fantasy from reality. *Psychological Inquiry*, 14, 1 -26.
- 7) Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- 8) Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York : W. W. Norton & Company
- 9) 谷冬彦 (2004). アイデンティティの定義 谷冬彦・宮下一博(編) シリーズ荒れる青少年の心ーアイデンティティの病理ー発達臨床心理学的考察 (pp.2-4) 京都: 北大路書房
- 10) 折笠国康・庄司一子 (2019). 中学生の学校ストレスが学校忌避的感情と関係性攻撃に与える影響、及び、本来感によるストレス低減効果, *学級経営心理学研究*, 8, 17-28.
- 11) 折笠国康・庄司一子 (2019). 中学生の本来感と優越感および学校適応感との関連の検討：本来感と随伴性自尊感情の組み合わせの視点から, *発達心理学研究*, 30, 132-141.
- 12) 磯野登美子・鈴木みゆき・山崎喜比古 (2008). 保育所で働く保育士のワークモチベーションおよびメンタルヘルスとそれらの関連要因, *小児保健研究*, 67, 367-374.

- 13) 垣内国光 (2007). 保育者の現在－専門性と労働環境－. 京都：ミネルヴァ書房.
- 14) Bandura, A. (1977). Self-Efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 15) 庄司一子 (1996). 幼児・児童のself-controlの発達とその規定要因に関する研究. 東京：風間書房.
- 16) Bandura, A. (1995). SELF-EFFICACY IN CHANGING SOCIETIES. Cambridge University Press. (本
明寛・野口京子・春木豊・山本多喜司訳 (1997). 激動社会の中の自己効力 東京：金子書房.)
- 17) 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺
度の検討－生涯発達の利用の可能性を探る－, 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 18) 萩原志織・甲田宗良 (2020). メンタルヘルスの向上のためのセルフコンパッション研究の動向と今
後の展望, 徳島大学総合科学部 人間科学研究, 28, 1-10.
- 19) Neff, K. D. (2003). Development and validation of a scale to measure self-compassion. *Self and
Identify*, 2, 223-250.
- 20) 有光興記・青木康彦・古北みゆき・多田綾乃・富樫莉子 (2016). セルフ・コンパッション尺度日本
語版の12項目短縮版作成の試み, 駒澤大学心理学論集, 18, 1-9.
- 21) 水野雅之・菅原大地・千島雄太 (2017). セルフ・コンパッションおよび自尊感情とウェルビーイン
グの関連－コーピングを媒介変数として－, 感情心理学研究, 24, 112-118.
- 22) Zessin, U., Dickhäuser, O., & Garbede, S. (2015). The relationship between self-compassion and well-
being : A meta-analysis. *Applied Psychology : Health and Well-Being*, 7, 340-364.
- 23) Rabon, J. K. , Sirois, F. M. & Hirsch, J.K. (2017). Self-compassion and suicidal behavior in college
students : Serisl indirect effects via depression and wellness behaviors. *Journal of American College
Health*, 66, 114-122.
- 24) 有光興記 (2014). セルフ・コンパッション尺度日本語版の作成と信頼性、妥当性の検討, 心理学研
究, 85, 50-59.
- 25) 宮川裕基・谷口淳一 (2016). 日本語版セルフコンパッション反応尺度(SCR-J)の作成, 心理学研究,
87, 70-78.
- 26) 河村茂雄 (2000). 教師特有のビリーフが児童に与える影響. 東京：風間書房.
- 27) 國分久子 (1999). イラショナル・ビリーフの特徴 國分康孝(編) 論理療法の理論と実際. 東京：
誠信書房.
- 28) 佐藤智恵・七木田敦 (2007). 幼稚園教諭のBeliefに関する研究 ー小学校教員との比較からー, 広
島大学大学院教育学研究科紀要, 56, 333-339.
- 29) 河村茂雄 (1999). 学級担任のビリーフ 國分康孝(編) 論理療法の理論と実際. 東京：誠信書房.
- 30) 折笠国康 (2016). 幼稚園教諭のビリーフが本来感に与える影響, 郡山女子大学紀要, 52, 207-215.
- 31) 野津友美枝 (2014). 父親・母親の養育態度が青年期のレジリエンスに及ぼす効果, 京都学園大学人
間文化学部 人間文化学部学生論文集, 13, 27-36.
- 32) 平野真理 (2011). 中高生における二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の妥当性－双生児法による検
討, パーソナリティ研究, 20, 50-52.
- 33) 折笠国康 (2021). 保育職従事者の本来感と勇気としての共同体感覚との関連, 郡山女子大学紀要,
57, 41-49.
- 34) 折笠国康 (2022). 保育職志望学生の本来感と両親の養育態度の関連, 郡山女子大学紀要, 58, 55-
65.
- 35) 中道圭人・中澤潤 (2003). 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連, 千葉大学教育学部

- 研究紀要, 51, 173-179.
- 36) 田中道弘 (2005). 自己肯定感尺度の作成と項目の検討, 人間科学論究, 13, 15-27.
- 37) 折笠国康・庄司一子 (2012). 中学生の本来感が学級適応に与える影響, 教育カウンセリング研究, 4, 11-19.
- 38) 折笠国康 (2022). 保育職志望の女子大学生における本来感と自己肯定感の検討 ー恋愛イメージが本来感と自己肯定感に及ぼす影響ー, 共生教育学研究, 10, 25-34.
- 39) 折笠国康 (2023). 保育職志望の女子大学生における本来感と自己肯定感の検討 2 ー被服行動が本来感と自己肯定感に及ぼす影響ー, 郡山女子大学紀要, 59, 103-113.

保育者養成における「絵本の読み聞かせ」の自己教育モデルの構成

～PDCAサイクルと自己調整学習の社会的認知モデルの視座から～

Composition of the Self-education Model of "Picture Book Reading"
in Childcare Provider Training : From the Perspective of the PDCA Cycle
and the Social Cognitive Model of Self-Regulated Learning

佐々木 郁 子

Ikuko Sasaki

In this paper, we examined a method for independently reading picture books to students at a training school for childcare providers prior to their practicum. As a result, we were able to construct a self-educational model of picture book reading, the SUDSIP model, based on the PDCA cycle and the social cognitive model of self-regulated learning. Furthermore, we demonstrated the effectiveness of this model.

1. はじめに

保育者を志す学生にとって保育実習や教育実習は大きなイベントである。それゆえ、学生は、保育実習や教育実習の事前に、授業内だけではなく、授業外の時間を用いて実習の準備を行なっていると思われる。小屋(2010)や佐々木(2021)は、保育実習や教育実習を終えた学生に対して、実習前にもっと練習しておきたかった内容についてアンケート調査した。その結果、「絵本の読み聞かせ」、「手遊び」、「ピアノ」、「指導案や実習日誌の書き方」が多いことを報告している。特に、絵本の読み聞かせは、言葉への興味や獲得を促進するだけではなく、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わえることから、情緒面の発達を促すという意味でも大切である。

一方、絵本の読み聞かせは手遊びやピアノと比較して、保育者養成校において練習する機会が少ないと思われる。保育者養成校における授業でも、絵本の読み聞かせは扱われるが、時間的な制約から、一人ひとりの学生が十分に練習する時間と機会を確保することは困難である。したがって、絵本の読み聞かせの練習は、学生の授業時間以外の自主的な練習を行う必要があるが、どのような点に気を付けて読めば良いのか、自分がどのように読んでいたのかを確認することも困難である。そこで、佐々木(2023)は、実習を控えた学生が、自立的に絵本の読み聞かせの技術を向上させる自己教育モデルとして、SUDSIPモデルを試案として提案している(図1)。SUDSIPモデルは、「絵本の選定」(selection)、「内容理解」(understanding)、「読み聞かせ」(Do)、「自己評価」(self-evaluation)、「改善方法の検討」(improvement)、「実践」(practice)の6

フェーズから構成される、絵本の読み聞かせの自己教育モデルである。

2. 研究の目的と方法

本研究では、佐々木(2023)が提案したSUDSIPモデルを理論的に検討して再構成することを目的とする。佐々木(2023)は、SUDSIPモデルを構成する際、絵本の読み聞かせの練習は継続的な改善を伴うことが必要であると考え、企業において品質管理など業務管理における継続的な改善方法として知られる「PDCAサイクル」(plan-do-check-act cycle)を参照している。このサイクルは、「計画」(Plan)、「行動」(Do)、「評価」(Check)、「改善」(Act)の4つのフェーズから構成され、品質管理以外の分野でも広く参照されているモデルである。

SUDSIPモデルでは、「絵本選定」、「内容理解」がPDCAサイクルの「計画」に対応し、「絵本の読み聞かせ」が「行動」、「自己評価」が「評価」、「改善方法の検討」が「改善」にそれぞれ対応している。また、SUDSIPモデルは、学生が絵本の読み聞かせの練習を一人でやることを想定したモデルであるため、自己調整学習の視座からSUDSIPモデルに対する考察を加える必要がある。したがって、本研究では、PDCAサイクルと自己調整学習の理論的整合性を明らかにした後、それらを理論的な基盤として、SUDSIPモデルを再構成する。

3. 読み聞かせのSUDSIPモデルの構成

(1)絵本の読み聞かせの練習と自己調整学習

保育者を志望する学生が行う絵本の読み聞かせの練習には、他の学生や教員の前で行う場合や、自分自身で行う場合がある。前者の場合は、他の学生や教員からのフィードバックが得られ、それが改善へつながることになるが、後者の場合は他者からのフィードバックが得られないことから、自己調整が重要となる。

自己調整は教育学や心理学で多様な意味で用いられているが、Zimmerman(1989)によれば、自己調整学習における「自己調整」とは、「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と定義している。これよりもっと正確な定義は、研究者の理論的な見方によって異なる。伊藤(2009)によれば、自己調整学習の諸理論は、Zimmermanらの社会的認知モデル、Pintrichの自己調整モデル、Borkowskiのメタ認知のプロセス志向モデル、Winneの自己調整の4フェーズモデル、Boekaertsの適応的学習モデル、Cornoの意志理論、Maceらのオペラント理論、McCombsの現象学的視点、McCaslinらのVygotsky派の見方、Parisらの構成主義に分類される。

絵本の読み聞かせの練習は、技術的な向上を目指すという学生自身の「個人作用」、技術的向上を目指して練習するという「行動」、学校、自宅、実習園などの読み聞かせの場、つまり「環境」の相互作用により行われる。個人作用、行動、環境の3者の相互作用として人間の機能を捉え

る考え方はBandura (2001)の社会的認知理論と同じであり、この考え方を概念的枠組みとするのが自己調整学習の社会的認知モデルである。したがって、絵本の読み聞かせの練習を自己調整学習の視座から捉えようとする場合、自己調整学習の社会的認知モデルを基礎におくことにする。自己調整学習の社会的認知モデルでは、自己調整は、自己観察、自己判断、自己反応の3つの下位過程に区別される。これらは独立したものではなく、相互作用していると考えられ、自己観察によって、学習者は自己評価が促され、そして、このような自己判断が、多様な個人的で行動的な自己反応へ導くと考えられている(塚野, 2012)。

(2)PDCAサイクル

佐々木(2023)は、SUDSIPモデルを構成する際、絵本の読み聞かせの練習は継続的な改善を伴うことが必要であると考え、企業において品質管理など業務管理における継続的な改善方法として知られるPDCAサイクルを参照している。このサイクルは、品質管理や業務管理だけではなく、他の様々な領域でも参照されており、幼児教育においても参照に値すると思われる。

幼稚園教育要領(文部科学省, 2017)の第1章 総則 第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価 4 幼児理解に基づいた評価の実施(1)において、「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること」と規定されている。このことは、幼児教育において評価及び改善を継続的に実施することであり、PDCAサイクルを具体的に示したものである。また、岸(2023)も、保育士もPDCAサイクルにより保育の質の継続的な改善を行なっているのではないかと考え、現役の保育者を対象として調査を行なった結果、PDCAサイクルを個人的に活用している保育士がいることを明らかにしている。絵本の読み聞かせの場合、技術的な向上を目的とする練習は、継続的な改善と反復を伴うことから、絵本の読み聞かせの自己教育プログラムの構成にPDCAサイクルを基盤としてもよいといえる。

(3)自己調整学習の社会的認知モデルとPDCAサイクルの理論的整合性

本研究では、PDCAサイクルを基盤として、絵本の読み聞かせの自己教育モデルを構成しようとしているが、上述した通り、絵本の読み聞かせの技術向上には、個人作用、行動、環境の3者による相互作用が不可欠である。この考え方は、自己調整学習の社会的認知モデルの考え方である。このとき、自己調整学習の社会的認知モデルとPDCAサイクルに理論的整合性があることを示しておく。

自己調整の社会的認知モデルは、自己観察、自己判断、自己反応の3つの下位過程から構成されている。自己観察と自己判断の過程はPDCAサイクルの「評価」に対応し、自己反応が「改善」にあたる。したがって、自己調整の社会的認知モデルは、PDCAサイクルの一部に組み込まれていると考えることができることから、自己調整学習の社会的認知モデルとPDCAサイクルは理論的な整合性をもつといえる。

(4) 絵本の読み聞かせの評価シートの検討

絵本の読み聞かせに関する評価の視点は、『よみきかせのきほん 保育園・幼稚園・学校での実践ガイド』(東京子ども図書館編, 2018)を参考に作成した(表1)。評価の視点は、全体評価と場面別評価に大別し、全体評価には、絵本の持ち方、読み上げ方、絵本のめくり方の3つの小分類を設け、場面別評価には、準備場面、導入場面、終了場面の3つの小分類を設けた。場面別評価に展開場面がないのは、展開場面の評価項目が全体評価に含まれていると考えられるからである。このように分類したうえで、絵本の読み聞かせ自己評価シートは、全部で16項目から構成されている。また、それぞれの項目に対して、「1. できなかった」、「2. あまりよくできなかった」、「3. 少しよくできた」、「4. よくできた」の4件法で回答する。

以下、自己評価シートの各項目の内容について説明する。

表1における全体評価1「絵本の持ち方」の第1項目(1)は「絵本がグラグラしたり、傾いていないか」である。読み手は、時と場合により、立って読む、椅子に座って読む、直接床に座って読むなど、様々な体勢で読むことがある。そのため、聞き手が絵本に集中し、絵本の世界に入り込めるように、脇をしっかり締め、絵本の中心部分をしっかりと持ち、安定していることが大切である。

表1. 絵本の読み聞かせ自己評価シート

全 体	1	絵本の持ち方	(1)絵本がグラグラしたり、傾いていないか (2)自分の持ち手で絵本を隠していないか
	2	読み上げ方	(3)場面によって緩急をつけて読んでいたか (4)言葉をはっきりと読んでいたか (5)全体に届く声の大きさだったか (6)つまずくことなく読んでいたか (7)演じすぎていなかったか (8)聞き手全体に目配りしていたか
	3	絵本のめくり方	(9)スムーズにめくっていたか (10)話の流れに合わせてめくり方か (11)めくった直後に新しい絵に集中させるための間をとったか (12)めくる準備をして聞き手の視界を遮っていなかったか
各 場 面	4	準備場面	(13)物語の流れを理解していたか
	5	導入場面	(14)表紙をしっかり見せていたか
	6	終了場面	(15)裏表紙を見せ、表紙に戻っていたか (16)最後まで読み切ったか

次に、第2項目(2)は「自分の持ち方で絵本を隠していないか」である。読み手は、絵本を安定して持とうと集中するあまり、絵本の中に描かれている文や絵を持ち手で隠してしまう場合がある。絵本を自分の体の横に持ち、聞き手に絵をしっかり見せてあげることが大切である。

表1における全体評価2「絵本の読み上げ方」の第1項目(3)は「場面によって緩急をつけて読んでいたか」である。これは、読み手が全体の流れを捉えた上で、場面に応じてある程度の緩急をつけることにより、聞き手がより絵本の世界に入る助けになる。

第2項目(4)は「言葉をはっきりと読んでいたか」である。絵本は、文と絵が上手く1つに合う

ように考えられている。そのため、書かれている言葉を略したり、自分の言葉を付け加えたりせず、絵本に書かれている言葉を正確にはっきりと読むことが大切である。また、読み聞かせは、無意識に早口になりがちなため、ゆっくり読むことも意識する必要がある。

第3項目(5)は「全体に届く声の大きさだったか」である。読み手は、聞き手の年齢や人数、場所など、その時々に応じて、声の大きさを調整し、全体に届く声でなければならない。また、読み手は、絵本を読むと同時に、聞き手の表情や様子を見たりするため、常に同じ場所に向かって声を発するわけではない。聞き手全体に声が届いているかを常に確認する必要がある。

第4項目(6)は「つまずくことなく読んでいたか」である。これは、せっかく聞き手が絵本に集中していたとしても、読み手がつまずきながら読んでしまうと、現実の世界に引き戻されてしまう。読み手は必ず下読みをし、聞き手の集中力を途切れさせないようにする必要がある。

第5項目(7)は「演じ過ぎていないか」である。登場人物や会話の部分など、場面によって多少声色を変えたり演じたりする場合がある。しかしながら、絵本を揺らしたり、大袈裟に声色を変えたり、身振り手振りを使って表現してしまうと、聞き手一人ひとりの想像力や創造力を途切れさせてしまう。また、そのような読み方をすると、聞き手は絵本ではなく、絵本を読んでいる人に注目してしまう。読み手はあくまでも黒子だということを意識して読む必要がある。

第6項目(8)は「聞き手全体に目配りしていたか」である。読み手は、聞き手の視線や表情から絵本に入り込んでいるか、興味を示しているか、読み聞かせと聞き手のペースが合っているか等を確認して読み進めていくことが大切である。また、特に聞き手の年齢が低い場合は、聞き手同士のトラブルが起こっていないか、その場を離れることがないか等の安全に配慮する必要がある。

表1における全体評価3「絵本のめくり方」の第1項目(9)は「スムーズにめくっていたか」である。読み手がページをめくる際に、もたついたり、2枚一度にめくって後戻りしたりすると、聞き手の集中力が切れ、興が削がれてしまう。読み手は、聞き手の邪魔にならないようにスムーズにめくる準備をしておく必要がある。

第2項目(10)は「話の流れに合わせためくり方か」である。読み手は、全体を捉え、次の場面がどのような流れになるかを把握した上で、話のテンポや情景描写に合わせてゆっくりめくったり、さっとめくったりすることが大切である。

第3項目(11)は「めくった直後新しい絵に集中させるための間をとったか」である。聞き手は、新しい場面が現れた時、絵に集中する間が必要である。万が一、間を取らずにめくり同時に文を読みはじめてしまうと、聞き手の頭上を文だけが通り過ぎてしまい、文と絵が一体ではなくなってしまう。その場面に合わせた間の取り方も確認しておく必要がある。

第4項目(12)は「めくる準備をして聞き手の視界を遮っていなかったか」である。絵本は、中央部分をしっかり持ち、もう片方の手でページをめくるようにするが、絵本の上部や中心に近い

部分をめくろうとすると読み手の腕で絵を隠してしまうため、注意が必要である。

表1における場面別評価4「準備場面」の第1項目(13)は、「物語の流れを理解していたか」である。どの絵本にも起承転結のように流れがある。緩やかに始まり、徐々に盛り上がり、クライマックスでもっと力が入り、その後は緊張が一気に緩んで静かに終わる。読み手は必ず下読みをし、内容を十分理解した上で、読みが平板にならないようにすることが大切である。

表1における場面別評価5「導入場面」の第1項目(14)は、「表紙をしっかりと見せたか」である。表紙のタイトルや作者を読み上げ、表紙をしっかりと見せることが、聞き手にとって良い間となり、それが絵本の導入となる。また、絵本の表紙と本体をつなぐ役割である見返しも同様に聞き手にしっかりと見せることで、聞き手は心を落ち着かせ、あるいは心を弾ませ、より絵本の世界に入りやすくなる。

表1における場面別評価6「終了場面」の第1項目(15)は「裏表紙を見せ、表紙に戻っていたか」である。絵本には、表紙と裏表紙が一つの絵になっていたり、その後の物語を想像させてくれる挿絵が書いてあったりして、物語の余韻を楽しめるものが多い。

第2項目(16)は「最後まで読み切ったか」である。これは、時間の都合や読み手の気分で言葉を端折ったり、ページを飛ばしたりせず、最後まで読み切ることが大切である。

(5)絵本の読み聞かせのSUDSIPモデルの構成

絵本の読み聞かせの技術の向上には、練習と改善を継続的に繰り返すことが必要である。

何故ならば、絵本の読み聞かせは、読み手の発話の仕方、一連の動作、環境構成、その時の子どもの状態など、多くの要因が複雑に関連していることから、すべての要素が満足されることがないと考えられ、常に改善点が現れるからである。そこで、本研究では、企業において品質管理など業務管理における継続的な改善方法として知られるPDCAサイクルを基にして、絵本の読み聞かせ技術向上のための方法について検討した。その結果、図1に示す絵本の読み聞かせのSUDSIPモデルが構成できる。佐々木(2023)においてSUDSIPモデルについては簡潔な説明にとどまっていたことから、ここで詳細について説明する。

PDCAサイクルは、上述した通り、「計画」、「行動」、「評価」、「改善」の4つのフェーズを反復することにより、業務を継続的に改善する方法である。このサイクルを絵本の読み聞かせの文脈に対応させると、初期フェーズは「絵本の選定」、「絵本の内容理解」であり、これがPDCAサイクルの「計画」に対応する。

続いて、PDCAサイクルの「実行」に「読み聞かせ」が対応する。ただし、SUDSIPモデルでは、絵本の読み聞かせを行う場面は、「読み聞かせ」と「実践」の2つのフェーズにある。前者は学内で行う読み聞かせであり、後者は園で子ども達を対象とした読み聞かせである。SUDSIPモデルにおける「Do」は、前者の読み聞かせ場面を意味している。また、読み聞かせを行う場合、スマートフォンを設置して、動画撮影機能を用いて自らの読み聞かせを撮影し、この後のフェー

ズの自己評価に利用する。このとき、学生の読み聞かせの様子を撮影した動画を、評価に用いることの妥当性も検討しなければならない。

吉永ら(2015)は、保育表現技術の相互作用の側面の視座から自己教育プログラム構成を試みており、読み聞かせに関して、自己の読み聞かせの技能を客観的・反省的に捉え、その向上を図ることを企図して、学習プロセスにビデオ映像を用いた自己評価を組み込んだ。結城ら(2015)は、吉永ら(2015)が構成しようとしている自己教育プログラムの効果を検証している。絵本の読み聞かせに関して、視認可能な技術部分について、ビデオ映像を観て評価した場合は、養成校の教師などの他者から評価された場合と大きな差がないことを明らかにしている。このことは、学生が一人で絵本の読み聞かせを行なう場合、つまり、読み聞かせを評価してもらえ他者がいなくても、ビデオ映像が視認可能な技術部分の練習に用いる可能性を示唆している。したがって、学生の読み聞かせの様子を撮影した動画を、評価に用いることが可能であると考えられる。

PDCAサイクルの「評価」に対応するフェーズは「自己評価」である。通常、保育者養成校において、模擬授業などの評価は、自身の振り返りの他、ピア評価や教員からの評価も含まれるが、SUDSIPモデルでは、自己評価シートを用いて読み手が単独で行う評価を意味する。本研究では、教員や同級生がいない場合でも自身で練習を可能とするモデルの構成を目指しているため、読み手が単独で評価する必要がある。しかしながら、自分自身以外からの他者からの評価がない状態で、自らの読み聞かせを評価し、改善点を見出すことは難しいと考えられる。そこで、自己評価シートによる自己評価を、読み聞かせ終了直後の評価、動画を視聴しながら評価するといったように、2度行い、両者の評価の違いを検討することで改善点を見出す。読み聞かせ直後の自己評価は、読み手自身の実感をもとにした評価であり、動画を視聴しながら自己評価した結果は、自分の読み聞かせをある程度客観的にみた評価である。したがって、両者の間には違いが生じる場合がある。そして、違いが生じた項目を中心に「改善方法の検討」を行うのである。これら、「読み聞かせ」、「自己評価」、「改善方法の検討」を循環させるDSIサイクルが、SUDSIPモデルの核心部分である。

DSIサイクルによる練習の後、実際に園において子供たちを前に読み聞かせを行う。これがSUDSIPモデルにおける「実践」のフェーズである。読み手は実践を詳細に記録して、DSIサイクルへと還元させる。図1におけるDSIサイクルと「実践」が双方向の矢印で結ばれているのは、そのような意味からである。

以上が、「絵本の読み聞かせのSUDSIPモデル」と、その構成方法についての説明である。このモデルに従うと、図2に示すフローにより、絵本の読み聞かせを練習することになる。

以下、図2のフローについて説明する。

第1フェーズは「内容理解」であり、選定した絵本の内容を理解する。絵本の内容理解では、

何をどのように、どこまで深く理解するかは読み手によって様々であることが考えられるが、どこまでの理解が必要であるかは、SUDSIPモデルにおける「改善方法の検討」で改善を要する内容として顕在化されたときに明らかにされるものと考えられる。

絵本の内容理解の後には、学内や自宅において絵本の読み聞かせを行うフェーズである。このとき、絵本の読み聞かせを行っている様子を撮影することに留意する。読み聞かせ終了後に表1に示す「絵本の読み聞かせ自己評価シート」に記入する。次に、動画を視聴しながら、再び自己評価シートに記入する。読み聞かせ直後に記入する自己評価シートと動画視聴しながら記入する自己評価シートの評価項目は同一である。これは、読み手の主観性と動画から明らかにされる客観性を比較するからである。

さらに、次のフェーズにおいて、2枚の自己評価シートを比較して改善点について検討する。このとき、改善点は、読み聞かせの直後に、読み手自身が気付く改善点と、読み手自身では気付にくい改善点がある。前者の改善点は、読み手自身が既に改善点として意識している。したがって、2枚の自己評価シートにおける評価が異なる項目から、読み手自身で気付くことが難しい改善点を顕在化させる。大学内や自宅における絵本の読み聞かせの練習では、読み聞かせ、自己評価、改善方法の検討のサイクル(英語表記の頭文字をとり、DSIサイクルとよぶ)により練習を繰り返す。また、これらのサイクルを循環する過程において、必要に応じて絵本の内容理解のフェーズに戻る。

学内や自宅における練習の過程の後には、園における「実践」である。実際に園児に対する絵本の読み聞かせを行い、自ら課題や改善点を見出すフェーズである。読み手は、終了後に読み聞かせの様子を詳細に記録し、それを改善点として、再びDSIサイクルに戻って練習する。

実習前の練習を想定する場合、読み手が単独で行うことの出来る練習は、DSIサイクルのみであり、実習が「実践」に相当する。また、学外に、協力園がある場合は、DSIサイクルの練習と実践を相互に行うことができる。

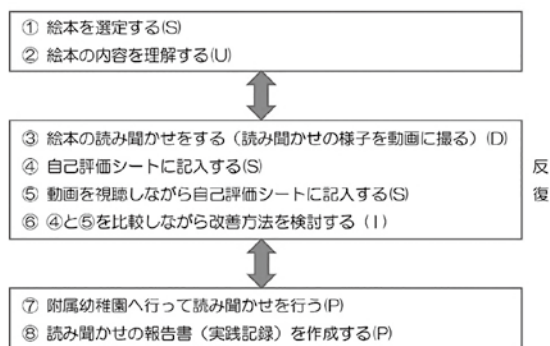


図2. SUDSIPモデルに沿った練習の過程

4. SUDSIPモデルを用いた実践

絵本の読み聞かせのSUDSIPモデルに沿った練習を以下の要領で行った。

協力者は私立短期大学部幼児教育学科の2年次生1名である(以降、学生Sと記す)。日時は、1回目の「読み聞かせ」「自己評価」「改善方法の検討」を20XX年X月X日(水) 9:00~10:30、2

回目の「読み聞かせ」「自己評価」「改善方法の検討」を20XX年X月X日(水) 9:00～10:30に私立大学短期大学部のゼミナール室において実施した。さらに、実際に子ども達への実践は、20XX年X月X日(水)10:40～12:10に同私立大学附属幼稚園において実施した。

学生Sが選定した絵本は『てぶくろ』(エウゲーニー・M・ラチョフ, 1965)である。

読み聞かせ直後の自己評価と動画視聴して行った自己評価を表2に示す。

1回目の読み聞かせの直後の自己評価で肯定的評価だが動画視聴した自己評価で否定的評価となった項目は表1の項目(2)、(10)および(12)である。この時、学生Sは「自分では全く気づいていなかったが、動画を視聴してみると、自分の手で絵本を隠してしまっている場面があった。」「単調で、動物が沢山出てくる絵本なので、話の流れに合わせためくり方に工夫があると聞き手のイメージを壊さずに済むのではないかと感じた」「めくことに意識が入ってしまい、聞き手の視界を遮っていた場面があった。動画を視聴すると、自分の気づかない部分が沢山わかったので、一つずつ改善していきたい」とコメントしている。

1回目の読み聞かせの1週間後に2回目の読み聞かせを行った。読み聞かせの直前に、1回目に抽出した改善点を確認してから、2回目の読み聞かせを行った結果、いくつかの改善点がありながらも、1回目に抽出した改善点のうち、項目(2)および(12)は解消され、項目(10)のみという結果になった。この結果について、学生Sは「全体的に常に聞き手の立場になって読むことができた。ただ、話の流れに合わせためくり方については、ゆっくりめくったり、間を持たせたりして、聞き手が絵本に入り込みやすくするためにもうひと工夫が必要だと思った。特に、この絵本は、身近な動物が沢山出てくるので、次の展開にワクワク感やドキドキ感を持たせながら、子ども達がより楽しめるようにしたい」「めくること自体にまだ不安があるので、例えば、絵本の端に軽く折り目をつけておくのも一つの工夫だと感じた」とコメントしている。学生Sは、自身の読み聞かせの課題を解消するために試行錯誤しながら工夫している様子が伺える。

これは本研究で提案したSUDSIPモデルという自己教育プログラムに内蔵される「読み聞かせ」「自己評価」「改善点の検討」というサイクルが工夫する機会を創出している可能性がある。

2回目の読み聞かせ後に、学生Sは附属幼稚園において読み聞かせの実践を行った。その時の振り返りにおいて学生Sは「課題であった流れに合わせためくり方、自己練習していた時よりも上手にできたと思う。子ども達の表情を見なが

表2. 学生Sの自己評価シート

評価項目	1回目		2回目	
	直後	動画視聴	直後	動画視聴
(1)	2	2	3	3
(2)	3	2	2	2
(3)	3	3	3	3
(4)	2	4	3	3
(5)	3	4	3	3
(6)	3	3	2	3
(7)	2	3	2	2
(8)	2	2	3	2
(9)	2	3	2	2
(10)	3	2	3	2
(11)	2	2	3	3
(12)	3	2	2	3
(13)	4	4	3	3
(14)	4	4	4	4
(15)	3	4	4	4
(16)	4	4	4	4

ら自分も間を取りながら楽しんで読み聞かせができたと思う」とコメントしている。実際に子ども達の表情を見て、子ども達の発言に耳を傾けながら読み聞かせを行い、自分自身の読み聞かせを客観的に見るができたと思われる。

引用文献

- 1) 小屋美香：保育実習中の学生の幼児保育体験に関する研究，育英短期大学研究紀要，27，pp.33-44，2010.
- 2) 佐々木郁子：教育実習における学生の幼児教育体験を基にした事前事後指導内容の検討，東京経営短期大学紀要，29，pp.55-56，2021.
- 3) 佐々木郁子：保育者養成における「絵本の読み聞かせ」技術向上の方法の検討～「絵本の読み聞かせのSUDSIPモデル」の提案と実践～，日本基礎教育学会紀要，28，pp.65-70，2023.
- 4) Zimmerman, B.J. : A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, 81, pp.329-339, 1989.
- 5) 伊藤崇達：「自己調整学習の問題点」，『自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割』，北大路書房，pp.3-5，2009.
- 6) Bandura, A. : Social cognitive theory : An agentic perspective. *Annual Review of Psychology*, 52, pp.1-26, 2001.
- 7) 塚野州一：「自己調整学習と学食の諸理論：概観と分析」，『自己調整学習の理論』（ハリー・J・ジーマン，ディル・H・シャンク編著，塚野州一編訳），北大路書房，p.22，2006.
- 8) 文部科学省：平成29年告示 幼稚園教育要領，2017.
- 9) 岸久美子：幼児教育におけるPDCAサイクルの活用-保育現場における実践-，相模女子大学紀要，86，pp.1-6，2023.
- 10) 東京子ども図書館：『よみかせるのきほん 保育園・幼稚園・学校での実践ガイド』，東京子ども図書館，pp.2-6，2018.
- 11) 吉永安里・結城孝治・吉永安里・山瀬範子・廣井雄一：保育表現技術の自己教育プログラム構成：絵本の読み聞かせの技能向上を目指して，國學院大學人間開発学研究，6，pp.111-120，2015.
- 12) 結城孝治・吉永安里・山瀬範子・廣井雄一：保育表現技術の習得における評価方法の影響：絵本の読み聞かせ技術を題材にした聞き手との相互作用への気づき，國學院大學紀要，53，pp.159-178，2015.
- 13) エウゲーニー・M・ラチョフ，うちだりさこ（翻訳）：『てぶくろ』，福音館，1965.

『音楽的情動調整による保育技法の開発』 — 幼児期の子どもたちへの情動調律応用アプローチ —

Development of childcare techniques using musical emotional regulation

宇 治 和 子[※] 横 溝 聡 子[※]

Kazuko Uji

Toshiko Yokomizo

Controlling children's emotions is a difficult task in early childhood education. According to a survey of students seeking to become kindergarten teachers, young children are not yet able to control their emotions well, so they will quickly fight and cry even if they seem to be friends. Students reported trying to calm young children who did not listen, causing the students difficulties. Therefore, we used observational experiments to investigate whether children can learn to regulate their emotions through music instead of words. This experiment was carried out in a kindergarten, where original play and music were prepared. The music was simple, repeating the same phrases. Also, the play was easy but required patience and concentration. We compared the children playing with and without music to ascertain which condition facilitated better emotional control. Results indicated that children exhibited greater ease in controlling their emotions when music was playing. This suggests that musical emotional regulation is a viable technique for childcare.

I. はじめに

幼児教育を志す学生にとって、幼稚園や保育園、認定こども園等に在籍する子どもたちは、興味の対象であると同時に手強い相手でもある。手強い要因の一つと推測されるものに、彼らの感情は往々にして変動が激しく、笑っていたかと思うと突然泣いて駄々をこねる、仲良さそうにしているも次の瞬間に物の取り合いやケンカをはじめするなど、関わる大人たちの思い通りには決してならないことがある。このような問題に対し、本研究は、幼児教育を学ぶ学生へのアンケート調査から子どもとの関わりのどこに難しさを抱えているか整理し、彼らが保育実践において利用できそうな音楽的要素を取り入れた保育技法を試作、その効果を検証して、実施の可能性を探ることを目的にしている。

乳幼児の感情発達は、Bridges¹⁾によると、生後早い時期にお腹がすいた、オムツが気持ち悪い、といった要求を適切に対処してもらうことを通して、興奮や緊張の中から快／不快に代表

※幼児教育学科

されるような感情が分化しはじめることを起源とする。これらは子どもが成長するにつれて、更に細かく広がりをもった感情体系へと組織化されていくと考えられている。それ故Lewis^{2,3)}は、生後3年に出そう子どもの内的な感情の出現はその後の人生においても存在し続けるとし、これらに注目することの必要性を説いている。

やがて子どもは、他の子どもが登場する保育の環境に入っていくのだが、そのような保育現場における他児との感情のぶつかり合いは、いつも思い通りにいく訳ではないため、状況次第で感情調整を行うことが求められるようになる。保育者は業務においてその手助けを積極的に行いながら、いつか子どもが自身で感情調整を行えるように導いていく。しかし子どもの言語の発達が追いついていない場合などは、泣いたり怒ったりしている理由が保育者には一向に理解できない、ということが生じる。入江⁴⁾によると、それは表情などを中心とした非言語的コミュニケーションを多用する低年齢の子どもほど顕著で、保育者のキャリアや柔軟性が問われるという。ベテランの保育者ならば、豊富な経験から泣いている原因がすみやかに推測できることも、新人の保育者には難しいため、「子どもが泣いたら、とりあえず抱っこする」などの感情調整支援に終始し、技法が単調でバリエーションに乏しくなるという問題がある。また樋口・藤崎⁵⁾らによると、実際の保育現場では、保育者の側から子どもの感情調整を行おうとあれこれ声掛けし気分が変わるように誘い掛けしている場面が圧倒的に多く見られ、当該子どもが行う調整は行われず、その結果本人は泣き止まないまま何かに参加しているといった事例も見られたという。集団での活動を指導している保育者の立場からすると、活動に子どもが復帰できたことは全体がまとまりよかったが、気持ちが崩れている状態を立て直せない子どもにとっては、心と身体の動きが一致せず、混乱が助長されないか一抹の不安が残る。子どもが自ら行う感情調整を育てるには、保育者側からの声掛けや誘い掛けといった言語による調整だけではフォローしきれない点も多いと推測する。したがって言葉以外の感情調整の技法も検討する必要がある。

これに関連し、子どもは養育者と、様々な音楽的律動(身振り・音声・表情など)を通して情動を共有しながら成長していくという指摘がある⁶⁾。確かに幼児を見ていると、特に機嫌が良い時など、リズムを取っているかのような踊っているかのような、身体の動きをしていることがある。スターン(1985)は^{7,8)}、人が自身の感情を、強さ、動き、輪郭、リズムといった音楽的表現で示すことを生気情動と名付けた。さらに彼は、乳幼児期の子どもと養育者が、このような情動に応答し合う方法として情動調律という概念を提唱した。これは子どもの発声や行為に含まれる情動的意味に沿った反応(言語的表現とは限らない)を養育者が示すことで気持ちの共有が図られ、また養育者自身の情動状態を発声や動作の強弱で示すことで子どもの情動状態をも調整することができる、という相互作用性がある。情動調律は前提として非言語の世界観(音声が使用される場合も含む)の中で起こるものであるため、それを保育に取り入れるにはか

なりの工夫が必要だ。一方で、生気情動には音楽的要素が含まれており、音楽との相性の良さを期待できる⁶⁾。そこで情動調律を応用し、子どもの感情に合わせて音楽を効果的に取り入れるアプローチ法を考案することにより、保育者が子どもたちの感情調整機能に働きかけることができないかと考えた。

以上から、幼児教育を学ぶ学生たちが実習などで子どもたちと関わる際に、彼らの感情調整についてどのような苦勞をしているか実態を把握し、その解決策となるような情動調律を応用した音楽的情動調整の保育技法を検討するため、本研究を行うことにした。

II. アンケート調査について

2023年6月、東北地方の短期大学幼児教育学科2年生80名(女子校のため全員女子)に対し、2週間の幼稚園実習が終了したタイミングで、自由記述アンケートに協力してもらった。

1. 方法と手続き

授業前の時間を利用して、手のひらサイズに切った紙(以下シートと略す)を用意して配り、「実習中、難しいなと感じたことを、箇条書きで思いつくまま自由に書いてください」という指示を行った。すると協力学生からは、「これは誰が見るのか」「何を書いてもいいのか」という質問が寄せられた。そこで「これは研究だけを目的として行うものなので、発表する場が限られており、また匿名化処理を行うため、エピソードをそのまま加工せず論文に載せることはしない。何を書いても大丈夫なので、忌憚のない意見を出してほしい」と付け加えた。協力学生からそれ以上の質問はなく、実施は10分ほどで終了した。大きめの封筒を用意し、その中に各自シートを入れてもらう形式で回収したが、特に混乱はなかった。

2. 倫理的配慮

倫理的配慮として、ヘルシンキ宣言に準じ、調査を実施する前に「幼児教育の現場で使える新しい保育技法を考案しようと考えている。それにあたりニーズを把握するため、実習に行った皆さんが実際にどんなことに困ったかを知りたい」という調査目的を、協力学生に丁寧に説明した。そして全体の結果は、後日共有する機会を設け、紀要等においてまとめられることも伝えた。またこの調査は匿名で任意に参加ができること、参加してもしなくても授業評価とは関係なく何ら不利益が生じることはないこと、何か問題が起こればいつでも対応すること、シートの返却は面倒でも協力学生自身の手で行い、返却されたことで上記に同意したとみなすこと、を合意した。

また論文発表をするに当たって、「郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部における人を対象とする研究に関する倫理委員会」に審査を依頼し、承認を得た(課題番号2023-107)。

3. 結果と考察

得られた質的データは、Excel表に落とし込んで匿名化処理を行った。

a) データ整理と分析手続き

協力学生らが実習中に感じた困難について、自由回答された質的データは全80シートだった。多くの場合、1つのシートに複数の困難情報が書かれていたので、Excel表の整理においては1セル1種類の関連情報が記述されるようにし、シートごとのユニット化を行った。その結果、1シートにつき最小1から最大13のセルに分割され、全体としては240の質的データに整理することができた。

そのデータ群をうへの式質的分析法⁹⁾によって分析したところ、「特にない」等の無効データ(10)を除外し、下位カテゴリー30種(以下<>で内容を表示)が生成された。さらに意味においてまとめられた上位カテゴリー6種《やらなければいけない課題》《実習先との関係》《幼児を導くことの難しさ》《幼児らしさに翻弄される》《幼児同士のトラブル解決の難しさ》《子どもに障害がある》に分類できた。

それぞれがどんな文脈であったのか、以下、順に述べる。

b) 《やらなければいけない課題》

実習中、学生に課される《やらなければいけない課題(57)》は大きく2種類あった。一つは実習体験をまとめた日々の実習日誌、もう一つは実際の子どもに対し保育指導を行うための指導案作成である。これらを決められた期間内にこなしていくのはくとても大変(17)>で、学生たちは<睡眠不足(7)><体調不良(5)><その他の問題(5)>を抱えながら、<実習のプレッシャー(8)>や自身の<保育技術不足(8)>等の不安と闘いつつ、<準備や片付け(5)>に奔走していたことがわかった。

c) 《実習先との関係》

《実習先との関係(21)》についての困難は、小さなデータ群だった。<対人関係の難しさ(15)>として、挨拶しても返事を返してもらえないことや急な予定変更を言われて対応しきれなかった不満などが、遠慮がちに語られていた。あるいは<保育観の違い(6)>から、担当の保育者のやり方に疑問をもつこともあったようだ。

d) 《幼児を導くことの難しさ》

子どもとの実際の関わりにおける困難で一番大きなデータ群は、《幼児を導くことの難しさ(67)》であった。幼児期は発達の個人差が激しいため<活動ペースの違い(10)>が顕著で、<指示がうまく伝わらない(6)>や<することが理解できていない(2)>、面白いことに反応して<悪ノリ(4)>等をはじめするなど、<全体としてまとめる(10)>ことが難しくなる。学生は、子どもを何とか落ち着かせようと、<子どもへの対応(6)>を考えたり<子どもの気持ちの読み取り(3)>に努めたりするが、やはり声掛けだけでは<場面の切り替え(16)>がうまくいかず、<集中力が続かない(4)>事態が発生したり、ゲームで負けたことが悔しくて延々と怒っているなど<くだめるのが大変(5)>だったりするようだ。またどこまで見守ってどこから関

わればいいか＜援助のタイミング(1)＞がわからず、保育経験の浅い学生にとって、幼児を導くことはかなり難しく感じているとわかった。

e) 《幼児らしさに翻弄される》

《幼児らしさに翻弄される(46)》のデータ群からは、学生が幼児ならではの行動に振り回されている状況が理解できた。例えば、＜異常にくっつかれて困る(12)＞＜妨害されて平等に関われない(6)＞＜泣かれる(5)＞＜説得に「嫌だ!」と拒否される(12)＞は、幼児にありがちな自分中心の感情表現である。だがそれを目の前で実行されてしまうと、学生はどうやって対応すればいいかわからなくなるようだ。また力加減がわからない幼児に突進され、おもちゃをぶつけられてケガをするなど、＜思わぬ攻撃(4)＞を受けることもあった。さらには担当保育者の言う事には従っても実習生の言う事はきかない、といった対応差をつけられ＜子どもに甘く見られる(7)＞こともあったようだ。

f) 《幼児同士のトラブル解決の難しさ》

幼児は頻繁にトラブル(＜物の取り合い(11)＞や＜子ども同士のケンカ(10)＞)を起こすので、学生はその状況にも逐一对応しなければならない。その中には、何度言っても行動の改善ができなくて＜嫌がられることをする(5)＞子どもがいて、《幼児同士のトラブル解決の難しさ(26)》を感じていた。

g) 《子どもに障害がある》

ここまでの上位5カテゴリーは、多少の言語理解が期待できる健常児の場合の困りごとであった。そこに最後の《子どもに障害がある(13)》が加わると、さらに手強さが倍増する。子どもに障害がある場合は、上位5カテゴリーすべての項目に渡って影響があり、健常児の時とは違うイレギュラーな事態が起り得るので、対応にバリエーションを効かせられない学生たちは右往左往してしまうようだ。

4. まとめ

アンケート調査結果を俯瞰すると、学生たちが実習中に感じていた困難には、実習日誌や指導案の作成、実習先との対人関係など実習そのものに付随する課題や問題もあったが、それよりも《幼児を導くことの難しさ》《幼児らしさに翻弄される》《幼児同士のトラブル解決の難しさ》にあるような、子どもと関わることについての難しさが多かった。さらにその内容は、幼児が自分からは感情調整を行うことが難しいために、勝手にはしゃいだり泣いたり怒ったりケンカしたりするのを保育者側が必死になだめようと試みるが上手くいかない、というものが多かった。学生は子どもたちに対して、声掛けという言語的コミュニケーション以外に使える方略をもっていないようなので、非言語での新しい保育技法を開発することには意味があるとわかった。また幼児は、保育活動中、場面を選ばず気持ちが崩れる可能性があることとわかったので、柔軟性があって応用がきく技法を検討することが大切だと考えた。

Ⅲ. 子どもたちへ情動調律応用アプローチの検証

上述のアンケート調査の分析を土台として、次は本題となる子どもたちへの情動調律応用アプローチを検証した。

1. 方法

2023年7月後半、東北地方の私立幼稚園にて、夏休み中のため預かり保育の子どもだけで人数が少なくなるタイミングを狙い、その日登園してきた年少児、年中児、年長児を一日1クラスずつ訪問した。

検証方法として用意したのは、10～15人程度の集団で行うことのできるオリジナルの遊び「ひまわりモンスターとジャンケンゲーム」だった。この遊びに含まれる要素は、子ども自身に馴染みがある方が良いので、順番に並んで待つ、ジャンケン、くぐり抜ける動きとした。オリジナルの遊びを考案した理由は、子どもが過去の情動経験から影響を受けることがなく、ルールの変更や追加を持ち込みやすく、観察しやすい場面設定が用意できることを考慮したからだ。そして音楽的情動調整として「ジャンケンの歌」を考案した。オリジナル曲にこだわった理由は、同じく子どもにとって過去の情動経験が呼び起こされる心配がなく、馴染みやすい旋律で遊びに誘いやすいこと、音の強弱やテンポの変化といった演奏のアレンジを行いやすいことからだった。この遊びと音楽を使って、音楽がない状態で遊ぶ時と音楽がある状態で遊ぶ時を見比べて、情動調律応用アプローチの効果を関与しながら観察することを計画した。さらに一連の活動をビデオ撮影し、遊びの中で子どもが自然にはしゃいだり興奮したり怒ったり小競り合いを始めたりする様子の動画記録も取ることにした。

2. 装置と手続き

装置：ひまわりモンスターとして、スチール製3段の脚立に、ひまわりの目玉を取り付けた段ボールを被せ、周囲を平テープで飾ったものを用意し、遊びの中心となる装置とした(写真1と2参照)。「ジャンケンの歌」は、ベースとなる旋律(譜例1)に、勝った時の気分を表す旋律(譜例2)と負けた時の気分を表す旋律(譜例3)を用意して、バリエーションをもたせた。

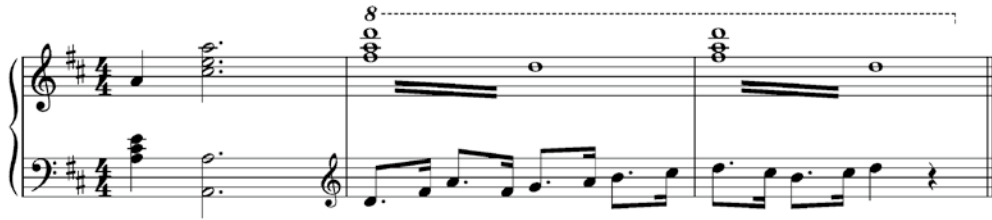


写真1と2 「ひまわりモンスター」

譜例1 「ジャンケンの歌」



譜例2 「勝った時の音楽」



譜例3 「負けた時の音楽」



手続き：遊びは、以下①～⑥の手順で行われた。詳しい場面設定についてはFigure 1で示す。

- ① 自発的に寄ってきた子どもたちに遊び方を説明し、ジャンケンの練習を兼ねて、「ジャンケンの歌」(譜例1)を皆で歌う。さらに「monsterの中で立たないこと(立つと頭をぶつけ、脚立が倒れて危ないから)」という注意事項を伝える。
- ② 最初は音楽なしでスタート。monster助手は、子どもがはしゃいだり騒いだりするのを言葉で注意することは極力控える。子どもは、40cm間隔に貼られた床の白テープに従い列を作って並び、ひまわりmonsterの前まで来たら、monster助手1とジャンケンをする。
- ③ ジャンケンに勝ったらmonsterの中をくぐることができる。
- ④ monsterをくぐったら、monster助手2の前の丸クッションに座る。
- ⑤ 丸クッションの子どもが3人になったら、monster助手の合図で3人ジャンケンをする。
- ⑥ 勝ったら列に戻って順番を待つことができる。(途中から音楽ありの遊びに移行)

注意：全体として30分を越えない遊びとする。

音楽なしから音楽ありの遊びに移行するタイミングは、ピアノ演奏者が判断する。

子どもがはしゃいだり騒いだりしたら音楽のリズムや強弱を変えて介入する。

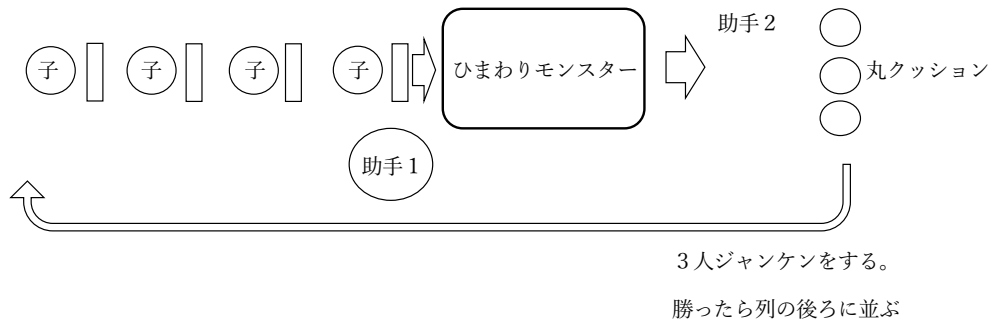


Figure 1. 「ひまわりmonsterとジャンケンゲーム」の場面設定

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、ヘルシンキ宣言に準じ、調査を実施する前に研究目的や方法を当該幼稚園園長に説明し、同意を得た。そして子どもたちは自由意志で用意された遊びに参加し、やめることができた。また個人情報を園の先生などから聞き出すことはせず、遊び場面のみを撮影し、撮影した動画は研究目的以外には使用せず、USBに保存し適切に管理することにした。

また論文発表するに当たっては、「郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部における人を対象とする研究に関する倫理委員会」に審査を依頼し、承認を得た(課題番号2023-107)。

4. 結果と考察

a) データ整理

本調査では、筆者2はピアノを演奏、筆者1はmonster助手1として遊びを運営、他にアルバイト学生が助手2として実験に参加した。得られたデータは2種類あり、関与しながらの観察によるメモとビデオ撮影による動画であった。前者の関与しながらの観察では、音楽がない時と比べある時の方が、実際の遊びの運営にまとまりやすさを感じていた。だが子ども一人ひとりの動きまではとても追いきれないので、目の前の子どもたちが遊びに集中できていれば(年長や年中)ゲームが成功したと感じ、反対に散漫な雰囲気が強ければ(特に年少)失敗したのではないかと不安になる傾向があった。

そこで後者のビデオ動画による記録を比べてみることにした。3種類データ(年少、年中、年長)を整理するため、分析枠組みとして、＜遊びがはじまる前＞＜音楽なしの遊び＞＜音楽ありの遊び＞＜遊びの終了後＞の4場面を設定した。そして筆者1と2が別々に動画を見ながら、各場面で気になった子どもの様子を細かく紙に書き出し、年齢と音楽のある／なしがどんな風に影響するのか比較分析した。詳細はTable 1に示す。

Table 1. ビデオ動画による子どもたちの様子

学年 (クラスに いた人数)	年少：動画27分 (14人)	年中：動画26分 (22人)	年長：動画30分 (17人)
ジャンケン 遊びに ついて	<ul style="list-style-type: none"> ・まだジャンケンが理解できていない子が多い ・テンポより遊びが進まない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンは理解できているが、同じものを出し続ける子が多い ・遊びはゆっくりながらもスムーズに進んだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンは十分できる。次は何を出すか素早く考えられる子もいる ・子どもたち自身でテンポを取り始め、遊びがどんどん早くなる
遊びが 始まる 前	<ul style="list-style-type: none"> ・青虫のホーンを、助手1から奪って走り回る男児1がいる ・男児1は助手1に「返して」と言われ、助手2にホーンを渡す ・男児2が、助手2の手からホーンを取って、助手1に渡す ・それに納得しない男児1が大泣きする。ピアノで自身の泣き声を再現されるとびっくりして顔をあげ、また泣き出す。自分だけでは収まらず、助手2に抱きついて泣きはじめるが、比較的早く泣き止む ・9人ほどが近寄ってくる。とても距離が近いので、助手1が「少し下がって」と指示を出す 	<ul style="list-style-type: none"> ・大声を出している子が多数いる。理由はわからないが、文句を言って泣いている子もいる ・手足を振り回している女児1がいる。他の子が気が付いて、遊びに誘う ・男児1と先生が話している間を邪魔するように、男児2が通っていく ・「は?」「バカヤロー!」「この野郎!」と怒鳴っている男児の音が聞こえる ・助手1が準備していると、モンスターに興味をもった男児3が乱暴に触ろうとするので、「ダメダメ、壊れちゃう」といさめる ・12人ほどが近寄ってくるが、口々にしゃべっているのを何をしゃべっているのかわからなくなる 	<ul style="list-style-type: none"> ・お客さんが珍しくないようで、子どもたちは助手1に近寄ってこない ・自分の遊びをしながら、チラチラこちらを見ている子がいる ・「ダルマさんが転んだ」を7人ほどでやっている。節回しを覚えて工夫しながら楽しんでいる ・「(遊びに)まぜてー!」「いいよ」とやり取りしている ・「ダルマさんをやっている人はやってもらって、こっちで遊ぶ人は来てね」と声をかける ・10人(ダルマさんをやっていた子7人(気になってみている子3人)ほどが近寄ってきた
音楽なしの 遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンの練習は、リズムにのれずタイミングよく手を出せない子が多数いる。手に持っているおもちゃを男児3が投げ捨てる。4回練習する ・段取りがわかっておらず、助手1に「まだですよ」「こっちはよ!」と何度も言われる子が多い。丸クッションでジャンケンせず、動こうとしない子が多い ・子どもたちは遊びに夢中になると順番抜かしをして、「ダメ!」「違う!」と小競り合いが起こる。助手1に注意される子もいる ・丸クッションの付近で小競り合いが始まり「痛い、痛い」ともめる ・男児4が長い棒を持ったまま参加し、前で待っている子をついたり床を叩いたりしている ・モンスターをくぐった後、遊びの輪から離脱していく男児5がいる ・モンスターを触りに来たり、丸クッションをパタパタさせたりする子が数人いる ・参加人数：8～10人 遊びの時間：7分 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンの歌の練習は、列を乱さず落ち着いて出来ている。自分が出したものが何であったのか「見てー」と催促する男児4がいる ・モンスターをくぐってから、「やっぱまざんない!」と大声で主張する男児3がいた。数人がつられて一緒に動き始める ・説明は聞いてくれるが、少し注意散漫で理解に時間がかかる。同じことを何度も伝えた ・頭に手をやったリガッツポーズでビヨンビヨン飛んだり足踏みしたりしている女児が複数いる ・あちこちで「先生～」と叫んだり、うなり声のような大声を出したりするので、助手1も大きい声を出さないといけない ・うろうろと何となく別のことをして、遊びの輪から離脱していく子がいる ・子どもたちの順番を待つ列は、最初こそ整っていたが、すぐに崩れ出す。途中で遊びの輪から離脱していく子が多い、最後は5人ほどになる ・参加人数：10人 遊びの時間：3分45秒 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャンケンの歌の練習は、集団を崩すことなく落ち着いて出来ている。「パーもできるよー」とアピールする男児1がいる ・「(僕やんない!」「やんない!」「やっぱり僕やんない!」と大声で主張する男児1がいたが、誰もつられて動かないので、すぐに本人も戻ってくる ・全員が、素早く段取りを理解し、積極的に遊びはじめる。集中すると全員がほとんどモンスターに近づく ・待って、ビヨンビヨン飛んでリズムを取っている子どもが数人いる ・なかなか勝てなくて次の行動をとれない女児1が出たが、子どもたち自身がそのことを楽しむ余裕がある ・自分たちで遊びを盛り上げ、助手1が指示を出すのを忘れていると催促する ・身体を揺らして口々に叫んでいる子どもが数名いるので、それぞれが何をしゃべっているのかわからなくなる ・参加人数：11～12人 遊びの時間：9分
音楽ありの 遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノが入ってくると、急いで参加しようとする女児1と男児6が現れる。2人とも順番抜かしをして、他児から指摘される。男児6が助手1から注意されて泣き声をかくが、順番をおくらずとも順着て待つことができる ・リズムに合わせて、揺れたり足踏みしたりジャンケンを出したりする子が多い ・女児1はリズムに合わせて手を出すのが苦手だが、少し練習すると慣れてくる ・助手1に順番抜かしを指摘された女児2が、少し離れたところからすねたように見えて、助手のすきを見てモンスターを触りに来る。触るのがしつこくなったので助手1が注意すると、また少し離れたところからすねたように見えている。その後、たから滑り落ちて転んだが、助手1が「大丈夫?」と声をかけると立ち上がり、舌を出してまた離れた行った ・男児4は何度も並んでいたが、手の棒を振り回したり持ち上げたりはほとんどしなかった。女児3は、淡々と何度も並んでは、モンスターをくぐる。ジャンケンに勝ったか負けたかは判断できないようだが、ピアノが負けた音になると、自分から後ろに並び直す ・参加していないが、手にしたおもちゃでリズムを取りつつ様子を見ている子が多い ・途中で遊びの輪から離脱していく子が多い、最後は5人ほどになる ・参加人数：9～10人 遊びの時間：8分30秒 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノが入ってきていたことに、子どもたちはあまり気付いていないようである ・ピアノが入ると参加する子が増えたが、騒がしく「先生!」と呼びかける声は継続している ・2分経った頃、ピアノ演奏者の横で、でたらめ弾きをする子が複数出てくる ・列に並びながら、ビヨンビヨン跳ねたり手やお尻を動かしたりしてリズムを取る子どもたちがいる ・「まざんない!」と言っていた男児3が、遊びの輪に近づいて来ても、何度も他児に邪魔を仕掛けている ・遊びの輪から出たり入ったりする子が多い。でたらめ弾きのピアノ音と張り合うように騒ぐ子が多い ・助手1に近い少人数は、ピアノ演奏者のピアノ音に合わせて身体を動かして、落ち着いて待っている ・座り込んだ男児5をどこかへ移動し、執拗に頭や肩や背中を押して攻撃する男児6がいる。園の先生が止めるが入るが、男児6は攻撃をなかなかやめない ・でたらめ弾きの音が大きくなると、子どもたちの態度もまったりなくなり、乱暴になつたり遊びの輪からの離脱が増えたりする。段ボールを蹴っている子が多い ・参加していないが、身体を動かしてリズムを取りつつ様子を見ている子が複数いる ・減ったり増えたりしながら、最後は8人ほどになる ・参加人数：8～10人 遊びの時間：13分30秒 	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい音からスタートした。それに気が付いてピアノの方を見ている女児1がいた ・子どもたち全員が、3人になったらジャンケンするというシチュエーションが気に入って、モンスターに近寄り、次の展開に集中している ・リズムに合わせて服裾を引っ張りあげたりビヨンビヨン飛んだりリガッツポーズをする子が多い ・助手2に相手をしてみよう、ジャンケンしたりおどけた顔をしたりする子が数人いる ・ひまわりモンスターの上に置いている青虫のホーンを、助手1の目を盗んで鳴らしに来る子が多数。うるさく鳴らすので少ししなめる ・ジャンケンの歌を取って待っている子が複数いる ・順番が回ってきた子の横や後ろから、ジャンケンの手を出している子が複数いる ・列を崩さずリズムに動き回り、近くの子とじゃれ合うが、トラブルなく待っている ・自分たちの早いリズムでジャンケンをはじめ、ピアノ演奏と合奏するようになる ・子ども同士でトラブルはないが、少し飽きてきたように感じたのでルールを少し変える(3人ジャンケンで勝った人は反対からモンスターをくぐって戻ることができる) ・参加していないで自分の遊びをしているが、様子を見ている子が複数いる ・参加人数：10～12人 遊びの時間：14分30秒
遊びの 終 後	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びが終了すると、脚立を触る子が数人いた。すぐにおもちゃの取り合いで泣き声が上がった。落ち着かなくなりかけたが、ジャンケンの歌ではない曲が鳴ると、全員が動きがゆっくりになりそれぞれの遊びを始める ・男児4は、手に持った棒を誰もいないところで振り回していた。男児3が身体を左右に投げ出すようにしながらふらふら歩いている。男児2が後ろより男児1を紙で叩く。男児6が箱を持ってきて、助手1のそばでカードを出して遊び始める。男児1が助手1に身体を寄せて座り、「ピアノが聞きたい」とささやいてくる。「うりゃ!うりゃ!」と何かを攻撃しているらしい声が聞こえる 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びが終了し、ジャンケンの歌ではない曲に変わっても、でたらめ弾きの音が聞こえている。プロレスごっこをするように床にゴロゴロしている男児が2人いる。子どもたちが勝手に動き、口々に声を出して騒然となる ・助手1の周りには、もうおしまい?と不満げに集まってきた複数の子どもたちがいた。青虫のホーンを顔に向けて鳴らして機嫌を取ると、嬉しそうに触って和やかな雰囲気になったが、そのホーンを奪って走り回る男児7が出現すると、それを追いかける子が出てきて、また騒がしくなった 	<ul style="list-style-type: none"> ・「これでおしまい、また来るね」と言うと、「明日来る?」「いつ来る?」と子どもたちが少し騒がしくなるが、ジャンケンの歌ではない曲にピアノの音が変わると、興奮がずっと静まる ・すぐにダルマさんが転んだの遊びを始めるグループと、助手1の近くに来て名残惜しそうにするグループに分かれた

b) 動画による比較分析

年少では、まだジャンケンが理解できていない子どもが多く、遊びがテンポよく進まなかった。＜遊びが始まる前＞、男児が助手1の押すと音が鳴る青虫のホーンを奪って逃げ回り、他児に取り上げられて大泣きし、かなり騒々しかった。＜音楽なしの遊び＞が始まると、10人ほどの子どもたちは遊びに参加しつつも、順番抜きを助手1に見つかって注意されたり、小競り合いが始まって誰かが「痛い、痛い」と言ったり、長い棒を持ったまま参加して前の子どもをつついたり床を叩いたり、丸クッションをバタバタさせたりと、落ち着いて自身の番を待っていることができない場面が多かった。しかし＜音楽ありの遊び＞が始まると、丸クッションに座り込んで動かなかった子どもたちが遊びに戻ってきたり、リズムに合わせて身体を揺すったり、棒を持っちはいるが振り回さなくなったり、転んでも泣かなかったりといった様子が見られるようになった。ピアノ演奏がやみ終了が告げられると＜遊びの終了後＞、子どもたちは自身のやりたい遊びをそれぞれに始めた。助手たちが片付けをしている時に、おもちゃの取り合いでケンカが始まり泣き出したり、気に入らない他のメンバーを紙で叩いたり、棒をまた振り回し始めたり、「うりゃ、うりゃ」と何かを攻撃したりしている子どもたちが出てきた。

年中はジャンケンが一応できる子どもが増えるので、比較的スムーズに遊びが進んだ。＜遊びが始まる前＞、準備をしている段階からモンスターに興味をもち触りにくる子どもが続出し、助手1が「ダメダメ、壊れちゃう」と注意し、セッティングに手間取ってしまった。泣いていたり、手足を振り回していたり、「バカヤロー」と怒鳴っていたりする子どもたちがいて、かなり騒がしかった。＜音楽なしの遊び＞が10人ほどで始めると、その中から「やっぱ、混ざんない」と他の子どもを扇動するように大声で叫ぶ男児が現れた。数人がそれにつられて、一緒に動き始めた。また一部の子どもがうなるような大声で話し始め、負けじと助手1の声も大きくなり、遊びから離脱していく子どもが増えて輪が崩れ始めた。＜音楽ありの遊び＞が始まると、ピアノ演奏者の横でたらめ弾きをする子どもが数人出てきてしまった。すると待っている間、助手1の近くで演奏者の音に合わせてピョンピョン跳ねてリズムを取る子どもがいる一方で、でたらめ弾きの耳障りなピアノの音に負けまいと声を張り上げて騒いだり、座り込んだ子どもをどかせたくて執拗に攻撃を仕掛けたり、段ボールを蹴ったりしている子どもたちがいたり、保育室が騒然となってしまった。＜遊びの終了後＞も、しばらくでたらめ弾きのピアノの音が聞こえている間は、騒がしさが持続した。助手1の周りに、「もう少しやろうよ」と集まってきた子どもがいたので、青虫のホーンを鳴らして機嫌を取ると、嬉しそうにみんなで触って和やかな雰囲気になった。しかし青虫のホーンを奪う子どもが現れたので、また騒がしくなってしまった。

年長では、ダルマさんが転んだ遊びが流行っており、それに参加している子どもが大勢いた。＜遊びが始まる前＞、準備をしている段階では寄ってこなかったが、「ダルマさんをやってる

人はやってもらって、こっちで遊ぶ人は来てね」と声をかけると、気になってこちらを見ていた3人程度に加えて、ダルマさんが転んだ遊びをやめた9人ほどの子どもたちが寄ってきた。＜音楽なしの遊び＞が始まると、「やっぱり、僕、やりません」と大声で主張する男児が現れたが、誰もつられて動かないので、すぐに本人も戻ってきた。子どもたちは素早く段取りを覚え、積極的に遊びはじめ、なかなかジャンケンに勝てなくて次の行動がとれないことを楽しむ余裕さえあった。待っている間、ピョンピョンと飛んでリズムを取っている子どもがいた。＜音楽ありの遊び＞が小さい音から始まると、それに気が付いてピアノの方を見ている子どもがいた。子どもたちは3人になったらジャンケンするというシチュエーションが気に入る、ますます遊びに集中し、全体として楽しい雰囲気になった。ひまわりモンスターの上に置いていた青虫のホーンを助手1の目を盗んで鳴らしにくる、ジャンケンの歌を歌って待っている、後ろでバク転を試みる、順番が回ってきた子の横からジャンケンの手を出しているなどしている子どもたちがいたが、全く子ども同士のトラブルは発生しなかった。そのうち子どもたち自身の早いリズムでジャンケンをはじめ、ピアノ演奏と合わなくなることもあった。＜遊びの終了後＞は、「今日はこれでおしまい。また来るね」と言うと、興奮がずっと静まって、一部の子どもたちはまたダルマさんが転んだ遊びに戻っていった。

c) まとめ

子どもたち自身の感情調整力という視点から考えると、年少や年中の子どもは、遊びに入る前と遊びが終わってからの様子において自発的な子ども間のトラブルが頻繁に起こっており、発達的にまだ自分で調整することが難しい年齢であることが示唆された。一方今回の観察で、年長の子どもは同場面での自発的トラブルは少なく、子どもたち自身の感情調整力が育っていることが推測できた。そして大人が遊びを提供するシチュエーションでは、3年代(年少・年中・年長)の子どもたちすべてにおいて、やってみようという挑戦心や積極性を示してくれるものの、言語による介入だけだと順番を待てなくなったり集中できなくなったりして、全体の遊びの輪が崩れやすくなっていた。ところが音楽が入ると、気が散ることが少なくなって遊びに集中し、さらに音楽に合わせて声を出したり身体を動かしたりすることで自発的に気持ちの調整もしているようで、子ども間で起こるトラブルが減る傾向にあった。ただし年中の子どもたちの観察から、音楽の中にでたらめ弾きのような不協和な音が混じると、その音に反応してしまったと思われる騒々しさやトラブルが起こることもあると理解できた。

以上の結果を踏まえ、音楽的情動調整による保育技法の検討と情動調律応用アプローチの可能性について考察する。

IV. 総合考察

1. 音楽的情動調整による保育技法の開発

学生たちのアンケート調査の結果を俯瞰すると、彼らは幼児を保育していくに当たって、ポジティブな感情は問題ないがネガティブな感情は一人であっても表出されると全体がまとまらなくなるので、集団が崩れる前に声掛けをして何とかなだめて事を収めたい、と感じていたとわかる。しかし情動調律応用アプローチの検証結果から明らかになったように、言語による正確なコミュニケーションがあまり期待できない年少や年中の子どもは、自身で情動を調整する力がまだ育っていないことが考えられた。また年長を合わせた幼児全体でも、言語だけに頼る保育には限界があり、待てなかったり集中できなくなったりする子どもが出てくると、集団として落ち着かなくなりまとまりを失いやすい傾向があった。

そこで本研究では、言語に替わる非言語の新しい保育技法として、音楽の可能性を探ることにした。もちろん幼児教育の中で音楽的活動は目新しいものではなく、すでに取り入れられている。だがこれまでの使い方は、歌を歌わせるにせよ、演奏させるにせよ、子どもに表現させる(リトミック¹⁰⁾)にせよ、積極的に子どもをその音楽的な活動にのせていくために使われている。言わば音楽は、子どもの感性を引き出し、より充実させるための装置として機能する。それに対し、本研究での音楽の位置づけは全く異なる。音楽的な活動へ誘導することが目的ではなく、遊んでいる子どもの感情に並走させつつそれらに影響を与えるものとして機能させることを目的にした。そのため使用した音楽は非常にシンプルで、ジャンケンの動きを説明する歌詞は付いていたが、子どもたちにそれを歌うことや覚えることをあえて求めなかった。さらにピアノ演奏者が目の前で展開している子どもの様々な感情をひろって、それをアドリブで音楽的に再現することを通して、子どもが自分自身の気持ちと向き合えるように促していくことを心がけた。

その結果、子どもの揺れ動く感情を音楽が下支えするような、これまでにない保育が展開できた。どの年代でも全体として楽しい雰囲気が生まれ、特に仲間がやっていることをじっと見ながら並んで待つというような忍耐が求められる場面で、大きな効果を発揮した。年少では、個々人が音楽に合わせて身体を揺らすなどして落ち着いて待てられるようになり、年長ではそれに加えて、何かをやっている仲間の気持ちに自然と寄り添い拍手したり喜んだり残念がったりしながら、自分の番でなくても遊びに積極的に気持ちを傾けていられる様子が見られた。さらにその効果は、直接遊びに参加せず違うことをしている子どもたちにも広がっており、さりげなく一緒にリズムを取ったり歌ったりといった場の共有があった。

以上から、音楽には、子どもの揺れ動く感情を自然な形でなだめ活動をまとめる力が高いことが理解できた。ただし使用する旋律は、年中でのでたらめ弾きによる騒々しいピアノの音がまとまりを壊してしまったように、簡単なものであってもきちんと効果が期待でき、子どもの

感情に寄り添えるすっきりとしたメロディーラインであることが望ましい。今回の方法をさらに実践的に洗練させる必要はあるが、本研究の一連の取り組みは、目的としていた音楽的情動調整という新たな保育技法の開発においての大きな一歩となったと考える。

2. 情動調律応用アプローチの可能性

情動調律とは、本来、幼児と養育者という人対人の関係において、リズムや強さといった音楽的表現によって表される気持ちを共有することで、子どもの情動状態を養育者が調整していくという、養育者側からの感情の調整方法である。本研究は、このような養育者の役割を保育者が奏でる音楽が担うことで、子ども一人だけに対応するのではなく集団に影響を与えることができるのではないかと考えた。

情動調律応用アプローチの検証において、集中の持続と音楽との相互作用性という点から考察する。ピアノ演奏による楽しそうな音楽の介入は、筆者2が実際に子どもの様子を見ながら行ったのだが、年少から年長まで、音楽なしの時は遊びを運営している筆者1とジャンケンをしている子ども以外、あまり楽しそうな様子が感じ取れなかった。子どもたちは早い段階で遊びそのものや待っていることに飽きてしまって、散漫な雰囲気を醸し出し、離脱者も出てしまっていた。介入のタイミングは前もって決めていた訳ではないが、これ以上は限界という筆者2の判断で行った。すると子どもたちが楽しそうな表情になって遊びに気持ちが入り、ジャンケンをのぞき込んだり勝った子どもに賞賛の拍手を送ったりするようになった。さらに音楽なしの時は参加していなかった子どもまで遊びに合流してくるなど、音楽ありの方が場の雰囲気が華やいだものになり、遊びへの集中時間が長くなることが観察された。

また音楽ありの遊びの時に、子どもたちは特に指示を出したわけでもないのに、遊びに参加する自分たちのさまざまな気持ちに並走していた音楽に合わせて、一緒に歌ったりジャンケンの手を出したり、揺れたり足踏みしたりピョンピョン飛び跳ねたり、手やお尻を動かしてリズムを取ったり、服の裾を引っ張り上げたりバク転をしたりと、思い思いに動いていた。ただしその動きはどれも意識的ではないようで、周囲の大人たちに向けてやっているのを見せようなどの意図はなく、時々思い出したようにその場で一人でやっている程度のさりげないものだった。もちろん子どもたちが頻繁にこのような反応を見せたからといって、すぐさま音楽との相互作用性が生じたと判断することはできない。だが音楽がある状況に影響を受けたことは確かであり且つこのような動きをしながら子どもたちは、音楽なしの遊びの時には難しかった、楽しそうに順番を待ったり遊びに集中したりができるようになっていた。

複数の子どもの向けられた音楽が、一人一人の子どもの情動にタイミングよく機能したというよりは、子どもらがそれぞれに揺れ動く自身の情動を整えるために音楽を利用した可能性が高い。子どもの側から、提供されていた楽しそうな音楽に自身の情動を沿わせて調整してい

たのだとしたら、自発的な情動調律が音楽によって促進されたと解釈できるだろう。これは情動調律そのものではないが、情動と相性が良い音楽的要素をうまく取り入れ、よく似たメカニズムで情動の調整を行うという意味で、情動調律応用アプローチと捉えることが可能である。アンケート調査の結果にもあったように、言葉をまだうまく使うことのできない幼児には、言語による保育者側からの気持ちの調整がうまくいかない時が必ずあるものだ。声掛けとは全く違う子どもの情動の調整方法として、音楽を使った情動調律応用アプローチが幼児教育の現場で発展していく余地は十分にある。

今後に向けて

本研究は、幼児教育学を専攻する学生のニーズを整理し、幼児期の子どもたちの感情を調整することの難しさに焦点を当てて、言語によらない音楽的情動調整という新しい保育技法を開発するため、音楽を使った情動調律応用アプローチについての可能性を実践的検証から探ったものである。その結果、このアプローチの応用可能性は高いことが明らかになったが、これを実際の保育現場に取り入れていくにはさらなる工夫と改善が必要である。例えば介入させる楽しそうな音楽は、BGMになってしまっただけでは意味がなく、その場の子どもたちの気持ちに沿った音であることが重要で、忙しい現場でどのように取り入れることができるか導入枠組みを検討しなければならない。あるいは情動調整を促しやすい音楽の開発が必要なのか、既存の子ども向けの音楽を使用することが可能なのかも明らかにしなければならない。

本稿の成果を踏まえ、今後も本研究テーマのすそ野を広げていきたい。

謝辞

本研究に協力してくれた、短期大学幼児教育学科の2学年の皆様、私立幼稚園の教職員の皆様、園児の皆さんに感謝します。

利益相反の有無について

本研究発表に関連して、開示すべき利益相反関係にある組織等はない。

文献

- 1) Bridges,K.M.B.,:Emotional development in Early Infancy, Child Development,Vol.3,pp.324-341,1932.
- 2) Lewis,M.,:The development of intentionality and the role of consciousness, Psychological Inquiry,Vol.1,pp.231-247,1990.
- 3) Lewis,M.,:The emergence of human emotions,The Guilford Press,pp.272-292,2016.
- 4) 入江慶太：新人保育士が感じる保育の難しさとは何かー3歳未満児クラスにおける検討ー，川崎医療短期大学紀要,33号,61-67頁,2013.

- 5) 樋口寿美・藤崎春代：Toddler期の子どもの集団保育活動参加への自己調整と保育者の関わりー情動調整に着目してー，昭和女子大学生活心理研究所紀要,16号,21-32頁,2014.
- 6) Juslin,P.N.& Sloboda,J.A.,(Edited):Music and Emotion:Theory and Research, Oxford University Press,2001. 大串健吾・星野悦子(監訳)：音楽と感情の心理学，誠信書房,95-123頁,2008.
- 7) Stern,D.N,:The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. NY,Basic Books 1985. 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳)，神庭靖子・神庭重信(訳)：幼児の対人世界ー理論編一，岩崎学術出版社,1989.
- 8) Stern,D.N,:The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. NY,Basic Books 1985. 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳)，神庭靖子・神庭重信(訳)：幼児の対人世界ー臨床編一，岩崎学術出版社,1991.
- 9) 上野千鶴子：情報生産者になる，筑摩書房,2018.
- 10) 神原雅之・伊藤仁美：保育ではじめてリトミック，チャイルド本社,207頁,2021.

幼稚園教諭・保育士養成校における実習での 音楽実技についての考察

～アンケート調査を通して～

A Study of Practical Music Skills in Practical Training at Kindergarten Teachers and
Childcare Workers Training Schools
～ Through a Questionnaire Survey ～

深 谷 悠里絵 佐々木 郁 子

Yurie Fukaya

Ikuko Sasaki

In this study, we will analyze and verify the differences in piano performance skills required by different preschools, what exactly is required, what preparations students make for the practical training, and what they notice and issues they face after completing the training.

In addition, for many years piano was considered essential for nursery school teachers in employment examinations, but we have heard from many students that there are now kindergartens and nursery schools that do not have a practical piano exam, but only a paper and an interview. We will investigate the treatment of piano in practical training through a survey of students and investigate whether or not piano exams are required for employment, focusing on job applications.

1. はじめに

本学幼児教育学科の学生は、幼稚園教諭免許と保育士資格取得を目指し、必要単位を学修し、実習に取り組んでいる。筆者は、その中で音楽科目や実技ピアノの授業を担当している。また、幼稚園や保育所、施設実習の訪問巡視を行い、学生の日々の学びや取り組みがどのように活かされ、何が必要とされているのか、現場の先生方から直接話を伺う機会がある。

本学に入学する前までのピアノの学習歴は様々で、幼稚園の頃からピアノを習っていた学生もいれば、独学で弾いてきた学生、全くピアノを弾いたことが無い学生も中にはいる。しかし、学習歴に関係なく2年間の授業回数は同じで、実習でも同じことを求められる。朝のごあいさつ、お弁当や給食、お帰りのごあいさつのうたなど、様々な場面でピアノを用いた音楽・歌唱活動に取り組み、多くの幼稚園では、季節のうたを月ごとに定めて一緒に歌ったり、身体表現や器楽演奏なども行っている。

「実習生にピアノの実践力を望む幼稚園が多いということは、現実的に幼稚園では音楽活動

が盛んに行われており、ピアノの習得は必須であることを示唆していると考えられる。」と大野¹が述べているように、多くの園でピアノを用いた音楽活動が行われている現実があり、それに合わせた指導や取り組みがそれぞれの養成校で行われていることがわかる。

学生は自分の技術を高めながら、実習で園側からの要求にこたえられるように、授業の中だけでなく個人練習に励み、準備をしているが、なかなか上手く準備が進められず苦しんでいる学生もいる。

実習巡視に伺った際「ピアノは苦手であれば違う方法を考えればよい」「一緒に歌ったり楽しく活動できることが大事」というピアノにそんなに力を入れていない園もあれば、「ピアノの事前準備が不十分である」「弾き歌いができない」「もう少し練習が必要」など、直接指導をいただく園もあった。

本研究では、園によって求められるピアノ演奏技術の差から、具体的にどのようなことが要求され、学生はどんな準備をして実習を迎えているのか、実習を終えて気づきや課題などについて分析・検証していく。

また、長年保育士には就職試験でもピアノは必須とされていたが、現在はピアノの実技試験がなく、論文や面接のみの幼稚園や保育園もあることを学生から多く聞かれる。実習でのピアノの扱いについて学生へのアンケートで調査し、就職でのピアノ試験の有無について、求人票を中心に調査を行う。

2. 研究の背景

筆者はこれまで、令和3年郡山女子大学紀要 第58集において「『保育表現技術 器楽Ⅱ』実習での音楽活動から考えるピアノ演奏技術のあり方～聞き取り調査を踏まえて～」²の原著論文を掲載し、課題を踏まえた授業を展開しているが、音楽に力を入れている園や体育に力を入れている園、また自由保育で特に決まった活動はない園など、園によって方針は様々でピアノの取り扱いに差がある現実が分かってきた。

例年、本学の幼稚園実習の時期は6月であるため、求められる曲目や音楽活動はだいたい決まってきたているが、近年ピアノや楽器を使わずに、YouTubeからフリー音源を使用したり、Bluetoothでスマートフォン等をスピーカーに繋いで、その音源にあわせて音楽活動をしている園もあるようだ。第58集の調査の時にも、ピアノの使用をしない園があることに大変驚いたが、ICTなど様々な機器が発達して、園によってはタブレットなど、最新の機器を導入しているため、一概にこれまでの活動を踏襲することは難しいようにも思える。

第58集でのアンケート調査においては、筆者が担当していた19名の学生で偏りがあったため、本研究では幼稚園実習を終えた2学年(84名)にアンケート調査を行い、質問項目も具体的な内容がわかるように組み立てた。公立園や私立園、また幼稚園やこども園、園児の人数によって取り組みに違いがあるのか、そこにも注目して調査を進めていく。

3. 研究方法

本学2学年に在籍で、教育実習の授業を履修している学生を対象として、計84名に紙面によるアンケート調査(表1)を行った。

アンケート時期：令和5年7月3日～17日

アンケート方法：教育実習事後指導の授業内

アンケート回答方法：項目複数選択、自由記述

4. 倫理的配慮

本研究については、郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部人を対象とする研究に関する倫理委員会による承認を受けている(課題番号2023-102)。また、授業での声かけや紙面にも「※本アンケートは、成績評価とは無関係であり、回答者の個人を特定しないため、回答の有無によって不利益を被ることはありません。本アンケート結果は、教育・研究の目的以外には使用いたしません。」と記載し、学生の個人情報や園の特定がされないような配慮を行ったうえで、調査を行った。

5. 調査結果

①実習園の形態(設置)

1. 公立園…28園(幼稚園12園 こども園16園)

2. 私立園…56園(幼稚園37園 こども園17園)

②実習園の形態(種類)

1. 幼稚園…49園

2. 認定こども園…33園

③実習園の形態(園児数)

【公立幼稚園】		【公立こども園】	
50名未満	5園	50名未満	5園
50名～100名	4園	50名～100名	5園
101名～150名	2園	101名～150名	5園
151名以上	1園	151名以上	1園

【私立幼稚園】		【私立こども園】	
50名未満	3園	50名未満	1園
50名～100名	9園	50名～100名	3園
101名～150名	16園	101名～150名	7園
151名以上	9園	151名以上	6園

④実習で行った音楽活動について

子どもたちとどんな音楽活動を行いましたか？

【公立幼稚園】

実習で行った音楽活動(複数回答)	人数
歌唱活動	10
リズム遊び	6
楽器演奏	3
手作り楽器	2
リトミック	0
その他	0
音楽活動を行わなかった	0

【公立こども園】

実習で行った音楽活動(複数回答)	人数
歌唱活動	14
リズム遊び	5
楽器演奏	0
手作り楽器	1
リトミック	1
その他	1
音楽活動を行わなかった	1

【私立幼稚園】

実習で行った音楽活動(複数回答)	人数
歌唱活動	32
リズム遊び	10
楽器演奏	10
手作り楽器	3
リトミック	7
その他	1
音楽活動を行わなかった	3

【私立こども園】

実習で行った音楽活動(複数回答)	人数
歌唱活動	13
リズム遊び	5
楽器演奏	5
手作り楽器	4
リトミック	5
その他	0
音楽活動を行わなかった	1

⑤実習期間中、子どもたちの前でピアノを弾く機会はありましたか？

⑥「はい」と答えた方への質問です。幼稚園実習中、子どもたちの前で何回ピアノを弾きましたか？

【公立幼稚園】

実習中ピアノを弾く機会があったか	回数	人数
はい：6名 いいえ：6名	2回	2
	4回	3
	6回	1
	8回	3

【公立こども園】

実習中ピアノを弾く機会があったか	回数	人数
はい：12名 いいえ：4名	1回	1
	2回	2
	4回	3
	5回	2
	8回	1
	10回	2
	20回以上	1

【私立幼稚園】

実習中ピアノを弾く機会があったか	回数	人数
はい：35名 いいえ：2名	1回	2
	2回	3
	3回	1
	4回	4
	5回	3
	6回	6
	7回	2
	8回	3
	9回	2
	10回	3
	20回以上	6

【私立こども園】

実習中ピアノを弾く機会があったか	回数	人数
はい：16名 いいえ：1名	2回	1
	3回	4
	4回	1
	5回	3
	6回	1
	9回	1
	10回	2
	13回	1

⑦事前にピアノを練習してくるよう指定された曲目はありましたか？

公立幼稚園……はい：6名 いいえ：6名 公立こども園……はい：8名 いいえ：8名

私立幼稚園……はい：30名 いいえ：7名 私立こども園……はい：14名 いいえ：3名

その曲はどんなものでしたか？

【公立幼稚園】

指定された曲	人数
朝のうた	1
おべんとうのうた	1
おかえりのうた	1
さようならのうた	3
シューベルトの子守歌	1
かたつむり	2
あめふりくまのこ	1
にじ	1
おたまじゃくし	1
すてきなパパ	1
歯をみがきましょう	1
お誕生日	1

【公立こども園】

指定された曲	人数
朝のうた	3
おべんとうのうた	1
おかえりのうた	3
園歌	2
かえるのうた	3
かたつむり	1
あめふりくまのこ	2
英語が大好き	2
お誕生日おめでとう	1
子ども会のうた	1
拍手	1

【私立幼稚園】

指定された曲	人数	指定された曲	人数	指定された曲	人数
おはようのうた	11	国歌	2	すてきなパパ	1
朝のうた	8	讃美歌	3	だからあめふり	1
おべんとうのうた	15	幼稚園の前奏・後奏曲	2	にじ	1
おかえりのうた	10	かえるのうた	5	おたまじゃくし	1
さようならのうた	10	かたつむり	6	ちょうちょう	1
おねむりの曲	4	とけいのうた	3	夕焼け小焼け	1
シューベルトの子守歌	3	あめふりくまのこ	3	ことりたちは	1
ベートーヴェンの子守歌	2	きらきら星	3	小さいおてて	1
ねむれねむれ	3	大きな古時計	1	メリーさんのひつじ	1
おきよおきよ	6	とけいやのとけい	1	ディズニーやジブリ	1
園歌	4	えらいパパ	1		

【私立こども園】

指定された曲	人数	指定された曲	人数
おはようのうた	3	にじ	2
朝のうた	6	たなばたさま	1
おべんとうのうた	4	かえるのがっしょう	1
おかえりのうた	9	ちょうちょう	1
さようならのうた	2	すてきなパパ	1
園歌	2	ライオンはみがき	1
おきよおきよ	1		
ベートーヴェンの子守歌	1		
シューベルトの子守歌	1		
あめふりくまのこ	5		
とけいのうた	4		

⑧楽譜を事前に渡されていた場合は、曲目を教えてください。

【公立幼稚園】

配布された楽譜	人数
朝のうた	1
おべんとうのうた	1
おかえりのうた	1
さようならのうた	1
シューベルトの子守歌	1
かたつむり	1
あめふりくまのこ	0
にじ	0
おたまじゃくし	1
すてきなパパ	1
歯をみがきましょう	1
お誕生日	1

【公立こども園】

配布された楽譜	人数
朝のうた	3
おべんとうのうた	1
おかえりのうた	3
園歌	2
かえるのうた	0
かたつむり	0
あめふりくまのこ	0
英語が大好き	2
お誕生日おめでとう	1
子ども会のうた	2
拍手	1
あまだれぼったん	1

【私立幼稚園】

配布された楽譜	人数	配布された楽譜	人数	配布された楽譜	人数
おはようのうた	8	幼稚園の前奏・後奏曲	2	ちょうちょう	2
朝のうた	2	かえるのうた	3	夕焼け小焼け	0
おべんとうのうた	8	かたつむり	2	ことりたちは	1
おかえりのうた	5	とけいのうた	1	小さいおてて	1
さようならのうた	9	あめふりくまのこ	2	メリーさんのひつじ	0
おねむりの曲	2	きらきら星	0	ディズニーやジブリ	0
シューベルトの子守歌	3	大きな古時計	0	青い空に絵をかこう	1
ベートーヴェンの子守歌	2	とけいやのとけい	1	1・2の3のごあいさつ	1
ねむれねむれ	2	えらいパパ	1	てんのおとうさま	1
おきよおきよ	2	すてきなパパ	1	むすんでひらいて	1
園歌	4	だからあめふり	1	おかたづけ	1
国歌	2	にじ	1	はなひらく	1
讃美歌	3	おたまじゃくし	0	きれいなあさです	1

【私立こども園】

配布された楽譜	人数	配布された楽譜	人数
おはようのうた	2	にじ	1
朝のうた	2	たなばたさま	2
おべんとうのうた	2	かえるのがっしょう	0
おかえりのうた	5	ちょうちょう	0
さようならのうた	2	すてきなパパ	0
園歌	2	ライオンはみがき	1
おきよおきよ	1	ちっちゃないちご	2
ベートーヴェンの子守歌	1		
シューベルトの子守歌	0		
あめふりくまのこ	4		
とけいのうた	3		

⑨音楽活動で特に難しいと感じたことはどんなことでしたか？（複数回答可）

【公立幼稚園】

音楽活動で特に難しいと感じたこと	人数
ピアノを弾くこと	3
歌を歌うこと	3
子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと	7
弾き歌い	6
間違えないようにピアノを弾くこと	3
音楽表現	0
楽器演奏	0
年齢に合った選曲	1

【公立こども園】

音楽活動で特に難しいと感じたこと	人数
ピアノを弾くこと	3
歌を歌うこと	5
子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと	8
弾き歌い	8
間違えないようにピアノを弾くこと	8
音楽表現	3
楽器演奏	0
年齢に合った選曲	2

【私立幼稚園】

音楽活動で特に難しいと感じたこと	人数
ピアノを弾くこと	14
歌を歌うこと	7
子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと	24
弾き歌い	26
間違えないようにピアノを弾くこと	21
音楽表現	1
楽器演奏	2
年齢に合った選曲	6
その他(ピアノもCDも無い中での音楽活動)	1

【私立こども園】

音楽活動で特に難しいと感じたこと	人数
ピアノを弾くこと	7
歌を歌うこと	2
子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと	6
弾き歌い	10
間違えないようにピアノを弾くこと	8
音楽表現	3
楽器演奏	1
年齢に合った選曲	1
その他 (子どもたちのリズム(テンポ)に合わせること)	2

⑩音楽活動をするために必要だと思う事はどんなことですか？

【公立幼稚園】

・練習	・経験	・知識	・イメトレ
・歌詞を覚えておくこと。	・間違えても動揺しないこと。		
・音楽をたくさん知っておくこと。			
・手遊びをたくさんできるようにしておく。			
・演奏を間違えても止まらないで歌うこと。			
・園児の様子を確認しながら弾くこと。			
・子どもに合わせて速度を変えたり、音量を変えたりすること。			
・ひらがなで大きく歌詞を書き、視覚的支援をする。			
・読めない子どものために歌いだす前に歌詞を言うこと。			
・保育者自身が楽しむこと。元気に表現すること。			
・決まった音や曲調だけでなく、自分で考えながらやること。			
・年齢、季節、子どもたちの興味に合った曲を選ぶこと。			
・子どもたちが主体的になれる活動の流れ。			
・楽器の正しい使い方の指導方法。			

【公立子ども園】

・自信がつくまで練習。 ・笑顔で楽しく行う事。 ・元気に楽しむこと。 ・事前準備。 ・事前練習。
・ただピアノを弾くだけではなく、子どもたちの様子を見ながら子どもたちに合わせて弾くことが必要だ と思う。
・子どもたちが歌いやすいように丁寧に導入を行う事。 ・歌詞を覚えられるように1から伝える。
・保育者が視覚教材(絵など)を用いて、歌詞を説明することで子どもたちがより歌いやすくなると思う。
・なぜその活動をするのか(目的)、歌を歌う季節を考える。 ・弾き歌いの時、ピアノは止まらずに歌うこと。
・ピアノなど楽器を使う時に間違えても止まらない心。 ・子どもと一緒に楽しんで歌やピアノを弾くこと。
・ピアノを弾いて歌って終わりではなく、手を動かしたり輪唱してみたり、子どもたちの興味をひかせる こと。
・年齢に合った選曲をすること。 ・子どもたちの前ではっきり歌い、身体を動かす。
・音楽活動の中に遊びの要素を取り入れて、楽しく活動ができるようにすること。 ・間違えても弾き続ける。
・できたら小さいことでも褒める。 ・ピアノで弾き歌いの練習を常にしておくこと。
・子どもたちをよく見ながら弾くこと。 ・子どものことも考えながら声の大きさやリズムを考えること。
・ピアノを弾くときは子どもの様子を見ながら、子どもたちと一緒に楽しく活動すること。
・子どもたちをひきつけ、歌が楽しいと感じてくれるような導入をすること。 ・楽しむこと、笑うこと。
・保育者の動揺が子どもたちに伝わらないように平然としていることが大事。
・子どもたちが歌いやすいようにリズムやテンポを合わせること。
・子どもたちが歌えるように歌詞を掲示したり、確認しながら歌うことが大切だと思った。
・子どもたちが歌いたいと思う選曲やピアノの練習も重要であると思った。

【私立幼稚園】

・子どもの年齢や興味にあわせて選曲すること。 ・季節に合った選曲をすること。
・子どもがしっかり歌えるように歌詞の先読みをしたり、ピアノを右手だけでも止めないことが大切。
・ピアノの音に声量が負けないようにすること。 ・子どもたちの方を見てピアノを弾くこと。
・場合によっては、歌詞を先に言って子どもたちが歌いやすくなるような援助。 ・大きな声で歌うこと。
・保育者が笑顔で楽しそうに弾き歌いすること。 ・歌う前にどんな曲であるか伝えること。
・声を張り、元気よく歌うこと、またピアノを弾くこと。 ・子どもたちと一緒に楽しんで元気に活動すること。
・子どもたちと一緒にコミュニケーションを取りながら、一緒に楽しむこと。
・わかりやすい表現で子どもたちに伝えること。 ・ピアノを失敗しても子どもと楽しく歌えること。
・子どもの歌うスピードに合わせて伴奏を弾くこと。 ・子どもに寄り添ってピアノを弾くこと。
・楽しみながら活動をすること。 ・最低限の音楽の知識が必要。 ・楽しむこと。演奏や歌唱を強制しないこと。
・活動するうえで、保育者が子どもたちをリードして行うことが大切。 ・とにかく楽しむ！ ・練習。
・子どもたちが好きそうで、興味のある曲を選曲すること。 ・技術が必要だと思った。
・子どもたちが楽しみながら音楽活動ができる環境づくりや声掛けをすること ・自分自身も楽しむこと。
・広く視野を持つことや大きな声で歌う事。 ・子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと。
・ピアノを間違えても戻らずに進むこと。(弾き続けること) ・保育者と一緒に楽しむこと。 ・自信を持つこと。
・余裕を持つこと。(緊張から心に余裕がないと子どもたちにも伝わり、不安を与えてしまうから。)
・ピアノを間違ってしまったても、歌は止まらずに歌い続けること。 ・日頃からピアノに触れておくこと。
・ピアノや楽譜だけを見ずに子どもを常に見ながら演奏すること。 ・大きな声で歌い子どもたちをリードすること。
・たとえピアノが苦手でも、険しい顔はせずに笑顔で子どもたちと楽しく行うこと。

<ul style="list-style-type: none"> ・一生懸命弾くことも大切だが、子どもたちと一緒に歌う事。 ・子どもにリズムを合わせてピアノを弾くこと。
・ピアノを弾くことに夢中にならず、子どもたちの様子を見ながらピアノを弾くことが必要だと思った。
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが興味を持ってくれるような導入をすること。 ・子どもの歌い方やスピードに合わせて弾くこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・自信をもってピアノを弾き、大きな声で楽しそうに歌う事。 ・季節に合った曲を選ぶこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノが弾けなかったら違うことを考えること。 ・楽しく大きな声で歌い、大きな声で指導すること。
・子どもたちが歌いやすいように支援することや笑顔で楽しく歌うことが必要だと思った。
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちと楽しんで取り組むこと。 ・失敗しても止まらずに続ける勇気が必要だと思った。
・曲に合った表情をつけて、その曲らしい印象(雰囲気)を出せるよう心掛けることが大切だと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・失敗しても恐れずに、前向きに行う事。 ・事前の準備・確認・必要に応じて楽器の練習。
・大きい楽譜を準備。
<ul style="list-style-type: none"> ・普段から様々な音楽に触れて、音楽に興味を持つこと。 ・年齢に合った曲や季節に合った曲を選ぶ。
<ul style="list-style-type: none"> ・子どものお手本となるように表情豊かに行う。 ・活動を始める前にピアノを弾けるようにするなど準備が大切。

【私立子ども園】

<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちと音楽を楽しむために、ピアノを事前にしっかり弾けるように練習することが必要だと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの年齢に合った選曲をすること。 ・ピアノを弾きながらも、常に子どもの様子を観察すること。
<ul style="list-style-type: none"> ・明るく笑顔で楽しそうに活動すること。 ・保育者自身が楽しむこと。
・弾きながら笑顔で歌うメンタル。
<ul style="list-style-type: none"> ・声の大きさ、動きなど子ども達に伝わりやすいように表現すること。 ・間違えても次に進める力。
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達を置いていかずに、楽しく行うこと。 ・弾きやすいように、見本の見せ方や、声かけの仕方など。
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達の様子を見て、音のスピードや音量を考えて行うこと。 ・自信を持って弾けるようになること。
<ul style="list-style-type: none"> ・間違ったとしても最後までやり通すこと。 ・歌やピアノのうまい下手ではなく、笑顔で楽しく歌うこと。
・歌唱活動の際、子ども達に正しい音程や歌詞が伝わるように伴奏し、一緒に歌うこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・楽しんで活動に参加できるような導入や言葉掛け、支援。 ・音楽の楽しさを伝えること。
<ul style="list-style-type: none"> ・音楽に触れて、大きな声で歌ったり、季節に触れること。 ・子どもの意欲、興味を惹きつけること。
・いろいろな音(楽器から出る音だけではなく、日常の中の音)を聞いて、音に親しみを持てるようにする。
・歌詞カードを作って掲示するなど、子ども達が歌いやすいような環境をつくること。
・歌い終えた後に、「上手だね」「この部分が元気よく歌えていてよかったね」など、前向きなフィードバック。
・季節や行事に合っている曲や、明るい曲、有名な曲にすることが必要。

⑪音楽活動に関して困ったことはどんなことですか？

【公立幼稚園】

<ul style="list-style-type: none"> ・自分が想像していたことと、子どもの動きが違ったところ ・音楽遊びが最後はダンスになってしまったところ
<ul style="list-style-type: none"> ・一部の子どもが歌ってくれなかったり、ダンスをしなくてくれなかったりしたとき。 ・立ちながら弾いたこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが歌詞を覚えていなくて声が小さくなってしまったとき。 ・園独自のピアノを使った合図があったこと。
<ul style="list-style-type: none"> ・手遊びが分からなくて、子どもが止まってしまったとき。 ・間違えたときに止まってしまう。
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを弾くときに子どもの様子が見られず、歌い出しに歌詞を言うことができなかった。
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの音に自分の声が負けてしまった。 ・伴奏をやり直したら子どもたちを混乱させてしまった。
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの歌声がピアノの音に勝ててしまい、ピアノが聞こえなくなった ・音を出すタイミングを揃えられない。

・ピアノを間違えてしまったときに、続きから弾くか歌って乗り切るか迷った。
・こちらが楽器を鳴らしても見ていない子が多かったため、一人一人に改めて説明をしたこと。
・真似してほしいことが伝わらなかったり、バラバラに表現してしまったりする。
・子どもたちが歌いたいと思った曲の楽譜を持っていなかった。
・1から教えて、曲を完成させる難しさ

【公立子ども園】

・急に「ピアノを弾いていいよ」と言われたこと。
・子どもの様子を見ながらピアノを弾くときに間違えてしまう。
・ピアノを弾き間違ってしまったとき、子どもたちが歌うのをやめてしまったこと。
・子どもたちの前に出てピアノを弾くと、緊張して子どもたちに聞こえるような声で歌を歌うことができなかった。
・楽譜をもらえず、曲も教えてもらえなかったため、責任実習で普段歌っている季節のうたが弾けなかった。
・子どもたちが知らない歌を歌う時に歌詞をどのように教えればよいか困った。
・自分で音楽活動をするときは、興味を示さずに歌わない子どもや楽しくないような子どもがいたら対応
・歌の始まりと終わり方が定まらず、メリハリがうまくつけられなかった。
・ピアノを間違えないように楽譜と手元を見ていると、歌詞を見ることができず、歌うことが難しかった。
・朝のうたが今まで聞いたことがない曲だったため、覚えるのが大変だった。
・楽譜を配られたのが、部分実習の前日だったため、1日で弾けるようにするのが大変だった。
・子どものその日の気分に合わせることに。気分が乗らず一緒に活動ができない子への対応が難しかった。
・ピアノを弾きながら、子どもたちの様子を確認したり声がけをすること。
・子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと。・たくさん練習して、歌えるくらい暗譜すること。
・一斉保育ではなく、自由保育だったため、それぞれの子どもへの対応が大変だった。
・急に「ピアノを弾いて!」と子どもからリクエストがあったが、弾けずに困った。

【私立幼稚園】

・ピアノを弾きながら歌うことが難しかったこと。・弾き歌いの時の歌とピアノのバランスのとり方。
・歌を使ったゲームを行ったが、子どもたちはそのゲームも歌もわからず、成り立たなかったこと。
・間違わずにピアノを弾くこと。・子どもの前で手が震えてしまい、いつも通り弾けなかった。
・ピアノを弾くことだけでなく歌も歌うことで、手がうまく動かなくなってしまう。・楽譜が読めない。
・子どもたちの様子を見ながら弾き歌い。
・ピアノを弾くことに緊張してしまい、止まってしまったこと。
・歌う前にうるさくなってしまうことがあったため、静かにさせて、音楽に興味を持たせること
・歌を歌う時に子どもの様子を見ながら弾いたり、間違えた後に落ち着いて途中から弾けるようにすること。
・ピアノが気になって、1人が前に出て見に来ると他の子どもも気になりだしてなかなか進まなかったこと。
・リトミックを行ったときに、子どもたちが曲よりも先の行動をしてしまったこと。・両手で弾けない。
・子どもたちの様子を見ながら演奏する事が難しかった。・大きな通る声で歌うことが難しかった。
・ピアノが弾けなくなると、子どもたちの歌も止まってしまったこと。
・やりたがらない子どもがいること。
・保育者が普段5回転調させる「かえるのがっしょう」を弾いていたこと。・園歌を覚えること。
・ピアノを間違えてしまったとき、途中から入れなかったこと。
・緊張して弾き方がわからなくなってしまった。
・子どもたちに弾けない曲をピアノで弾いて!と言われたこと。
・ピアノに興味を示して近くに集まったが、これから歌う時にピアノを触る子どもが多く、声がけが大変だった。
・子どもの歌のスピードにピアノを合わせて弾き歌いすることが難しかった。
・季節のうたがピアノの本に載っていない曲だったため、Youtubeで調べて練習を行ったこと。
・ピアノを教えてほしいと伝えられた時に上手に教えてあげられなかったこと。
・ピアノのテンポが事前の練習より早かったため、実習中にも練習したこと。
・初めて歌う曲だったため、子どもたちは歌えずに困っていたこと。(次第に手拍子をして、歌ってくれた。)

・「あめふりくまのこ」や「うみ」を子どもたちが知らず、一緒に練習し、歌詞を言いながらピアノを弾くこと。
・鼓笛に関して、「できないからやりたくない」という子どもが何人かいた。
・ピアノ伴奏やCDの音楽など他に音楽が無い場面で、自分で流れを作って子どもたちと一緒に楽しく歌うこと。

【私立子ども園】

・練習してきたリズムと子どもたちの歌うリズムが違った時に、合わせるのが難しくて困った。
・緊張した。
・子ども達が普段歌っているスピードがどのくらいかわからないため、初めて子ども達の前で弾く時に戸惑った。
・幼稚園のピアノを初めて使ったため、使い方がわからなかった。
・一度間違えたら、先に進めないこと。
・子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと
・楽器に夢中になってしまっ、なかなか話を聞いてくれないこと。
・ピアノを弾いている時に、違う行動をとる子どもへの対応 ・弾きながら歌うのが難しい。
・子ども達は、ピアノでミスをしてもしまらないで歌い続けるため、合わせるのが難しい。
・事前に楽譜を渡されたが、リズムが難しく一人ではできなかった。
・練習をしてきた伴奏の速さと会わず、子どもの歌声に合わせて弾くことが難しく感じた。
・子ども達が歌詞を間違えているところがあり、そのことに対する声かけがわからなかった。
・子どもから「〇〇がいい」と言われ、その曲が弾けなかった時の対応の仕方に困った。
・練習していた曲と違ったため弾けずに困ったが、子ども達に「歌で助けてほしい」と声かけてなんとかなった。
・ピアノが途中で止まったときに、途中から入って弾くことができなかった。
・子どもは何の曲であれば知っていて歌えるのかわからなかったこと。
・同じ「さようならのうた」でも、前奏が少し違うだけで、歌いづらそうな場面があった。

⑫実習前に準備しておけばよかったと思う事はどんなことですか？

【公立幼稚園】

・使う物の材料を確認しておけば良かった。 ・ピアノ・歌・弾き歌いの練習。
・イメトレが足りなかった。子どもたちがいると想定した練習。
・伴奏型をもっと前から決めて練習しておくべきだった。 ・歌詞を書いた模造紙。
・右手だけでも弾けるようにしておけば良かった。 ・季節の歌のレパートリーを増やすこと。
・曲の1番しか覚えていなかったから、2番まで覚えておけばよかった。
・曲のレパートリーを増やすこと。ピアノ、リズム遊び、歌唱など。
・視覚的にも楽しめるように、イラストや写真を準備しておけばよかった。
・楽譜を自分で準備しておくべきだった。 ・ペープサートなど、隙間時間にできること。

【公立子ども園】

・すぐに弾ける曲をもっておくこと ・歌いながら弾くこと。
・子どもに喜ばれるエプロンシアターなどを作って、楽しい気持ちになってもらえる準備。
・弾ける曲のレパートリーを増やすべきだった。 ・歌詞をしっかりと覚えていく。
・誰かの歌に合わせて弾く練習もしなければならなかった。
・ピアノは事前にたくさん練習しておくこと ・季節のうたのレパートリーを増やすこと。
・歌を何回繰り返してどのように歌うのかしっかり計画しておくこと。
・季節のうたをたくさん調べて、子どもたちが歌っている曲と一緒に歌えるようにしておくこと。
・子どもたちの様子が見られるくらい練習すること。 ・年齢に応じた言葉の使い分け。
・手元を見ずに弾けるように練習すること。 ・子どもの前で堂々と話せるようにすること。
・季節に合わせた曲の歌詞を覚えておくことと自信をもって子どもたちと一緒に歌えたと思う。

【私立幼稚園】

・子ども達の間で流行っている歌を歌いながらできるペープサートやパネルシアターなども作っておけばよかった。
・隙間時間でもできるようなリズムダンスなどを少しでも考えて用意しておけばよかった。
・間違わずに弾けるように更に練習をしておけばよかった。 ・子どもたちの方を見て弾けるようにすること。
・間違ってもすぐ弾けるように練習の時から失敗しても続けて弾くようにしていればよかった。
・制作活動について工程をしっかり把握し、細かなことを決めておけばよかった。 ・ピアノ・弾き歌いの練習
・自分が納得いくまでピアノを練習すること。 ・声掛けのパターンを考えること。
・流れをきちんと把握すること。 ・歌(歌詞)を先に言う練習 ・元気に大きな声で歌う練習
・楽譜を暗譜するほど練習しておくこと。 ・ピアノの練習のみでなく、歌と一緒に弾けるようにすること。
・歌詞をしっかりと覚えたり、弾ける曲を増やしておけばよかったと思う。 ・歌い方やテンポの変え方、レパートリー
・にぎやか、静かといったクラスの様子も考えて、練習することが大切。 ・もっと練習すること。
・保育者がどの曲を弾いて、どのように流れを作っているのかを知り、同じようにできるようにしたかった。
・季節の歌をもう少し練習しておきたかった。 ・季節の曲のレパートリーを増やしておくこと。
・転調させることを練習するべきだった。 ・間違えても止まらずに最後まで弾ききることを習慣づけておくこと。
・ピアノの練習をもっと前から行っておくべきだと思った。 ・ミスをしないように、たくさん練習すること。
・季節のうたを1曲しか準備していなかったため、暗譜で弾ける幼児曲が無かった。 ・緊張に負けない。
・声を出してうたい、ピアノを弾くことを練習しておけば止まらずにできたと思う。 ・制作活動、指導案。
・何回も練習して、楽譜を見なくてもピアノを弾けるようにすること。 ・季節のうたは何が良いのか聞くこと。
・季節に合った歌をいつでも楽譜なしで弾けるようにしておけばよかった。
・子どもたちが好きなアニメやTVの歌を把握しておくこと。 ・自信が持てるまで、とにかく練習をすること。
・楽譜をスケッチブックに貼ったり、ファイルに1枚1枚開けるように整理すればよかった。
・弾き歌いを何度も練習して子どもたちの様子を見れるようにしておくこと。 ・梅雨や夏に向けた歌の練習
・子どもたちと制作活動をした際、もう少しわかりやすい説明を事前に考えておけばよかったと思った。
・季節のうたを歌うだけではなく、少し振付などを加えて子どもたちと楽しむ工夫を考えておいた方が良かった。
・もしもの場合をもっと深く考え準備することが必要だと思った。
・鍵盤を見ずにピアノを弾けるようにすること。 ・静かにしてほしい時、手遊びをたくさん覚えておくこと。
・子どもが興味を持っていそうな曲を事前に聞いて一緒に歌ったり踊ったりすることができたら良かったと思った。
・手作り楽器を行ったので、わかりやすい大きさにして準備しておけば良かった。

【私立子ども園】

・楽譜に集中するのではなく、子ども達の様子を見ながら弾き歌いができるようにすること。
・スムーズに音楽活動に入ることができるよう、事前にピアノの使い方を質問しておく必要があった。
・ヨコミネ式でピアノを練習していたため、ピアノの指導方法や支援の仕方について。
・ピアノを弾く前の対応と後の対応のイメージをもう少し考えておけばよかったと思う。
・子ども達の前で弾ける曲を、もう少し覚えておけばよかった。 ・楽譜の整理とピアノ練習。
・事前に言われなかった季節の歌なども弾き歌いを練習しておけばよかった。 ・弾き歌いの練習。

・ピアノを弾いても弾かなくてもいいと言われていたが、練習をして1曲でも子どもの前で弾いてみればよかった。
・「歌うときの立ち方」など、写真や絵などの視覚的教材を準備しておいて、掲示できるとよかったと思った。
・自己紹介をするカード・絵本・ペープサート・手作りしたもの・手遊びの練習。
・歌詞を先にリードすること。
・梅雨に関する歌を練習しておけばよかった。 ・心配な伴奏を完璧にしておくべきだった。

⑬その他、感じたことや気づいた事があれば自由に書いてください。

【公立幼稚園】

・自分が予想していなかった行動をしたときの対応力が本当に重要になってくると感じた。
・予想していなかったことの対応の仕方を事前に考えておくべきだった。
・周りを見ながら歌えるようにする。 ・子どもは音楽を楽しんでいる。
・ピアノが止まっても子どもは歌うから、メロディーだけでも弾けるようにするのが大切。
・ピアノの音に合わせず、自分のペースで歌っている子どももいることに気付き、焦ってしまった。
・間違えても焦らず、臨機応変に対応することが大切。 ・子どもたちの前で弾くのが緊張した。
・歌詞を覚えてもらうために、どんな曲なのかを説明していた。
・ピアノをもっと強く弾けるようにして、子どもの声に負けないようにしたい。
・「みんな、これできるかな?」と言うと子どもたちは主体的に挑戦しようという気持ちになる。

【公立子ども園】

・担任の先生が元の楽譜をそのまま弾くのではなく、自分でアレンジして弾いていた。 ・楽しかった。
・子どもたちの感情にまずは、共感してあげてから次のことを伝えることで落ち着いて聞き入れてくれること。
・練習では弾き歌いができていても、実践すると止まってしまったり、ピアノから目が外せなくなってしまうこと。
・子どもたちの知っている曲を知るべきだと思った。・歌唱活動では、大きな声で歌っている様子が見られた。
・音楽活動で担任の先生と子どもがピアノとダンスを混ぜて遊ぶところを見たが、リズムに乗って、子どもたちが楽しく元気に取り組んでいる姿を見て、自分でもやってみたいと思った。
・ピアノを間違えても弾き続けていれば子どもたちは歌ってくれるし、自分が思っていたより元気に歌ってくれる。
・ピアノの音で静かになったり、興味をもってきてくれる子どもがいて、ピアノが弾けることは大切だと感じた。
・障がいを持った子どもへの対応に慣れて、仲良くなれたので、子どもとの関わり方を学ぶことができてよかった。
・子どもたちは身体を動かしたり、何かの動物になりきることが好きなため、リトミックがとても盛り上がった。
・3歳児は歌いながら体を動かしたり、表現したりすることが好きだという事がわかった。
・保育者はただ弾き歌いをするのではなく、目線は常に子どもたちの方を確認し、声がけしている様子が見られた。
・年中年長クラスでは、歌詞をピアノの横に貼ることで歌いやすいように工夫されていた。
・歌を歌う時に必ずピアノが必要だと思っていたけれど、手拍子をしたりするだけで楽しく歌えることがわかった。
・音楽用いたとき、子どもたちの行動に変化があり、音楽の力は偉大だと思った。
・歌唱活動の指導方法について。
・新しい曲を歌う際、その曲に合った絵を見せて視覚的に覚えることで曲のイメージをしやすくなったと思った。
・歌うというよりも、リトミックの活動を通して身体を動かすことが好きな子どもが多い印象だと感じた。
・楽しそうに歌ったり、踊りながら歌っている子どももいれば、ただ立っている子どももいた。その子どもたちも楽しく活動に参加できるような工夫が何かできればよいと思った。

【私立幼稚園】

・実習初めは自分のピアノや弾き歌いばかりに意識がいったしまったが、実習をやるにつれ自分のことだけでなく、子どもたちが気持ちよく、達成感を得られるようにすることが大切だと気付いた。
・メロディのみでも弾き続けていると子どもたちは歌うことができていた。
・焦らず、楽しんで活動すること。
・練習では弾けていても、本番子どもたちの前に達夫緊張により間違いが多くなってしまった。
・歌う前にどんな内容であるのかを子どもに知ってもらい、頭の中でイメージできるようにする。
・子どもたちの意識を自分に向けるための声掛けの種類を増やした方が将来に役立つと思った。
・自分が楽しく歌ったりすることで、子どもたちも楽しく歌ってくれたので、自分の表現は大切だと思った。
・子どもの前でピアノを弾くことを慣れておくことが大事。
・子どもたちの自由な発想や表現を大切にしたい。
・子どもを前にすると緊張してしまうので、たくさん練習をしてすらすら弾けるようにすること。
・止まらずに弾けることが大切であり、ピアノを間違えても歌のみで繋げることが大切。
・ピアノを弾いて、間違えたり止まったりしても子どもたちは元気に歌い続けてくれるので、落ち着いて自分も大きな声で歌いながらまた弾き始めることが大事。
・自分の弾く歌で、子どもたちが楽しそうに歌ったり、歌に関する動作をしたりする姿を見られたのが嬉しかった。
・保育者は、ピアノが苦手でも歌声が楽器になるということ。
・ピアノが止まっても子どもは歌い続けてくれる。
・子どもたちの様子を見ながら弾き歌いを行うことが思っていたよりも難しく感じた。
・自分自身が楽しむこと。
・ただ歌を歌うよりも、歌いながら体を動かすことで、子どもたちもより楽しく音楽活動ができると感じた。
・ピアノの設置されている向きが壁で、後ろの方を見ながら弾かなければ子どもの様子が見られなかった。
・歌うのが好きな子が比較的多いと感じた。
・子どもたちは歌詞がわからないと一気に声が小さくなっていった。
・子どもたちに助けられた部分も多かったため、1人で抱え込みすぎないことも大切だと感じた。
・「かえるのがっしょう」を大きな声で楽しく歌ってくれて、歌う時間以外にも歌ってくれたことが嬉しかった。
・実際に子どもたちを前にして保育をしてみて、とても楽しかった。ピアノを間違えても止まらず、元気に歌うことで子どもたちも不安がらずに楽しく歌ってくれた。
・歌の活動じゃなくても、保育者や実習生のピアノの音を聞いて歌を歌う子どもたちが多かった。
・保育者がうまくピアノを弾けなくても、元気よく歌えば子どもたちは元気よく歌ってくれる。
・クラスによってリトミックの時の反応が違く、楽しんでいる園児や少し難しそうにしている園児など様々だった。
・年長クラスでは、先生がわかりやすく書いた楽譜を見てピアノを弾く子どもや友達と一緒にピアノを練習する子どもの姿が見られた。また絵本や話の途中で「かたつむり」や「ももたろう」などの単語が出てくると歌いだす子どもの姿が見られた。
・制作活動を活かし、歌ったり、音を鳴らしたりすることができたのはとても良い活動だったと感じた。
・ピアノを少しミスしても子どもたちは気にせず元気な歌ってくれた。
・ピアノは、あまり緊張せずに弾き、楽しく引いた方がよい。
・間違えても子どもたちが盛り上げてくれた。
・ピアノだけでなくに歌も歌えるように、もっと練習を重ねたかった。音楽活動が大切だと思った。
・ピアノだけではなく、木琴・鉄琴もできるようにしておくとうれしいと感じた。
・子どもたちと一緒に歌う時には、歌詞の部分部分を強調し、支援しながら歌うことが重要であると思う。
・子どもたちの前で弾くのと、自分で弾くのでは感じ方全然違ったため、たくさん子どもたちの前でピアノを弾いて慣れることはとても大切だと思った。
・子どもたちに考えを求め、視野を広げる大切さ。・間違っても歌もピアノも止めないことが大切。
・ピアノを弾くことで、子どもたちが楽しく過ごすことができていた。
・保育者としては、ピアノを弾くことは「嫌」と感じる人もいるが、子どもにとっては大切な時間であると感じた。
・年長児は大太鼓や小太鼓など、小打楽器以外も使用していたが、こどもそれぞれのできるこ（リズム感や体の大きさ）によって子どもが担当する楽器をさりげなく保育者が選ぶようにしていた。
・子どもにとって、音楽は心が豊かになるので取り入れるべきだと思う。
・子どもの人数がとても多かったため、活動をする前にまとめることが難しかった。

【私立子ども園】

・同じ曲でも、先生によって伴奏の仕方が違うと思った。 ・子ども達と楽しく音楽にふれること。
・弾き歌いを行った際に、無理に歌声を大きくするのではなく、ピアノの音を小さくすると良いと学んだ。
・保育者が楽しまないと、子どもも楽しむことができない。思い切り行うことが大切である。
・保育者は子どもに「何がいい?」と聞いて、子どものリクエストした曲を即興で弾いていた。
・保育者は、子ども達を退屈させないように、曲のスピードを変化させたり、問いかけたりと工夫していた。
・子ども達のモチベーションを上げるためにピアノを使うととても良いことがわかった。
・楽しくなるような声掛け。
・間違えても止まらず、子ども達が歌詞を覚えきれていない時は、口に出して伝えながら歌うといいと思った。
・「ピアノが苦手なら違うアプローチの仕方でも子どもに歌うことの楽しさを伝えられるようにしたい」と教えていただいたため、自分なりの音楽活動の方法を学生のうちにたくさん考えていきたいと思う。
・子ども達と楽しく音楽にふれることはとても大切だと思った。 ・先生の動きは、一日目に細かくメモをする。
・保育者はたくさん練習しておくことで、子ども達と歌うとき、楽しく余裕をもって行えると感じた。
・どんな気持ち、表現で歌ってほしいか伝えること、1つ1つの物事を声かけによって繋げていくことを学んだ。
・5歳児は、自分が想像していたよりも新しい曲の歌詞を覚えるのが早いことに気がつき、驚いた。
・1人で練習するときにも、歌ったり周りを見ながらピアノを弾く練習をすると、現場でも弾けると感じた。
・ピアノが弾けなくても、たくさん練習して堂々と弾くこと。 ・歌詞をしっかりと伝えること。
・1人が楽しそうにしていると、周囲の子どもまで興味をもって取り組んでいた。

6. 考察・まとめ

アンケート集計結果から、実習園の形態に注目しながら考察をすすめていく。まず、公立・私立幼稚園・こども園の全ての園に共通で、取り組んだ音楽活動で一番多かったのは、歌唱活動で、その次にリズム遊びと楽器演奏と続いた。

ピアノを弾く機会があったかの問いに関して、私立幼稚園・こども園では、90%以上の学生がピアノを弾く機会があったことがわかったが、公立幼稚園・こども園では50～75%となった。事前に練習してくるよう指定された曲目があったかの問いについても、私立幼稚園・こども園では80%以上だったが、公立幼稚園・こども園では、50%となった。

また、幼稚園で事前に練習してくるよう指定された曲は、公立・私立関係なく、幼稚園・こども園の全てに生活のうたが共通していることがわかる。その他、季節のうたとして、梅雨に関連した「かえるのうた」や「あめふりくまのこ」などの曲や、時の記念日が近いことから「とけいのうた」「大きな古時計」、実習期間が父の日も近いため、「えらいソパ」や「すてきなソパ」など、イベントに合わせた曲を歌っていることが読み取れる。キリスト教や仏教など特色のある園においては、「讃美歌」等の宗教曲にも取り組んでいることがわかった。

学生の話によると、これらの事前に練習してくるよう指定された曲の中で、楽譜が配布された園と自分で準備するように指示があった園の2通りあったことが見えてきた。楽譜の配布があった園で、5曲以上楽譜を渡され、必死に練習をして実習を迎えたが、実習では1回も弾けなかったとがっかりして帰ってきた学生や、楽譜の配布が無かったため、自分で準備をした

が、普段子どもたちが歌っている調と違いがあり、子どもたちが歌えずに終わってしまった学生などがいた。楽譜配布の有無に違いはあっても、多くの学生は実習に向けて良い準備をしようと、それぞれピアノの練習に取り組むが、学生にとっては『ピアノを弾く』ということに大きな負担とプレッシャーがかかっていることがわかった。

自由記述の「音楽活動をするために必要だと思う事はどんなことですか？」の問いについて、「保育者(実習生)も一緒に楽しむこと」ということが多く挙げられていた。また、「子どもたちと一緒に楽しめる環境づくり」や「子どもと一緒に歌う」「子どもの様子を見ながら、子どもに合わせる」など、実習で子どもたちを前にすることで、自分ではなく、子どもを中心に考えられるようになっているようだ。また「ピアノの練習」や「事前準備」「弾き歌い」など技術的にもっと力をつけたいことも挙げられた。更に、技術面に加えて「曲に合った表情や雰囲気に合わせて伴奏を弾く」「歌い終えた後の子どもたちへのフィードバック」「子どもの意欲・興味を引き出すような活動」を目指したい、と一歩先を考えた内容も書かれていた。

「音楽活動に関して困ったこと」については、「子どもに指示が伝わらなかった」「子どもがついてきてくれなかった」など子どもたちを前にすると、想定外なこともあり、想像と違う事でうまくいかなかった反省もあった。その中でも1番多かったのは、「ピアノ」についてだった。「途中で止まってしまった」「子どもの様子を見ながら弾くことができなかった」「間違えても弾き続けることができなかった」「途中から弾きなおすことができなかった」など、練習ではうまくいっていたことが緊張からできなくなってしまったことや子どもたちの想定外の反応があり、動揺してしまったことなどが読み取れた。

「実習前に準備しておけば良かったと思う事はどんなことですか？」については、「事前準備」「練習」のほかに、季節のうたや子どもたちが好きな歌、一緒に楽しめる音楽の「レパートリーを増やす」ことが多く挙げられていた。手遊びやペープサート、エプロンシアター・パネルシアターなど、隙間時間にできることを用意しておけばよかったなど、実習を経験して気づいたことが多くあったようだ。

最後の「その他、感じたことや気づいたことがあれば自由に書いてください。」では、予想していなかったときの対応力や臨機応変な対応が求められている事、自分の声掛けで子どもたちに助けてもらえたこと、「ピアノがないといけなと思っていましたが、手拍子をするだけで楽しく歌えるということに気づいた」「ピアノは苦手でも歌声が楽器になるという事」「保育者が元気に歌えば、子どもたちも元気に歌ってくれる」など、前向きな気づきが多かった。

様々な意見が寄せられていたが、実習でしか気づけない事、感じられないことが多く、学生にとっては学びの深い実習だったことがアンケートから読み取ることができた。

7. 本学に届いている就職試験(ピアノ実技)について

現時点(8月下旬)で、本学に届いている幼稚園や保育所に関する求人は、48件だった。その中で、就職試験の内容で「ピアノ」や「実技」と書いてある求人は22件、課題曲があるのは22件のうち2件だけだった。その他は、自由曲と記述してあったが、弾き歌いと明記されているのはなかった。

毎年、学生は自分が希望する園の就職試験について調査し、ピアノ実技と書いてある園に問い合わせをすると、「弾き歌い」での試験と言われるケースの方が多い。「保育表現技術 器楽Ⅱ」の授業では「弾き歌い」に取り組んでいるが、選択授業となっており、2年生になるとピアノから離れてしまう学生もいる。就職試験前に慌てることがないように、就職試験に関する実技についても学生と共有し、試験だけではなく将来の現場で生きていくような情報や内容を検討していくことも必要であると考え。

8. おわりに

幼児教育の音楽活動にはピアノが多く用いられ、アンケートの結果からピアノを弾くことへの不安や負担を感じている学生が多いため、楽しんで音楽活動をしている学生は少ないのではないかと推察する。子どもたちと一緒に楽しむ時間となるような工夫をして、音楽活動が「遊び」の感覚で、音楽と触れ合う時間になってほしいが、これまで当たり前保育の現場で活用されてきたピアノから簡単に離れることは難しいだろう。カリキュラムにもピアノの授業があり、実習でもピアノに取り組まなければならない現実はあるが、苦手意識の強い学生が多いことから、音楽活動自体に不安や心配事にならないような考えも必要ではないかと感じる。何人かの学生も自由記述に記していたが、「ピアノが苦手だから手拍子をしながら歌を歌った」「自分の得意な楽器を弾いた」など、違う選択肢もあるという臨機応変な対応が必要である、実習先の先生から「ピアノが苦手なら違うアプローチの仕方で子どもに歌う楽しさを伝えられるようにしたい」と言われた学生もいた。

日本の幼児教育の現場では、前述したとおり1日の流れの中でピアノは必要不可欠となっている場面も多い。そのため、主体性や自主性、モチベーション教育を推奨する海外にも目を向けて、どんな音楽教育がなされているのか研究し、多様な音楽表現について考え、教育現場での音楽活動の可能性を広げていくことを今後の課題とする。

また、学生のうちに身につけられるピアノ技術については、最低限力がつくような指導を続けていくことは前提として、「子どもの豊かな感性と表現を養うことができるような、ピアノを使った音楽遊び、そして歌唱伴奏としてだけではなく、楽しくピアノを活用できる方法が求められているのではないだろうか」と吉田(2018)³が述べているように、苦しいピアノではなく、「遊び」の感覚で楽しくピアノを用いる方法を学生に伝えていくことも、今後取り組んでいきたい。

就職試験には、少なくなったとはいえ、求人のある半数の園でピアノの試験が組み込まれていることがわかった。本研究では、保育者から直接実技試験について話を伺う機会が設けられなかったため、試験ではどのような点が重要となっているのか、今後保育者へのインタビューやアンケート等を実施し、考察・検討していく。弾き歌いや音楽表現の授業時間が有意義で、将来の保育現場で活かせるような内容になるよう再考していきたい。

表 1

<p>■研究 1 日本の幼稚園での音楽活動あり方に関する調査 ■対象：幼稚園実習を経験した学生 【幼稚園実習 音楽活動についての振り返りアンケート】 本アンケートは、成績評価とは無関係であり、回答者の個人を特定しないため、回答の有無によって不利益を被ることはありません。本アンケート結果は、教育・研究の目的以外には使用いたしません。</p> <p>① 実習園の形態（設置） 1. 公立園 2. 私立園</p> <p>② 実習園の形態（種類） 1. 幼稚園 2. 認定こども園</p> <p>③ 実習園の形態（園児数） 1. 50名未満 2. 50名から100名 3. 100名～150名 4. 151名以上</p> <p>④ 実習で行った音楽活動について 子どもたちとどんな音楽活動を行いましたか？ 番号に○をつけてください。（複数回答可） 1. 歌唱活動 2. リズム遊び 3. 楽器演奏 4. 手作り楽器 5. リズムミックス 6. その他 7. 音楽活動を行わなかった</p> <p>⑤ 実習期間中、子どもたちの前でピアノを弾く機会ありましたか？ はい ・ いいえ</p> <p>⑥ 「はい」と答え方への質問です。幼稚園実習中、子どもたちの前で何回ピアノを弾きましたか？</p> <p>⑦ 事前にピアノを練習しておくように指定された曲目はありましたか？ はい ・ いいえ 「はい」と回答した人 その曲目はどんなものでしたか？</p>	<p>⑧ 「はい」の人で、楽譜を事前に渡されていた場合は、枚数と曲目を教えてください。（複数回答可） 枚 曲目：</p> <p>⑨ 音楽活動で特に楽しいと感じたことはどんなことでしたか？ 番号に○をつけてください。（複数回答可） 1. ピアノを弾くこと 2. 歌を歌う事 3. 子どもの様子を見ながらピアノを弾くこと 4. 弾き歌い 5. 間違えないようにピアノを弾くこと 6. 音楽表現 7. 楽器演奏 8. 年齢に合った選曲 9. その他（ ） ※音楽活動をするために必要だと思う事はどんなことですか？</p> <p>⑩音楽活動に関して困ったことはどんなことですか？</p> <p>⑪実習前に準備しておけばよかったと思う事はどんなことですか？</p> <p>⑫その他、感じたことや気づいたことがあれば自由に書いてください。</p> <p style="text-align: right;">ご協力ありがとうございました。</p>
--	--

引用・参考文献

- ¹ 大野 恵美 保育士養成課程における実習での音楽実技についての考察 湘北紀要 第35号 2014
- ² 深谷悠里絵 「保育表現技術 器楽Ⅱ」実習での音楽活動から考えるピアノ演奏技術のあり方～聞き取り調査を踏まえて～ 第58集 2021
- ³ 吉田 めぐ 子どもと楽しく実践できる音楽遊びー表現を広げるピアノ遊びの可能性ー 関東短期大学紀要 第60集 p.20～29 2018

- ・川畑尚子 他 表現の基礎となるピアノ授業についてー近畿圏の保育者養成校シラバスから本学のピアノ授業を考えるー 大阪キリスト教短期大学紀要 巻57, p.146-159, 2017
- ・尾崎公彦 他 幼稚園教育要領改訂に伴う保育内容領域「表現」に求められる授業内容に関する考察ー新しい教職課程のモデルカリキュラムとの比較を通してー 川崎医療短期大学紀要 38号 p.55～61 2018

- ・長谷秀揮 保育内容領域「表現」と乳幼児の表現遊びについての一考察―「感性」と「表現」に着目して―
四條畷学園短期大学紀要 巻55 p.1-9, 2022
- ・吉田めぐ 保育における豊かな創造力と表現を育む音楽活動―総合的な表現活動の実践を通して―
関東短期大学紀要 第61集 pp.9～20 2019
- ・中川華那 音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究―人と関わる力を育むために―
岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号 p.73～82 2015
- ・及川留美 保育施設における遊びの特性から「幼児教育」の基本について考える―子どもの遊びを支える役割としての保育者―
東京未来大学保育・教職センター紀要 第5号 p.29～36 2018
- ・鈴木裕子 幼児の感性を具体化する試み 保育学研究 第47巻第2号 p.28-29 2009
- ・渡邊雄介他 保育内容「音楽表現」声から音楽へ 響きあう心と身体 福村出版 2022
- ・中野由紀子他 幼稚園教諭・保育士養成課程 音楽表現 そのまま使える基礎と実践 共同音楽出版社 2021
- ・須崎朝子・林加奈他 幼稚園・保育園で人気の創造性を育む音楽あそび・表現あそび 毎日の活動から発表会まで 音楽之友社 2021
- ・駒久美子・味府美香 コンパス音楽表現 建帛社 2020
- ・梅澤実・森本昭宏 保育・教育のための実践事例で理解する「表現」―幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿― 創成社 2020

附記

本研究は、以下の研究助成を得て実施している。

科学研究費助成事業 基盤研究(C) (一般)課題番号22K02478

研究課題名 北欧4か国の事例を基にした幼児期の音楽実践プログラム開発の試み

打楽器奏者による演奏と作曲の一考察

— 黎明期の朝吹英一氏の足跡を辿って —

Consideration of performance and composition by percussionist

— About the pioneer, Eyichi Asabuki —

會 田 瑞 樹

Mizuki Aita

Eyichi Asabuki (1909-1993), a xylophone player and businessman who supported the dawn of percussion music in Japan, imported the latest xylophone and vibraphone from America and used them extensively in his own performances and compositions, building on their foundation. While taking into account the comparison with another living xylophone player, Yoichi Hiraoka (1907-1981), and Japan's earliest xylophone instruction book, "Xylophone Instruction Book," published in 1927, will introduce a new way of viewing his music.

はじめに

打楽器音楽の歴史は20世紀に入ってから急速に拡大した。技術革新から楽器そのものの調律や性能が安定し、音楽上の可能性が高まったからである。日本の打楽器音楽の黎明期を支えた木琴奏者で実業家の朝吹英一(1909-1993)は、アメリカより最新の木琴や鉄琴を輸入し、自らの演奏と作曲に幅広く用いてその礎を築いた。しかしながら朝吹自身の作曲作品についての論考や、朝吹が生きた時代、とりわけ最も音楽家として充実した活動を行なった30代については、時代とその音楽を両面から検討する論考は皆無であった。本論は、朝吹の生きた若かりし時代(1909年から1944年4月までに的を絞る)とその時代に作曲された作品や彼の音楽論を通して音楽の持つ時代性と役割、同時代を生きたもう一人の木琴奏者平岡養一(1907-1981)や昭和2年(1927)に出版された日本で最初期の木琴教則本「シロホン教則本」との対比を踏まえながら、氏の音楽観を新たな視点から読み解き、打楽器音楽の発展に対する一考察を論じるものである。

1. 「現代」の定義

(1). 音楽の持つ「目的」の現出

デジタル大辞泉によれば「現代」という単語は以下の意味を持つ。

1. 現在の時代。今の世。当世。「一社会」
2. 歴史上の時代区分の一。ふつう、日本史では第二次大戦後の時代、世界史では第一次大

戦後の時代をさす。

以上を踏まえて「現代音楽」を考える時、二つの世界大戦は大きな節目となっている。そこから生じた様々な出来事は音楽家にとっても大小様々に影響を及ぼしている。戦争の影響における「編成規模の縮小」であったり、何らかの公演実現のための「演奏目的」が生じ、作曲を手掛け演奏するというケースが増えた時代であると筆者は考える。

(2). 打楽器の場合

打楽器音楽においてはこのケースが幸いし、「打楽器独奏」が誕生した。1918年、イゴール・ストラヴィンスキー(1882-1971)《兵士の物語》は、ロシア革命の煽りを受けたストラヴィンスキーの困窮からの脱却と、第一次世界大戦中のため大規模な演奏会が開催できないことを逆手に取り、少ない人数で演奏効果の高いものを作曲するきっかけとなった。この作品における打楽器の用法は、終幕における悪魔の行進の場面で膜質打楽器のみの演奏となり、独奏打楽器の新たな可能性を切り開いた。

(3). 音楽と階級

西洋クラシック音楽とは「階級」から成り立っているものであると筆者は考える。ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685-1750)の一週間は週末に奏されるミサ曲の作曲にその大半が費やされ夥しい数の作品が残された。これは「教会」という権力への奉仕と捉えることができる。ヨーゼフ・ハイドン(1732-1809)はエステルハージ家に仕え、毎回の晩餐のための新作を書き下ろした。それが104曲からなる交響曲の一端を担っている。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)もまた、貴族からの支援なしに作品の発表はあり得なかった。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)が、「芸術家」を最初に名乗った作曲家として知られているが、その支援はやはり上流階級層に頼る他なかった。日本国内において西洋音楽が流入したのは明治時代に入ってからである。そしてそれらは上流階級層の嗜みとして始まった。音楽とは「階級」との関わり合いから生まれているのである。

(4). 20世紀の音楽の「目的」

20世紀に入ってからには貴族の衰退に伴い、演奏家や作曲家という芸術家個人の意志が尊重されることが増えたと筆者は考える。様々な団体・個人による委嘱、もしくは作曲家自らが作曲家グループを組織し、仲間内で集合し、聴衆を集めて発表活動を行うなど、「音楽」は個人の自由意志や「目的」を持って作られることが前時代より頻繁になった。そのような独自で、積極的な活動が音楽の新規性を切り開いていったと言えるだろう。だがその一方で音楽の「教育」を受けられるものは、中産階級以上の裕福な者に限定されていたことも指摘できる。このように20世紀に入ってもなお、「階級」による支配は、継続されていたとも言える。

2. 日本における歴史の捉え方に対する一考察

(1). 朝吹英一と高橋和巳の言葉から

2024年現在、戦後から79年の月日が流れ、証言者はますます減少の一途を辿る。英一は自らの回想録『ローズウッド60年』のあとがきに次のような言葉を残している。

「木琴をはじめてから六十年、私は去年の暮で七十才になりました。その七十余年の中程には、戦争といういわば巨大な壁があって、前後を大きく隔てています。前半の三十年近くは、壁の向こう側で、今では遠い過去として、霧の中にあります。その頃のことを知る人も段々少なくなって、今に何もわからなくなってしまうことでしょう。」ⁱ

また小説家高橋和巳(1931-1971)の『日本の悪霊』から次の一節も引用したい。

「世の中の価値観が、時代の変遷につれて移り変るということは知っていても、短い一生の間にあまりにめまぐるしく基準がかわるのに立ち会うのは愉快的なことじゃないね」ⁱⁱ

英一や平岡養一はまさにこのような時代を生き抜いてきた世代と言って差し支えないだろう。西洋の気風に憧れ自由闊達な青年期から、戦争の不安と軍部が台頭し挙国一致の名の下に民衆を支配した時代、終戦ののちにまた新たな価値観やしがらみが生まれていく時代。この時代を渡り合ったものにしかわからない苦悩を本論では解き明かしたいと筆者は意図し、徹底して残存する文献、当時執筆された資料を読み込むことを心がけた。よって本論では朝吹英一の黎明期を1944年4月までと定義し、その時代に書かれた論考、新聞、作品を列挙し分析することを方法とした。

(2). 本稿の目的と主張

筆者は戦前期にかけての日本人の思考の一端が失われつつあることを非常に危惧している。音楽学者秋山邦晴(1929-1996)は「昭和の作曲家たち ―太平洋戦争と音楽―」(2003)において、戦後日本の作曲家たちが、戦前期の一連の作曲家たちを十把一からげに「旧態依然のもの」とひとくくりにし、一切省みることのない姿勢に強い警鐘を鳴らしている。筆者も同意見であり、時代を顧みずに、自分自身の用いる楽器がどのような歴史を経て、手元にやってきているのかを知ろうともしない昨今の風潮に強く疑問を呈する。これは音楽に限ったことではなく、日本社会全体を覆う問題であり、ひたすら新規性を求め続け、先人の声を省みることのなかった世代に対して、大いに反省を促したいという強い批判を込めて研究を行った。だが筆者は戦前を賛美したいのではないことも付記したい。太平洋戦争突入については満州事変を皮切りに軍部の独走や当時の権力者の思惑などの様々な結果が重なり合って勃発した事象であり、第一次世界大戦以降の日本国内の資料を読み解けば、文化の面においてアメリカはじめ連合国側と発展的な友好関係を築いていたことは自明である。なにより、英一や平岡が用いる木琴、鉄琴はDeagan社、アメリカ・シカゴ製造の舶来ものである。以上を踏まえ、本論を展開する。

3. 打楽器の製造技術の革新

(1). Deagan社について

20世紀に入ってから、打楽器の製造技術は急激に進歩した。中でもJohn Calhoun Deagan (ジョン・カルホーン・ディーガン/1853-1934) 率いるDeagan社は調律の優れたグロッケンシュピールの製造に成功しアメリカの楽器製造会社として君臨した。好景気も手伝って、木琴や鉄琴など様々な打楽器製造を意欲的に行い、その性能は遠く離れた日本でも注目される。Deagan社の音楽の新規性を示す一例として、当時若手作曲家として将来を嘱望されていたPercy Grainger (パーシー・グレインジャー /1882-1961) に新作を委嘱したことが挙げられる。さらに1928年、Walt Disney (ウォルト・ディズニー /1901-1966) が手がけた最初期のアニメ『Steamboat Willie (蒸気船ウィリー)』の中でGeorge Hamilton Green (ジョージ・ハミルトン・グリーン/1893-1970) による Deagan社製造の木琴演奏による『Turkey in the Straw』(日本ではオクラホマ・ミキサーという曲名でもおなじみ) が効果的に用いられた。グリーンはアメリカにおける木琴演奏のパイオニア的存在であり、1924年製造まもないヴィブラフォンを用いた演奏『When it's love-time in Hawaii』がアメリカ議会図書館に所蔵されている。ⁱⁱⁱ

(2). 日本での先駆的な使用の一例

日本で初めてヴィブラフォンを輸入した記録は、1929年に遡る。大阪を拠点に活動をしていた女性だけの踊り子集団「河合ダンス・バレエ團」が見世物の一つとして「シロフォン」を取り入れ名物となっていた。1929年2月発行の「帝劇」によると「シロフォン獨奏は毎回呼物のひとつとしてプログラムを飾ってゐましたが、今回は更に新楽器バイブラフォンと一緒に軽快な流行曲を演奏致します。」^{iv} との記述がある。だがヴィブラフォンの使用はこの一回に終わったようで、翌年からはシロフォンとサクソなどの組み合わせで興行を行なっている。シロフォンについては「アメリカのデイガン會社の、最も優秀なもの」^v を使っていると紹介し、河合菊彌、せき子(両者生没年不詳)がその演奏を担当した。

4. 朝吹英一の軌跡

(1). 木琴との出会い

朝吹英一は1909年(明治42年)12月22日東京市京橋区築地明石町四十二番地(現在の中央区明石町)生まれ。父・常吉(1877-1955)は千代田組創設者、三越社長を歴任する財界の有力者であり、恵まれた環境の中で成長した。幼少期より様々な習い事に精通し、中でも中学時代に木琴演奏のレコードに出会い、直ちに木琴が買い与えられると独力で学び、その技術を確かなものとした。当時の打楽器奏者は陸軍戸山学校出身の小森宗太郎(1900-1975) や星出義男(1888-1971) といった軍楽隊の経験を踏まえてオーケストラなどでの演奏業務にもあたる者が多く、小森はロシア留学などを通し音楽に精通し、『打楽器教則本』(共益商社書店,1933(昭和8年))

をはじめ、数多くの教則本を発表するなどして、現在の打楽器奏者への礎を築いた。小森が1949年(昭和24年)8月に教育教材用として執筆した『りずむがっきれんしゅうの本』(音楽之友社)は歩き方や声の出し方から詳細に解説が始まり、リズムを多面的に捉える。幼児リズム教育の先例であり、弟子である有賀誠門(b.1937)がその後提唱した「上の発想 下の発想」の萌芽を示すものであることも大いに注目すべき点である。

(2). 初のラジオ出演

英一は1927年(昭和2年)6月11日、陸軍近衛師団軍楽隊の打楽器奏者である星出義男の推薦を受け、中央放送局(現在のNHK)への出演を行なった。

「けふのコドモの時間 愉快的曲の木琴獨奏 朝吹さんの令息の得意の木琴 今晚子供の時間に木琴獨奏をする英一さんは朝吹常吉氏の令息で慶應大学経済部予科二年生です、自分では二年ほどほんのいたづらに稽古したに過ぎないで放送するのはなんとなく気が引けますと謙遜してゐる。木琴の美しい音色が好きで趣味としてひとり楽しんでゐるのだそうです。曲目 第一のマーチロレーヌは佛ガンヌの作曲でロレーヌ州の民謡が出てくる行進曲 第二の幻想曲はモツキングバードを主題としてストツプが特に木琴のため作曲したもの。第三はミーチャム作曲のアメリカンパトロール軍隊がだんだんと遠くから勇ましく近づいて来るそしてまん中でアメリカンレット・ホワイトアンド・ブルーデクシードそれも済むとまた遠くに去つて仕舞つてヤンキー・ヅールの歌で終る 第四キスメツトこれはどなたもご存知に相違ない東洋風の間行進曲、マーキーの作曲 最後に軍艦行進曲。何も子供さんのお喜びになる曲ばかり」^{vi}

当時18歳であった英一の謙遜する姿がいじらしい。演目も世相を映し出す軍艦行進曲をはじめ、その一方アメリカやフランス由来の作品も入り、国際色にあふれるものばかりで、この数十年後に敵国同士になるとは俄かに信じがたいものである。

(3). 常吉の支援とDeaganアーティスツ・スペシャル・ザイロフォンNo.264

さらに絶大だったのは父・常吉の支援だった。1927年(昭和2年)9月9日、二度目のNHK出演直前に、先述のDeagan社製造「アーティスツ・スペシャル・ザイロフォン No.264」が到着。常吉がアメリカの三井物産に買付けを頼み、たまたま帰国するテナー歌手、藤原義江(1898-1976)の荷物として持ち帰らせたという。当時の価格は300ドル。これに運送費や関税も加算されたと思われる。1929年アメリカのGE社平均年収は1855ドル^{vii}であり、アメリカ国内で購入するとしても数ヶ月分の生活費に匹敵する巨額な金額であるが、このような常吉の支援があったらからこそ英一は充実した音楽活動を送ることができた。またこの日の演目は「木琴獨奏「アメリカ民謡曲集」「金婚式」圓舞曲「女学生」朝吹英一、(ピアノ伴奏)阿部萬次郎(1898-1954)(打楽器)星出義男」^{viii}先述の推薦者である星出も出演し、一層豊かな演奏を披露したことが想像できる。

通崎睦美(b.1967)の平岡研究によれば、この木琴を一目見た平岡は羨望の眼差しでその楽器を見つめ、自らを奮起したと伝えている。その後平岡の両親が家に代々伝わる笛と鼓を処分し

て、「ディーガン・アーティスト・スペシャル No.266」を購入し彼に捧げたという。^{ix} 平岡もまた、徳川家の家老として長く仕えた先祖を持つ名家の出身であることも注目すべき点である。

(4). はじめての作曲と自らの手による曲目解説

1929年、英一は作曲を試みる。当時木琴のレパートリーは数少なく、演奏するにあたって、ヴァイオリンやピアノの楽譜を自ら編曲して演奏しなければならなかった。その際に写譜は必須であり、その作業が彼を作曲へと駆り立てたのだという。完成した作品は《軽井澤の美人 op.1》と名付けられ、1929年2月の完成後、新緑の季節に自らの手で初演を行なった。その当時のラジオ欄には英一自らが曲目解説を執筆しており、以下にその全文を引用する。

「若葉に木だまして 木琴は鳴り出す 木琴 朝吹英一 ピアノ伴奏 後藤奈賀夫 1、序曲陽気な盗賊…スッペ作曲 スッペはイタリー生まれの喜歌劇作曲家で、多数の軽い親しみ易い曲を作っています。之も其内の一つで、荘厳な調子で始まり、中頃で八分の六拍子の美しい旋律が二度現れ、最後に至ると急速調に移り熱狂裡に終わります。まるでロビンフッドを思はせます。 2、幻想曲アメリカ歌謡…朝吹英一編曲 アメリカの数多くの歌の中の粋を集めたもので、前半には国歌「星の輝く旗」を始めとして主に愛国歌、軍歌の変奏曲を列ね、中頃で調子が変わって民謡がたくさん現れます。最後は有名なデイクシーの歌の展開で愉快に結びます。

3、円舞曲エスパナ…ヴァルドトイフェル作曲 ヴァルドトイフェルはスペイン宮廷付音楽家でシトラウスに次いでワルツ作曲家の大立者です。「エスパナ」とはスペインの意味で、シャブリエと言ふフランスの作曲家が作った「西城牙狂想曲」の主題をとってワルドトイフェルがワルツにしたものです。スペイン独特の気分が一貫して流れている華やかな舞曲で、彼の代表的作品の一つです。 4、行進曲軽井澤の美人…朝吹英一作曲 軽快な調子で始まり、避暑地の有様を思はせる様な華やかな旋律が済むと、トリオに入り調子は一変してなだらかな優美なメロディーが流れます。中間に華麗な部分が十六小節あつて後、再び前のメロディーが今度は強調され、木琴は變へ手を弾きます。トリオが済むと型の如く曲の最初に環へり、終にコダ入って快活に終わります。 5、序曲輕騎兵…スッペ作曲 之はさきに述べましたスッペの傑作として有名な曲で、壮大なる氣分の導入部の後、輕快極まりなき主題が奏せられ、中間に至ってカデンツァの後、アンダンテの落付いた而も力強い部分がしばらく続き、突如前の快活な主題に返り徐々に速度を増し、勇ましい輕騎兵隊の突撃を思わせる様に進み、雄大に終を結びます(朝吹英一解説)」^x

演奏家自らが作品についてわかりやすく躍動感溢れる筆致で記しており、20歳を迎えた英一の音楽への情熱が感じられる。同時期の平岡はアメリカへの挑戦が始まった頃である。1929年10月、英一は平岡の渡米への饞に《故郷の空変奏曲 op.5》を献呈している。^{xi} その後平岡はアメリカでオーディション三昧の生活を送っていた。彼らの年齢差は二つ。両者は同じ楽器を用いながらも日米の地で、それぞれの道を歩んだ。1930年、英一は常吉の勧めでハワイやアメリカ

への遊学を行った。この滞在を通して、多くの最新楽譜の入手や音楽家との邂逅も実現し、その日々を心の底から楽しんだという。

(5). 苦悩

だが、英一の苦悩はここから始まったといっても過言ではない。その後、彼は数多くのラジオ放送をこなすようになり、プロフェッショナルの音楽家として模索できないか思案するようにもなる。だが大学卒業直前、常吉に突然「音楽は趣味にやれば結構だ。」^{xii}と告げられたと云う。長男としての期待は高いものであり、千代田組創設者の常吉にとっては大切な跡取り息子である英一には継承させなければならないものもあると考えていたであろう。1933年(昭和8年)3月慶應義塾大学卒業、同年4月三井信託銀行に入行。ラジオ放送は1933年4月3日、11月22日に出演後、約1年半出演から遠ざかる。作曲に関しても1932年9月に完成したとされる《ソナタへ長調op.11》以降、3年間の沈黙が続く。

1933年11月からの英一の1年半を想像するに、社会人として奔走する英一の姿が筆者は目に浮かぶ。また「勤めはイヤだった」^{xiii}と正直に吐露しており、1929年の熱量たっぷりの曲目解説や軽やかな作曲作品の数々を思い起こしても、彼自身が音楽に寄せる思いは並々ならぬものであったことは疑いようもない。もしくは社会人として生き、このまま音楽と決別することも頭をよぎっていたかもしれない。

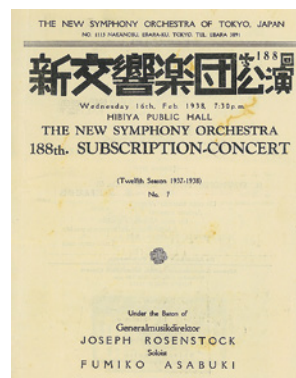
英一にとって、何らかの大きなきっかけが、必要だったはずである。

5. 朝吹文子との音楽活動

(1). 音楽家としての復帰

社会人として奔走していた英一は1935年4月、突如演奏の現場に復帰する。

「午後六時の子供の時間 新婚後初放送 朝吹英一さん木琴獨奏 約一年振りで軽快な木琴獨奏する朝吹英一さんは実業家朝吹常吉さんの愛息で、木琴をはじめたのは慶応二年の時でした。五年前アメリカへ音楽研究に行ったこともあって、AKの子供の時間ではお馴染みです。ピアノ伴奏の文子さんは、英一さんの奥さんで昨年四月東音器楽科出身のピアニスト、新婚後初の放送です。1. 行進曲「エルドラード」ハーバート作曲 2. 円舞曲「スケートをする人々」ヴァルトトイフェル作曲 3. ガヴォット舞曲 モーツァルト作曲 4. 喜歌劇「天国と地獄」序曲 オットフェンバック作曲」^{xiv}



(2). ピアニスト・朝吹文子(あさぶきふみこ)について

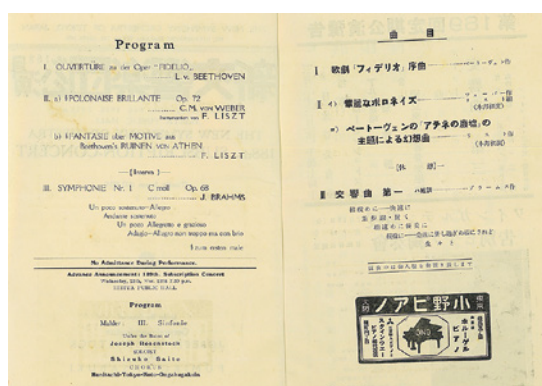
朝吹文子(旧姓：池田)は1912年(大正元年)11月17日生まれ。^{xv} 御木本真珠店総支配人である

父：池田嘉吉(1876-1956)、御木本真珠創設者である御木本幸吉(1858-1954)を父に持つ母：容子^{xvi}(1886-?)との間に三女として生を受け、御茶ノ水高等女学校を経て東京音楽学校を卒業。川上きよ(1898-1997)、レオニード・コハンスキー(1893-1980)、レオ・シロタ(1885-1965)、ジョセフ・ローゼンシュトック(1895-1985)に師事した。文子が朝吹関連の文献に初登場するのが、駐日アメリカ大使であったジョゼフ・C・グルー(1880-1965)による著作『滞日十年』の中の「日本の家族のター音楽つき」と題された一文「1934年1月10日 朝吹家で晩食。(中略)食事が終わると令息の一人がシロフォンをやり、池田フミ子嬢がピアノで伴奏した。」^{xvii}にはじまる。

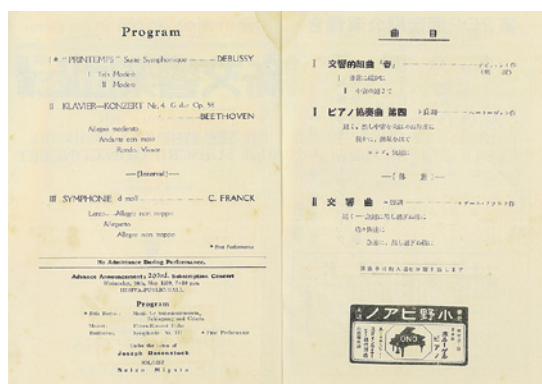
その後文子は英一のラジオ出演の際には度々ピアニストとして共演を行うだけでなく、自らも独奏者としてリサイタルを行い、1938年2月16日、新交響楽団第188回公演(日比谷公会堂)において、ジョセフ・ローゼンシュトック指揮のもと、ウェーバー作曲(リスト編曲)《華麗なポロネイズ》リスト作曲《ベートーヴェンの「アテネの廃墟」の主題による幻想曲》にソリストとして出演。両作品は本邦初演であった。月刊楽譜1938年4月号に掲載された野村光一(1895-1988)による文子の演奏批評は次の通り。

「新響公演(十六日)で豫て噂の高い洋琴家朝吹文子夫人がデビューした。噂に違はず、彼女の演奏は燦然たるものだった。邦人女流洋琴家中稀に見るヴィルトゥオーゾ型演奏家の手練を發揮して、楽器を制御し、音量と速度に飛躍的なものを見せた。」^{xviii}

文子は翌年1939年(昭和14年)4月19日新交響楽団第202回公演(日比谷公会堂)において、ローゼンシュトック指揮のもと、ベートーヴェン作曲《ピアノ協奏曲第四番》のソリストとして出演している。英一と文子の共演は1935年を皮切りに盛んに行われた。英一はこの時期から作曲活動も



▲新交響楽団第188回定期演奏会で実際に配布されたプログラム(筆者所蔵)



▲新交響楽団第202回定期演奏会で実際に配布されたプログラム(筆者所蔵)

再開している。作品リストによれば自ら作詞をも手掛けた《流線型時代 op.12》(初演等の経緯は不明)を皮切りに、1936年8月作曲の《きつつきポルカ op.15》、1937年4月作曲の《ミッキーマウス・ギャロップ op.16》はラジオ放送でも取り上げ、そのどちらも英一の木琴、文子のピアノによるものである。

(3). ヴィブラフォンとの出会い

英一はヴィブラフォンの輸入を日本で先駆けて行い、その新規性に着目した。Deagan社に「ヴァイブラハープNo.145」を発注し、1937年(昭和12年)7月、日中戦争の影響から不要不急の品とみなされ高額な関税が課せられるトラブルを乗り越え、1938年(昭和13年)1月31日の以下の演目を披露した。「6:00 子供の時間 ヴィブラフォンと木琴 1. ヴィブラフォン独奏「アロハ・オエ」幻想曲 朝吹英一編 ファーマー作曲「スコットランドの風鈴草」ファーマー曲 2. 木琴独奏「イタリアン・ロイヤル・マーチ」ガベツテイ曲「双頭の鷺の旗の下に」ワグナー曲「愛國行進曲」朝吹英一編 朝吹英一(ピアノ伴奏 朝吹文子)」^{xix}

(4). その後の朝吹文子について

1941年4月9日英一出演のラジオ欄には「ベートーヴェンのメヌエット、ゴセックのガヴォット、エルドラド、ヴィブラフォン・木琴独奏朝吹英一、ピアノ伴奏朝吹文子」と記載がある。1941年6月13、14日新交響楽団第227回定期公演(日比谷公会堂)はローゼンシュトックと朝吹文子の両名のピアノによるモーツァルト作曲《二台のピアノのための協奏曲 変ホ長調》の告知が成されていた。だが、1941年6月、新交響楽団が発行する「The philharmony」6月号に以下の一文が掲載された。

「當第二二七回定期公演曲目は獨奏者朝吹文子氏御病氣の為め豫告されてゐました三曲の代りに本曲を以て樂季悼尾を飾る事に致しました」^{xx}

以降、文子の足取りは途絶える。

6. 太平洋戦争中の音楽 ―カルア・カマアイナスに隠された思い―

(1). 時代の“色”

1941年(昭和16年)8月、英一は父・常吉が創設した千代田組に入社。その年の暮れに日本軍は真珠湾攻撃によりアメリカに宣戦布告。時代は軍事一色に染まる時代に突入する。折しもこの時代は、国際現代音楽協会とも繋がりを持っていた作曲家集団「日本現代作曲家聯盟」も解体され、「楽壇新体制促進同盟」さらには「日本音楽文化協会」といったものへと変遷し、一元化が図られる。秋山邦晴の聞き取りによる、音楽評論家宮沢縦一(1908-2000)の証言は以下の通りである。

「国の中にいる限り、あのころは人権なんということはほとんど無視されてた時代であったということ。そして特高警察と憲兵隊というものがあるわけですよ。そういうところは、投書一本あってもすぐに調べにくるということ。そしてもう、証拠を突きつけてどうするじゃなく

て、とにかく、投書によってもひっくくって持ってっちゃうという恐ろしい時代であった。(中略)全国的に影響をもつ新聞、雑誌、映画、レコードは内務省の警保局の検閲課で全文検閲する。(中略)検閲というものは、一カ所でたった一人がやってるんじゃないということよね。そういうふうな複雑な状態—金縛りというかな—にがんじがらめのうるささがあったということ。(中略)楽器のほうも、材料の使用禁止で次々になくなってくるんだから。それから、集会でも、音楽会をやるということを予定しているときでも、日比谷公会堂で、国民精神総動員の何とかの会があるということになっちゃうと、そっちに取られちゃうわけ。会場もそうなんだよ。場というのがなくなるというのは、いろいろな面に及んでくるわけですよ。』^{xxi}

(2). 平岡養一の場合—アメリカでの成功とそれゆえの「利用価値」

以上を踏まえ、平岡養一の場合を考察する。平岡研究は先行研究である通崎睦美による『木琴デイズ』に詳しい。その上で原典資料に立ち返って平岡の姿を読み取ってみたい。

平岡が特に日本国内の新聞を賑わす最初期の一例として、1937年6月2日東京朝日新聞夕刊5面の「藤原義江の米国みやげ(下)」が挙げられる。「木琴の獨奏で米國一の平岡君」の見出しとともに躍動感あふれる平岡の写真が掲載されている。この6年間一度も欠かすことなく毎朝7時半に木琴独奏をNBC放送局から行なっていることを紹介し、これだけの演奏家はアメリカ広しといえども他にはいないと賞賛している。1938年12月21日東京朝日新聞朝刊一面には「平岡氏紐育で好評」と小見出しではあるがリサイタルの成功を報じている。1939年5月14日東京朝日新聞朝刊9面には「今日の聴きものは平岡氏の木琴」と見出しが踊り、国際放送により木琴演奏がニューヨークから日本にラジオ中継されることが知らされている。

だが、この後日米関係は急激に悪化の一途を辿る。1941年12月8日の真珠湾攻撃を最後に平岡のNBC放送出演は取りやめとなる。続いて平岡が紙面に登場するのは1942年7月30日朝日新聞朝刊3面「庭球の柏尾や木琴の平岡 引揚邦人の変り種を拾ふ」といういささか好奇の目に満ちた記事である。続いて1942年8月12日朝日新聞夕刊2面では「實に素敵・浅間丸の生活 野村大使も「肥つたよ」日本食のご馳走で楽しい船路」という見出しとともに、平岡の帰国が報じられている。さらにここからは1942年10月21日朝日新聞夕刊二面「手練の木琴で奉公 対米放送に活躍する平岡氏」という見出しが踊る。

筆者が最も不穏な記事と感じたのは、1942年12月6日、12月10日読売新聞朝刊に掲載された「開戦前夜」というシリーズ記事である。「ニューヨーク編」に平岡の名前が掲載され、真珠湾攻撃の日から浅間丸での帰国までの緊迫感溢れる模様を報じている。その見出しは前編「X前夜の「軍艦マーチ」紐育の空へ力一ぱい木琴を叩いて祖国日本の大勝に“萬歳”！」後編「つき纏う“謀略”の魔手 断乎拒けて氣も晴晴と交換船へ」だが、これは平岡自身が語ったことなのか信憑性は疑わしい。通崎の研究にはこのころの平岡の状況が克明に記されているが、時間や状況の点からも明らかな矛盾が生じている。このシリーズ記事は全九回にわたり、「語る人」として

それぞれ人物が変わり、泰国編としてメリー・ピラショー嬢(印度人で皇軍がバンコク進駐の八日まで在泰英公使館の家政婦として働いた人物と称される)、バンコクの邦人四十士の某氏、駐泰外交官某氏、海軍武官補佐官〇〇中佐、三井物産の南部次郎氏、二回にわたりニューヨーク編として平岡、二回にわたりサイゴン編として〇〇海軍中佐、松下光廣、村上竹松の両氏という、訝しい面々が揃うばかりか、公人は平岡のみという杜撰さを鑑みるに、一連のこの記事はブンヤの浅ましい見識による捏造記事ではないかと筆者は考察する。

以上を踏まえ、平岡はアメリカでの活躍があったことが起因し、プロパガンダの一環として軍部や報道から利用されていたことが指摘できる。

(3). 朝吹英一の場合ーカルア・カマアイナスの活動

カルア・カマアイナス、又の名を「南海楽友」とするこのハワイアンバンドは英一が主体となり、主要メンバーが華族などの上流階級の師弟で結成された。アマチュアながら日比谷公会堂を満席にし、大手レコード会社からもその演奏がレコード化されており、その存在は戦中日本において特異な位置を占める。古川隆久(b.1962)による先行研究「昭和戦中期の軽音楽に関する一考察ーカルア・カマアイナスについてー」を参照しながら、その足跡を追いたい。



▲カルア・カマアイナス復刻版レコードジャケット(筆者蔵)

1937年(昭和12年)英一は社会人四年目となっていた。同僚の熱心な誘いを受け、灰田晴彦(1909-1986)にスティール・ギターのレッスンを受けるうちにその魅力に惹かれ、同時期に灰田のレッスンを受けていた原田敬策(1919-2001/男爵貴族院原田熊雄の長男)、芝小路豊和(1920-2010/男爵芝小路豊俊の長男)、朝比奈愛三(1911-1946/雪村いずみの父親)らと自然に意気投合し、ハワイアン音楽の演奏会を開催するに至る。「カルア」はハワイの地名、「カマアイナス」はハワイの言葉で「土地の人」あるいは「昔馴染み」の意味である。第一回公演は1940年10月12日、産業組合中央会館(国鉄有楽町駅近く)で開催され、入場料は1円。300席に立ち見が出るほどの盛況ぶりだったという。第三回公演以降は敵性語とみなされたバンド名を「南海楽友」に改称、客席数約3000席の日比谷公会堂に場所を変え大変な盛況ぶりだったという。英一はこのバンドの音楽監督、スティール・ギターとヴィブラフォンの両方を駆使し、日本独自のハワイアン音楽の作曲も手がける万能音楽家としての力量を発揮した。古川2007の研究には1940年(昭和15年)10月の第一回公演から第七回公演(1943年(昭和18年)6月12日)までのプログラムが記されている。

(4). ヴィブラフォンの可能性の発露

英一は1941年(昭和16年)6月28日、「カルア・カマアイナス(第三回)南海音楽の夕」でヴィブ

ラフォン独奏を披露した。これは日本国内で初めてヴィブラフォンを主奏とした一例と言える。そのプログラムは、ハワイアン作品から、自ら編曲した作品まで多岐にわたる。第四回(1941年昭和16年11月8日)は木琴独奏、第五回(1942年/昭和17年6月20日)にはヴィブラフォン主奏として《南海の絵に寄すop.24》(朝吹英一詩・曲)《三日月の世界》(朝比奈愛三詩・東郷安正作曲)《君を呼ぶリラ op.33》(朝吹英一詩・曲)《行進曲「爽風」》村上一徳、朝吹英一共編を披露。とりわけ《南海の絵に寄すop.24》《君を呼ぶリラ op.33》は日本人音楽家の中で初めて作曲されたヴィブラフォンを主奏とした作品と捉えることができる。

(5). 君を呼ぶリラ

1942年2月15日、英一は《君を呼ぶリラ op.33》を作詩作曲した。冒頭はヴィブラフォンによる独奏である。日本国内でのヴィブラフォン独奏の一例として最初期のものであり、美しい響きに包まれる。Lilacすなわちライラックの花言葉は『思い出』『青春の思い出』『友情』『大切な友達』『純潔』以下に詩を引用する。

君を呼ぶリラ 風に香りて 若き日の思い出は かえり咲きぬ
君を呼ぶ声 風まにきこえ 忘れいし あの歌は よみがえりぬ
夏も近き五月 みどり濃き庭に 雲の影を追いて 夢みるひととき
君を呼ぶリラ 風に散りそめ ゆく春を惜みつつ われは歌う^{xxii}

この作品は戦後英一が出版した作品集の中でもマリimba版として登場する。英一本人の解説は以下の通り。「逝く春を惜しみつつ、去りゆく青春を回想した歌で、元来は声楽曲として作られ、楽譜の冒頭の如き詩がついています。前奏はヴィブラフォンのような感じで幻想風に行い主部に入ってから木琴はオクターブのトレモロ奏法で歌って行きます。」^{xxiii} 筆者はその楽譜を改めて読み、ピアノパートがヴィブラフォンの最高音Fまでとなっていることから、この楽曲がヴィブラフォンを主体として書かれていることを実感した。また、マリimbaとピアノのための楽譜ながら、英一の指示によるものであろう、歌詞が記されている珍しい楽譜でもある。また、曲目解説に「逝く春」と記していることに着目したい。「逝く」とは、「行く」「往く」と異なり、人の死に関することに使われる言葉であり、季節に対して用いることは少ない。すなわち、英一はこの「春」に人の死を見、2度と戻れぬ季節をそこに見ていると筆者は考察する。

(6). 火華

1942年11月、朝吹英一は《火華》を作曲する。現在ではマリimbaのレパートリーとして演奏されている楽曲であるが、南海楽友第七回定期公演(1943年/昭和18年6月12日)で初登場している。ここでは「木琴とヴィブラフォン独奏」のコーナーで取り上げられている。この作品は英一が作曲した作品の中で最もスピードを求める作品であり、聴き手にも熱い興奮をもたらす音楽である。まさに、ヴィルトゥオーゾピースとして意識した作品であると言える。形式は変奏曲のスタイルを取り、提示された主題を様々な形で変奏し高揚感を生み出す。

英一はこの作品について目立った解説を残していない。もし「火華飛び散る勇ましい音楽です」と説明すれば、軍部に対してのカモフラージュも十分可能であると筆者は考える。これはソ連時代のショスタコーヴィッチを思わせる、音楽を用いた心理戦ではないだろうか。

(7). したたかな音楽活動

以上の資料を読み解くと、絶妙に自作を織り交ぜながら、敵性音楽として排斥される危機を持ち合わせたハワイアン音楽の魅力をしたたかに発露し、観客と共に分かち合う姿勢は当時の世相から考えても、並並ならぬ勇気を持った行動であると筆者は感じる。古川の研究によれば、第三回公演では開演に先立って、内閣情報部が制定した「愛国行進曲」を演奏したらしい。「私たちの周辺に憲兵や特高警察の圧力が何となく感じられるようになっていた」^{xxiv}という言葉からも、現在では考えられない緊張感に包まれていたことを物語る。

1943年(昭和18年)6月12日、惜しまれつつ最終公演となった南海楽友第七回公演は日比谷公会堂から人が溢れ、灯火管制の中にもかかわらず、ホール内は着飾った人々で大いに賑わったという。そして最終曲目は英一が1943年5月に作詞作曲を手がけた《別れの歌 op.48》であり、会場中が大合唱となったことが参加者の記憶に今でも残っているという。

筆者は、軍部に対して毅然と振る舞う英一の姿が目浮かぶ。それは音楽家としての強い自我であり、権力に対する静かな、しかし青い炎の様に熱い、抵抗がここには凝結されている。自らの生い立ちや立場を強みとして生かし、軍部や憲兵が暴走する世相を堂々と音楽で渡り歩いていく。英一は、静かでありながら、本質がぶれることのない、真っ直ぐな、内に秘めた情熱を持つ芸術家であったと筆者は感じるのである。そして筆者は、ここに、同じ時代を、炎の様に生きた文子というもう一人の芸術家からの影響をも、感じずにはいられないのである。

7. 二つの教則本

日本国内で最初期の木琴教則本とも言える「シロホン教則本」(昭和二年)と朝吹が1944年に雑誌「音楽知識」(日本音楽雑誌)に寄稿した全4回にわたる「木琴の知識」を紐解きながら、当時の演奏技術と表現についての考察を行う。

(a). シロホン教則本(共益商社書店発行)について

昭和2年8月16日発行の48ページにわたる教本である。作者名は一切明記されていない。

目次は以下のとおり

音楽の基礎(音符、音符の種類、音符の示す長さ、付点音符、休止符、音の高さ、三連符及び六連符、拍子記号の種類、拍子に依る音の強弱、音階の種類、音程) 槌の握り方
楽器と楽譜との対象(半音階、轟音(トレモロ) 音階の練習(十二長音階の練習、音階に基づく練習) タイムを主とする練習(帯線、ラグタイム、練習曲、槌の交錯(クロスハムマリリング)、槌の用法、拍子、ワルツ拍子、槌の変化、ワルツ拍子の練習、同一槌にて二音

連続に打つ場合、二部合奏の独奏曲、滑音、琵琶音、二重琵琶音、短三度における練習、半音進行の練習、装飾音、短倚音、重倚音)

音の高低著しき譜の練習 結論「技術の量は練習の重に正比例す。」

練習小曲

1.America 2.Auld Lang Syne 3.Home,Sweet Home 4.In the Gloaming 5.Marching Through Georgia 6.Yankee Doodle 7.Dixie 8.Turkey in the Straw 9.練習曲(十二題)

(b). 木琴の知識

木琴の知識は1943年11月から1944年4月にかけて全5回に渡って掲載された英一執筆による木琴の技術論である。戦前の英一の演奏に対する考え方が克明に記されており貴重な資料と筆者は考える。「まへがき」において、英一は昨年秋世界的木琴奏者平岡養一氏が帰国したことにより、放送、音盤、写真、実演にその妙技を示したことで木琴に対する世人の関心が高まったことを述べ、この楽器を認識しなかった人々にも如何にそれが美しい楽器であるかを教え、楽器としての地位を高め、一般の注意を喚起することになったことは喜ばしいという言葉から本論を開始している。以下は目次と、一部内容を引用した。

(1)1943年11月 第一講 木琴に就いて まへがき 木琴の特色 ◇鑑賞者の立場から 1. 音色が愛らしく美しい。 2. 音色が他の楽器とハッキリ区別出来る 3. 音が一つ一つハッキリしている 4. 以上の諸特色の総合的結果として、楽器から来る感じが非常に明るく、爽やかで、又歯切れよいと言ふ事が出来ます。◇演奏の場合(主として初心者に就いて) 1. 調律の必要がない。 2. 正確な音程と、本来の音色が容易に出せる。 3. 絃とか爪等の消耗品が要らない。 4. 以上諸論の結論として、比較的初心者にとつて入り易い楽器だと言ふことが出来ます。(中略)その道の名手となるのは非常に六ヶ数いことで、夫には優れた天分と、人一倍の努力が要るわけで、(中略)唯素人として職務の余暇の慰みに弾く、つまり厚生の用途として之を見た場合には、それは最も入門し易い楽器の一つであると思はれます。誰でも容易に音が出せます。そして、簡単な曲なら直ぐに弾ける様になります。木琴の構造

木琴の手入 第二講 演奏の基本 「最初から正しい演奏法を」

(2)1944年1月 音符に就いて 演奏の姿勢 撥の持ち方 撥の打ち方 パーの打つ場所 撥の開く角度 第三講 基本的技巧 左右の撥 1. 左右交互に打つこと 2. 左右同じ強さになること 3. 左手を発達せしむこと トレモロ トレモロの用途 トレモロの仕方 トレモロの練習曲

(3)1944年2月 音階奏法 愛国行進曲 第四講 特殊技巧 半音階 南方歌曲「ラサ・サヤン」滑奏(グリサンド) 撥の交叉 装飾音符 トリラ

(4)1944年3月 二重音 八度奏法 四本撥奏法(三重音及四重音) 第五講 楽譜と曲目 木琴の曲 ヴァイオリン楽譜 他の楽譜よりの編曲

(完結)1944年4月 伴奏楽器 独奏曲の実例 【序曲】輕騎兵、詩人と農夫、天国と地獄【歌劇抜粋】カルメン、ミニヨン、魔弾の射手【行進曲】愛國、軍艦、太平洋、奮友、双頭の鷲の下、軍隊(シーベルト)【円舞曲】ドナウ川の漣、エスパニア【各国舞曲】各種のハンガリア、スペイン、ポーランド等の舞曲【古典小品】ゴセツク其他のガヴォット、ミニュエット、トルコ行進曲【描寫樂其他】トルコの巡環兵、森の鍛冶屋、森の水車、金婚式 合奏の場合 第六講 終結 練習の指針と上達の秘訣

1. 楽譜をよく見よ 最初から細部に亘って十分注意し、どんな小さな記譜や音譜も見逃さぬようにします。曲を覺えたならば暗譜で演奏します。
2. 楽曲の精神を掴め 細部の仕上がりが出来たら、大局から曲全體を把握することが肝心です。
3. 楽器の短所を補へ 木琴の最大欠陥は音が持続せず、機械的で表情に乏しいことです。故に歌の様な曲を奏する場合には、特につとめて楽器を歌はせる様心掛けねばなりません。
4. 名手に学べ 優れた木琴奏者の演奏は勿論、他の器樂或ひは聲樂等の大家の演奏には、つとめて之に接し、又音楽書等により音楽の素養を深めます。木琴の演奏技術と云ふものは、木琴独特のものですが、それは單に楽曲表現の手段に過ぎず、表現せらるべきものは音楽そのものであることを心に銘記すべきであります。

(c). シロホン教則本と英一の木琴の知識の対比

最も目立つのは練習曲の毛色の変化である。敵国アメリカや連合国側の楽曲は廃絶され、愛國心を煽る多くの軍隊行進曲、南方楽曲やドイツとその植民地の音楽が目立つ。さらにユダヤ人作曲家の作品も極力抑えられている。インドネシア歌曲なども織りまぜることで、大東亜共榮圏の意図を汲み取っていることを腹芸の如く示しながら、英一は淡々と木琴についての音楽論を披露している。この筆致は、《輕井澤の美人》を作曲した少年英一から、凛々しく、独立した芸術家として毅然とした態度で世相と向き合う英一の姿を筆者はここに見るのである。

8. 考察とまとめ

(1). 朝吹英一の戦前期の音楽活動の全容

以上の資料から筆者は朝吹英一の新しい音楽家像を感じるに至った。戦後の英一の活動は今更ここで列記する必要もないほどに自叙伝、門下生による回想録が多数存在している。本論は、まさに英一が述べた「前半の三十年近くは、壁の向こう側で、今では遠い過去として、霧の中」にある時代を明らかにし、英一の実像を追い求めた結果である。筆者はここに彼の真の芸術家としての覚悟を見出した。演奏に、作曲、そして実業家としての様々な面を持ち合わせながら、芸術と社会の関わりを常に模索した存在である英一は、時の権力とも対峙し、様々な人々との交歓、そして逝く人への思いを音楽に託した。だからこそ戦中期の多くの人々の心をも掴む芸術家として大成したと筆者は考える。戦後の「優しく温かく気品ある英国的紳士」の姿とは異

なる「青い炎を放ち、社会と真正面から向き合う芸術家」としての英一を筆者はここに見る。

また英一はヴィブラフォンを意欲的に取り入れた。それは「木琴の最大欠陥は音が持続せず、機械的で表情に乏しいこと」を克服するために、更に身近にピアニストの妻という存在がいたことが大きな刺激になっていたのではないかと筆者は考える。憧れの存在でもあり、静かな対抗意識を持ち合わせていたことも、音楽家同士ゆえに想像出来ることである。英一は木琴のみならず、ヴィブラフォン、そして作曲を手がけることによって「音楽」に向き合っていたと筆者は考える。それは終生「木琴」に固執していた平岡とは全く異なった視点から音楽を捉えていたことを示すと筆者は思うのだ。

(2). 朝吹英一の演奏とは

国立国会図書館に所蔵されている英一の演奏は1930年代のものが主である。同時代人である平岡や、河合ダンス・バレエ團の河合菊彌やせき子、ボードヴィルの要素を取り入れたゼームス・ダン(1898-1950)と比べ、英一の演奏はその誰もが持ち合わせない端正さと気品がある。筆者はそこに憧れて英一の研究を始めたと言っても過言ではない。打楽器演奏とは、兎角派手に、熱量を全面むき出しにしてしまいがちである。英一は生まれ持った上品さと、徹底した「うたごころ」を重んじていたように思える。だが英一は、木琴や鉄琴にはピアノ伴奏が必須だとも考えていた。その点は平岡も同様であると言える。無伴奏の打楽器音楽の世界の構築は、戦後の英一の弟子である安倍圭子(b.1937)、高橋美智子(b.1939)、そして京都から彗星の如く現るツトム・ヤマシタ(b.1947)の登場を待たなければならない。

(3). 朝吹英一の作曲とは

一方で英一の作曲作品を見るにつけ、一概に英一が「上品さ」だけの音楽家なのか疑問が残る。作曲、さらには作詞まで手がけるというのは、突き動かされる何か、衝動が何よりも重要だからである。その点は筆者も作曲を行うものの端くれとして、指摘せずにはいられないのである。その点を踏まえて、はじめて英一の芸術の全体像が見えてくるように思えるのである。戦前期の打楽器奏者が、1943年、自らの作詞作曲による《別れの曲 op.48》で、日比谷公会堂を大合唱と落涙の渦に巻き込んだ英一の作品に、筆者は彼の真髄を見る。英一は、物事を大局的に捉え、それを芸術に昇華することのできた、当時でも数少ない真の芸術家であったと言えよう。

(4). 朝吹英一の作曲作品は新しかったか

英一の音楽が当時の時代の中で新規性を持っていたかどうかは、作曲家の目線から考えると斬新な新しさはないと言える。1930年代の作曲家たちの組織する活動では、東京音楽学校を中心としたドイツアカデミズムとそれに対抗するフランス近代派、在野で音楽研究を続けた個人とに大別することができる。英一の作風は師ハインリヒ・ウェルクマイスター(1883-1936)の影響から、ドイツアカデミズムに当てはまると言える。だが、作曲家たちはまだこの当時、木琴や鉄琴の可能性を認知していなかった。現に当時の作曲作品発表会ではピアノ、弦楽器、声

楽、木管楽器にそのほとんどが集中しており、彼らは新しい楽器である木琴や鉄琴に目を向ける余裕はなかった。それを踏まえた場合、英一の作曲は新しい楽器を取り入れている点においては「新規性」を持ち合わせていたと考えることができる。

最後に、英一が戦後作曲家に向けて送った言葉をここに記したい。

「正に発展の途上にある楽器と云うことが出来る。それと共に作曲家も大いにこの楽器の特性を認識して、未知の分野の開拓に努めて欲しいと思う。」^{xv}

9. おわりに

筆者が朝吹英一編「マリンバ名曲30選」(共同音楽出版)と出会ったのは2001年、中学時代の部室だった。マリンバの楽譜であるのに「歌詞」が掲載されている《君を呼ぶりら》、優雅な雰囲気漂わせる《軽井沢の美人》…朝吹英一という人は何者なのだろう。調べていくうちにその存在の大きさを実感するようになった。さらに筆者はヴィブラフォンを中心に演奏活動をするに至った今、なおさら氏の存在を実感した。彼がいなければヴィブラフォン文化はなかったかもしれない。そんな一心で始めた研究は、朝吹文子との出会いによりさらに戦前期の日本へと誘われた。初出の資料も多数あり、これは朝吹英一先生に会ったことのない、僕のような世代が成さなければならない仕事だと覚悟を決めた。ご批判は甘んじて受け入れる覚悟である。

「マリンバ名曲30選」収録の最後の作品は、オッフェンバックの《喜歌劇「天国と地獄」序曲》。英一が、文子とはじめてラジオ放送に臨んだ時のトリを飾った作品であることに、ふとこの論考を書き終える間際、気がついた。時代は霧の中のように遠くなっていくが、ここに、二人の音楽活動の軌跡が刻み込まれているように筆者は感じた。

引用文献

- i 島田博：朝吹英一ローズウッド60年 木琴の揺籃期より今日までの歩み，p.68，日本木琴協会，1983
- ii 高橋和巳：日本の悪霊，p.23，河出文庫，1969/2017
- iii Library of Congress (2023年9月16日閲覧) <https://www.loc.gov/item/jukebox-72130/>
- iv 帝劇第七十五號，p.58，59.帝國劇場文藝部，1929
- v 河合ダンスグラフィック第一輯，p.27，河合ダンス編集部，1930
- vi 読売新聞朝刊，9面，1927年(昭和二年)6月11日
- vii 鈴木良始：1920年代General Electric社における福利厚生，p.65，経済学研究，46(2)，(2023年9月16日閲覧) [https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/32030/1/46\(2\)_P61-76.pdf](https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/32030/1/46(2)_P61-76.pdf)
- viii 東京朝日新聞朝刊，9面，1927年9月9日
- ix 通崎睦美：木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」，p.32，講談社，2013
- x 読売新聞朝刊，4面，1929年(昭和四年)5月13日
- xi 島田博：朝吹英一ローズウッド60年 木琴の揺籃期より今日までの歩み，p.13，日本木琴協会，1983

- xii 朝吹英一：受け取らぬ千円札，p.78，丸No.6，潮書房光人新社，1953年7月
- xiii 丸No.6，p.132，潮書房光人新社，1953年7月
- xiv 読売新聞朝刊，10面，1935年4月15日
- xv 大日本音楽協会編：音楽年鑑昭和15年版，p.94，共益商社，1940
- xvi 人事興信録第八版，1928，2023年9月16日閲覧
https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-1782?fbclid=IwAR26CL7XuUGWekCVnPO3jEAWII79ELG0XFMiHZccBZWwQ5_9BDtnGXbiyNw
- xxvii ジョセフ・C.グルー，石川欣一 訳：滞日十年：日記・公文書・私文書に基く記録 上巻，p154，毎日新聞社，1948
- xviii 月間楽譜，p82，1938年4月
- xix 読売新聞朝刊10面，1938年1月31日
- xx The philharmony，p.19，新交響楽団，1941年6月
- xxi 秋山邦晴：昭和の作曲家たち 太平洋戦争と音楽，p.336-339，みすず書房，2003
- xxii 朝吹英一編：マリンバ名曲30選，p.36，共同音楽出版，1965/2018再販
- xxiii 朝吹英一編：マリンバ名曲30選，p.5，共同音楽出版，1965/2018再販
- xxiv 原田敬策：テニス軽井沢ハワイアン，p.150，私家版，1997
- xxv 朝吹英一：木琴の為の名曲と楽器の説明，p.50，音楽の友1954年3月

参考文献

- 會田瑞樹：独奏楽器としてのヴィブラフォン音楽の確立 ～クレア・オマー・マッサーの作品を例に～，郡山女子大学紀要第58集，p.115-131，2022
- 會田瑞樹：第1回かなつく現代音楽講座「會田瑞樹が語る 打楽器音楽の世界」、會田瑞樹の音楽歳時記，2023，2023年9月16日閲覧 <https://marimperc.hatenablog.com>
- 秋山邦晴：昭和の作曲家たち 太平洋戦争と音楽，みすず書房，2003
- 朝吹英一編：マリンバ名曲30選，共同音楽出版，1965/2018再販
- 有賀誠門：上の発想，下の発想にいたる経過，東京芸術大学音楽学部年誌（通号 7），p.75～101，1981
- アルス音楽大講座第7巻 管楽器・打楽器の實技，アルス，1941
- 飯村諭吉：小森宗太郎におけるリズム学習の試行－日常生活の「運動性」を視点として－，子ども・教職研究第2巻，埼玉県立大学保険医療福祉学部，p.3-11，2019
- 大田黒元雄他：世界音楽全集第7巻，筑摩書房，1961
- 奥野他見男：「河合ダンスの人々」（「僕も嬉しや嫁もろた」所収，p.285-296），玉井清文堂，1930
- 小野寺拓也、田野大輔：検証 ナチスは「良い」こともしたのか？，岩波書店，2023
- 小森宗太郎：打楽器教則本，共益商社書店，1933
- 小森宗太郎、江木理一：鼓笛隊指導書並教則本，共益商社書店，1938
- 小森宗太郎：りずむがっきれんしゅうの本，音楽之友社，1949
- 作者不詳：シロホン教則本，共益商社書店，1927
- 沢木耕太郎：オリンピア1936 ナチスの森で，新潮文庫，2021
- 島田博：朝吹英一ローズウッド60年：木琴の揺籃期より今日までの歩み，日本木琴協会，1983
- 須藤元夫：明治の陸軍軍楽隊員たち，陸軍軍楽隊の記録刊行会，1997
- 通崎睦美：木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」，講談社，2013

日本木琴協会「朝吹英一先生回想録」編集事務局：朝吹英一先生回想録，1994

古川隆久：昭和戦中期の軽音楽に関する一考察 ―カルア・カマアイナスについて―，日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要第七十四号、p.23-45，2007

色を使った造形活動による個性の萌芽について

－学生と幼児が取り組んだモザイク画作品の比較から－

Confirmation of the emergence of individuality through modeling activities using color :

Comparison of mosaic works created by students and children

松 田 理 香

Rika Matsuda

Abstract

This study compared mosaic made by students with colored tiles and mosaics made by young children in order to investigate the influence of color on individuality. The mosaic was created using colored tiles and mounts. Most of the children's works had no special purpose, and were simply an arrangement of colored tiles. However, about 30% of the works were inspired by an interest in color. None of them expressed concrete motifs such as flowers or diversity. In contrast, about 90% of the works created by students had compositions motivated by an interest in color. Almost all of these works exhibited regularities indicating order, repetition, and symmetry. Some works were inspired by figurative motifs such as flowers and the sun. By comparing the mosaic works of students and children, we were able to confirm the development of individuality in early childhood.

はじめに

幼児期の造形表現活動において「色」の存在は不可欠な要素の一つである。私たちは視覚や聴覚、触覚などの五感を通して外界の情報を得ながら生活し、特に視覚による知覚(色や形、大きさや距離感などの判断)は、他の感覚の判断にも多大な影響を与えており、非常に重要な感覚といえる。幼児が視覚の発達によって色を認知し興味や関心をもって関与を試みようとする「色への応答性」は、その後の色彩感覚の獲得につながっている。色に反応を示すことは好奇心や発想力につながり、色の特性を学ぶことで協調性や自制心が育まれる。そしてそれが一人ひとりの個性の発現になり、感性に広がりを与えるものである。造形要素としての「色」に特化してすべての子どもに当てはまるような発達の過程を見出すのは難しいが、この時期の子どもが色への応答性を高める体験の積み重ねは観察可能であると考え、その萌芽がいつ頃生まれてくるのかを実験的に調査し、まとめるものである。

I 色の応答性とは何か

幼児期における造形活動の中の「色」は「形」とともに重要な要素であり、認知機能の発達、運

動機能の発達、感性や感情の発達などと深い関係がある。造形遊びや描画表現の中に発達の道筋をみていくことについては多くの検証がなされており、幼児期の色の嗜好性や、色と形の関連性、色へのイメージなど、造形教育における色への関わりに対する重要性の認識が見てとれる。杉田を中心とする産業技術総合研究所の研究グループによると、色彩感覚は生まれつきのものではなく、幼児期からの多くの色の知覚(色の視覚体験)により身につくものであるという¹⁾。色彩感覚は、生活環境の中で多くの色に触れ、色を理解し、色で表現するという体験の積み重ねによって獲得されるもので、一人ひとりの個性の発現にも関わりがあり、感性の広がりを与えるものである。子ども自身が興味や関心をもって色彩感覚を身につけていくための過程の一步が「色への応答性」であり、色を使って何かを表現しようとすることは、個性の萌芽であると考えてる。

幼児期において色を意識して使えるようになるまでには、心身の発達を待たなければならない。色知覚という観点からヒトの視覚の発達をみると、生後1ヶ月頃までには明暗への反応が認められ、次第に特定のものに対する「凝視」や、動きのあるものへの「注視」および「追視」などが見られるようになる。色を感じるのは生後3ヶ月目くらいからで、1歳頃には大まかではあるがいくつかの色の区別ができるようになる。そして、握った筆記用具で紙などをたたきようにして点や短い線をかくなぐりがき(錯画期、スクリブルという名称もある)が始まる。肘を軸とした動きができるようになると水平線(横線)が表われ、手首と肘の連結がスムーズになり、腕が大きく動かせるようになると垂直線(縦線)も表われる。やがて自分の中にある表現したい何かのイメージを持つようになると、つぶやきや独り言、擬音を発しながら、波型や螺旋状の線、独立した円などをかくようになってくる。活発な探索活動も可能になることで、幼児の世界観は一気に広がりを見せはじめる。しかしこの段階でも色そのものに対する意図はうまれていない。

心理学者のダヴィッド・カッツの実験に近い例として、色と形のうち、いずれにこだわるかを調べるテスト(ある形の赤色Aを提示し、同じ形の緑①と、違う形の赤②のどちらが提示したAに似ていると思うかを問うテスト)や、心理学者のヘルマン・ロールシャッハの実験になった例(無意味な図形を見せて何に見えるかを回答させ、その時に色と形のどちらにより強い関心をもったかを知ろうとするテスト)では、子どもの早い発達段階においては形よりも色への反応が強いと結論づけている。

しかし、近江によると「子どもは色に関心をよせやすいが、発達とともに形へのこだわりが強くなる、という傾向はかなり確かな事実である。しかしこの傾向には多少用心してみなければならないところが含まれている」²⁾とのことである。色と形は相補的な関係にあり、安易にその役割を切り離して考えるべきではないとの懸念が見られる。また横田らによると、描画表現における発達のあり方の中には「描くために使用する色の選択理由に、情緒的なものや色と

物との関係の認識によるものは含まれないと考えられている」³⁾とあり、幼児期の色彩教育に関しては「造形分野を単独で保育実践する場合も、色だけや形だけを取り扱ったりすることは、非常に稀である」³⁾という記述も見られ、生活環境や教育環境上の避けがたい合理性などにより、色と形の相乗効果や発達の過程が果たす役割についてはもう少し検証の継続が必要であると感じる。

私たちは視覚や聴覚、触覚などの五感を通して外界の情報を得ながら生活し、特に視覚による知覚(色や形、大きさや距離感などの判断)は他の感覚の判断に大きな影響を与えている。視覚情報については、山中によると「われわれが外界から受けるすべての情報のうち、視覚を通じて受ける情報すなわち視覚情報はすべての感覚器官から受ける情報の87%を占めるといわれており、いかに視覚情報がわれわれにとって重要であるかが分かる」⁴⁾とあり、視覚による知覚の中でも「色」の知覚は特に重要で特殊な生体反応となっている。さらに、仁科らによると「人は色に対して何らかのイメージや連想があり、その感覚は社会情勢や経済状況、自身の置かれている立場、年齢、ジェンダーなどによって変化し続けている」⁵⁾とあり、「色」によって様々な意味を汲み取ったり、発信したりすることができるようになっている社会システムは、多様な環境の秩序として機能しており、また象徴的な意味や感情的な意味の伝達媒体としても有効に活用されていることがわかる。

幼児が視覚の発達によって色を認識し、興味や関心をもって関与を試みようとする「色への応答性」はその後の色彩感覚の獲得につながっている。仁科らによると「色には何かしらの力があり、赤を見れば力がみなぎり、青を見れば落ち着いた気分になるなど、古代人から現代人まで通時的に共通・普遍的な色彩感覚が人々には宿っている」⁵⁾とあり、身近な生活環境の色が果たすさまざまな事象に、早い時期から関わることで自分の中に色への連鎖反応が起こり、好奇心や発想力、協調性や自制心なども育まれると考えられる。

本研究は、個々人の色彩感覚は色の嗜好性に基づく個性と捉えることができるため、造形要素としての「色」を軸に幼児期の個性の萌芽について検証する目的でモザイク画的表現の実験を考案し、実施した結果をまとめて分析したものである。モザイク画的表現の実験は、並べる色の順序(色の配置・配列)、色と色の組み合わせ(配色)、そして色の特性(色の知覚的效果や心理的效果)などを体験することになり、自分に内包されたイメージを色によって具現化する取り組みであることから、幼児期における個性の発現が確認できるのではないかと考えた。

Ⅱ 方法と結果

<実験1>

幼児期における色の応答性がある後に獲得される色彩感覚に関係し、個性の発現時期となっている可能性を確認するため、東北地方のA短期大学部幼児教育学科1年生に比較実験の協力

を依頼した。学生たちは実習などで保育の現場に接する機会が多くあり、その多くがそれに関わる職業の資格取得を目指している。それまでの成長過程において色による表現体験が複数回あり、一人ひとりの色の嗜好性もほぼ確立されていると思われ、個性の表出に色も関係している可能性が高いと考えた。

個々人の中に内包されているさまざまな感情やイメージをモザイク画的な色面構成の中に展開することで、色への応答性による派生が個性表出の完成期になっている可能性があると思い実験をおこなった。

尚、郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部における「人を対象とする研究に関する倫理委員会」において、研究実施の承認を得ている。(2023-108)

1) 研究協力者

- ・対象者：学生 30人(A短期大学部 女子の短期大学部であるため全員女子)
- ・実施日：2023年6月8日(木) 9:00~10:00

2) 材料等

①台紙 1枚(ボール紙18cm×18cm)

台紙に発泡タイルが49枚貼り付けられるように14cm×14cmの正方形(2cmの方眼入り)を記載した。

②発泡タイル 50個(発泡ポリスチレンパネル：商品名『デコパネ』 5色×10枚)

デコパネ全32色の中から、PCCS(日本色彩研究所表色体系)の心理四原色に近い色の高彩度の4色(品名：赤、黄、グリーン、ブルー)を選び、それぞれ2cm×2cmのサイズにカットし、黒を加えて5色×10枚=50個を1セットとした。発泡タイルには片面に両面テープを貼りつけた。

資料1) 短大生の色面構成のための材料



3) 実施方法

材料を配布する前に実験の目的を説明し、協力したくない場合には実験に参加しなくても構わない旨を改めて伝えた。学生全員の了承を得られたので、1人ずつビニール袋に入れた材料(①台紙1枚、②発泡タイル50個)を配布し、台紙に描かれている正方形の方眼すべてに発泡タイルを貼るよう依頼した。さらに、完成した作品の天地左右がわかるよう、周囲の余白に天を表わす方向で矢印を記すよう依頼した。両面テープの剥離紙は、余った発泡タイルと一緒にビニール袋に入れてもらい、発泡タイルを貼り終えた台紙と共にすべて回収した。実験の実施前後の説明時や制作中に質問や意見等はなく、最後まで問題なく実施することができ、全員の作品を回収することができた。学生には取り組んだ作品で何を表そうとしたのかを別紙に記載してもらうことも検討したが、言葉による説明に偏る可能性もあることから今回は採用を見送った。

4) 結果

30人分の実験について以下のように実施・分析した。

短大生に発泡タイルが49枚貼り付けられる台紙を配布し、発泡タイル50枚(5色×10枚)を好きなように貼ってもらいモザイク画のように仕上げてもらうという実験を行った。

その結果、色面構成Aと名付けた群は30作品のうち3作品(10%)であった。取り組みの様子を見ていると制作時間が短く事務的に処理しており、色の順番(配置・配列)や色の組み合わせ(配色)、絵画的表現へのこだわりはあまり見られず、何かを表そうとする特別な意図は感じられなかった。

それ以外の27作品(90%)は、取り組み方や作業の手際などに差異は見られたものの、何らかを表現しようとする試みが構図の一部ないし全体に反映されていた。そして半数がリピート(反復)やシンメトリー(対称)を意識して色面構成に取り組んでいた。発泡タイルを貼る前に台紙に発泡タイルを並べてからそれぞれの色の位置を検討したり、同じ色の発泡タイルをまとめて置き、色面積の大きさや印象を確認したり、隣り合う色と色の組み合わせを試したり、また台紙の中心となる位置を確認してからポイントとなる発泡タイルを置いたりする様子が見られた。

色面構成Bと名付けた群は5作品(17%)で、全体ではなく一部に、色の順番(配置・配列)やシンメトリー(対称)などの規則性があり、イメージを表現しようとする何らかの意図が感じられた。

色面構成Cと名付けた群は6作品(20%)で、青い発泡タイルで空を、赤い発泡タイルで太陽を、黒い発泡タイルで地面などを表し、またそれらを組み合わせで風景として見えるような絵画的表現を試みていた。他に、絵文字の笑顔マークのような配置を試みたものもあった。

色面構成Dと名付けた群は16作品(53%)と最も多く、色による平面構成のような配列で全面的に規則性が見られ、リピート(反復)を試みている部分もあった。色の順番を決め1つのユニット(まとまり)を繰り返しながら外周を一周させたものもあった。また任意の2色を交互に配置して市松模様を構成したものがあった。

反省すべき点として、発泡タイルの数が不足したことを挙げる。本来であれば、全面を一色で仕上げることも予想して材料を用意するべきであった。リピート(反復)やシンメトリ(対称)を意識して構成しようとした学生が27人(90%)いたにもかかわらず、発泡タイルの不足により意図した画面構成を完成させることができず、未使用の別の色で代替したことが明確にわかるものが一定数あった。

表1にまとめたものを記す。

<実験2>

次に幼児の色の応答性についての実験を行った。

東北地方のB幼稚園に幼児期における色の応答性を探るため実験の協力を依頼した。園は実験用として別室を用意してくださり、3歳～6歳までの男女の園児を2人ずつ交代させながら連れてきてくださった。園児の中には初めて会う部外者に対し少し動揺し、警戒感を持つなどして席に着くまで時間がかかることがあった。そのような場合は園児が落ち着くまで付き添うなどの支援もしてくださり、園の先生方には心から感謝を申し上げたい。

短大生の実験における発泡タイル不足の反省を踏まえ、園児の実験では発泡タイルの枚数を1色につき17枚(予備を含む)用意し、台紙に1色だけで配置し完成させることができるようにした。結果的には作品を1色で仕上げた園児はいなかったが、発泡タイルの色不足による代替という事態は防ぐことができた。

短大生では有彩色5色だった発泡タイルの色数を園児では有彩色3色のみとした理由は、年少にあたる3歳児は、東山らによれば「自分がイメージしたことを象徴的に表現する時期」⁶⁾であり、野村によれば「視覚も明度反応から色相反応に移行していく時期と考えられ、明度反応としての[黒]よりも彩度の高い[赤]により興味を示す」⁷⁾「一枚の絵に対する平均使用色数は3歳児で3.7色であるが、命名期に属する幼児では、1-2色が多い」⁷⁾とあり、また森らによる「色彩の嗜好性の官能評価より、幼児は明るい色を好み、暗い色を嫌う傾向が見られた。彩度・明度が100%のものが一番好まれ、高彩度・高明度のものが好まれるという結果が得られた」⁸⁾とあることを参考にしたからである。年少クラスにあたる3歳児は、赤・青・黄などの色の区別や単純な形の違いを認識できるようになっている時期であり、高彩度色の3色であれば、ほとんどの園児がモザイク画的表現の課題に取り組めると判断した。

また発泡タイルのサイズを大きくした理由は、幼児が2本ないし3本の指で発泡タイルをつ

表1) 短大生による色面構成

	作品数 (%)	特徴など	作品例
色面構成 A	3 作品 (10%)	構成に特別な意図は感じられない	
色面構成 B	5 作品 (17%)	構成の一部に何らかの意図を感じる	 <div> <p>正方形を上下2つのブロックに分けて使用する色を限定している</p> <p>色ごとにまとめて何かを表現しようとしている部分がある</p> <p>中央に赤の正方形を置き、周囲は対称性を意識して配色している</p> </div>
色面構成 C	6 作品 (20%)	構成に絵画的表現(花、風景など)を試みている	 <div> <p>花、空、大地を表現したように感じられる</p> <p>草木と大地、空と太陽を表現したように感じられる</p> <p>シンメトリーを意識し、中央にシンボリックなモチーフがある</p> </div>
色面構成 D	16 作品 (53%)	構成に規則的な色の配列(順番など)や反復を試みている	 <div> <p>黒、青、緑、黄、赤の順に横に改行しながら反復を試みている</p> <p>左右対称を意識して色を配置している</p> <p>対角線を意識して色を配置している</p> </div>

まみ両面テープの裏紙を剥がして台紙に貼るという一連の作業において、発泡タイルは小さすぎない方がよく、また台紙のマスをすべて埋める作業を複数回繰り返すことになるためである。短大生で試みた49ヶ所の貼付け回数は多すぎるのではないか、さらに園児が興味を持って取り組める時間は長くても10分～15分程度が適切ではないか、と判断したことによる。

尚、郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部における「人を対象とする研究に関する倫理委員会」において、研究実施の承認を得ている。(2023-108)

1) 研究協力者

・対象者：園児 30人(B幼稚園 男児15人・女児15人)

3歳：男児5人・女児2人 4歳：男児6人・女児5人

5歳：男児4人・女児4人 6歳：男児0人・女児4人

・実施日：2023年7月21日(金)・7月31日(月)・8月2日(水)・8月3日(木) 4日間
10:00～12:00

2) 材料等

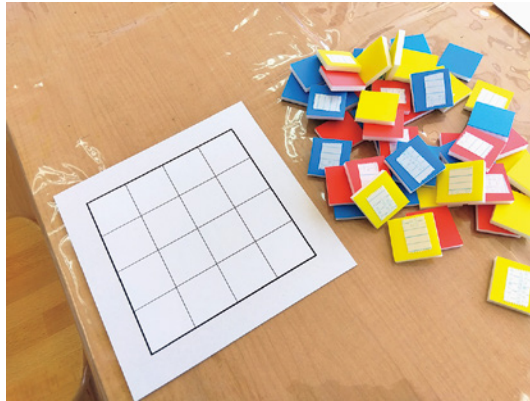
①台紙 1枚(ボール紙17cm×17cm)

台紙には、発泡タイルが計16枚貼り付けられるよう作成した12cm×12cmの正方形(3cmの方眼入り)の用紙を貼り付けた。また裏には、実験の実施日、施設名、性別、年齢、その他の項目を記載する用紙を作成して貼付し、天地左右がわかるようにした。

②発泡タイル 51枚(発泡ポリスチレンパネル：商品名『デコパネ』 3色×17枚)

デコパネ全32色の中から、PCCS(日本色彩研究所表色体系)の心理四原色に近い色の高彩度の3色(品名：赤、黄、ブルー)を選び、それぞれ3cm×3cmのサイズにカットして3色×17枚=51個を1セットとした。発泡タイルには片面に両面テープを貼りつけた。発泡ポリスチレンパネル(商品名：デコパネ)全32色の中から選んだ色は、短大生では5色(品名：赤、黄、グリーン、ブルー、黒)、幼稚園児は3色(品名：赤、黄、ブルー)で、それぞれPCCS(日本色彩研究所表色体系)の心理四原色に近い色として選んだ。心理四原色は日本色彩研究所が「最も赤らしい赤」「最も黄色らしい黄色」「最も緑らしい緑」「最も青らしい青」をアンケート調査によって決め、PCCS色相環の中に組み入れた色である。発泡ポリスチレンパネル商品の色は心理四原色の色見本と同じではないが、比較的近い色であることから代用しても不都合はないと判断した。また、短大生については、無彩色の白、黒、灰色の3色から黒を選び追加した。幼児期に使用頻度が高いと思われる色材のクレヨンの中で、黒は白や灰色と比べると手に取る機会が多い色であり、馴染みのある色だと考えたことによる。なお、商品名のブルーはこれより「青」と表示することとする。

資料2) 園児の色面構成のための材料



3) 実施方法

園児は2人ずつ机を挟んで斜めに向かい合うように椅子に着座し、机上に材料①台紙1枚②発泡タイル51枚)を置き、台紙の方眼すべてに発泡タイルを貼るよう説明した。両面テープの剥離紙は、余った発泡タイルと一緒にビニール袋に入れ、発泡タイルを貼り終えた台紙と共にすべて回収した。実験を拒否した園児はいなかった。

4) 結果

色面構成Aは30作品のうち21作品(70%)と最も多かった。色の順番や貼る場所にこだわって考え込んだりすることはなく、無作為に発泡タイルをつまみあげ、左上から右横に貼っていく園児が多かった。台紙の下方からや、右の列から左に向かって縦に貼っている園児はいなかった。発泡タイルに両面テープが貼られていることを見つけるとすぐに裏紙を剥がす園児が多く、「これ、はがすの?」と聞いてから剥がす園児もいた。自分で剥がそうとしたができず「やって(剥がして)」と言った園児は1名だった。その園児にはまず発泡タイルを選んでもらい、裏紙を剥がしてから発泡タイルを渡し、好きな場所に貼ってもらった。




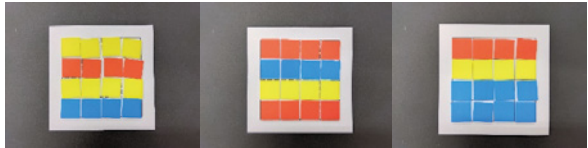
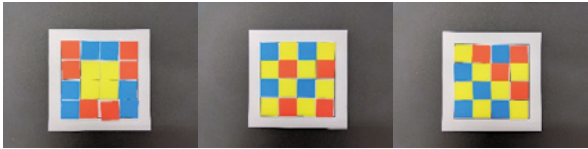
色面構成Bは3作品(10%)で、発泡タイルを貼る前に「青が好き」と言った女兒(No13作品)は、青の発泡タイルを16枚中11枚貼った。また、「赤が好き」と言った男児(No17作品)は赤の発泡タイルを16枚中10枚貼り付けた。

色面構成Cは該当作品がなく(0%)、絵画的表現(笑顔、花、風景など)を試みた園児はいなかった。

色面構成Dは7作品(23%)あり、列ごとに色を決めて貼ったり、任意の2色を交互に貼り市松模様にした園児がいた。

表2にまとめたものを示す。

表2) 園児による色面構成

	作品数 (%)	特徴など	作品例
色面構成 A	21 作品 (70%)	構成に特別な 意図は感じら れない	 No.3 (5 歳男児) No.4 (5 歳女児) No.16 (4 歳男児)  No.20 (4 歳女児) No.26 (6 歳女児) No.29 (4 歳男児)
色面構成 B	3 作品 (10%)	構成の一部に 何らかの意図 を感じる	 No.8 (4 歳男児) No.13 (6 歳女児) No.17 (3 歳男児)
色面構成 C	0 作品	構成に絵画的 表現 (花、風景 など) を試みて いる	—
色面構成 D	6 作品 (20%)	構成に規則的 な色の配列 (順 番など) や反復 を試みている	 No.1 (4 歳男児) No.2 (5 歳女児) No.30 (5 歳男児)  No.9 (4 歳男児) No.12 (6 歳女児) No.27 (5 歳男児)

Ⅲ 考察

1. 短大生と園児の作品の比較から

今回の実験により、構成に特別な意図は感じられないとした「色面構成A」は、短大生では3作品(10%)で、園児では21作品(70%)となり、それまでの色知覚や色によるコミュニケーション経験の差によるものと思われた。短大生については、色で何かを表現することへの興味の無さや作業の手間に対する抵抗があったかもしれない。短大生の色面構成の割合はあらかじめ予想されていたものと相違はなかったが、色面構成に特別な意図が感じられなかったとしても、当然ながら各自の個性や感性が内包されていないというわけではないだろう。園児においては色への興味・関心よりも、発泡タイルをつまむ、両面テープの裏紙を剥がして貼る、などの運動機能としての興奮である「手指の巧緻性」の方が優先されたのではないか。

作品構成の中で、全体でなくても部分的に何らかの意図を感じるとした「色面構成B」は、短大生は5作品(17%)で、園児は3作品(10%)であった。このグループの短大生は、色面構成Dに近い規則的な配列よりも色面構成Cのような絵画的表現に寄せようとしたものが多かった。それに対し園児には絵画的表現が感じられるものが1つも無かったため、園児とは明確な違いがあると感じた。表現したい具体的なイメージをある程度持っていて、発泡タイルを49のピースとして落とし込むことは短大生でも難しかったのかもしれない。具象的なものを表現しようとする場合は、色の制限がなく、色の彩度や明度に変化をつけたり、混色したりできる描画表現の方が取り組みやすいからである。そのため、発泡タイルによる色面構成では完全な状態に至らず部分的な表現となってしまった可能性がある。

幼児では、作品No.8(4歳の男児)が3列目までは列ごとに色が貼られたため、色面構成Dのグループになると思われたが、最後の4列目になったときに園児の手の動きが止まった。「あとはどうするの?」と聞くと「わかんない」と答え、結果的に4列目はそれまでのような1色だけの配列にはならなかった。4列目に使いたいと思う他の色がなかったからなのか、作業への集中力が途切れたことによるものかは不明である。

また作品No.13の6歳の女児は1列目の左から黄、赤、青、赤と発泡タイルを順番に貼ったところで「やっぱり青がいちばん好き」と話し、それ以外の場所のほとんどに青を貼りつけた。作品No.17の3歳の男児は「赤が好きなの」と赤の発泡タイルをランダムに半数以上貼りつけてから、隙間を埋めるように黄と青の発泡タイルを貼った。この作品No.13と作品No.17の園児は、自分の中にあるイメージの輪郭がまだ明確ではないが、発泡タイルを選んだ理由を説明しており、色の嗜好性の発信と受け止めることができる。自分が好む色と好きな色の名前をリンクさせることができた。自分が好む色で発泡タイルを半数以上貼りつけ大きな色面を作ったことは、色に対する応答性の深まりであり、個性の萌芽ととらえることができる。なお、ジェンダー的関わりとして男の子の色は青、女の子の色は赤というイメージの認識をした時代があるが、作品No.

13と作品No.17の園児はそれとは違う結果となった。幼児をとりまく生活環境や家庭環境の変化などの影響も今後は視野に入れて、検討を重ねる必要がある。

絵画的な表現を試みているとした「色面構成C」は、短大生は6作品(20%)で、園児には見られなかった。短大生でもイメージ通りにはできにくかった様子があり、作品点数は予想したよりも少なかった。発泡タイルでの構成はやはり描画表現とは違うやりにくさがあったと思われる。モザイク画では色による計画性がある程度必要である。表現したいものとなっているか色や形の見え方を確認する際に、色の境界をぼかすため、制作物を薄眼にして見たり、距離を取って離れた位置から確認したりすることがある。つまり内包されている具象的なイメージをモザイク画で表現することは難易度が高かったといえる。園児にはモザイク画による絵画的表現のものがなかったことから、発達段階においては形よりも先に色への反応が優先している可能性の表われである。

規則的な色の配列や反復を試みているとした「色面構成D」は、短大生では16作品(53%)、園児は6作品(20%)であった。短大生はリピート(反復)やシンメトリー(対称)を意識した構成が多く、モザイク画表現という設定にしたことで、絵画のような具象的なものよりも模様や柄のような抽象的な表現の方が取り組みやすかったと思われる。16作品のうち色の順番を決めてリピート(反復)させる構成にした作品は7作品、シンメトリー(対称)の作品は9作品であった。短大生は結果的に、色の配置によるリピテーション(繰り返し)やリズム(律動)というデザイン的な構成要素で仕上げた作品が半数を越えた。

園児の6作品のうち3作品は列ごとに色を決めたものとなった。リピート(反復)やシンメトリー(対称)を意識したと認識することもできるかもしれないが、発言からそこまでの意図はなかったと思われる。年齢構成に3歳の園児はいなかったが、4歳の男児が2名、5歳の男児が2名、5歳の女児が1名、6歳の女児が1名であった。作品No.1の4歳の男児は「ここは黄色(の場所)だから、こっちは赤(の場所)。」と、1列目と2列目のマス目を指でなぞり、色の配置場所を確認してから発泡タイルを貼った。同様に作品No.2の5歳の女児も、1列目に赤、2列目に青、3列目に黄を貼り、4列目を貼る際には「ここは、もういっかい赤だよ」と筆者に確認し、扱う色の順番に規則を与えようとしている様子が伺えた。青を2列で8枚とした作品No.30の5歳の男児も、色の順番と配置を意識する様子が見られた。なお、作品No.1と作品No.2の園児は、偶然一緒に向かい合って作業したことにより、お互いの様子を見て影響し合ったことも考えられる。また1色を4枚あるいは2枚でセットにした作品No.9の4歳の男児は、貼り付ける前に発泡タイルを台紙に並べ、色の配置場所を少し考えてから中央に黄の発泡タイルを4枚貼った。その後、周囲に赤と青の発泡タイルを2枚ずつセットにして貼るなど、この作品には規則性が感じられた。

6作品のうちの2作品は、任意の2色を交互に貼って市松模様を表現した園児が2名いた。

作品No12の6歳の女児はたくさんの発泡タイルの中から1枚の発泡タイルを指で指し示してからつまみ上げ、貼りつける場所にタイルを一度置いてから丁寧に貼る作業を繰り返し、枠からはみ出さないように貼る慎重さもあった。作品No27の5歳の男児は手際よく発泡タイルを選んでつまみ上げ台紙に貼る作業を繰り返していたが、最後まで貼り終えてから「まちがっちゃった。ここは黄色だったの」と、1列目にある青の発泡タイルを指して剥がそうとした。

2. 色による造形表現活動を通して個性はどのように出現するか

3歳～5歳児の色彩上の特徴について野村は「色と描かれている物との因果関係はほとんど見られない。無秩序に手あたりしだい色を使っているようだが、前に使用した色と次に用いる色のちがいは知覚しており、そのちがいを楽しむ様子も見うけられる。これは、はっきりとした色相の知覚が生じたことを意味する」⁷⁾とあり、今回の実験でも形よりも色への欲求が表れている時期ととらえることができる結果となった。絵を描く表現とは別の視点で色への関心を検証するため、あらかじめ限定した共通色の発泡タイルをモザイクタイルのように加工して実施したが、園児で絵画的な表現となった作品はなく、園児からは形を意識したと思われる発言もなかった。しかし大坪のように「ものを握る、破る、壊す、組み立てる、つくる等の活動は、子どもの感動、想像、思考、実現力などの基礎になる脳のシナプスの連結をより緊密にすると考えられている。そして、幼児の段階の表現の中に、すでにバランスやシンメトリー、集中性などの感覚のあることが指摘されている」⁹⁾と示している。色の嗜好性、色の順番(色の配置・配列)について発言した園児が数名おり、全体のバランス(均衡)やリズム(律動)を意識した園児は色への知覚がもたらす自我の発芽と見ることができる。無頓着で特別な意識を持たない段階から、色を使って特定のイメージを表現する段階への移行時期には個人差があると思われるが、色知覚の発達過程の延長上に色への応答性があることが垣間見られた。

今回のモザイク画的表現の試みとして、発泡タイルを赤・青・黄の3色としたことは、色の数としては不足だったかもしれない。無作為に発泡タイルを貼った作品のほとんどは、使った3色の発泡タイルの数に差が見られず、結果的には色の選択に対して個性としての意図が表れることにはならなかったからである。しかし、限られた色数であってもデザイン的要素が感じられるような構成作品はいくつかあり、色への応答性による個性の発現が感じられた。色のレイアウトによる心地よさや隣り合う色同士の配色効果など、色が持つ性質に対して何らかの感情が発生した可能性がある。

幼児に対する実験の結果から、発達による個性の萌芽が感じられた作品は色面構成Bの3作品と色面構成Dの6作品の計9作品であった。

台紙のマスの半分以上に好きな色をたくさん貼りつけた「色への嗜好性を優先した作品」(作品No13、作品No17)は、色そのものへの強い興味が表れている。好きな色についての発言はおそらく日々の生活において繰り返されていることではあるが、どちらの園児も好きだといった

色の発泡タイルをランダムに貼ってから、隙間を埋めるように別の色を貼った。好きな色とは別の色を近くに置くことによって見え方が変わる、という色の变化も体験したことになる。

また「色の配列を列ごとに分割して構成した作品」(作品No.8、作品No.1、作品No.2、作品No.30)は、自らの色の嗜好に加え、自分の中に秩序や規則性を生み出して表現した。3人の園児はそれぞれ好きな色の列を2列ずつ作り、次の列の色について発言するなどしてから作業に移った。これらの作品は列ごとに色の場所を決め、その理由を見出して仕上げたことが特徴である。ものの見方に対する視野の広がりが見えており、それが個性の萌芽につながっている。ちなみに、短大生では列ごとに色のラインを作り出した作品はなかった。

発泡タイルを市松模様貼り「色の配列を全体で構成した作品」(作品No.12、作品No.27)も、自分の中に一定の規則性を生み出して表現した。列ごとに色を変えた作品とは色の分割の仕方が違うが、作品No.27の園児は対角線をも意識した構成となっており、貼り間違いを正そうとした行為などは社会性の獲得を思わせる自我の発信と考えられる。

「複数のデザイン要素で構成した作品」(作品No.9)は、色の嗜好性に加え、全体と部分を意識した構成のバランスが見られ、内包されているイメージの具現化をさまざまな方法で試みた表現となっている。台紙全体にシンメトリー(天地左右の対称性)やリズム(律動)、リピート(反復)などの複数のデザイン要素が含まれており、色の面積比や色の配置のバランスなど、色による構成力の高さが印象的で、絵画的表現を試みる可能性も感じられた。台紙に発泡タイルを並べ色の配置を試してから貼りつけるという手順から几帳面さや慎重さなどが伺え、正確性を重視する姿勢が感じられた。

3. 今後の展開

幼児の実験では自分だけではなく自分の家族にもやらせたいと、台紙と発泡タイルのセットを持ち帰った園児が1名いた。幼児期における色の嗜好性や感情は流動的で、生活環境の影響も大きく不確定な要素を多く含んでいる時期ではあるが、色を使った造形活動への興味は他者をも巻き込むほどのものであると確認することができた。モザイク画表現による色の応答性の実験については、色数や枚数などの他、年齢層も広げるなど、今後もさまざまな検証を重ねながら継続して実施する必要があると感じた。

謝辞

本研究に協力してくださった東北地方のB幼稚園の教職員の方々と園児のみなさん、A短期大学部幼児教育学科の学生のみなさんに心から感謝を申し上げる。

利益相反の有無について

本研究発表に関連して、開示すべき利益相反関係にある組織等はない。

参考文献

- 1) 杉田陽一，産業技術総合研究所の研究グループ：「乳幼児期の視覚体験がその後の色彩感覚に決定的な影響を与える」，発表・掲載日：<https://www.aist.go.jp> 2004/07/27
- 2) 近江源太郎：色彩感覚 データ&テスト，監修 財団法人日本色彩研究所，22p-23p，2000
- 3) 横田咲樹，高橋敏之：幼児期における色彩教育の研究動向と保育実践の教育課題，大学美術教育学会「美術教育学研究」第52号，371p，373p-374p，2020
- 4) 山中俊夫：色彩学の基礎，文化書房博文社 第8刷，9p，2010
- 5) 仁科恭徳：若者世代の色彩感覚に関する実態調査，明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル，55p，2015
- 6) 東山明，東山直美：子どもの絵は何を語るか 発達科学の視点から，NHKブックス863，日本放送出版協会，63p，2007
- 7) 野村正則：幼児画における色彩的発達段階，別府大学短期大学部紀要1，87p，1982
- 8) 森俊夫，齋藤益美，梶尾恭子：幼児の嗜好する色彩特徴，岐阜女子大学紀要 第40号，51p，2010
- 9) 大坪圭輔：美術教育資料研究，武蔵野美術大学出版局，58p，2014

福島県内の非山林に生育するコシアブラの放射性セシウム濃度

Radiocesium Contamination in Koshiabura (*Eleutherococcus sciadophylloides*) grown in the Non-forestland in Fukushima Prefecture

武地 誠一*

金子依里香**

郡司 尚子***

影山 志保***

Seiichi Takechi

Erika Kaneko

Naoko Gunji

Shiho Kageyama

The Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident in 2011 caused severe contamination in the forested area in Fukushima prefecture.

Consequently, edible wild plants especially Koshiabura (*Eleutherococcus sciadophylloides*) were contaminated severely by radiocesium. Many municipalities in Fukushima Prefecture have restricted the commercial distribution of Koshiabura buds picked in forest even now.

So, in order to cultivate Koshiabura on decontaminated field, we investigated the ^{137}Cs activity concentration of Koshiabura grown in forest and non-forest, and respectively ^{137}Cs deposition in soil of the plant habitat at Katsurao-mura, Futaba-gun and Koriyama city in Fukushima Prefecture.

By this investigation, the ^{137}Cs activity concentration of the buds and leaves of Koshiabura grown in non-forest were very low compared to those of the forest, although the nearly same ^{137}Cs deposition in soil of the plant habitat.

はじめに

2011年3月に起きた東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、メルトダウンした原子炉から多量の放射性物質が飛散し、福島県内ばかりでなく広く東日本を汚染した。福島県は山林の占める割合が多いため、とりわけ山林は広くかつ厳しく汚染された¹⁾。原子炉から飛散した放射性物質の種類は多いが、現在、特に問題となっている放射性核種は、放出量とその物理的半減期からセシウム137(以下、 ^{137}Cs)である。セシウム(Cs)はカリウム(K)と同じアルカリ金属に属しているが、水に溶解しやすい反面、イオン半径が大きいことから水和、溶存するよりも粘土鉱物等へ強く吸着されやすく、またある種の粘土鉱物の末端構造から固定されやすいことも知られている²⁾。

山林に沈着した放射性Csは、樹冠から直接、あるいは樹幹等を経て、森林土壌に集積し、最終的にはリター層(落葉等が堆積した層)、FH層(リター層の下に位置し、落葉等が分解、集

* 国立研究開発法人 国立環境研究所福島地域協働研究拠点、郡山女子大学非常勤講師

** 郡山女子大学短期大学部健康栄養学科

*** 郡山女子大学家政学部食物栄養学科

積した層)から徐々に粘土成分を含むA層(FH層の下に位置し、腐植に富む鉍質土層)に移行すると考えられる³⁻⁵⁾。

森林土壌では特にFH層が発達し、ここに腐植物質に比較的緩く結合した多量の放射性Csが存在すると考えられる。FH層がほとんど存在しない耕地土壌とは対照的である⁶⁾。

コシアブラ(*Eleutherococcus sciadophylloides*)はウコギ科の落葉広葉樹で日本列島の森林地帯に広く分布し、春先に芽吹いた新芽は食用になる。俗に、「タラノメ」が山菜の王様、「コシアブラ」は女王と呼ばれ、主要な山菜である。東京電力福島第一原子力発電所の事故以降、コシアブラは他の山菜に比較し、際立って高い放射性Cs濃度を示したばかりでなく、濃度の低下傾向も明確でない⁷⁻¹⁰⁾。コシアブラによる放射性Csの特異的な吸収の原因については、根の分布域が浅いこと¹¹⁾、菌根菌の寄生¹²⁾、根内細菌の関与¹³⁾等が報告されているが、未だに明確とは言えない。また、コシアブラの放射性Csの吸収に関する植栽木と野生木の違いについては差が認められないとする報告¹⁴⁾はあるものの、詳しい報告はほとんど見当たらない。

一方、山菜の一つであるキク科ヤマボクチ属のオヤマボクチ(*Synurus pungens*)は、双葉郡葛尾村では「凍みもち」の原料として利用され、山林から採取利用されていたが、東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射性Csに汚染され、利用が困難となっていた。ところが、これを畑で栽培するとほとんど放射性Csを吸収しないことが分かった¹⁵⁾。放射性Csをほとんど吸収しない理由として、畑土壌にはFH層がなく、土壌有機物は粘土鉍物等と混在し、放射性Csは粘土鉍物等に移行、強く吸着・固定され、オヤマボクチに吸収されにくい物理化学的な形態となっていることが考えられた。

コシアブラにおいても同様の可能性が考えられ、東京電力福島第一原子力発電所の事故以前に畑や庭等平地に移植されたコシアブラの葉や若芽の放射性Cs濃度及びその株元の土壌の放射性Csの蓄積量を明らかにすることで、コシアブラの耕地における栽培法の開発に寄与する目的でこの調査を行った。

方法

1. 山林におけるコシアブラの放射性Cs濃度と土壌蓄積量

2022年4月28日、東京電力福島第一原子力発電所から西北西方向に約30km離れた福島県双葉郡葛尾村野川浜井場の山林内において、コシアブラの若芽を採取するとともに株元から土壌を採取した。対象山林は落葉広葉樹を中心にアカマツが散在する標高約550 mmの里山である。土壌は花崗岩質の褐色森林土壌、年間降水量は1,484 mm、年間平均気温は10.6℃(双葉郡川内村AMeDASポイント)である。調査地点は図1(図中●ポイント)のとおりである。

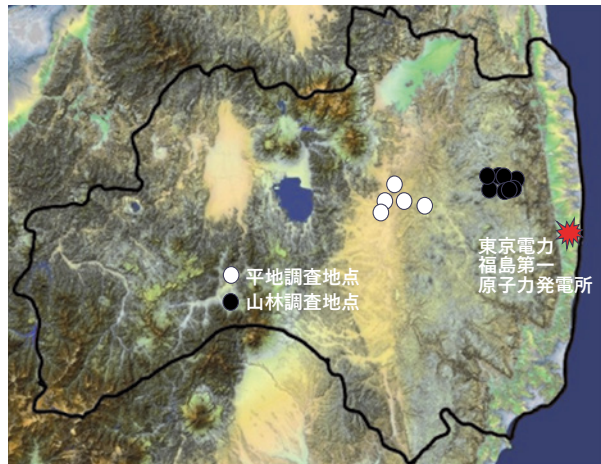


図1. 調査地点

(1) コシアブラ若芽の採取

調査コシアブラ樹の樹高は約1 mから2 mで、頂部及び側枝から若芽を3～4個採取し、ポリ袋に封入した(図2)。若芽を実験室に持ち帰り、水道の流水で洗浄後、キムタオル紙で水分を拭きとり、はさみで約10 mm角に裁断してよく混和した後、プラスチック容器(以下、U-8容器)に充填した。はさみは試料ごとに流水で洗浄した。



図2. 山林におけるコシアブラ

(2) 土壌の採取

FH層は調査コシアブラ樹の株元から概ね30 cmの土壌表面に半径18 cmの円形枠を置き、新鮮なりター(枯れ葉)を除去し、FH層の厚さに応じて、内側面積の全量又は半量を採取した。A層はFH層を除去した後、円形枠面積の1/4について移植

(3) 放射性Cs濃度の測定

U-8容器に入れた試料は高純度ゲルマニウム半導体検出器(GC2020-7500SL: Canberra Japan Tokyo, Japan)を用いて、 ^{137}Cs 放射能濃度の相対誤差が5%以内となるように測定した。計測用ソフトウェアとしてスペクトル/ガンマエクスペローラ(ミリオンテクノロジーズ)を用いた。検出器は定期的に標準線源(Co60点線源、U-8体積線源5種: 日本アイソトープ協会)を用い、校正を行った。

コシアブラの若芽については生重当たりの ^{137}Cs 放射能濃度(Bq/g)、土壌については単位面積当たりの ^{137}Cs 放射能濃度(蓄積量(KBq/m²))で表した。

2. 平地におけるコシアブラの放射性Cs濃度と土壌蓄積量

(1)コシアブラ成熟葉および若芽の採取

2022年8月23日～10月2日にかけて、東京電力福島第一原子力発電所から西方向に約60 km離れた福島県郡山市の畑や道路わき等(非山林、以下平地)において、コシアブラの成熟葉を採取した(図3)。平地の植生は雑草、茗荷等草本が生え標高250～350 mmの畑等である。土壌は黄色土、花崗岩質土壌、年間降水量は1,143 mm、年間平均気温は12.4℃である(郡山AMeDASポイント)。

また、2023年4月22日～5月7日にかけても同樹より若芽を採取した。



図3. 平地におけるコシアブラ

(2)土壌の採取

2022年8月23日～10月2日にかけて、コシアブラの成熟葉と若芽を採取した根元の土壌を採取した。採取地点は試料採取木を中心に根元から概ね30 cm離れたところに木を囲むように正三角形を描き、その頂点に当たる3か所とした。平地にはFH層が発達しないことから新鮮なリター(枯れ葉)を除去し、土壌表面に直径5 cmの円筒を押し込み表面から5 cm、5 cm～10 cmの2層にわけてA層を採取した。これらの土壌は風乾後、2 mmメッシュの篩で篩別、混合し、U-8容器に充填した。調査地点は図1(図中○ポイント)のとおりである。

(3)放射性Cs濃度の測定

放射性Cs濃度の測定は、1.「山林におけるコシアブラの放射性Cs濃度と土壌蓄積量」(3)に準じて行った。

結果および考察

山林土壌の ^{137}Cs 蓄積量はFH層が22～108 KBq/m^2 (図4)、総蓄積量は61～195 KBq/m^2 (図5)、コシアブラの若芽の ^{137}Cs 濃度は0.394～3.157 Bq/gFW であった(図4, 5)。図4および図5から、若芽の ^{137}Cs 濃度は食品衛生法の基準値(0.1 Bq/g)と比較して極めて高く、土壌の ^{137}Cs 総蓄積量との相関関係は低かったが、図4に示したようにFH層の ^{137}Cs 蓄積量との寄与率は $R^2=0.3602$ と比較的高かった。

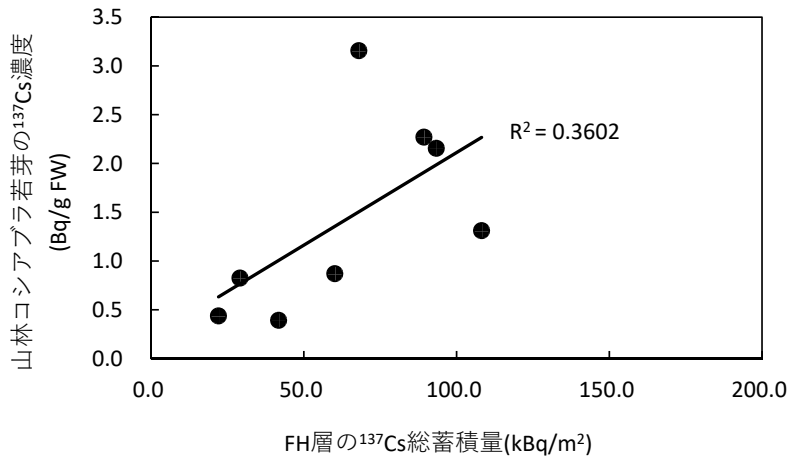


図4. FH層の¹³⁷Cs蓄積量と山林コシアブラ若芽の¹³⁷Cs濃度

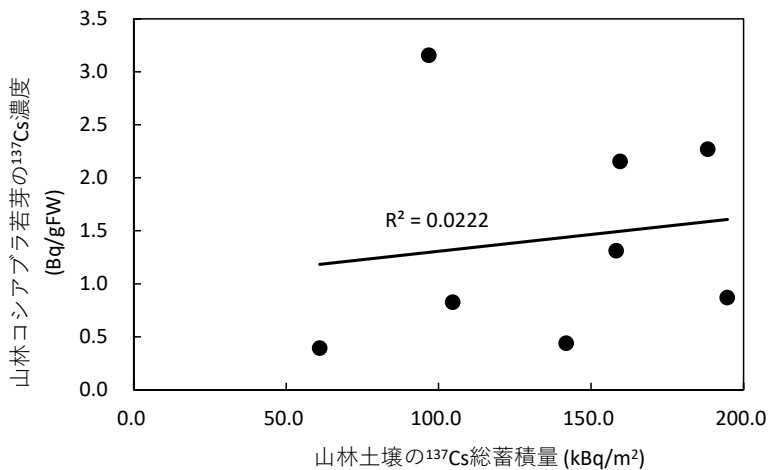


図5. 山林土壌の¹³⁷Cs総蓄積量と山林コシアブラ若芽の¹³⁷Cs濃度

一方、平地土壌の¹³⁷Cs総蓄積量は19～199 KBq/m²、コシアブラ若芽の¹³⁷Cs濃度はND(検出限界値は最大0.022 Bq/g)～0.018 Bq/gFWであった(図6)。また成熟葉からは¹³⁷Csは検出されなかった。

このように山林土壌と平地土壌の¹³⁷Cs総蓄積量はほぼ同レベルでありながら、コシアブラの若芽の¹³⁷Cs濃度には大きな違いがあることが明らかになった。観察によれば平地土壌には山林土壌と異なり、A層すなわち鉍質土壌層はあるもののFH層はほとんど認められなかった。図6に示したように平地のコシアブラがA層から¹³⁷Csをほとんど吸収していないこと、山林におけるコシアブラ若芽の¹³⁷Cs濃度はFH層における¹³⁷Cs蓄積量と相関が比較的高く(図5)、山林土

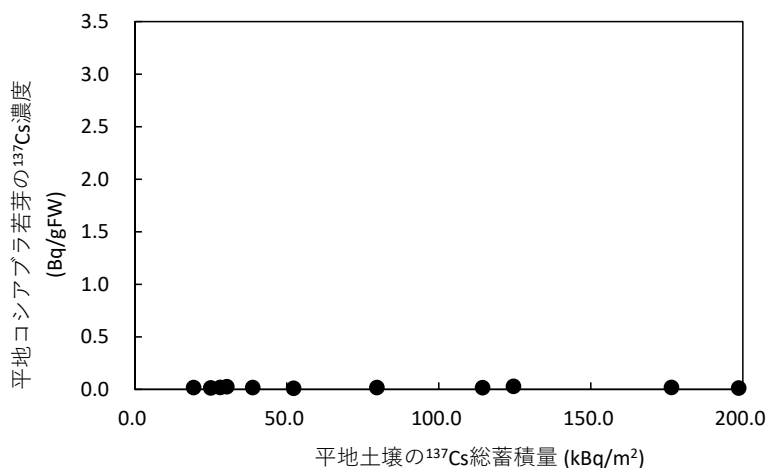


図6. 平地土壌の¹³⁷Cs総蓄積量と平地コシアブラ若芽の¹³⁷Cs濃度

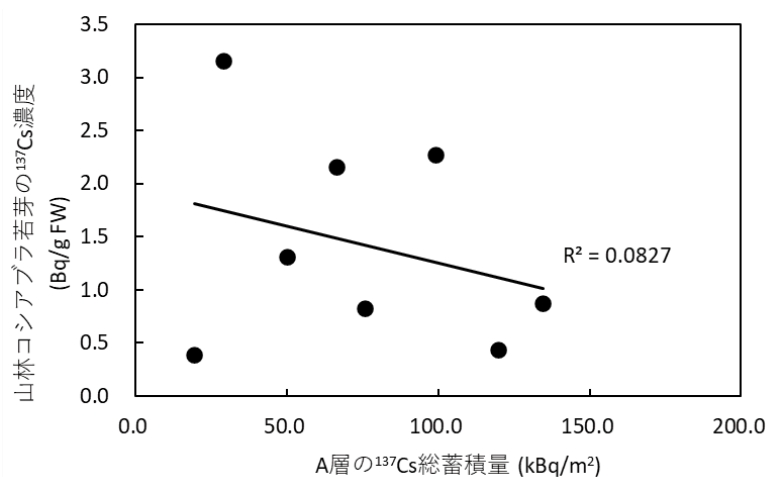


図7. A層の¹³⁷Cs蓄積量と山林コシアブラ若芽の¹³⁷Cs濃度

壌のA層の¹³⁷Cs蓄積量との相関が低いことから(図7)、山林のコシアブラは主に森林土壌のFH層に存在する¹³⁷Csを吸収していると考えられた。

コシアブラの放射性Cs吸収の特異性については、これまで根系分布の浅さ、有機物層(L, FH層)からの特異的吸収が指摘されている^{10, 14, 16)}。今回の研究結果は、これらの報告と合致する。

以上から、本報告では¹³⁷Cs総蓄積量がほぼ同レベルの山林土壌と平地土壌に生育するコシアブラと放射性Cs吸収を比較することにより、山林に自生するコシアブラのFH層からの放射性Csの吸収の重要性を明らかにするとともに、放射性Csに比較的軽度汚染された耕地における栽培の可能性が示唆された。

まとめ

2011年に起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故により、福島県の山林地域は厳しい放射能汚染に見舞われたことから、山菜特にコシアブラに深刻な放射能汚染が生じ、県内の多くの自治体は現在でも山林から採取されたコシアブラ若芽の流通を制限している。

本研究では、除染耕地におけるコシアブラ栽培法開発の一環として、福島県双葉郡葛尾村の山林、郡山市の畑や庭(平地)に生育するコシアブラの若芽、成熟葉及び株元土壌の放射性Cs濃度を調査した。

この結果、畑や庭に生育するコシアブラの若芽や成熟葉の放射性Cs濃度は、株元土壌の放射性Cs蓄積量がほぼ同等にもかかわらず、山林のコシアブラのそれよりも非常に低いことが明らかとなった。

謝辞

本研究は、福島イノベーション・コースト構想推進機構「2023年度 大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業」の助成を受け実施したものであり、ここに謝意を表します。

郡山女子大学臨時職員である吉田三保氏には試料の水分測定等に関して大変お世話になりました。感謝申し上げます。

引用文献

1. Hashimoto, S., Ugawa, S., Nanko, K. and Shichi, K. : The total amounts of radioactively contaminated materials in forests in Fukushima, Japan. *Sci. Rep.*, 2, 416; DOI : 10. 1038/srep00416 (2012).
2. 山口紀子 : 土壌への放射性Csの吸着メカニズム., 土壌の物理性, 126, 11-21 (2014).
3. Takahashi, J., Tamura, K., Suda, T., Matumura, R. & Onda, Y. : Vertical distribution and temporal changes of ^{137}Cs in soil profiles under various land uses after the Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Plant accident. *J. Environ. Radioact.*, 139, 351-361 (2015).
4. Nakanishi, T., Matunaga, T., Koarashi, J. & Atarashi, A.M. : ^{137}Cs Vertical migration in a deciduous forest soil following the Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Plant accident. *J. Environ. Radioact.*, 128, 9-14 (2014).
5. Sakai, M. *et al.* : Untangling radiocesium dynamics of forest-stream ecosystems : A review of Fukushima studies in the decade after the accident., *Environ. Pollut.*, 288, 117744, <https://doi.org/10.1016/j.envpol.2021.117744> (2021).
6. 伊藤祥子, 林誠二, 越川(金尾)昌美, 辻英樹 : 福島県森林土壌の放射性Csの鉛直分布と吸着形態の特徴, 日本森林学会大会データベース, 128(0), 734-, (2017).
7. Nihei, N., Nemoto, K. : Radiocesium accumulation in Koshiabura (*Eleutherococcus sciadophylloides*) and other wild vegetables in Fukushima prefecture. In : Nakanishi, T. M., O'Brien, M., tanoi, k., editors. Agricultural implications of the Fukushima nuclear accident (Ⅲ) : After 7 years.,

- Gateway East : Springer Nature Singapore; pp77-83 (2019) .
8. Takada, M., Yasutaka, T., Hayashi, S., Takagi, M., & Tagami, K. : Aggregated transfer factor of ^{137}Cs in edible wild plants and its time dependence after the Fukushima Dai-ichi nuclear accident., *Sci.Rep.*, 12, 5171. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-09072-5> (2022) .
 9. 田上恵子, 高田モモ, 保高徹生, 内田滋夫 : 山菜中の放射性セシウム濃度の経年変化 : 近年は減少しているのか? , *Proceedings of the 21st Workshop on Environmental radioactivity*, 98-103 (2020) .
 10. Hayashi, H. *et al.* : Explaining the variation in ^{137}Cs aggregated transfer factor for wild edible plants as a case study on Kosiabura (*Eleutherococcus sciadophylloides*) buds., *Sci.Rep.*, 13, 14162. <https://doi.org/10.1038/s41598-023-41351-7> (2023) .
 11. 小川秀樹 : コシアブラの ^{137}Cs 分布状況調査, *Proceedings of the 19th Workshop on Environmental Radioactivity*, 181-186 (2018) .
 12. Tanaka, C., Fukushi, A. & Matsuda, Y. : Arbuscular mycorrhizal fungi facilitate the uptake of radiocesium by *Eleutherococcus sciadophylloides* (araliaceae) -a pot-scale and field survey., *J. Forest Research*, 26 (2), 101-109 (2021) .
 13. Yamaji, K., *et. al.* : Root endophytic bacteria of a ^{137}Cs and Mn accumulator plant, *Eleutherococcus sciadophylloides*, increase ^{137}Cs and Mn desorption in the soil. *J. Environ. Radioact.*, 153, 112-119 (2016) .
 14. 清野嘉之, 赤間亮夫, 岩谷宗彦, 由田幸雄 他 : 2011年福島第一原子力発電所事故で放出された放射性セシウムのコシアブラ (*Eleutherococcus sciadophylloides*, 新芽が食べられる野生樹木) への移行, 森林総合研究所研究報告, 18 (2), 195-211 (2019) .
 15. 武地誠一 他 : オヤマボクチの現地栽培及び放射性Cs, *CREATION*, 30, 5 (2018) .
 16. 赤間亮夫, 清野嘉之 : コシアブラの放射性セシウム汚染—汚染程度が異なる地域間の比較および季節変化—, 関東森林研究, 66 (2), 225-228 (2015) .

研究ノート・報告

目 次

おもてなしのこころと家政学 ―旅の宿の空間分析を例として―	安田 純子	139
生活の社会化に関する研究 1 ―変化する家事労働―	大泉 由美	149
学習指導要領解説における「健康」の扱い ―中学校社会科、高等学校地理歴史科、公民科を例に―	坂倉 剛	159
博物館法改正とこれからの学芸員補教育	會田 容弘	175
【翻訳】ゲルト・アルトホフ「デモンストレーションと演出 ―ヨーロッパ中世の公共圏におけるコミュニケーションのルール」(1)	桑野 聡	191
福島市立図書館(第一次)の成立と明治後期の殖産興業政策の関連を探る	和知 剛	209
パパインによる絹タンパク質フィブロインの消化性	源川 博久	217
スポーツ栄養研究所新設	紺野 信弘 岡部 聡子 水野 時子 諏訪 雅貴 伊藤 央奈 金子依里香 西山 慶治	223
分析値を用いた学校給食の栄養摂取量把握の試み ～中学生一人ひとりのナトリウム摂取量に着目して～	亀田 明美 菅野 美穂 柳沼 和子	235
2023年度幼稚園教育実習後のアンケート結果分析 ～教育実習事前事後指導の内容の向上へむけて～	佐々木郁子 柳沼真美子	247
「チーム発想法概論」の授業実践におけるマインドマップ導入効果の評価	山口 猛	257

Research Notes and Reports

CONTENTS

Common Ground of Overlapping Between “OMOTENASHI” and Home Economics : An Approach from a Home Economics’ Perspective with Case Studies of Inns Junko Yasuda	139
A Study of Outsourcing of Life — Changing Homework — Yumi Oizumi	149
The Treatment of “Health” in the Explanation of Learning Guidelines — Examples from Junior High School Social Studies, High School Geography and History, and Civic Education — Go Sakakura	159
Revision of the Museum Law and Future Assistant Curator Education Yoshihiro Aita	175
Übersetzen und Erklärung : Gerd Althoff, Demonstration und Inszenierung. Spielregeln der Kommunikation in mittelalterlicher Öffentlichkeit Satoshi KUWANO	191
Exploring the relationship between the establishment of the Fukushima Municipal Library (the first) and the policy of reproduction and development in the late Meiji period Tsuyoshi Wachi	209
Digestibility of Silk Protein Fibroin by Papain Hirohisa Minagawa	217
Establishment of Sports Nutrition Research Facility Nobuhiro Konno Satoko Okabe Tokiko Mizuno Masataka Suwa Teruna Ito Erika Kaneko Keiji Nishiyama	223
An Attempt to Determine Nutrient Intake of School Lunches Using Analytical Values ~ Focusing on the sodium intake of each junior high school student ~ Akemi Kameta Miho Sugano Kazuko Yaginuma	235
Analysis of the Results of the Questionnaire After the 2023 Kindergarten Teaching Practice : Toward Improving the Content of Pre-ost Guidance for Teaching Practice Ikuko Sasaki Mamiko Yaginuma	247
Evaluation of the introduction of mind maps in the “Introduction to team thinking method” class. Takeshi Yamaguchi	257

おもてなしのこころと家政学

— 旅の宿の空間分析を例として —

Common Ground of Overlapping Between “OMOTENASHI” and Home Economics : An Approach from a Home Economics’ Perspective with Case Studies of Inns

安 田 純 子[※]

Junko Yasuda

Abstract : “OMOTENASHI” (hospitality) and home economics have a lot of relevance between them. In this paper, I consider about “OMOTENASHI”, especially I approach it from a home economics’ perspective, inclusive of O. F. Bollnow’s spaces analysis with case studies of inns.

キーワード (Keywords) : 旅行 (tourism) 家政学 (home economics) おもてなし (hospitality)

空間分析 (space analysis) 慰安 (refresh and heal)

1. はじめに

筆者は、昨年総合観光学会誌に「観光学と家政学との接点—家政学からのアプローチ」を執筆し、今年日本観光学会で「ツーリズムと家政学—おもてなしのこころ」を発表した。このように観光学と家政学の接点を見だし研究を続けている。そして、観光におけるおもてなしはボルノーの空間分析を踏まえて家政学的視座で考えると多くの点で関連性を見いだすことができると考え、この論文をまとめることにした。本稿では観光、特に旅の宿におけるおもてなし(ホスピタリティ)について考察をすすめる。

非日常の考え方には、マイナスの非日常があるだけではなく、観光によるプラスの非日常もある。観光によって毎日の生活から離れ異なった日を過ごすことで、日常を新たにし、人間生活をよりよく方向づけする。そのためには、安心・安全であることは言うまでもなく、安らぎの空間である“家”(内部空間—後に説明、筆者)的要素を要する。その雰囲気・気分を作り出すためには、きわめて家庭的な、言い換えれば家族的でフレンドリーなおもてなしのこころやホスピタリティが要となる。そして、家族いっしょの時間を過ごすことのできる場所や環境など、長期化が予想されマイナス要因が多い日常から一時的でも離れることができることがポイントとなるだろう。旅行時の宿泊先では、もてなしによって日常の家庭を離れた場所で家庭的な雰囲気がつくられ、それが癒しとなることが多々ある。では、家庭的な雰囲気とはどのようなことか。家庭的な雰囲気が癒しとなる理由の一つは、家政学におけるO.F.ボルノー¹⁾が提唱し関

※ 生活科学科

口富左氏²⁾が家政学の柱の一つとして考えた空間分析によって導き出せるだろう。

2. おもてなしについて

まずはおもてなしについてみておきたい。

もてなしとは、大辞泉によれば、1 客への対応のしかた。待遇。2 食事や茶菓のごちそう。饗応。3 身に備わったものごし。身のこなし。4 とりはからい。処置。取り扱い。と記載されている。おもてなしとは「もてなし」に「お」をつけて丁寧にした言い方で、広辞苑では、旅行者や客を親切にもてなすこと。歓待・厚遇。と記載され、その語源は、とりなし、つくろい、たしなみ、ふるまい、挙動、態度、待遇、馳走、饗応とある。

客を歓待するという意味のラテン語ホスぺス(hospes)を語源にもつホスピタリティ(hospitality)は、経済的利益や報酬(みかえり)を度外視した行為であり、自発的・非営利的・非作爲的性格が挙げられる。そのためおもてなしはホスピタリティ(hospitality)の訳とされることもあるが、まったく同じというわけではない。ヒエラルキー型で説明しているものも多く、それによると、おもてなしは相手に対する心づかいという点でホスピタリティの上位(最上位)とされることが多い。また、茶の湯から始まったと言われ、客や大切な人への気遣いや心配りという日本の文化・精神であり、表裏のないこころで客を迎えることとされている。

これまでおもてなしとホスピタリティの見解についての考察や、おもてなし文化などに関する論文はいくつか書かれているが、家政学の視座からのものは見当たらなかった。

3. “おもてなしのこころ”と“家”の持つ意味

人間がよりよく生きていくための根源の一つとして、労働や休息は重要なファクターとなり得る。その労働のためには、労働力の再生産のための休息とその原動力となる動機づけが必要である。ここでは“家”のもつ意味が考えられ、それは同時に旅行、特に“慰安のための旅行”の意味付けともなるだろう。

旅をするということは、非日常において外の世界(ボルノーのいう外部空間―後に述べる)に出ていることである。その中で人は、家庭的な雰囲気(内部空間―後に述べる―のような安らぎ)を求める。このためには、“おもてなしのこころ”は重要な働きをしていると考える。

旅の宿における“おもてなしのこころ”には、その根底に“家”の持つ意味を考える家政学の考え方が関与していると思える。つまり、非日常的な旅行における宿泊施設では、場所は異なっているけれども家庭生活において感じるのと同様の癒しと安らぎの空間であることが求められるからである。

旅行、特に慰安を目的にした旅では、ホスト側のおもてなし(近いことばはホスピタリティ)が期待される。そして旅人(ゲスト)は人と人とのふれ合いをも期待している。ここでいうホス

ピタリティとは、思いやり、心からのおもてなし、相手の立場になって考えることを意図し、相手に対して利便性を与えるというサービスとは異なっている。そして近年、人とのつながりや人間的な観点が重要であり、“人間くささ”や人間味のあるところからの素朴なもてなしへの価値が見直されている。物理的な意味における“家”(宿)においても精神的・抽象的な意味における“家”においても“サービス”とは異なる“おもてなしのこころ”(ホスピタリティ)が肝心となるだろう。

4. 安らいでいることと“おもてなしのこころ”

ボルノーは、人間は「安らいだ気持ち」という「内面的状態」が、「実存的絶望のあらゆる試練をこえて現在人間を囲んでいる世界にたいするのと同様に、未来にたいしても敬虔な信頼を維持する状態をさす」³⁾といい、「人間は絶対的な被護性の感情のなかで安らいでいるのである」⁴⁾という。また、「守護されていることを感じて、目ざめている注意力を放棄することができる…安らいで寝入ることができる」⁵⁾そして「人間は、内部世界(＝内部空間(筆者))の威嚇がまったく破壊的に迫ってきはいないことを、確信しているときには、安らいでいる」⁶⁾という。旅先で受ける“おもてなしのこころ”は、料金というサービスの対価は別とした経済的利益や報酬(みかえり)を度外視した行為であり、自発的・非営利的・非作為的性格を持っている。その意味で人は安らぎを感じることができるのである。

5. 「住む」ことと“おもてなしのこころ”

哲学に通じる家政学的視座において、人間は、その場所、“家”を空間的に占領し、時間的に過ごすことによって、安全な安らぎを感じ、秩序を身に着け、事物への愛情を見だし、幸福を感じる時、よりよく生きながら人間として自己の本質を満たしうる。ボルノーが「一つのたいなる真理(真実)」として挙げている「人間とは住まう者である」ということは、住むことが人間の本質であるとする人間規定を根拠としてあげ、人間は、ただそこに“いる”のではなく、“住む”存在であるという人間存在の規定を説いている。そして“住むこと”の意味は、護(守)られ護(守)る場所(家)における人間の真の存在、すなわち愛情と秩序という本質的価値をもって成長し、充足感(幸福感)に至る人間らしい存在となることと熟思する。空間と時間は人間の存在と密接な関わりを持っているが、旅行においては非日常的な空間と時間を過ごすことによって、人間は“住む”存在となりうる。その場所に愛情(家政というアガペー的な愛)と秩序をもった思いやりや相手の気持ちになって考える行い、つまり心からの“もてなし”が注ぎ込まれるとき、その空間は家庭生活において感じるのと同様の癒しと安らぎの空間になるのである。

6. “住む”ことと住まうものとして、そして旅することの一つの意義

哲学に近づく家政学的視点での“住む”ことは、家の中にということだけの概念ではなく、時空を越え、一定の場所に属して存在することである。“家”は存在の中心であり、混沌とした威力にたいして、人間を保護し、安らいだ気持ちを提供する。つまり、人間が根づくために城砦のごとく外部の混沌、あらゆる敵対する力から人間を護る。自然的に腐朽させる力だけではなく、現代社会の構造において徐々に加速化する破壊力をも象徴する“外部”において、人間が自己の本質を失い、そのために安らぎに達することができないという困難さにたいして、人間は“家”を求め、“住むこと”を求める。ある意味で旅人は“家”を求めている。そのとき旅人は「泊まる」よりも行って帰ってくる「住む」がふさわしい。宿主が「おかえりなさいませ」と客を迎え、「いってらっしゃいませ」と客を見送ることは、“おもてなし”の一つの表れだろう。

“家”は、単に物理的存在、すなわち家屋としての“家”としてだけではなく、確固とした立場を与えることをとも意味し、砂漠のようになったところに“おもてなし”は、水のように滲みていく。つまり、“家(家庭的な雰囲気)”と“おもてなしのこころ(ホスピタリティ)”—家政と旅は深い根底的なところで関係性を持っていると熟思する。

サービスとは違い、“おもてなしのこころ(ホスピタリティ)”は、人間の愛情(アガペ的な愛)と秩序から発し、またそれは感謝という形で相互関係として通じるものとする。このことは、非日常の中に日常の安らぎを求める旅、特に“リフレッシュのための旅行”や家族(との絆再確認)旅行では、ホスト側においてもゲスト側においても重要なファクターの一つとなるだろう。

7. 家政学における“家”の持つ意味と旅との関わり

7. 1 “家”の持つ意味

現代社会は、人間のすべてを営為、無秩序、散逸、崩壊へと導くあらゆる力を持っている。それは、D.リースマンが著した『孤独な群衆』において現代人の孤独と不安について言及したことを思い起こさせる。このような実存的思想漂う世界において、人間はいかに安らぎや希望に向かって指向するか、護られた空間“家”に“住まう”(生活する)ことによって人間の生の健全さは保たれる。ここに家政学における“家”の持つ意味を見いだすことができる。

ボルノーは「健全なもの」ということばを使って人間をみる。「健全であること」「健全なままであること」「健全になること」ということばを使って、「どんな傷害を受けても、再び健全である状態に戻ろうと努力する、何ものか」⁷⁾と人間を含む有機体を考える。そして、碎かれる可能性があるから「健全な」ということが可能で、「健全な世界のなかで自己を保持する」課題が生じ、二重の方向を指しているという。それは、「脅かしに対抗するところの、安らいだ気持ちを完成すること」⁸⁾と、「人間が自分の側で、力の及ぶかぎり自分を脅かす危険にたいして武装することを、要求する。」⁹⁾つづけて、「人間がこの世界のなかで一つの安全な避難所を創るよ

うに努め、人間に迫ってくる危険にたいして、自ら防壁を築くことによって、しゅったいするのである」¹⁰⁾と言っている。

7. 2 旅との関わり

関口氏が家政学に哲学を求める際にあたったサン＝テグジュペリの『城砦』¹¹⁾では、比喩的な表現で城砦(じょうさい)＝“家”を描写している。筆者は影山彌氏¹²⁾のご指導で精読したが、ここでは、外部世界(＝外部空間(筆者))の威嚇(混沌)から人間を護っていると同時に、「〈安らいでいること〉や希望などの徳についての、これまでの考慮の際に、人間が実存的動揺(不安や絶望－筆者)を超越して自分自身のなかに新しい確固とした点を築く」。¹³⁾旅する意味とそこに要する“家”＝もてなしと安心できる施設などの要素は、まさにこれを示唆するものと考えられる。

8. ボルノーの空間分析から

“おもてなしのこころ”とも密接に関係している癒しと安らぎの空間について考察するにあたり、前出の関口氏が「家政学とは何か」という問いに対してよりどころとした、O.E.ボルノーの空間分析についてみておきたい。関口氏は、家政学に実存的視点を取り入れ「家政学とは何か」の問いに対して、ボルノーの「人間とその家」¹⁴⁾にそのよりどころを求めた。

ドイツの哲学者・教育学者であるボルノーは、人間によって体験される空間には、根本的区分、すなわち「内部空間」と「外部空間」の区別が生ずるという。そして、「内部空間は人間がそこへ帰り、その中で自分が安全だと感ずることのできる休息と平和の空間である。つまり、守護の空間である。外部空間は労働と仕事の空間で、敵意に満ちた緊張の空間である。人間生活の健全さは、まさにこの2つ領域の均衡が正しくもたれていることにかかっている」¹⁵⁾と明言している。これについて関口氏は「人間存在の個人的意義と社会的意義の基盤を明確に表現しているとみていいのではないか」¹⁶⁾と述べている。

そしてボルノーは、内部空間にあたる“家”について、「家の私的空間を保持することは、人間の精神の健全さのために、欠かせない条件である。人間は家の中で、ただ肉体的に休養することができるだけでなく、世界(つまり外部世界－筆者)の忙しい仕事の中で精根が尽きていく時に、英気を養って再び仕事に出かけるために、再び内面的に自分自身を取り戻すことができるのである」¹⁷⁾と言っている。ここにおける“家”には単に場所的意味だけではなく、人間学的意味も含まれている。また、「人間自身は家の内部にいるか、外部にいるかで異なったものになること、ただ違った態度をとるということだけではなく、別の全く異なった意識構造をもつようになるということを注意しなければならない」¹⁸⁾としている。また、ボルノーは次のようにも述べている。「人間は偉大な使命を果たし、偉大な行為を行うために、家を出て、敵対的な生活の中へ出ていかねばならない。・・・この使命を果たすためには、人間は対極として、その中に帰り、再びそこから出ていくような、自分を保護してくれる世界を必要とする。」¹⁹⁾こ

れらは、物理的な意味でも精神的な意味でも、人間の生活には、内部(家)と外部が不可欠で、人間らしい生き方を展開するには、均衡がとれていることがその必要条件であることを示している。ボルノーが分析している“空間”とは物体が関係している広がり・場所としての“空間”だけではなく、“時間”との関わりも含む認識の形式でもある。また、具体的な場所の広がりだけではなく、人間存在のあり方を示している。

ボルノーの2つの空間分析から考えると、近年程度の大小はあれ、この均衡が崩れているのではないだろうか。つまり、外部空間といわれる緊張の空間の割合が内部空間といわれる休息と平和の空間より大きくなっていると考えられる。この“家”(内部)の存在が脅かされている。そして、具体的な意味での“家”はもとより抽象的な意味での“家”の存在までもが脅かされている。

9. 「内部空間」=守護空間(安らぎの空間)⇒旅の宿(宿泊施設)

8で扱ったボルノーの空間分析から、旅行における宿(宿泊施設)は、「内部空間」に相当し、その守護空間における休息と平和の要素は“おもてなしのこころ”であり、その役割の一つはこの安らぎの空間を充実させることと考える。関口氏は、内部空間は「身体的、精神的休養の空間として必要であり、外部空間にたち向かう新たな鋭気を養成し、また自己自身にたちかえる空間である」とボルノーがいつていると記した²⁰⁾。旅行自体は“家”の外である「外部空間」にいるわけであるが、そこにおいても宿(宿泊施設)は守護の空間であり、“家”つまり「内部空間」に相当する。ここに現代社会における家政学の新たな根拠といわれる“家”の持つ意味を理解することの大切さを感じる。

アットホームという言葉がある。その使い方をみると人間(生活)にとって家庭的な雰囲気がいかに大事であるかがうかがわれる。旅館などで到着の際に「おかえりなさいませ」、出発の際に「いってらっしゃいませ」という声かけをしているのを耳にすることがあるのは、外部空間においても内部空間(家)にいる(a'空間=内部二次空間)²¹⁾ようにくつろいでほしいという“おもてなしのこころ”が関与しているからなのだろう。もちろんそこには信頼感に満たされた空間としての安全と信頼と親しみの現存が必須の要件となる。

10. 人間性を回復させる旅の必要性和“おもてなし”との関わり

このところ、自然災害や紛争、感染爆発などが世界的に起こり、深刻な被害が拡散しており、“不安”が広がっている。これらの現状を踏まえると、“人間性を回復させる旅行”が注目されるだろう。ここでいう人間性とは、人間が人間らしく生活するということであり人間存在の在りよう人間の生活そのものの在り方であり、関口氏のいう「人間守護」²²⁾の理念をもって思索するものである。「人間はその家に守護されることによって人間らしくその本質を新生させ得る」というボルノーの指摘を関口氏は家政学の本質的な出発点と考えた²³⁾。

都会の殺伐としたモノより地方や地域の自然的・家庭的なモノが求められ、自然との共存を再発見できること、人工物から離れるという意味での自然に触れること、“時間”ではなく“時”を感じるという意味での歴史的なモノに触れること、人の“生”を感じるという意味での祭りなどに触れること、家族も含め人とのつながりを感じる事が“人間性を回復させる旅行”の鍵となるにちがいない。

人との距離をおくことに藤村正之氏は不安の鎮めとしての“癒し”をあげ、癒しの多元化として、大塚英志氏の言う「癒しとしての消費」—自分自身を癒すための消費と他者を癒すための消費の2つを取り上げている²⁴⁾。その消費行動が旅に向けられれば“慰安を目的とする旅行”指向や“観光ボランティア活動”に結びつくことになる。

“慰安”というからには、心にふれ安らかな気持ちになることができるだけでなく、安全と思える環境や安心できる環境が必要である。アメリカの心理学者A.マズローが、人間の欲求段階において「生理的欲求」の次に「安全の欲求」をおいている²⁵⁾ように、安全であることは、旅行の前提条件である。矢口祐人氏が「観光とは、ある土地の人がよその土地を訪れる行為であり、人と人との出会いを作り出す」²⁶⁾と述べているように、よその土地に行くのであるから、安全と思えることは大事である。特に慰安を目的にあげる旅行には、そこに行って武装を解除できる要因、家政学でいう“家”(内部空間)の雰囲気が多くなければならない。場所的にも食料的にもあらゆる点での配慮が必要であることは言うまでもない。

旅の動機付けにはどうしてもそこに行きたいと思わせるものや、そこでなければならないものがなければならない。リピート要因には特に人と人、人と自然のふれ合いが感じられることも大切だろう。そのためには、大勢での団体旅行というよりも家族単位が好まれ、地方や地域の自然的・家庭的なモノが求められる。たとえば民宿に泊まることや自然との共存を再発見できることなどが求められる。非日常における“家”的安らぎが求められるのである。

“慰安を目的とした旅行”、“ケアのための旅行”、“保養目的の旅行”では、“癒し”がキーワードとなり、人とのつながりを感じることができ、“命の洗濯”ができることも旅行の目的となり得る。“家族型の旅行”や、精神面においてリフレッシュできる“慰安を目的とした旅行”の現代における意味は大きく、『「楽しみを目的とする旅行」』という人間の社会的行動²⁷⁾という意味だけではなく、“気晴らし”・“気分転換”という意味で“慰安を目的とした旅行”の効果は期待できる。先に挙げたように、家政学では「生活主体としての個人・家族・コミュニティから対象を眺め、愛情、ケア、互惠関係、人間的成長、文化の伝承と向上など」²⁸⁾を視座に入れており、その意味で家政学の目的は、“おもてなし”や非日常の中に日常の家庭的雰囲気を求める“慰安を目的とした旅行”の在り方によりそうものであると示唆する。

しかし、サービス産業としての観光業においては、この“おもてなしのこころ(ホスピタリティ)”を“労働力商品”として提供しなければならないことは多々ある。人として個々人の内発

的な行為を売り上げと利益に貢献させるという矛盾にどう折り合いをつけるかが難しい。それは、ホストとゲストという関係において“おもてなし”もサービスに含まれるととらえ、そのサービスに対する対価として合理的に考えなければならないからである。本当の意味での環境や人に優しい社会が求められている今、サービスの提供も安売りではなく、責任をもった提供の仕方が重要視されるべきであり、もちろんその際はサービスといっても“こころ”と“気配り”をないがしろにすることは意味していない。

11. おわりに

本稿では、旅の宿を例として“おもてなしのこころ”と家政学について考察した。筆者は、家政学的発想から“おもてなし”に着目した。旅することは“非日常で生活する”ことであり、家政は家族を要員として“日常生活(暮らし)”のなかでの知恵と技術である。家政学は広い領域をもち、様々な角度からの思考が可能であり、生活からの発想に基づき、思考や行動において人間を中核に据えている。これまでみてきたように、“家”の空間(内部空間と外部空間)の考え方は、旅の宿にも通じるものである。ボルノーの空間分析を踏まえて家政学的視座で考えると観光におけるおもてなしは多くの点で関連性を見いだすことができる。“おもてなしのこころ”は旅する者への家族的な愛にもつながるメリットとなるだろう。この考察は、新しい試みとして日本の文化や精神に結びつき、その深い探究につながることをも期待している。

注)

- 1) O.E.ボルノー、チュービンゲン大学の哲学・教育学の教授、郡山女子大学における講演「人間とその家」は同大学学長関口富左氏(故同大学名誉学園長)に学問上の影響を与えた。
- 2) 関口富左、郡山女子大学学長(故郡山女子大学名誉学園長)『家政哲学』家政教育社(1977)の編著者。
- 3) O.E.ボルノー著 須田秀幸訳：実存主義克服の問題—新しい被護性、58頁、未来社、1969。

4) 同上

5) 同上

6) 同上、179頁。

7) 同上、193頁。

8) 同上

9) 同上

10) 同上

11) 『城砦』(じょうさい)について

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ(1900-44)といえば、『星の王子さま』の著者として有名であるが、他にもいくつかの著書を残している。『城砦』もその一つであるが、第2次世界大戦末期に飛行中失踪する直前まで手を入れていた手稿で、後に『城砦』として出版された。

12) 郡山女子大学名誉教授

- 13) O.F.ボルノー著：前掲書，167頁.
- 14) O.F.ボルノー著，須田秀幸訳：人間とその家，郡山女子大学紀要，Vol.3，1966.
- 15) O.F.ボルノー著：前掲書，118頁.
- 16) 同上
- 17) 関口富左編著：人間守護の家政学，118頁，家政教育社，1999.
- 18) O.F.ボルノー著：前掲書，121頁.
- 19) 同上，121頁.
- 20) 同上
- 21) 関口富左氏は、内部空間をa空間、外部空間をb空間とし、その接点を人間存在の確認として、aとbとの均衡が大事だとした。またこれらの空間を別な見方から考え、内部空間(家)は外部空間に囲まれていて、寄宿舎や病院や介護施設はb空間に飛び出たa'空間(内部二次空間)とした。同様な意味で、旅行における宿(旅館等)はa'空間といえるだろう。
- 22) 人間を守り護る意で、家政学の中心理念として、関口富左氏が措定したもの。(日本家政学会：家政学用語辞典，133頁，朝倉出版.)
- 23) 関口富左編著：前掲書，133頁.
- 24) 藤村正之：〈生〉の社会学，77-80頁，東京大学出版会，2008.
- 25) A.マズローは、人間の欲求段階を1 生理的欲求、2 安全の欲求、3 社会的欲求、4 自我欲求、5 自己実現の欲求とし、段階的に高度化すると提唱した。
- 26) 矢口祐人：ハワイの歴史と文化，166頁，中央公論新社，2009.
- 27) 前田勇・佐々木土師二監修，小口孝司編：観光の社会心理学，6頁，北大路書房，2006.
- 28) 日本家政学会 家政学原論部会編：やさしい家政学原論，146頁，建帛社，2018.

生活の社会化に関する研究 1

— 変化する家事労働 —

A Study of Outsourcing of Life

— Changing Homework —

大 泉 由 美

Yumi Oizumi

The purpose of this study was to understand the current state of socialization of domestic work. In a society where working and living styles are changing, the significance of doing housework has changed with the times and with changes in society. Activities performed at home, including housework, used to be "passed down from parents to children," but now the meaning of this has begun to fade. Even child-rearing and nursing care, which were originally functions of the home, have been shifted to services. It is necessary to focus on the new household expenditures that arise with new domestic work.

はじめに

家事労働は家庭生活を営む上で必須の仕事として、長い間主婦(女性)の手によって営まれてきた。その家事労働も、近年さまざまな外部からの影響によって大きく変化している。全てが家の中で行われてきた家事は、現在では自宅(自分)で行うもの、機械に任せるもの、外部サービスに任せるもの等、人により様々なやり方を組み合わせており、重点をおく所もかけ方も時間のかけ方もその家庭により異なっていて、かつてのように典型的な家事像をとらえることは難しくなっている。例えば、今まで銀行に行かなければできなかった振り込みや残高照会などはネットバンキングとして自宅でインターネットを利用し行うことができる。また、集荷サービスや在宅介護サービス、ベビーシッターなど、様々な家庭外で行われていたサービスが家庭内に入り込んできている。これは、家庭生活を取り巻く環境の変化が、主婦(女性)の意識や行動に大きな影響を与え、家事労働にも変化をもたらした結果といえる。本研究では、このように家事労働に影響を及ぼす諸要因と家事労働の変化について実態を把握する。

1. 生活の社会化

現代の生活様式は、「生活の社会化」として特徴づけられる。それは、生活に必要な財とサービスを商品あるいは行政サービスに依存せざるを得ない都市的生活様式の形成ということである。具体的に言えば、衣・食・住・保育・介護・老後の暮らし・娯楽・水・燃料など、長く家

庭・家族の生活機能であったものが、企業の商品あるいは行政によるサービスという形によって代われ、今日、生活はこうした様々な商品および行政サービスを購入し消費することによって可能な状況にあるといえるだろう。

生活の社会化、都市的生活様式の形成の背景には、農業経済から工業経済への産業構造の転換があるといわれる。一般的に言って、農業社会段階では家族単位の小規模生産を主とした自給自足体制が支配的であり、家庭の多面的生活機能も相当程度の自己完結性を持ちえたと考えられる。ところが工業化の進展は、生産を家庭から切り離し、工場における生産と大量の労働者を生み出し、都市化と各種の生活手段を社会・公共的に依存せざるを得ない都市的生活様式を余儀なくしたのである。同時に、工業経済社会は、商品の生産・交換・消費という市場経済を経済の統合パターンとして商品集中社会を確立したのである。このようにみえてくると、工業化が世界の不可逆的傾向であるとすれば、生活の社会化、都市的生活様式の全般化も不可避的な事象であると考えられる。

商品集中社会とは、I.イリイチ¹⁾によれば、市場経済が経済の総合パターンである、すなわち市場経済が経済を全面的に支配している社会を意味している。これは、殆どすべての生産が商品生産、市場で販売するための財とサービスの生産であり、生活はそうした商品としての財とサービスの購入と消費に頼らなければ不可能な社会をいう。それゆえイリイチのいう商品集中社会とは、生活の社会化が全面化、全般化している社会であるということがわかる。市場経済が経済の総合パターンとして成立した時期は、西欧経済史においては、工業化を生み出した産業革命期にあたる19世紀以降のことである。このことを経済人類学者、カール・ポランニーは市場経済の離床²⁾(disembedding)と呼んだ。そしてこの状態は人類史上はじめてであるといわれるが、経済の総合パターンとしての市場経済が確立した背景には、本来、商品ではない、労働(人間)、土地(自然)、貨幣などの商品化と市場化があったといわれる。この点について、ポランニーは次のように記している。「しかし、労働はあらゆる社会を作り上げている人間そのものであり、土地はそのうちに社会が存在する自然環境そのものである。したがって、それらが市場メカニズムに包摂されるということは、社会の実体(substance of society)そのものが市場の諸法則に従属させられることを意味するのである。³⁾」また別のところでは、「…すなわち、労働、土地、貨幣は本源的生産要素であること、そしてこれらもまた市場に組み込まなければならないということである。事実これら三市場は経済システムの中できわめて重要な部分を形づくっている。だが、労働、土地、貨幣が本来商品でないことは明らかである。⁴⁾」経済の総合パターンとしての市場経済は、人間、自然、の商品化を意味する市場社会の成立によって実現したということである。

関口富左偏著『家政哲学』においても、生活の社会化が、19世紀の産業革命による工業化と、それに伴う人口の労働層化と都市化に起因したことが次のように記されている。

「近代ヨーロッパに始まる工業の発展とともに、人口は急速に労働者層化し、また工業の発展を中心として都市への人口集中が起こった。今日、更にそうした都市人口の集中・増加の傾向はメトロポリタンやメガロポリスと呼ばれる巨大都市にまで成長したのである。今後とも、工業化は好むと否とにかかわらず世界史的傾向にあり、したがってそれに即応して普遍的な都市化と都市の爆発を予想することができるのである。ところで経済上の変化である工業化は社会形態上と生活様式の上に実に大きな変化をもたらしたのである。一般的に言って、農業社会段階では家族単位の小規模生産を主とした自給自足体制が支配的であり、家庭の多面的な生活機能も各家庭の責任において相当程度の自己完結性を持ち得たと考えられる。ところが工業の進展は生産を家庭から切り離し、生産は多数の生産手段を欠いた工場労働者による社会的生産、すなわち「生産の社会化」をもたらしたのである。また、生産の社会化はそれが起因となって農村的生活様式の封鎖性を揺り動かし、社会形態的には大衆社会を生み出し、生活様式の面では各種の生活手段を社会・公共的に依存せざるを得ない都市的生活様式を余儀なくしたのである。すなわち「生活の社会化・外部化」と呼ばれる現代に特有な生活様式の形成である。⁵⁾」

生活の社会化は、人間活動力を再生産するために必要なモノやサービスに依存する「家事労働の社会化」の形態をとっている。本稿における家事労働の社会化とは「私的・個別的に行われている家庭生活の機能が社会的なものに代替されること」[伊藤, 2015]と定義する。

産業革命を契機に社会的生産が家庭から企業に移行され、家庭には私的消費過程における労働が家事労働として残されてきた。しかし、工業化社会の進行で家事の省力化のために一般に洗濯機、掃除機、電気冷蔵庫、食器洗い機、電子レンジなどの耐久消費財が普及、工業化された商品の購入など、社会的生産過程で家事労働を軽減したり代替したりする「家事労働の社会化」が進行した。

2. 家事労働の社会化

2-1 家電製品の普及・変化と家事労働

家庭労働に大きな変革をもたらしたものに家電製品がある。第二次世界大戦後の20世紀後半には標準的な生活水準を目標に、家庭家電製品が各家庭に普及した。昭和30年代はじめ三種の神器として電気洗濯機、電気冷蔵庫、電気掃除機の出現に引き続き、様々な家電製品の普及が家事労働の軽減に寄与してきたことは言うまでもない(図1)。かつて、手洗いをしていた時代には洗濯はつらい家事のひとつと考えられたが、洗濯機の普及により洗剤を計量後はスイッチを押せば干すだけの時代となり、個人差はあるが楽な家事になったといえる。洗濯機は家事労働の必需品としての量的な充実から、現在では性能、利便性の向上や省力化を目指して全自動化、大型化、生活スタイルに合わせたコースの多様化がすすめられ質的な充実へと変化がみられる。また、女性の就業率上昇による家事時間の夜間、早朝へのシフトは洗濯機の静音化、予約

タイマーや洗剤自動投入機能導入を進めた。このような家電製品の変化は家事行動の変化を招いた。

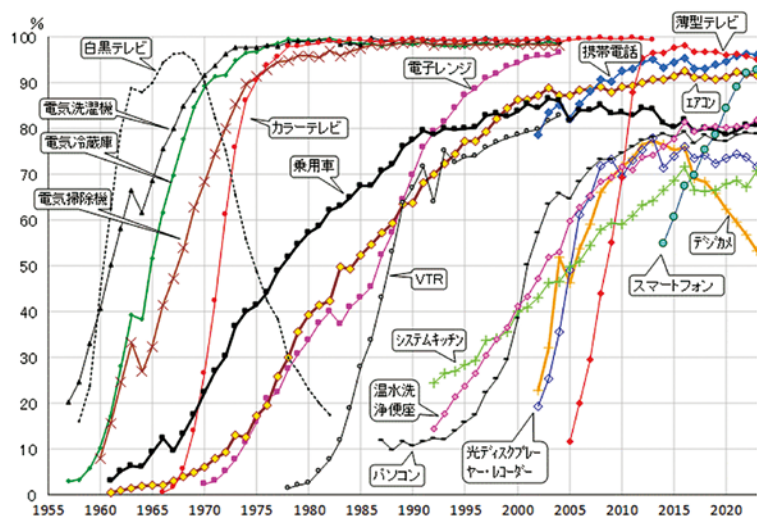


図1 主要耐久消費財の二人以上世帯普及率(内閣府：消費動向調査2023年)

電気冷蔵庫、電気掃除機、電気洗濯機、電子レンジについては2004年3月で調査が終了している。

例えば、洗濯機の全自動化、大型化は汚れ具合、素材や色などによる仕分け作業をなくした。掃除機の普及は昔からのたき、ほうき、雑巾による掃除から、掃除機をかけて空気清浄機を使用して終わりという形に変化した。冷蔵庫は、年々大型化し、食品のまとめ買いや冷凍食品の増加による買物、炊事の省力化を促した。以上のように、家電製品の今後の動向は主婦のライフスタイルや意識行動の変化とも相互に影響しあいながら、家事を変革していく鍵になる。

21世紀に入り注目されるのは、新たなテクノロジーとしての携帯電話・スマートフォンの普及率である。情報化の波とテクノロジーの進展が、日常生活を変えつつある。中でも、AI家電(Artificial Intelligence 人工知能を搭載した家電)やIoT(Internet of Things モノのインターネット)の登場は、家事労働に大きな影響を与えている。例えば、AIを搭載した冷蔵庫の場合、スマートフォンを提携して食材の在庫確認ができるため買い忘れを防ぐことができる。これらの家電製品のインターフェイスの多くは、タッチパネルや液晶画面からの操作が多いことから、だれでもが扱いやすいことも加速度的に普及した理由である。インターネットやAIの普及により、家事の分担がしやすくなり、家事分担は減ったが家事を担当する者の負担は変わらない。

2-2 家族形態の変化と家事

家族形態の変化として、核家族化の進展、単身世帯の増加、高齢世帯の増加等があげられ、単身赴任といった変則的家族形態も増加している。このような変化の中で、「親から子への家

事の伝承」はすたれ、掃除機や洗濯機などの機械化により、家事手伝いを子どもがしにくくなり、生活知識・技術の低下が懸念されている。家族の中での家事の担い手は依然して主婦(女性)であり、男性の家事参加は以前低い状況にある。しかし、最近では一人暮らしの男性や単身赴任の男性が増加し、ある程度自分の身の回りのことはできるようになってきているように思われる。

国が実施している調査では、「夫婦と未婚の子からなる」いわゆる核家族はもはや全世帯の4分の1となっている。その4分の1のうちの相当数は、高齢の親と50歳を超えた未婚の子の同居であり、未成年の子どもがいる核家族とは限らない状況である。このことを65歳以上の世帯構成をみると(図2)、1980年時点では半数以上が三世帯同居で暮らしていたが、今やその比率は1割強しかない現状である。65歳以上の世帯の半数以上が単身か夫婦のみで、2割が結婚していない子どもと同居している。高齢の親と未婚子との同居は、「8050問題」として社会問題化している。高齢化社会を迎え、今後は、高齢者の生活全般に、生活のしやすさへの配慮が必要である。

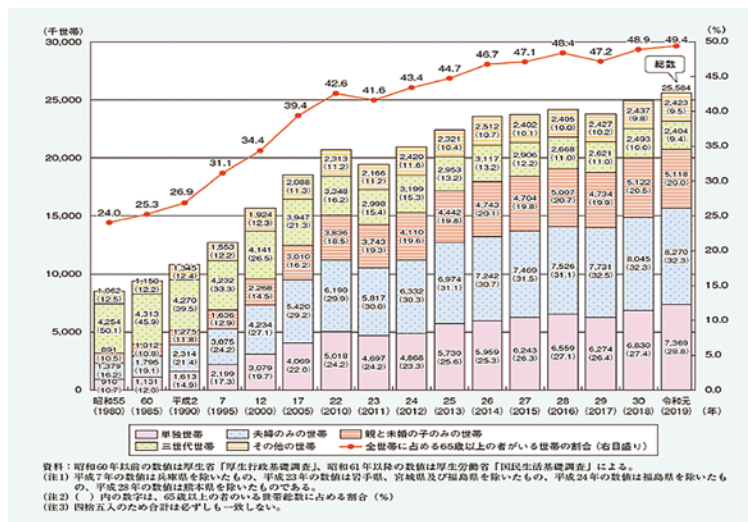


図2 65歳以上の者のいる世帯数及び構成割合と全世帯に占める65歳以上の者がいる世帯の割合
出典：内閣府令和4年版高齢社会白書(全体版)

家事の面においても、安全で楽に家事ができる住宅設備、製品が求められよう、さらに家事代行サービスなどの高齢者用福祉サービスも必要となる。この高齢者用福祉サービスを受ける際に、今までにはなかった家事労働に新たな労働が加わるのである。

3. 家事労働の社会化サービスの種類

家事が家庭外のサービスに依存するようになり、それをどのような受け皿が代替するかが重

要である。(一社)日本家政学会生活経営学部会編『持続可能な社会をつくる 生活経営学』の中にその受け皿をわかりやすく分類してある。

表1は伊藤(1990,pp270-271)⁶⁾による「家事労働の私企業労働(産業労働)、互助的労働並ならびに公務労働による代替」の表をもとに、社会化の提供主体別に家事労働の社会化の例を示したものである。表中に示すように「家事労働の社会化」の提供主体には、大別して、「民間営利部門(企業)=産業労働による代替」、「非営利部門(NPO、ボランティア、近隣住民など=互助的労働による代替)」、「公的部門(国・地方公共団体)=公務労働による代替」の3つがある。

表1 提供主体別にみた家事労働の社会化の例

	民間営利部門(私企業労働)による代替	民間非営利部門(互助的労働等)による代替	公的部門(公務労働)による代替
A 家事労働 (衣食住に関する労働)	買い物代行サービス、通信販売、レストラン、コンビニやスーパーの総菜、調理済食品、既製服、仕立て屋・リフォーム業、クリーニング、靴・カバンの修理業、家事代行業	生協などの共同購入、災害時のボランティアによる炊き出し、子ども食堂、住民団体やNPOによる衣服の交換会、住宅改修、団地や地域の互助会による草刈り、清掃、ホームヘルプサービスなど	自治体の産地直売システム、国立・公立学校・保育所の給食(自校・自園式)、災害時の飲食物や衣類・毛布のどの支給、家屋の修繕、ゴミの収集、廃棄物や汚物の処理、害虫駆除など
B 対人サービス (育児、教育、世話介護、看護)	ベビーシッター、企業が運営する託児所、育児用品や介護用品のレンタル・販売、塾、習い事、市販の学習教材、テキスト、離乳食・介護職など	共同保育所、共同学童保育、社会福祉協議会による子育てサロンやふれあいデイサービス、ファミリーサポート、NPOやボランティアによる補習塾、学校サポーターなど	公立の保育所、国立・公立の病院、福祉施設・機関、教育機関によって提供される各種サービス、育児や介護などの電話相談、助産師などによる家庭訪問など
C 家政管理 (計画、記録、情報収集、学習など)	食材宅配業者や食品メーカーなどによる献立・レシピの紹介、家計簿ソフト、企業のコンサルタントやファイナンシャルプランナーによる相談・家計診断サービスなど	生協や農協、ボランティア団体などの飲食会や料理教室における献立・レシピの紹介、社会福祉協議会や社会福祉法人によるワークショップ、セミナーなど	保健センターにおける対象別の献立・レシピ紹介、消費生活センターでの相談・助言、公的機関が主催する相談会、セミナーなど

出典：伊藤(1990).pp.270-271

表中、Aの家事労働は、衣・食・住に関するものを中心に民間営利部門(産業労働)により商品やサービスとして提供されている。

Bの対人サービスの家事労働のうち、社会福祉的なもの(育児、介護、世話)は1970年代までは公的部門(公務労働)による代替が中心であったが、1980年代の「福祉見直し」、1990年代の「社会福祉基礎構造改革」を経てその主たる担い手を民間営利部門、非営利部門とする代替が行われるようになった。

Cの家政管理労働の社会化については、その内容は情報化、テクノロジーの進展により質量ともに拡大し、複雑化・高度化している⁷⁾。

現実にはこれらの組み合わせも起きている。例えば、介護のように公的部門の委託を受けて民間営利部門もしくは民間非営利部門が代行するケースも見られる。

4. 家事労働の社会化に伴う新しい労働

私たちの生活は、家事労働の社会化の進展によって家事労働が軽減され、省力化により快適さと利便さを得た。生活の社会化の中で、特に家事労働の社会化と情報技術の進展は生活の営みに大きな変化をもたらしている。

ドイツの家政学者マリア・ティーレ＝ヴィッティヒは、家庭の内側と外側をつなぐために生じる新たな仕事を「新家事労働(New Household Work)」と名づけた。

伊藤によれば⁸⁾「新家事労働は」、労働力再生産労働と社会的労働の境界に発生する新たな労働であり、その種類と量は人々の生活ニーズが多様化し、高度化するにつれてより増加していくという性質を持つ。さらに「新家事労働」も従来の家事労働(労働力再生産労働)と同時に社会的労働に組み込まれた労働であるがゆえに、その社会の経済・政治等の状況によって量・質ともに影響を受ける。生活の社会化に対する人々の主体性と準備状況によってもその把握のされ方は異なってくると考えられる。

例えば、介護という対人サービスの家事労働について考えてみる。介護保険制度が導入された2000年以降、利用者は利用申請、サービス選択の必要に迫られるようになった。家族が在宅で高齢者や障がい者などの介護を行っている場合、家族介護者の肉体的・心理的・精神的疲労は計り知れないものがある。この介護の負担を軽減するために社会化した介護保険サービスの利用をしたいと考えた場合、市区町村を介さず利用者が事業者と契約を結ぶ直接契約の形がとられているため、被介護者本人や家族介護者が介護保険制度の仕組みや提供される介護サービスの種類、介護度によって異なる利用可能なサービス、その利用方法と費用負担の発生などについて十分理解するための知識を身につける必要がでてくる。これ以外に、介護サービスを提供する事業者との契約や交渉、手配など、社会化された介護サービスを受けるまでに必要な様々な家事労働を行うこととなる。自宅で介護を行う場合はこのような知識を身に着ける必要はなく、こうして発生した家事が新家事労働といわれる。新家事労働の多くは、表1のC家政管理に該当する。私たちは生活に必要と判断すれば、時間と労力をこれら家政管理労働にあてているため、家電製品の普及が家事労働の負担を軽減したといわれる反面、家事労働をする時間はあまり減っていないことも事実である。表2は家政管理労働の社会化の進行で新たに発生する家事についてまとめられたものである⁹⁾。これらの家事は自分の判断や選択、提案を伴うものであり、負担が大きいものであることが確認できる。

また、新家事労働の中でも介護サービス利用に伴って発生する、新家計支出に着目する必要がある。介護サービスは誰もが利用する機会があることから、利用方法などを利用者と提供者間で情報共有する必要がある。この新家計支出が家計にもたらす負担についても検討していかなければならないだろう。

表2 家政管理労働の社会化の進行で新たに発生する家事⁹⁾

家政管理労働の種類	新たに発生する家事
計 画 献立作成 予算 生活設計	専門家から提示される「計画」は、生活者側の予算規模や健康状態に適したものであるかどうか、別の手立てはないかを調べ、必要があれば専門家に別の計画の提示を求めたり、自ら提案する。
記 録 家計 健康 育児・介護	専門家との間で記録の必要性や内容・方法についての意思疎通を行い、必要であれば記録の内容・方法、記録にもとづく専門家との情報共有について生活者自ら提案を行ったり、改善を求めたりする。心身の不調や判断能力の低下などにより、記録自体が困難な場合は、他者に記録を依頼したり、補助的な機器などの導入を図る。
学習・情報収集	生活者のニーズを充たし、あるいは生活課題を解決するために必要な情報を効率的に収集・活用するためのツールや社会資源(専門家を含む)を調べる。情報の良否の判断とそれにもとづく意思決定を自らも行えるように学習する。必要があれば、情報提供元へ赴きニーズを直接伝える。
調整・交渉	専門家が提案・作成するサービスや情報の内容の吟味、良否の判断、改善の要求を行う。専門家任せにせず、自らも他者や複数の機関との調整や交渉を行う。

出典：『持続可能社会をつくる 生活経営学』p.133

5. 家事労働の社会化できない部分

家政学においては家事労働の意義について、生命の維持や労働力の再生産のほか、教育的側面、良好な家族関係の構築、生活文化の伝承など、多様な側面が指摘されてきた。家事労働は、生活を営む上で不可欠な労働であるにもかかわらず、貨幣や市場を介する有償労働(ペイドワーク)に対して、家事労働は、家族員からも評価を受けにくく、市場を介さないために無償労働(アンペイドワーク)である。このことが家事労働の現状を見えにくくしていると考察できる。

家事労働は育児・介護・教育などのケア的役割を担い、対人サービスの家事労働として位置づけられる。この対人サービスの家事労働は、家電などのテクノロジーでは代替しにくい、介護の分野においては介護ロボットの実用化などもあり、介護施設だけでなく家庭においても、情報化やテクノロジーのさらなる進展に期待が寄せられている状況である。

しかし、対人サービスの家事労働の社会化により、すべてが社会化されるわけではない。

対人サービスの家事労働では、手続きの代替ができて心理的なつながりの代替は難しいことが多い。なぜなら介護は人を対象とした労働であるからだ。介護を必要とする人にどのような支援ができるのか、冷静に対応すること望まれる。介護の社会化が進むにつれ、福祉サービスの利用に伴う新たな家政管理労働も増加している。そのような状況の中で適切な判断力と生活を経営する力を高めることが求められている。

6. まとめ及び今後の課題

本研究では家事労働の社会化の現状を把握することを目的とした。働き方も生き方も変わりつつある社会において、家事労働を行なうことの意義は時代、社会の変化に伴い変化してきた。家事を含め家庭で行われる行為は「親から子への家事の伝承」であったが、現在はその意味は薄れてきている。本来、家庭の機能であった子育てや介護すらサービスに移行している。人々の生活ニーズが多様化し、高度化するにつれてさらに家事労働の社会化はさらに進行することが見込まれる。

今後は、家事労働の社会化と「生活時間」との関係を明らかにするとともに、家事サービスの利用において発生する「新家事労働」及び「新家計支出」について研究を継続していきたい。また、家事労働の社会化を受け入れることにより、家庭内の人間関係がどのように変化するのか、家事労働の社会化により生じる「新家事労働」は誰が担うのかについても明らかにすることが必要である。

引用文献

- 1) I.イリイチは、1926年ウィーンに生まれる。フローレンス大学とローマ大学で自然科学、ローマ・グレゴリオ大学では神学と哲学を学び、さらにザルツブルグ大学で歴史学の博士号を得る。
- 2) カール・ポランニー、吉沢英成他訳：『大転換』p.76 東洋経済新報社、1975年。
- 3) カール・ポランニー、吉沢英成他訳：同上。 pp.95-96
- 4) カール・ポランニー、吉沢英成他訳：同上。 pp.96
- 5) 関口富左編著：『家政哲学』pp.239-240。 家政教育社、1977年。
- 6) 伊藤セツ：『家庭経済学』pp.270-271。 有斐閣、1990年
- 7) (一社)日本家政学会生活経営学部会編：『持続可能な社会をつくる 生活経営学』pp130-131。 朝倉書店、2020年
- 8) 伊藤純：「高齢者ソーシャル・サービスと新家事労働その2」p133。 学苑昭和女子大学人間社会学部紀要 2017年
- 9) (一社)日本家政学会生活経営学部会編：同上 p133。

参考文献

内閣府男女共同参画局：令和5年度版男女共同参画白書
内閣府経済社会総合研究所：令和5年度3月版消費動向調査
総務省：特集デジタルで支える暮らしと経済
内閣府：令和2年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況
内閣府：令和4年版高齢社会白書(全体版)
天野晴子・伊藤純・粕谷美砂子・齊藤ゆか・松葉口玲子：「育児・介護の社会化により発生する新家事労働・新家計支出」2008年
天野晴子ほか『生活時間調査による新家事労働の実態把握とアンペイド・ワークの社会的評価方法の開発』(平成16年度～19年度科学研究費補助金研究成果報告書)。

- 伊藤セツ：「労働者階級の家事・育児要求」黒川俊雄・島津千利世・犬丸義一編：『講座 現代の婦人労働 3』労働旬報社,1978年
- 伊藤セツ：「家事労働論・家事労働研究の系譜」大森和子・好本照子・阿部和子・伊藤セツ・天野寛子『家事労働』光生館,1981年
- 伊藤セツ：「生活経営学視点が『生活の社会化』の新たな地平を拓く」『生活経営学研究』2009年.
- 伊藤純・斎藤悦子編：『ジェンダーで学ぶ生活経済論』ミネルヴァ書房,2021年
- 伊藤純：「介護保険制度下における『介護家事労働』の社会化と生活福祉経営」『日本家政学会誌』52(11).2001年
- 伊藤純：「高齢者福祉領域にみる生活の社会化の進展と社会的新家事労働」堀内かおる編『福祉社会における生活・労働・教育』明石書店,31-43. 2009年
- 大森和子・好本照子・阿部和子・伊藤セツ・天野寛子：『家事労働』光生館 1981年

学習指導要領解説における「健康」の扱い

－中学校社会科、高等学校地理歴史科、公民科を例に－

The Treatment of “Health” in the Explanation of Learning Guidelines

- Examples from Junior High School Social Studies,

High School Geography and History, and Civic Education -

坂 倉 剛

Go Sakakura

Learning related to health is typically conducted in subjects such as physical education and home economics. However, there are instances where topics related to health are also addressed in subjects like social studies, geography and history, and civic education. In the midst of changing societal environments and with the aim of fostering healthy people, the new curriculum guidelines have been implemented in junior high schools since 2021 and in high schools since 2022. This paper summarizes the differences in the treatment of health through a comparison of the explanations between the old curriculum guidelines and the new curriculum guidelines in subjects such as junior high school social studies, high school geography and history, and civic education.

はじめに

学習指導要領は、直近の社会動向や社会的要請に基づいて内容が改訂される。平成30年以降に施行された学習指導要領に先立って公開された中央教育審議会答申を見ると、「子供の健康に関しては、性や薬物等に関する情報の入手が容易になるなど、子供たちを取り巻く環境が大きく変化している。また、食を取り巻く社会環境の変化により、栄養摂取の偏りや朝食欠食といった食習慣の乱れ等に起因する肥満や生活習慣病、食物アレルギー等の健康課題が見られる。」¹⁾と記述がある。

例えば、薬物に関する近年の傾向を見てみると、大麻取締法違反で検挙された少年の人数は、平成25年以降に増加傾向にある²⁾。検挙人数が増加していることは、薬物の利用が広まっている事実を示すものであり、教育現場から薬物への警鐘を鳴らすことを求められる。

次いで、栄養摂取の偏りについては、東京都内の調査によると生活困窮層の野菜摂取が1日1回未満である16-17歳の子どもの割合が2割以上を占めており、一般層でも1割程度を占めている³⁾。このように、子どもたちの栄養摂取の偏りが一部ながらもあることが可視化された。また、朝食欠食についてみると、令和3年度では小学生のうち1割程度、中学生のうち2割程

度で1週間につき1日以上朝食の欠食があると回答している⁴⁾。そして同年に行われた「学校保健統計」では、男子について着目すると小学4年生から高校生にかけて1割程度の肥満児が見られたという調査結果が出ている⁵⁾。

このような状況から、児童生徒らに健康に関する教育、指導を進めてゆく必要性が認められる。

1. 教育と健康

教育基本法の第1条は、「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と示されている。このことから、学校で健康に関する知識の定着や意識の向上を図ることが求められていると言える。これは学習指導要領総則にも反映されており、例えば、高等学校については以下のような記述がある⁶⁾。

学校における体育・健康に関する指導を、生徒の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより、健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること。特に、学校における食育の推進並びに体力の向上に関する指導、安全に関する指導及び心身の健康の保持増進に関する指導については、保健体育科、家庭科及び特別活動の時間はもとより、各教科・科目及び総合的な探究の時間などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めること。また、それらの指導を通して、家庭や地域社会との連携を図りながら、日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し、生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎が培われるよう配慮すること。

健康について取り上げる科目としては、保健体育科や家庭科が挙げられる。しかし、保健は高等学校では2単位が標準単位数であり、中学校では「3学年間で48単位時間程度配当すること」⁷⁾のため「雨降り保健」と称されるように、限られたなかで実施されている。高等学校の家庭科では、家庭基礎か家庭総合が必修科目であるが、家庭基礎のみの履修では2単位が標準単位数のため、そのなかで健康を取り扱うことが求められる。しかし、他の教科においても健康は扱われており、その例として社会科、地理歴史科、公民科があると言える。

2. 本稿の研究手法

まず、2013年から2022年までの先行研究の文献調査をCiNiiで行った。検索ワードは、「社会科 健康 学習指導要領」、「地理歴史科 健康 学習指導要領」、「公民科 健康 学習指導要領」とした。その結果、國原が新型コロナウイルス感染症を事例に大学生の教職科目の中で学

習指導案を作成させた実践を紹介していた⁸⁾。しかし、いずれの検索時においても、社会科、地理歴史科、公民科の学習指導要領解説そのものと健康を取り上げていた学術誌に掲載されていた論文は検出しなかった。

そのため以下では、社会科・地理歴史科・公民科を事例に、健康の扱われ方について現在の各学校で用いられている令和3年度以降に全面施行された中学校、高等学校の学習指導要領解説(以下、新学習指導要領解説とする)と平成20年度以降に全面施行された中学校、高等学校の学習指導要領解説(以下、旧学習指導要領解説とする)を手掛かりに探索的に調査した。

健康について取り上げることとするが、健康に関連する語というものは数多ある。そこで以下の健康に関するキーワードを用いることとする。まずは基本的な用語として「健康」を取り上げるほかに、「医療」、「栄養」、「感染症」を含めることとする。「医療」は、健康を支える保険制度やサービスである点から、含める語とする。そして「栄養」については、先に挙げたように児童生徒らの栄養摂取の状況に関して問題となっているため注目した。そして、「感染症」をキーワードに含める。歴史上、人類は幾度となく感染症に苛まれてきており、今後もその流行下になることも十二分に予想できることである。また、感染症に限らず幅広く疾病や病気を示す「病」もまた、健康に繋がる字である。感染症や医療と関連する字ではあるが、採択することにする。以上のような観点から、「健康」、「医療」、「栄養」、「感染症」の語、「病」の字が出る語の学習指導要領解説上の扱いについて取り上げる。なお、学習指導要領解説内にある学習指導要領本文の引用と参考資料の部分は除外した。

3. 新学習指導要領における健康

3-1. 中学校社会科における健康

中学校社会科における健康に関する語等は、表1のように、公民的分野でのみ表出されていた。まず、「健康」という語は大項目B「私たちの経済」のなかで公害の防止や環境保全を扱う内容として現れている。健康そのものを直接扱うのではなく、諸問題を抱えるなかでも健康に生活し続けることを、憲法の面も含めて記載している。また、「医療」についても公民的分野のなかにあり、大項目Aの「私たちと現代社会」にてその記述が現れる。医療の扱いは、社会保障の一部を構成するものとして取り上げている。

以上の通りに、「健康」、「医療」に関しては中学校社会科で取り上げられたが、一方で「栄養」、「感染症」、疾病や病気を示す意味での「病」の各語の利用は見られなかった。

表 1 新学習指導要領解説の中学校社会科での健康に関する記述⁹⁾(筆者作成)

	健 康
公民的分野	公害の防止など環境の保全…の意義を理解することについては、地理的分野及び歴史的分野の学習との関連を考慮しながら、個人の生活や産業の発展などに伴う公害など環境汚染や自然破壊の問題について理解できるようにすることを意味している。そして、現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に寄与するとともに人類の福祉に貢献するという視点に立って、環境を保全し、積極的に人間環境の改善を図るようにすることの重要性について理解できるようにすること、さらに、これらの問題の解決を図るためには、環境保全対策が国や地方公共団体の重要な課題であり、これまで様々な取組がなされてきたこと、我々の生活の在り方を見直し個人や企業が責任ある行動をとるようにする必要があることを理解できるようにすることを意味している。(p.147-148)
	栄 養
	該当なし
	医 療
公民的分野	家族や家族が生活する場としての家庭、学校や地域社会など日常の社会生活と関わりの深い具体的事例を取り上げ、現代社会の特色を理解できるようにすることが大切である。例えば、我が国が人口減少社会を迎えて、家族との生活、学校や地域社会での生活が変容してきていることや、労働力需給や経済成長など国民経済に大きな影響が出ていること、また、医療や年金など社会保障費の財政負担が増大し、財政の状況が悪化していることを理解できるようにすることなどが考えられる。(p.136)
	感染症
	該当なし
	病
	該当なし

3-2. 高等学校地理歴史科における健康

高等学校地理歴史科における健康に関する語等は、表2のように、地理総合、歴史総合、世界史探究にて表出されていた。「栄養」は、地理総合で大項目B「国際理解と国際協力」の内の「地球的課題と国際協力」にある。その例として国際的な問題の一つとして食料問題があり、そのなかに主題として栄養失調の人々を提示している。

また、「医療」については大項目Eにある「地球世界の課題」のなかにある「科学技術の高度化と知識基盤社会」にしてくるものである。ここでは、生命倫理に関してはあるが、世界史探究で扱われている。世界史探究では、第二次世界大戦後の現代史に該当する範囲において、科学技術の高度化に伴う諸問題として挙げられている。

そして、「感染症」については、地理探究と歴史総合で表れる。地理探究では大項目A「現代世界の系統地理的考察」のうち、「自然環境」に感染症に言及がある。ここでは、地球規模の問題である温暖化の影響として記載している。一方で、歴史総合では「グローバル化と私たち」のなかで、「グローバル化への問い」として感染症を挙げている。第二次世界大戦後から現代に至るまでの歴史を見る視点の一つとして、感染症があることを示している。

「病」については、地理総合において「病院」として出てきたものが該当する。地理総合のなかの大項目C「持続可能な地域づくりと私たち」のなかにある「自然災害と防災」にて学習活動の

例として挙げられている。地図上の情報から地域的特性を考えるなかで施設の分布などを考えられるようにして、あるべき姿について討議することを目指している。歴史総合においても「病」が登場するが、先述した通りであるため省略する。

以上のように、「栄養」、「医療」、「感染症」、「病」については検出されたが、「健康」の語については見られなかった。

表2 新学習指導要領解説の高等学校地理歴史科での健康に関する記述¹⁰⁾(筆者作成)

	健 康
	該当なし
	栄 養
地理総合	主題を設定し、現状や要因、解決の方向性などを多面的・多角的に考察し、表現するについては、「食料問題」を事例とすると、ここで取り上げる主題として「食料問題とその解決の方向性」などが考えられる。例えば、この主題を基に、まず、「世界の人々の食生活の変化により、世界の農業はどのように変化しているだろうか」といった問いを立てて、世界の農業を取り巻く状況をおおまかに捉えたとともに、「世界各国の食料生産と食料消費にはどのような傾向性があるだろうか」といった問いを立てて、世界の食料の需給には不均衡があることなどを捉え、食料問題の現状について考察する。次に、「世界には飽食を可能とする人々がいる一方で、なぜ飢餓や栄養不足に悩む人々がいるのだろうか」といった問いを立てて、各国の国内状況や国家間の関係について、歴史的背景を踏まえて経済的な側面や地理的環境の側面などから捉え、食料問題の要因について考察する。(p.58)
	医 療
世界史探究	医療技術・バイオテクノロジーと生命倫理については、医療の量的拡大や質的向上の変遷、遺伝子操作等のバイオテクノロジーの展開やバイオテクノロジーを利用した緑の革命が世界経済に与えた影響などについて扱う。また、医療技術の発達と世界諸地域の平均寿命との関連、医療技術・バイオテクノロジーの進展に関わる生命倫理を巡る問題などについて扱う。(p.339) 上記の原子力の利用や宇宙探査などの科学技術、医療技術・バイオテクノロジーと生命倫理、人工知能と労働の在り方の変容、情報通信技術の発達と知識の普及の学習については、中項目の主題を基にした学習上の課題(中項目全体に関わる問い)を踏まえ、中項目のねらいに則した学習を展開することが大切である。そのため、推移や展開を考察するための課題(問い)を設定し、さらに事象を比較し関連付けて考察するための課題(問い)を設定するなど、事象それぞれの学習の際に、段階的に課題(問い)を設定することが求められる。(p.340)
	感染症
地理探究	「気候」と「生態系」を関連付けて事例とすると、ここで取り上げる主題として「気候変動と生態系」などが考えられる。例えば、「熱帯におけるサンゴ礁の白化がなぜ起きているのだろうか。温帯において熱帯性の海洋生物の繁殖やデング熱などの熱帯性の感染症が報告されるようになったのはなぜなのだろうか」といった問いを立てて、地球規模の気候変動や温暖化と地域で起きている現象の関係を考察するような学習活動が考えられる。(p.87)
歴史総合	感染症を取り上げた場合には、例えば、教師が、伝染病感染者数などに関する統計や主題図、感染の拡大防止に向けた国際協力に関する資料などを提示し、20世紀の感染症被害が大規模となった理由や感染症の広がりに対する国際社会の対応など、生徒が歴史的な見方・考え方を働かせて資料から情報を読み取ることができるように指導を工夫する。生徒は、それらの情報を読み取ったりまとめたりしながら、感染症の拡大の背景と生活や社会の変容との関連性について考察する。(p.172) その際、冷戦と国際関係、人と資本の移動、高度情報通信、食料と人口、資源・エネルギーと地球環境、感染症、多様な人々の共存などに関する資料については、複数の資料を組み合わせさせて関連付けたり、一つの内容であっても視点の異なる複数の資料を比較したりするなど、豊富な資料を教材として、生徒がそれらの情報を読み取ったりまとめたりすることにより、グローバル化に伴う生活や社会の変容についての考察を深め、自分自身の問いを表現できるようにすることが必要である。(p.173)

	病
地理総合	複数の地図から読み取った情報を関連付けて、地域の特徴をまとめる地理的技能を生かし、洪水や地震、土砂災害など、複数のハザードマップを基に、予想される災害の特徴によって地域区分した地図を新たに作成する。例えば、洪水の際に浸水被害を受けやすい低地、地震の際に家屋の倒壊などが想定される住宅密集地、豪雨の際に土砂災害が予想される傾斜地などといった区分が考えられる。次に、「区分したそれぞれの地域では、自然災害に対してどのような備えが必要なのだろうか」といった問いを立てて追究する。市町村役場、避難場所、消防署、病院などの防災にとって重要な施設の位置、集落の分布や規模、道路網や橋の位置などに留意して、区分したそれぞれの地域の自然及び社会的条件に合わせた避難計画や防災のための施策の在り方について考察する学習活動が考えられる。その際、既述のように、災害発生時に現地がどうなるか、どのように行動すればいいのかなどについて具体的に考えたり、予想される災害の頻度や規模を考慮して、取るべき対策について議論したりすることが考えられる。(p.65-66)
歴史総合	感染症を取り上げた場合には、例えば、教師が、伝染病感染者数などに関する統計や主題図、感染の拡大防止に向けた国際協力に関する資料などを提示し、20世紀の感染症被害が大規模となった理由や感染症の広がりに対する国際社会の対応など、生徒が歴史的な見方・考え方を働かせて資料から情報を読み取ることができるように指導を工夫する。生徒は、それらの情報を読み取ったりまとめたりしながら、感染症の拡大の背景と生活や社会の変容との関連性について考察する。(p.172)

3-3. 高等学校公民科における健康

高等学校公民科における健康に関する語等は、表3のように、公共、倫理、政治・経済のすべての科目にて表出されていた。

「健康」については、公共のなかで大項目B「自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち」内の、「主に政治に関わる事項」に掲載されている。ここでは持続可能な開発目標について言及があり、それと合わせて健康に言及がある。加えて、同一項目内の「主に経済に関わる事項」について、経済活動を活発に行うことに意義がある一方で、法令やルールの順守と同時に長時間労働による健康の阻害を記載している。また、倫理においては、大項目A「現代に生きる自己の課題と人間としての在り方生き方」のなかにある「人間としての在り方生き方の自覚」の部分で記述がある。ここでは、精神の健康について記述があり、他教科との関連について配慮することを記している。また、倫理の指導上の留意事項として、ホームルーム活動が含まれる特別活動との関連があることにも言及している。

次いで、「医療」についてみると、公共では大項目B「自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち」内の、「主に経済に関わる事項」に記載があった。ここでは、社会保障制度の一つとして医療保険があることに言及し、その役割について触れることにしている。また、倫理では大項目B「現代の諸課題と倫理」のなかで、「自然や科学技術に関わる諸課題と倫理」のなかにある生命倫理の面で医療の進歩の関連性について言及がある。政治・経済では、大項目A「現代日本における政治・経済の諸課題」で「現代日本における政治・経済の諸課題の探究」の一つに公共での「医療」の扱いと同様に社会保障としての面の記述があるが、諸課題についてより詳細に言及している。また、大項目B「グローバル化する国際社会の諸課題」にある「グローバル化する国際社会の諸課題の探究」のなかで、医療の発展による新たな価値創造とそれに伴う諸問題・諸課題を考えさせることを挙げている。

そして「病」に着目すると、公共では大項目B「自立した主体としてよりよい社会の形成に参画する私たち」内の、「主に政治に関わる事項」において安全保障や国際協力の観点で病気について触れられている。

なお、「栄養」、「感染症」については見られなかった。

表3 新学習指導要領解説の高等学校公民科での健康に関する記述¹¹⁾(筆者作成)

	健 康
公共	<p>なお、「『国際貢献』については、国際連合における持続可能な開発のための取組についても扱うこと」(内容の取扱い)が必要であり、「誰一人取り残さない」との理念の下、自然環境や資源の有限性、貧困、イノベーションなどに関わる17のゴール(目標)、169のターゲットからなる国際連合における持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals。以下、SDGsと略す。)に触れながら、あらゆる人々が健康で活躍できるよう、教育の充実や飢餓の撲滅、全ての形態の暴力の大幅減少、子供の貧困対策などによって生存が脅かされている個々の人間の尊厳と平等を守り、その能力を生かすために平和で安全・安心な社会を実現していくことが、国際政治の安定や世界経済の発展につながることに理解できるようにする。(p.65)</p> <p>すなわち、第一に、市場経済においては、公正で自由な競争を促進し、企業が創意工夫を発揮し事業活動を活発化することで、消費者の利益が確保され社会的余剰が最大化すること、このため、市場における競争を維持・促進するための政府による適切な政策が必要になることを理解できるようにすること、第二に、政府は、公正かつ自由な経済活動が行われるよう、財産権を保護したり、商取引のルールを整備したりするなどしていること及び所得の再分配政策などによって国民福祉の向上を図っていることを理解できるようにすること、第三に、経済活動の意義は人間の生活を維持・向上させることにあり、経済活動がより活発に行われることで生活水準は高まるが、長時間労働で健康を害したり、公害などが発生して国民福祉が阻害されたりするなど個人の尊重という観点から懸念される問題が生じることもあることから、より活発な経済活動と個人の尊重を両立させることが必要であることを理解できるようにすることである。(p.67)</p>
倫理	<p>これら心理学の考え方の学習では、例えば、様々な人間の心の在り方について科学的に探究した各種の実験や観察、調査に基づく統計的な分析の結果を利用したり、対話や作文などを通して学習を深めたりすることも考えられる。その際、心理学の学説や各種の実験や観察の結果の紹介を知識として習得させる指導で終わることのないよう、現代に生きる自己の課題と人間としての在り方生き方について思索を深めるための手掛かりとして学習することができるよう工夫する。また、他の教科等における精神の健康や適応、発達などに関わる学習との関連についても配慮することが必要である。(p.95)</p> <p>特別活動…との関連については、とりわけ、ホームルーム活動は内容の3項目のうち「(2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」、「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」が特に「倫理」と関わりが深い。これらの内容の指導は、人間としての在り方生き方に関する教育において「倫理」とともに中核的役割を担っているのである。(p.118)</p>
	栄 養
	該当なし
	医 療
公共	<p>少子高齢社会における社会保障の充実・安定化については、疾病や失業、加齢など様々な原因により発生する経済的な不安やリスクを取り除くなどして生活の安定を図り、人間としての生活を保障する社会保障制度の意義や役割を理解できるようにするとともに、我が国の社会保障制度の現状と課題などを、医療、介護、年金などの保険制度において見られる諸課題を通して理解できるようにする。(p.69)</p>

倫理	<p>生命を取り扱う場合については、「生命科学や医療技術の発達を踏まえ、生命の誕生、老いや病、生と死の問題などを通して、生きることの意義について思索できるようにすること」(内容の取扱い)としている。</p> <p>その際、例えば、生命への人為的な操作や治療を超えた介入など、近年の生命科学や医療技術の発達に伴い、従来の死生観のみでは対処できない様々な問題が生じていることなどにも触れながら、老いや病、障害とともに生きる意義と社会の在り方といった視点から倫理的課題を見だし、探究する活動が考えられる。なお、これらの問題が、私たち一人一人の生命の尊さに関わる問題であるとともに、家族や地域をはじめとする人と人との関わりや、福祉や社会保障制度など社会との関わりが深い問題であることにも留意する必要がある。(p.114)</p>
政治・経済	<p>少子高齢社会における社会保障の充実・安定化については、社会保障制度の充実に伴い、社会保障の目的は、生活の最低限度の保障から広く国民に安定した生活を保障するものへと変化してきている。少子高齢化が進む日本では、労働力需給や経済成長など国民経済に大きな影響が出ており、また、生産年齢人口の減少や家族構成の変化などにより、公的医療保険や公的年金保険などの社会保険をはじめとする社会保障費の財政負担の増大も大きな問題となっている。</p> <p>その際、例えば、少子高齢社会における問題点を、個人の生活様式や就労形態の多様化、家族構成の変化、低所得や貧困とその連鎖、介護と医療を必要とする人の増加、女性や高齢者の安定的雇用などだけでなく、消費水準を平準化させる機能や長生きに伴うリスクを減少させる役割を果たしている社会保険に関して、世代間及び世代内の公平性を確保できる受益と負担の均衡のとれた制度の在り方について、また、子育て支援や教育費の支援と生活保障など、日本のこれからの充実した福祉社会の在り方について自分の考えを説明、論述できるようにすることが考えられる。さらに、社会保険の役割とともに、自助としての医療保険、生命保険、私的年金保険などの民間保険の役割なども調べ、広い視野から持続可能な社会保障の在り方について自分の考えを説明、論述できるようにすることも考えられる。(p.142)</p> <p>その際、例えば、環境や医療の分野などイノベーションによって新たに生まれる財やサービスの成長市場について具体的に調べたり、イノベーションが人々の働き方や社会生活をどのように変化させていくのかを調べたりして、イノベーションをより促進するための方策や、イノベーションによる社会の変化に対応した適切なルールや知的財産権の制度の在り方について自分の考えを説明、論述できるようにすることが考えられる。(p.156)</p>
	感染症
	該当なし
	病
公共	<p>我が国の安全保障と防衛については、日本国憲法の平和主義について理解を深めることができるようにするとともに、我が国の防衛に関する基本的な事柄にも触れながら、変化する国際情勢の中で、我が国の安全が世界の平和の維持といかに不可分に関連しているかについての理解を深めることができるようにする。その際、今世紀に入ってから国際情勢の変化や国際社会の動向を踏まえるとともに、様々なレベルでの国際協力や食料の安定確保など我が国の安全保障に向けての多角的な努力や、日米安全保障条約や我が国の防衛、国際社会の平和と安全の維持のために自衛隊が果たしている役割など我が国の防衛や国際社会の平和と安全に関する基本事項について、広い視野に立って理解できるようにする。また、従来の国家を中心とする安全保障では対処しきれない紛争、病気や貧困、環境破壊などによって生存が脅かされている個々の人間の生存や安全を守ろうとする考え方などの観点から取り扱うことも大切である。(p.64)</p> <p>少子高齢社会における社会保障の充実・安定化については、疾病や失業、加齢など様々な原因により発生する経済的な不安やリスクを取り除くなどして生活の安定を図り、人間としての生活を保障する社会保障制度の意義や役割を理解できるようにするとともに、我が国の社会保障制度の現状と課題などを、医療、介護、年金などの保険制度において見られる諸課題を通して理解できるようにする。(p.69)</p>
倫理	<p>生命を取り扱う場合については、「生命科学や医療技術の発達を踏まえ、生命の誕生、老いや病、生と死の問題などを通して、生きることの意義について思索できるようにすること」(内容の取扱い)としている。</p> <p>その際、例えば、生命への人為的な操作や治療を超えた介入など、近年の生命科学や医療技術の発達に伴い、従来の死生観のみでは対処できない様々な問題が生じていることなどにも触れながら、老いや病、障害とともに生きる意義と社会の在り方といった視点から倫理的課題を見だし、探究する活動が考えられる。なお、これらの問題が、私たち一人一人の生命の尊さに関わる問題であるとともに、家族や地域をはじめとする人と人との関わりや、福祉や社会保障制度など社会との関わりが深い問題であることにも留意する必要がある。(p.114)</p>

4. 旧学習指導要領における健康

4-1. 中学校社会科における健康

中学校社会科における健康に関する語等については、「健康」の語が新学習指導要領と同様に公民的分野のなかで表されていた。大項目(2)「私たちと経済」のなかにある、イ「国民の生活と政府の役割」に含まれ、概ね新学習指導要領に文言が引き継がれている。

なお、「栄養」、「医療」、「感染症」、「病」についての語等については見られなかった。

表4 旧学習指導要領解説の中学校社会科での健康に関する記述¹²⁾(筆者作成)

	健 康
公民的分野	「公害の防止など環境の保全」については、地理的分野及び歴史的分野の学習との関連を考慮しながら、個人の生活や産業の発展などに伴う公害など環境汚染や自然破壊の問題について理解させることを意味している。そして、現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に寄与するとともに人類の福祉に貢献するという視点に立って、環境を保全し、積極的に人間環境の改善を図るようにすることの重要性について理解させること、さらに、これらの問題の解決を図るためには、環境保全対策が国や地方公共団体の重要な課題であり、これまで様々な取組がなされてきたこと、我々の生活の在り方を見直し個人や企業が責任ある行動をとるようにする必要があることに気付かせることを意味している。(p.129)
	栄 養
	該当なし
	医 療
	該当なし
	感染症
	該当なし
	病
	該当なし

4-2. 高等学校地理歴史科における健康

高等学校地理歴史科における健康に関する語等については、「医療」の語が地理Bのなかで、「病」が世界史Bのなかで見られていた。

「医療」については、地理Bで大項目(1)「様々な地図と地理的技能」のなかに、地域調査に関する内容に出てくるものである。地域的課題を見る際に、医療の様相も一例に挙がるとして記載されていた。

「病」については、世界史Bで大項目(3)「諸地域の交流と再編」のなかにある、ヨーロッパ世界の形成に関わる内容として、その資料活用の例に黒死病を挙げていた。時代が下るにつれて活発になった交流の正の面と負の面を両面からみるにあたって、資料活用の技能をも合わせて養うことを目指していた。

なお、「健康」、「栄養」、「感染症」そのものの語等については見られなかった。

表5 旧学習指導要領解説の高等学校地理歴史科での健康に関する記述¹³⁾(筆者作成)

	健 康
	該当なし
	栄 養
	該当なし
	医 療
地理B	「生活圏の地的特色をとらえる地理的技能を身に付けさせる」とは、この中項目で身に付けさせる地理的技能の内容を示したものである。生活圏という「直接的に調査できる地域」の地的特色をとらえるためには、様々な地理的技能を適切に選択したり組み合わせたりして活用することが必要であり、調査の立案、実施、まとめという方法をとる。したがって、「その方法が身に付くよう工夫すること」(内容の取扱い)とあるように、個別の地理的技能の習得、活用だけではなく、地域調査の方法も身に付くように、地域調査全体の内容と学習過程を工夫することが大切である。なお、ここでの「生活圏の地的特色」とは、「直接的に調査できる地域」の課題も含んでおり、課題は、当該地域の人口の推移や構造、社会福祉や医療の実態、災害とその対策、環境の保全などの面から調査結果を考察することで浮かび上がってくると想定される。(p.102)
	感染症
	該当なし
	病
世界史B	「イ ヨーロッパ世界の形成と展開」では、「中世ヨーロッパの交易活動と黒死病の流行」という主題を設定し、各都市の黒死病の流行年と、人・ものなどの移動ルートを地図上に記入させたり、作成した地図を活用してそのことを説明させたりするなどの活動が考えられる。「ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界」では、「ユーラシアの諸地域世界を旅した人々」という主題を設定し、マルコ=ポーロ、イブン=バトゥータなどの旅行者の記録から分かる当時の諸地域世界の様子とそのルートを地図上に記入するとともに、海域におけるモンスーン交易と内陸における東西南北のネットワークの結合に伴う諸地域世界の交易ルートや商人の移動範囲、住民の生活の様子を発表させたり、作成した地図を活用してそのことを説明させたりするなどの活動が考えられる。(p.37)

4-3. 高等学校公民科における健康

高等学校公民科における健康に関する語等は、表6のように、現代社会、倫理、政治・経済のすべての科目にて表出されていた。

まず、「健康」については倫理のなかに大項目(3)「現代と倫理」にある「現代の諸課題と倫理」にて示されていた。ここでは、国際平和が生活と密接に関わりがあることを理解することを目指している。また、新学習指導要領に引き継がれている事項として、ホームルーム活動との関連性を記載した箇所もあった。

次に、「医療」では現代社会にて大項目(2)「現代社会と人間としての在り方生き方」のなかで、「現代の経済社会と経済活動の在り方」に内容が含まれ、社会保障としての医療について考えさせるものであった。また、倫理には大項目(3)「現代と倫理」のなかで、「現代の諸課題と倫理」の一つとして、生命倫理の観点から医療について言及があった。幅広い観点から見ることや人間に限らず様々な生態系とともに考えられるようにとしていた。そして、政治・経済では大項目(3)「現代社会の諸課題」のなかにある「現代日本の政治や経済の諸課題」の一つに挙げられていた。ここでは、現代社会と同様に社会保障と同様な内容が含まれているが、社会保障制度の

軌跡をたどりながら理解することを求めている。しかし、核となるものは少子高齢社会のため、その現状を見る一つの観点として医療を挙げていた。

そして、「病」の語について見てみると、現代社会では「医療」と同様の箇所で見られており、ここでは疾病の語が用いられていた。また、大項目(2)「現代社会と人間としての在り方生き方」のなかにある、「国際社会の動向と日本の果たすべき役割」のなかで病気の語が用いられていた。安全保障の観点から病気を例にする一方で、日本が貢献してゆく方法を考える内容になっていた。また、倫理では、大項目(3)「現代と倫理」のなかで、「現代に生きる人間の倫理」に「病」の語が現れ、病の意味について思索するように書かれていた。加えて、「医療」で上記に示した箇所でも「病」の語が現れていた。

なお、「栄養」、「感染症」そのものの語については用いられていなかった。

表6 旧学習指導要領解説の高等学校公民科での健康に関する記述¹⁴⁾(筆者作成)

	健 康
倫理	<p>「国際平和と人類の福祉」については、今日私たちが抱える問題が、例えば環境や資源の問題、食料や健康にかかわる問題などに見るように、一地域や一国内にとどまることのできない面が多いことの理解に立って、人類全体の福祉と国際平和の重要性を理解させ、自分たちにできることについて考えさせて、これに貢献する意欲を高め、積極的に参加する態度を養う。(p.36)</p> <p>特別活動、とりわけ、ホームルーム活動は内容の3項目のうち「(2) 適応と成長及び健康安全」、「(3) 学業と進路」が特に「倫理」とかかわりが深い。これらの内容の指導は、人間としての在り方生き方に関する教育において「倫理」とともに中核的役割を担っているのである。(p.39)</p>
	栄 養
	該当なし
	医 療
現代社会	<p>「社会保障」については、疾病や出産、障害、加齢など様々な原因により発生する経済的な不安を取り除くなどして生活の安定を図り、人間として生活が保障される社会保障制度の意義や役割を理解させるとともに、現状と課題などを、医療、介護、年金などの保険制度においてみられる諸課題を通して理解させる。またその際、少子高齢化の進行や、財政との関連、保険料の負担などとの関係について考察させる。(p.16)</p>
倫理	<p>「生命」については、近年の生命科学や医療技術の発達に伴い、従来の生命観のみでは対処できない様々な問題が生じてきていることなどにも触れながら、生命の誕生、老いや病、生と死の問題等を通して、生きることの意義について考えさせる。その際、これらの問題が倫理・宗教・哲学・科学・法律・経済・文化など様々な領域に広くかかわる問題であるとともに、家族や地域をはじめとする人と人とのかかわり、福祉や社会保障制度など社会とのかかわりの中にあることに気付かせる。老いや病や障害とともに生きる意義と社会の在り方について考えさせることも大切である。また、人間の生命が自然の生態系の中で、他の生命との相互依存関係において維持されていることを認識させ、人間中心の生命観にとどまることのないようにし、他のすべての生命との調和的な共存関係の大切さを理解させる。(p.35)</p>
政治・経済	<p>「少子高齢社会と社会保障」については、日本が少子高齢社会を迎えて、労働力需給や経済成長など国民経済に大きな影響が出ていること、医療や年金など社会保障費の財政負担の増大も大きな問題となっていることなどを、日本の社会保障制度の歩みや特色などに触れながら理解させる。(p.54)</p> <p>例えば、少子高齢社会に伴う問題点を家族、介護、雇用、年金、医療など様々な面から調べさせ、その解決のための方法について探究させることが考えられる。また、少子高齢化が進む諸外国の現状と課題などについて調べさせ、日本のこれからの福祉の在り方について探究させることなども考えられる。(p.54)</p>

	感染症
	該当なし
	病
現代社会	<p>「社会保障」については、疾病や出産、障害、加齢など様々な原因により発生する経済的な不安を取り除くなどして生活の安定を図り、人間として生活が保障される社会保障制度の意義や役割を理解させるとともに、現状と課題などを、医療、介護、年金などの保険制度においてみられる諸課題を通して理解させる。またその際、少子高齢化の進行や、財政との関連、保険料の負担などとの関係について考察させる。(p.16)</p> <p>「我が国の安全保障と防衛及び国際貢献」については、大項目(2)の「イ 現代の民主政治と政治参加の意義」の中の「平和主義と我が国の安全」と関連させ、広い視野から日本の安全保障の在り方と防衛及び国際貢献について考えさせる。その際、冷戦終結後の国際情勢の変化や国際社会の動向を踏まえるとともに、様々なレベルでの国際協力や食料などの安定確保など我が国の安全保障に向けての多角的な努力について、また、日米安全保障条約や我が国の防衛や国際社会の平和と安全の維持のために自衛隊が果たしている役割など我が国の防衛や国際社会の平和と安全に関する基本的事項について、広い視野に立って考察させる。なお、考察に当たっては、従来の国家を中心とする安全保障では対処しきれない内戦、病気や貧困、環境破壊などによって生存が脅かされている個々の人間の生存や安全を守ろうとする考え方などに着目するとともに、我が国が国際社会の平和と安全にどのような役割を果たし貢献し得るかという観点から考察させることが大切である。(p.17)</p>
倫理	<p>「人間の尊厳と生命への畏敬」については、先哲が人間をどのようにとらえ、人間の尊厳についてどこに根拠を求め、どのように考えたかを手掛かりとして人間の尊厳について理解を深めさせるとともに人間の生と死、老いや病の意味など深遠な生命について思索を深めさせ、生命への畏敬が現代における重要な倫理的課題となっていることに気付かせる。そこから生命はかけがえのないもの、他のものとは代替できないものであることを深く認識させ、生命を尊ぶ心もち、人間の尊厳を大切に生き、また、人間の力を超えるものに対する畏敬の念をもつことができるようにする。人間の尊厳の根拠を問うことや生命の深遠さに目を向けることにより、人間の尊厳や生命の大切さを単に自明のこととして考えるにとどまらず、より深い自覚に立ってこれらを大切にすることを重要である。(p.33)</p> <p>「生命」については、近年の生命科学や医療技術の発達に伴い、従来の生命観のみでは対処できない様々な問題が生じてきていることなどにも触れながら、生命の誕生、老いや病、生と死の問題等を通して、生きることの意義について考えさせる。その際、これらの問題が倫理・宗教・哲学・科学・法律・経済・文化など様々な領域に広がっていく問題であるとともに、家族や地域をはじめとする人と人のかかわり、福祉や社会保障制度など社会とのかかわりの中にあることに気付かせる。老いや病や障害とともに生きる意義と社会の在り方について考えさせることも大切である。また、人間の生命が自然の生態系の中で、他の生命との相互依存関係において維持されていることを認識させ、人間中心の生命観にとどまることのないようにし、他のすべての生命との調和的な共存関係の大切さを理解させる。(p.35)</p>

5. 考察

新学習指導要領解説における、健康に関する扱いの様相をまとめると表7の通りである。地理的分野や歴史的分野、地理歴史科より、公民的分野や公民科が多くを占めている。しかし、地理的分野や歴史的分野、地理歴史科においても全く触れられていなかったのではなく、むしろ公民的分野・公民科には無かった栄養や感染症の内容を含むものであった。

表7 新学習指導要領解説による健康(筆者作成)

		健康	栄養	医療	感染症	病
中学校 社会	地理的分野					
	歴史的分野					
	公民的分野	○		○		
高等学校 地理歴史	地理総合		○			
	地理探究				○	
	歴史総合				○	
	日本史探究					
	世界史探究			○		
高等学校 公民	公共	○		○		○
	倫理	○		○		
	政治・経済			○		

高等学校の場合、必修である地理総合、歴史総合、公共の3科目を通して、「健康」、「栄養」、「医療」、「感染症」、「病」について触れられていたことになり、今回取り上げた健康を概ね網羅していると考えられる。一方で、旧学習指導要領解説においては、以下の表のように健康に関する語等が見られていた。旧学習指導要領解説では、中学校でも高等学校でも栄養や感染症に関して言及がなかった。また、科目ごとに見てみると、中学校の地理的分野や歴史的分野では言及がなく、また高等学校でも地理歴史に関する授業での健康に関する扱いは少なく、中学校でも高等学校でも公民での扱いが中心になっていた。

表8 旧学習指導要領解説による健康(筆者作成)

		健康	栄養	医療	感染症	病
中学校 社会	地理的分野					
	歴史的分野					
	公民的分野	○				
高等学校 地理歴史	世界史A					
	世界史B					○
	日本史A					
	日本史B					
	地理A					
	地理B			○		
高等学校 公民	現代社会			○		○
	倫理	○		○		○
	政治・経済			○		

双方の学習指導要領解説を比較してみると、中学校社会では、公民的分野で「医療」の語が用いられるようになった。少子高齢社会の進展に伴い、社会保障費の増大の観点から医療制度を

扱っている。しかし、生命倫理の観点では高等学校公民科まで待つことになる。

そして、高等学校地理歴史科では、地理総合において「栄養」が表されていた。例示ではあるものの、深刻化する栄養にまつわる国際格差への注目を促している。これには、フードロスなどの食品にまつわる語が浸透してきたことも要因と考えられる。また、「感染症」についても語が新たに表れ、地理総合や歴史総合で登場した。旧学習指導要領解説でも、「病」の点から世界史Bで黒死病が扱われていたものの、新学習指導要領では地球温暖化に伴う諸問題の一つとして熱帯性の感染症、近現代を考察するうえでの観点としての感染症があることを示している。教科書上のことは過去のことではなく、現在に繋がる問題として捉えさせることを目指していると言える。加えて、「医療」が地理Bで登場していたものが、新学習指導要領下では世界史探究で登場している。地理Bでは、地域調査の内容として医療機関を用いていた。世界史探究では、医療を含む様々なテクノロジーの発展は目まぐるしいものであったが、様々な問題を孕みながら現代に至ったことから、それに伴う課題を考えさせることを目指している。

高等学校公民科では、政治・経済においても「医療」が登場している。イノベーションの深化が進んだことで医療分野での市場規模が広がっていることのみならず、付帯して考慮しなくてはならないことも合わせて考えられるようにすることとしている。政治・経済ではありながら、倫理の面も併せ持っている内容であると言える。

また、新旧のどちらにおいても、中学校の地理的分野、歴史的分野、高等学校の日本史においては、対象とした健康に関する語等について見られなかった。また、旧学習指導要領での高等学校で必修科目は、地理歴史科で世界史Aもしくは世界史B、公民科で現代社会もしくは倫理、政治・経済であった。必修科目と本稿で取り上げた語等について比較すると、健康に関して網羅していないことになる。しかし、それは健康について重視していないということではなく、必要に応じて教科用図書などで健康について取り上げているであろう。

さて、ここで社会科、地理歴史科、公民科の目標を確認しておく。社会科の目標は、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」⁹⁾を培うことである。地理歴史科のそれは、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」¹⁰⁾を養うことである。また、公民科では「社会的な見方・考え方を働かせ、現代の諸課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」¹¹⁾の育成が、目指されている。社会科、地理歴史科、公民科は、人々の生活や社会と密接にかかわる役割を担う教科に該当する。社会の有為な形成者になるためには、健康で

あることや健康な人々が多い社会の形成を目指していることが肝要である。各科目の目標と新旧双方の学習指導要領解説の健康の関係を見るに、過去から現在までの国内外の様々な情勢を学ぶとともに、健康について見識を深めることを目指す内容となっている。

おわりに

本稿は、社会科・地理歴史科・公民科の学習指導要領解説における健康の扱いについて取り上げてきた結果、これらの教科においても健康教育の一部を担っていることが明らかとなった。和田は、「保健教育の内容は他の関連教科においても扱われており、身体の構造や機能に関わる内容は生物科、食生活と健康に関わる内容は家庭科、社会と環境に関わる内容は社会科など多岐に及んでいる」¹⁵⁾と言及しており、健康教育について社会科や地理歴史科、公民科に一定の役割を期待している。社会科、地理歴史科、公民科の授業を通して健康について知識を身につけ、家族形態や生活様式が変化し続けるなかでも、健康な生活を送ることができるようになれば、教育基本法や新学習指導要領の理念に適うものとなる。

さて、本稿の今後の課題としては、健康そのものの定義や健康に関する語は他にも多様にあり、網羅的に取り上げてきたものではないため、この点については更なる追究を要することになる。また、小学校社会科での健康の扱いについても同様に着目することを要する。合わせて、小学校社会科では、より身近なテーマで健康と社会について扱われるものと推定されることから、この点についても調査が求められる。

参考文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の 学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」、2016年、
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf、2023年9月29日最終アクセス。
- 2) 法務省法務総合研究所編『令和4年版 犯罪白書』、2022年、
<https://www.moj.go.jp/content/001387336.pdf>、2023年9月29日最終アクセス。
- 3) 首都大学東京子ども・若者貧困研究センター「東京都受託事業『子供の生活実態調査』詳細分析報告書」、2018年、
<https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/joho/soshiki/syoushi/syoushi/oshirase/jittaityousabunseki.files/zentaiban.pdf>、2023年9月29日最終アクセス。
- 4) 文部科学省国立教育政策研究所『令和3年度全国学力・学習状況調査 質問紙調査報告書』、2021年、
<https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/report/data/21qn.pdf>、2023年9月29日最終アクセス。
- 5) 文部科学省総合教育政策局調査企画課「令和3年度学校保健統計(確報値)の公表について」、
https://www.mext.go.jp/content/20221125-mxt_chousa01-000023558.pdf、2022年、2023年9月29日最終アクセス。

- 6) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』、2018年、
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf、2023年 9 月29日 最終
アクセス。
- 7) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)』、2017年、
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf、2023年 9 月29日 最終
アクセス。
- 8) 國原幸一朗「中学校社会科における新型コロナウイルス感染症の教材化ー昭和22年度学習指導要領
(Ⅱ)の単元6を手がかりにー」、『名古屋学院大学論叢 社会科学篇』、第57巻第4号、p.115-138、
2021年。
- 9) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』、2017年、
[https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/
03/18/1387018_003.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_003.pdf)、2023年 9 月29日最終アクセス。
- 10) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』、2018年、
https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt_kyoiku02-100002620_03.pdf、2023年 9 月29日 最終
アクセス。
- 11) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 公民編』、2018年、
https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_04.pdf、2023年 9 月29日 最終
アクセス。
- 12) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』、平成20年7月、平成26年1月一部改訂、
[https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/
2014/10/01/1234912_003.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1234912_003.pdf)、2023年 9 月29日最終アクセス。
- 13) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』、平成21年12月、平成26年1月一部改訂、
[https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/
10/01/1282000_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000_3.pdf)、2023年 9 月29日最終アクセス。
- 14) 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 公民編』、平成21年12月、平成26年1月一部改訂、
[https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/
10/01/1282000_4.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000_4.pdf)、2023年 9 月29日最終アクセス。
- 15) 和田雅史「学校保健学における領域と構造に関する研究」、『聖学院大学論叢』、第30巻第1号、pp.1-
12、2017年。

注

・表1～6内にある(p.○○)は各指導要領解説でのページ数を示す。

博物館法改正とこれからの学芸員補教育

Revision of the Museum Law and Future Assistant Curator Education

會 田 容 弘

Yoshihiro Aita

Summery

The revised Museum Law went into effect in April 2023. The Basic Law on Culture and the Arts was added to the basic law of the Museum Law, and cultural tourism was newly added to museum operations. This paper traces the process of how museums came to play a role in cultural tourism from the perspective of the development of the law. Based on this, we would like to look forward to the curatorial training program under the revised Museum Law in our university's curatorial program.

はじめに

2023(令和5)年4月1日、改正博物館法が施行された。この博物館法改正について文化庁は「1. 法律の目的及び博物館の事業の見直し、2. 博物館登録制度の見直し、3. その他の規定の整備」(文化庁「博物館法の一部を改正する法律案の概要」)を主な改正内容としてあげている。「社会教育法」に基づいた「博物館法」に、新たに「文化芸術基本法」の精神に基づくことを追加したのである(改正博物館法第1条)。この改正以前の2008年の同法改正では「学習の成果を活用して行う教育活動機会の提供、運営状況の評価等及びそれらの情報提供、国や都道府県教育委員会による研修実施等」が改正点としてあげられた。2009年の博物館法施行規則の改正で「学芸員資格取得に必要な修得すべき科目・単位数の増加等」があった(平成二六年九月三日文部科学省令第二六号)。それを受けて文部科学省生涯学習政策局社会教育課では『これからの博物館』(2009)という冊子を作成し「博物館は「社会教育のための施設」として位置づけられ、人々の「学習の場」としての性格を強めてきました。特に近年は地域の学習拠点として、子どもたちへの参加体験型の学習機会の提供や、ボランティア等の協力を得た地域ぐるみの博物館活動、地域活性化のための知恵袋としての活動など、社会との活発なコミュニケーションに基づく活動が広がっており、「博物館」のイメージをダイナミックに変えています。」と高らかに謳ったのである。我々もそれに基づき学芸員補教育を行ってきた(会田ほか2017)。それから15年後に、博物館が「文化観光」の重荷を背負うことなど、予想もしなかった。

「博物館法」の重要な改正点について、これまで吟味が尽されたわけではない。国会において、

2022年4月22日文教委員会の博物館法改正の質疑で「れいわ新撰組」の舩後靖彦が反対討論の中で「本法案は、文化芸術基本法制定、文化財保護法改正、文化観光推進法制定との整合性を取ることが主な目的と言える」(舩後靖彦 Official Site 2022)と指摘したことは重要である。博物館が教育施設に加え、観光施設としての役割を負うことになることが正されたのである。それを栗田秀法は「文化庁としてはこれだけで九割方目的を果たしたのだと言えようが、理念上は社会教育施設だった博物館が名実ともに文化観光施設となることは博物館法にとって革命的な変更(立場によっては破壊的な改悪)であることに留意が必要である。」(栗田 2022)と指摘する。また社会教育の立場から長澤次は多面的に問題点を洗い出している(長澤 2021)。多くの問題点を内包した改正であることが懸念されている。

一方で、2022年5月13日の朝日新聞社説では「改正法には、博物館の新たな役割として、「文化観光」の推進を図り、地域の活力の向上に寄与するとの規定が盛りこまれた。社会や地域の課題に取り組むこと自体は、3年前に京都で開かれた国際博物館会議でも議論された世界の潮流だ。」と肯定的に扱っている。

もうひとつ重要な改正点に「3. その他の規定の整備 ・学芸員補の資格要件を、短期大学士を有する者で、博物館に関する科目の単位を修得した者等に」(改正博物館法施行に係る説明令和5年2月13日 文化庁企画調整課博物館振興室)」がある。改正博物館法「学芸員補の資格要件」に「短期大学士」が明記されたことは本学短期大学部学芸員課程の42年の歴史(會田 2021)では画期的なことである。現在、短期大学に学芸員課程を設置するのは5短期大学(文部科学省HP「学芸員養成課程開講大学一覧(令和5年4月1日現在)」)だけである。これからの改正博物館法のもとで活躍できる学芸員資格取得を希望する学生にどのように教育するか、学芸員課程教育に携わる教員に新たな課題が生まれたといえる。学芸員教育を担う養成校の団体である「全国博物館学講座講座協議会」の東日本部部会では既に議論がなされ、「文化観光」を学芸員課程教育科目に加えることに反対を唱える声があったという(注2)。

このように「博物館法」の基本法が変わったことに対して、その受け止め方は明確な反対ともいえない、「曖昧」としているのである。現場の方々にとっては「教育施設」でありながら、「文化観光」施設としての役割は既に担っているとの意識が強いのかもしない(会田 1997)。また、マスコミの方々にとっては博物館が文化観光施設であることは世界の潮流と、見ているのかもしない。

本論では戦後日本の文部行政の中で社会教育施設として位置づけられていた博物館が、文化観光施設としての役割をも負うことになった背景を探りつつ、これからの短期大学における学芸員補養成について考えてみたい。

1. 社会教育施設から文化観光施設へ

博物館は教育基本法に始まり、社会教育法で社会教育施設として公民館・図書館とともに位置づけられ、1951年に博物館法が制定された。法的に制定されても、国民の手の届くところに博物館が設置されるのは1973年に告示された「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準(48基準)」を待たねばならなかった(文化庁2008に示された博物館数)。48基準は県立クラスの博物館について具体的な基準を示した。未設置の県においては目標値になり、既に設置された施設においては改良点が示された。博物館が置かれた理由は「明治百年」などの記念事業との関りがあるなど、それぞれの設置者の事情があった。この基準が廃止され、2003年「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準」が新たに告示され、さらに2011年に「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」(平成23年12月20日文部科学省告示第165号)が告示される。この告示を担当したのは文部科学省の「総合教育政策局地域学習推進課」である。

1951年の博物館法制定から、何度も改正が行われているが、2022年の改正までは基本法は「社会教育法」だけであった。2022年「改正博物館法」で「文化芸術基本法(平成十三年法律第四百十八号)の精神に基づき」が加わるのである。この改正を主導し説明を担当したのは「文化庁企画調整課 博物館振興室」である。この変化には2018年の「文部科学省設置法の改正」(平成二十六年法律第六十六号)が大きく関係している。

「文部科学省設置法の一部を改正する法律の概要」では「京都への全面的な移転に向け、新・文化庁にふさわしい組織改革・機能強化を図り、文化に関する施策を総合的に推進する。」という大目標のもと

「1. 文部科学省及び文化庁の任務について、文化の振興に加え、文化に関する施策の総合的な推進を位置付ける。

また、その所掌事務に、

- ①文化に関する基本的な政策の企画及び立案並びに推進に関すること
- ②文化に関する関係行政機関の事務の調整に関すること

を追記し、文化庁が中核となって我が国の文化行政を総合的に推進していく体制を整備する。

2. 芸術に関する教育に関する事務を文部科学省本省から文化庁に移管することにより、芸術に関する国民の資質向上について、学校教育における人材育成からトップレベルの芸術家の育成までの一体的な施策の展開を図る。

※ 小学校の「音楽」「図画工作」、中学校の「音楽」「美術」、高等学校の「芸術(音楽・美術・工芸・書道)」等に関する基準の設定に関する事務を文化庁に移管する。

3. これまで一部を文部科学省本省が所管していた博物館に関する事務を、文化庁が一括して所管することにより、博物館の更なる振興と行政の効率化を図る。(下線付加筆者)

※ 社会教育施設としての博物館(文化施設としての美術館及び歴史博物館のほか、水族館、

動物園及び科学博物館等も含む)に関する事務全般を文化庁で所管することとする。

4. その他、文化審議会の調査審議事項など、上記1. ～3. の任務・所掌事務の追加を踏まえた見直しを行う。」というものである。これまでの文化庁業務からみれば、大躍進と言えよう。

この背景には経済政策を第一とする政治的戦略があったといえる。戦後日本の経済が大きく変わったといえる小泉政権から、駆け足で博物館の動きを絡めながら辿ってみる(表1)。小泉政権の民活は国家財政の重荷になった公立施設を如何にして切り離すかのひとつの方策であった。国鉄、郵政省が民営化され、国立大学は法人化された。見かけ上の、国家公務員人件費削減である。地方では、指定管理者制度が導入され、地方公務員削減を目指した。この指定管理者制度を導入した博物館が多数あった。このころから、「博物館経営」という言葉が使われだし、1997年の博物館法施行規則改正により学芸員課程においても「博物館経営論」が必修とされるようになった。いつしか、戦後経済成長が終わりを告げた。

長い経済低迷を復活させようとしたのが、第二次安倍内閣のアベノミクスだが、その前の民主党政権も公立博物館には厳しかった。事業仕分けによって、国立の施設には厳しい財政的判断が下された。財政再建を旗印にした橋下大阪府知事による大阪の博物館潰しは、地方財政再建が原因である。社会教育の独立性が様々な理由により浸食されていった。

第一次安倍内閣が手をつけた教育基本法は戦後レジームからの脱却が旗印であったが、教育を政治に巻き込む第一歩でもあった。第二次安倍内閣のアベノミクスは企業だけでなく、官民教育が一体となった。

「文化芸術の振興に関する基本的な方針—文化芸術資源で未来をつくる—」(第4次基本方針)(平成27(2015)年5月22日閣議決定)の博物館関連部分を以下に引用する(下線は筆者)。

「(2)美術館、博物館、図書館等の充実

美術館、博物館、図書館等が、優れた文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信の拠点のみならず、地域の生涯学習活動、国際交流活動、ボランティア活動や観光等の拠点としても積極的に活用され、地域住民の文化芸術活動の場やコミュニケーションを通じた絆づくり、感性教育、地域ブランドづくりの場としてその機能・役割を十分に発揮できるよう、次の施策を講ずる。」(文化庁HP「文化芸術推進基本計画」)以下美術館、博物館、図書館が取り組むべき具体的方策が列記されている。

その掛け声は「クールジャパン!」、首相は東京オリンピック招致でマリオに化けることで、ソフトなトリックスターを演じて見せた。ワンダーランドニッポンへの招待である。美味しいものを食べて、カラオケで歌って、美しい箱庭のような自然を満喫して、博物館や文化財の地域テーマパークに目を見張る。美術館には現代アートやアニメキャラ。インバウンドを誘うための仕掛けのひとつとして博物館・美術館が目につけられたのである。同時に財政再建のため

の自力更生が公立博物館に求められるのだから、拒めるはずもない。このアベノミクスの「ニッポン丸ごとテーマパーク計画」は周到で、同時多発である。そしてその中に安倍首相の歴史観が加えられていることを見過ごしてはならない。世界遺産、古代遺跡の大規模復元事業もその路線である。世界遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の中に、お膝元、山口県の史跡「萩城下町」「松下村塾」が含まれている。「長州だけが明治の産業革命を牽引したわけではあるまいに」と言うのは東北人の僻みであろうか。それに答えるように「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産指定が準備されていた。文化庁はもろ手を挙げてその列車に飛び乗った。この計画は2020年に開催されるはずであった東京オリンピックで開花する予定であった。ところが、皮肉にも2019年12月に発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)により、計画は頓挫することになる。

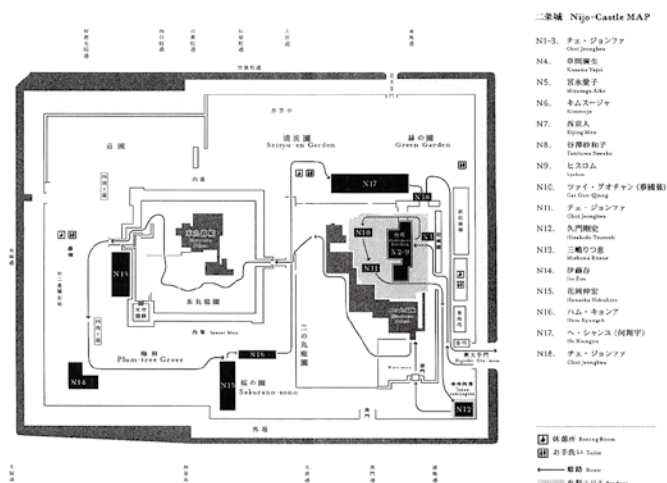
第二次安倍政権以降の官邸主導型の「経済再建」計画の一角を担う外国人観光客受け入れの観光政策がある。それに伴う法整備として、2006年「観光立国推進法」が制定され、2008年に国土交通省観光庁が設置される。2008年に社会教育法が改正され、歴史まちづくり法が制定、2013年にアベノミクス日本再興戦略：観光立国の実現が提示される。2015年には文化庁による「日本遺産」認定が開始される。2017年に文化芸術振興法を改正し「文化芸術基本法」が制定され、18年には文部科学省設置法が改正され、文化芸術振興、博物館の監督官庁が文化庁となり、2020年には文化観光推進法が文化庁の手により制定され、21年には文化財保護法が改正され、文化財の公開が一気に加速する。これらと並行し、世界遺産に日本の文化・自然の景勝地が毎年のように登録されている。

最後に2023年、博物館法が改正され、施行されるのである。その博物館法には「文化芸術基本法」の精神が注入された。文化芸術を担う基幹施設という位置づけは既に「文化観光推進法」の中にあったのである。博物館は「文化観光」を担う文化庁の手中にあったのである。博物館に逃げ道はなかった。

2. 観光施設としての博物館－学芸員はいらないのか－

「山本幸三・地方創生相「学芸員はがん。一掃しないと」発言に批判相次ぐ」(2017年4月)という記事が新聞や報道をにぎわしたことがある。山本元大臣は大蔵官僚から衆議院議員となり「自他共に認めるアベノミクスの仕掛け人」とのことである。2017年4月は「文化芸術基本法」が成立の見通しで、「第二十六条 国は、美術館、博物館、図書館等の充実を図るため、これらの施設に関し、自らの設置等に係る施設の整備、展示等への支援、芸術家等の配置等への支援、文化芸術に関する作品等の記録及び保存への支援その他の必要な施策を講ずるものとする。」ことになっており、学芸員・司書は「展示等への支援、芸術家等の配置等への支援」を行わねばならないことになっている。この年の夏、京都二条城では「東アジア文化都市2017京都 アジア

回廊「現代美術展」(第1図)が行われることになっていた。国宝「二条城」を会場として、巨大な現代アートが所狭し、と並ぶのは「文化財保護法」を遵守する学芸員(文化財担当職員)には許可の際、大きな負担であったと推測される。



第1図「東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展」会場見取り図と展示風景(會田撮影)

この出来事は博物館関係者にとって、学芸員の役割を再考するよい機会と考える向きもあった。しかし、実際にはこれが議論となることはなかった。逆に筆者にはこの出来事が、改正博物館法下の学芸員の未来像に見えるのである。博物館が教育委員会部局を離れ、首長部局に移動した時、「観光政策」を旗印とする首長が「文化財を活用した観光」に向かい旗振りをした場合、「それは文化財保護法に抵触します。」と学芸員は言えるだろうか。多分「君の仕事は規制することではない。規則に触れない方策を考えることだ。」と一喝されるのだ。

学芸員も一枚岩ではない。歴史系学芸員と美術系学芸員のスタンスの違いもある。そのような理由もあり、文化芸術基本法では博物館と美術館を別にしているのかもしれない。

3. 「短期大学士」としての「学芸員補」養成課程

改正博物館法に「(学芸員補の資格)第六条 次の各号のいずれかに該当する者は、学芸員補となる資格を有する。

一 短期大学士の学位(学校教育法第百四条第二項に規定する文部科学大臣の定める学位(専門職大学を卒業した者に対して授与されるものを除く。)及び同条第六項に規定する文部科学大臣の定める学位を含む。)を有する者で、前条第一項第一号の文部科学省令で定める博物館に関する科目の単位を修得したもの

二 前号に掲げる者と同等以上の学力及び経験を有する者として文部科学省令で定める者」と明記された。今回の改正で「学芸員補」の資格に明確な基準が記されたことになる。「文部科学省が定める博物館に関する科目」とは、「博物館法施行規則」に定める「生涯学習概論」「博物館概論」「博物館経営論」「博物館資料論」「博物館資料保存論」「博物館展示論」「博物館教育論」「博物館情報・メディア論」「博物館実習」を指す(博物館法施行規則第一条)。本学学芸員課程においては設置当初からこれら「博物館に関する科目」を開講していた。さらに学芸員課程を擁していた旧文化学科においては博物館関連科目(旧・博物館法施行規則)とされた9科目のうち、「文化史」「美術史」「考古学」「民俗学」「生物学」を開講し(郡山女子大学短期大学部文化学科1998)、短期大学の中でも文系学芸員補養成に特化した教育を行ってきた。この教育成果は福島県内の博物館施設の解説員として活躍するなどとして現れている(郡山女子大学短期大学部文化学科1998～2018)。改正博物館法に伴う「博物館法施行規則」(令和五年二月一〇日文部科学省令第二号)の改正により、これらの博物館関連科目は消えてしまった。本学の学芸員補養成が実際に効果をあげてきたことは福島県下の博物館施設に就職した多くの卒業生がおり、それを報告した事例を引いて「学芸員補の必要性」と肯定する博物館関係者もいる(栗原 2022 pp.209)。

では、改正博物館法に適合する現実的な学芸員補はどのようにして養成すべきなのであろうか。「博物館」の理念を論じるのではなく、「博物館法」に記載された「博物館」施設の学芸員を養成するのであれば、当然、博物館法の記載内容にあった博物館の担い手を教育する必要がある。その意味で「社会教育法」に則った「教育施設」であると同時に「文化芸術基本法」の精神に則り、「文化芸術」の発表の場としての博物館を運営する知識を提供することになろう。これをより深く理解するには「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律」(令和二年法律第十八号)を参照する必要がある。そこに博物館の役割が明記されている。ここでいう「文化資源保存活用施設」とは「博物館、美術館、社寺、城郭等」を指し、「(各計画において行われる事業のイメージ)①文化資源の魅力増進・地域の文化資源の調査研究・鑑賞しやすい展示改修・デジタル・アーカイブ化及び活用・専門人材確保②理解を深めるのに資する取組・展示品のわかりやすい解説及び多言語化・情報通信技術の活用・ガイドツアー及び体験プログラムの実施③利便の増進・地域内の周遊バス借上・キャッシュレス、Wi-Fi整備・バリア

フリー整備(スロープ等)④物品の販売提供、他施設との連携⑤国内外への宣伝」(文化庁「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律の概要」)である。博物館がめざす「文化観光拠点施設」の項目は「わかりやすい解説」である。そこには「学芸員補」としての「解説員」の活躍の場が認められる。

本学における「実践力ある学芸員補」の養成は、「博物館実習」において展示を計画立案から実施、体験学習、展示解説まで行う教育である(仲田 2020~23)。展示は博物館施設との共催で実施している。SNSを用いた広報活動も行っている。これからこのような学芸員補養成の授業にデザイン系の教員を加えることを目論んでいる。本学が地域創成学科として再編されたことで、学科内の教員による授業担当ができるようになったことが大きい。ほかにも「地域創成プロジェクト演習」が必修化されているので、地域の文化施設や文化行政との連携を経験することができている。それらの知識と経験を獲得し、博物館施設で実践する準備は整っている。さらに、「学芸員」資格を得ようとする場合は、特例適用専攻科である「専攻科文化学専攻」が準備されている。展示だけでなく、イベントを企画できる学芸員が養成されているのである。これらの学生の弱点を挙げるとすれば、ある研究分野に特化した学識を得るまでに至っていないことである。もし、そのような学識を得たいと希望するならば、その分野の大学院進学を勧めることになる。

このような教育内容を踏まえた学芸員補資格を取得した学生が卒業後、博物館に迎え入れられ、博物館解説員となる。そこに立ちはだかるのが待遇の問題である。最も多いのが有期雇用または単年度雇用である。これでは安定した職業とはいえない。そこに教育現場のジレンマがある。

4. 考察

博物館法改正の背景を時系列で記述した。文化観光戦略の背景を解き明かした。これらのことから考察されることは従来の教育機関としての博物館機能低下の予測であり、学芸員の負荷が異常に高くなる。それを解消するためには博物館学芸員が社会教育と文化観光の両者の責務を担うのではなく、職務を分掌すべきであると考ええる。その方策はこれまで解説員として雇用されていた、学芸員補の積極的活用である。

前回の博物館法改正を取り仕切り、京都国立博物館副館長として国際博物館会議京都大会を乗り切った現・国立科学博物館副館長栗原祐司は自著で「研究なくして展示はない。」という主張はもっともらしく聞こえるけれども、研究だけしか行わない博物館職員は、もはや学芸員ではないだろう。」(栗原 2022)と述べている。この発言を肯定的にとらえるならば、「研究なくして展示はない」という学芸員もいるが、解説業務やイベント開催に特化した学芸員補がいることを忘れてもらっては困るのである。

博物館法には「(学芸員の資格)第五条 次の各号のいずれかに該当する者は、学芸員となる資格を有する。(中略)二 次条各号のいずれかに該当する者で、三年以上学芸員補の職にあったもの」という項目がある。多くの博物館では期限付き解説員がなくなり、長期的に経験を積む職員が生じている。実際、すべての解説員が学芸員補資格を持つ者ではない場合が多いようである。ここで、登録博物館の解説員は学芸員補以上の有資格者のみ採用し、博物館法の第五条二にあるように三年以上の学芸員補の職にあったものを学芸員として正式採用する道を開いてはどうだろうか。

近年のZ世代と呼ばれる学生は、過剰な業務内容の職場を敬遠する傾向にある。その代表例は「教職」(小中学校教員)であろう。博物館学芸員も同様の職種と見られれば、職業としての「学芸員」の価値は低下する。そうしないために職掌の分化を行い、窓口を広げる必要がある。そのような具体的方策がなければ、博物館法をここまで改正した意味がないのではなかろうか。

おわりに

改正「博物館法」が根本法に「社会教育法」だけでなく「文化芸術基本法」が加わったことのその背景と根本的部分について述べてきた。現実に現行「博物館法」のもと、博物館経営は行われ、文化庁もそれを支援する事業を様々な形で行っている。厳しい経営環境下の博物館はそれに飛びつかざるを得ない。

一方でコロナ明けの日本の観光はコロナ前に回復したとは言えないが、7～8割の回復を示している。ほくほく顔の土産物屋の店主のインタビューと並び、「オーバーツーリズム」という言葉が新聞紙面を賑わし出した。「観光」の弊害である。

博物館が「文化観光」を担う施設になったことは、逃れられない事実である。この状況乗り越えるために、「学芸員補」の積極的活用を提案した。その根拠となるのは本学の学芸員補の養成教育内容である。様々な形で集客数が増加するならば、博物館でもそれらに対応できる職員が必要となるのは道理である。理念としての博物館は置いておこう。現実の博物館をよりよく運営するために現行の「博物館法」を遵守した経営が必要である。

注

注1)「基本法」という用語は本論では法律が立脚する上位法をさす。

注2)令和5年度全国博物館学講座講座協議会東日本部部会総会に本学学芸員課程仲田佐和子准教授と佐藤愛未講師が出席した。その報告による。

引用文献

会田容弘1997「地域資料館の挑戦—宮城県鳴瀬町奥松島縄文村、その理念と実践」『宮城県歴史科学研究』第43・44合併号 pp.36-46

會田容弘2021「郡山女子大学短期大学部専攻科文化学専攻における考古学教育」郡山女子大学短期大学部専攻科文化学専攻編『地域と文化—郡山女子大学短期大学部専攻科文化学専攻創設20周年記念—』pp.38-49

会田容弘・仲田佐和子・桑野聡2017 「学芸員養成課程の実質化と地域貢献の試み—郡山女子大学短期大学部文化学科を例として—」『全博協研究紀要』第19号pp.105-118

郡山女子大学短期大学部文化学科1998～2019「学芸員課程科目」『資格課程(文化学科)報告集』第1～21集

栗田秀法2021「博物館法よ、お前もか。」『月刊美術手帳』

(<https://bijutsutecho.com/magazine/insight/25235>) (2023年9月30日閲覧)

伊藤寿郎1975「博物館法の成立とその時代」『博物館学雑誌』第1巻第1号pp.26-40

金子淳2001『博物館の政治学』

栗原祐司2022『基礎から学ぶ博物館法規』

長澤成次2022「文化審議会答申を博物館法改正問題—市民の学びの自由と権利を保障する博物館の自由をめぐる—」月刊『住民と自治』3月号pp.11-15

博物館法令研究会2023『改正博物館法詳説・Q&A 地域に開かれたミュージアムをめざして』

文化庁2008『平成20年度 日本の博物館総合調査研究報告書』https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/hokoku/h20/1409474.html (2023年9月30日閲覧)

「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律の概要」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/index.html (2023年9月30日閲覧)

舩後靖彦 Official Site 2022「2022年4月7日 参議院文教科学委員会質疑・反対討論(博物館法改正案について)」<https://yasuhiko-funago.jp/page-220407/> (2023年9月30日閲覧)

文部科学省生涯学習政策局社会教育課2009『これからの博物館』

仲田佐和子2020～23「博物館実習報告」郡山女子大学短期大学部地域創成学科『地域創成学科報告集』第1～4集

日本の博物館の歴史

年代	元号	博物館法	博物館規則等	関連法規	社会事象	首相	世界遺産 (記載年)	戦後の博物館に 関する施策の推移
1950	昭和25			文化財保護法				
1951	昭和26	博物館法公布				吉田 茂		
1952	昭和27		博物館法施行 規則の制定(学 芸員の資格等 を制定)			吉田 茂		国際博物館会議(ICOM)、 日本国内委員会の加盟を 承認 恩賜京都博物館、文化 財保護委員会所管とな り、京都国立博物館と 改称 東京文化財研究所・奈 良文化財研究所発足 国立近代美術館設置
1953	昭和28					吉田 茂		
1954	昭和29					吉田 茂		
1955	昭和30	博物館法の改 正(博物館の設 置主体の範囲 を広げ、学芸 員資格取得の ための講習を 廃止して、自 然系、人文系 学芸員を一本 化し、文部大 臣が資格を認 定する制度に 改め、また文 部大臣が博物 館相当施設を 指定できるよ うにするなど) 博物館法施行 規則の制定(博 物館法の改正 を受けて、学 芸員資格に関 する規定の全 面改訂)			高度経済成長期	鳩山 一郎		
1956	昭和31				高度経済成長期	鳩山 一郎		
1957	昭和32				高度経済成長期	石橋 湛山・ 岸 信介		
1958	昭和33				高度経済成長期	岸 信介		
1959	昭和34				高度経済成長期	岸 信介		国立西洋美術館設置
1960	昭和35				高度経済成長期	池田 勇人		
1961	昭和36				高度経済成長期	池田 勇人		
1962	昭和37				高度経済成長期	池田 勇人		
1963	昭和38				高度経済成長期	池田 勇人		
1964	昭和39				高度経済成長期・東京オリン ピック	池田 勇人		山形美術館
1965	昭和40				高度経済成長期	佐藤 栄作		所得倍増計画、明治百 年事業等により、博物 館の設置が進んだ。
1966	昭和41			古都保存法 (国交省)	高度経済成長期	佐藤 栄作		
1967	昭和42				高度経済成長期	佐藤 栄作		秋田県立美術館

博物館法改正とこれからの学芸員補教育

年代	元号	博物館法	博物館規則等	関連法規	社会事象	首相	世界遺産 (記載年)	戦後の博物館に 関する施策の推移
1968	昭和43				高度経済成長期	佐藤 栄作		文化庁を設置
1969	昭和44				高度経済成長期	佐藤 栄作		
1970	昭和45				高度経済成長期・大阪万国博覧会	佐藤 栄作		列島改造論、三全総に沿って地方の開発が進み、各地域に博物館が設置された。また、社会教育が生涯学習の概念に包含された。
1971	昭和46				高度経済成長期	佐藤 栄作		山形県立博物館
1972	昭和47				高度経済成長期・日本列島改造論・札幌オリンピック	田中 角栄		
1973	昭和48		公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準(48基準)			田中 角栄		東北歴史資料館・青森県立郷土館
1974	昭和49					田中 角栄		国立民族学博物館設置
1975	昭和50			文化財保護法の改正(各種の開発事業の進展から埋蔵文化財の保護を強化するための制度の充実等)		三木 武夫		秋田県立博物館・文化財保護法の改正(各種の開発事業の進展から埋蔵文化財の保護を強化するための制度の充実等)
1976	昭和51					福田 赳夫		
1977	昭和52					福田 赳夫		第3次全国総合開発計画(三全総)決定
1978	昭和53					福田 赳夫		
1979	昭和54					大平 正芳		
1980	昭和55			明日香法(国交省)		鈴木 善幸		岩手県立博物館
1981	昭和56					鈴木 善幸		国立歴史民俗博物館設置・宮城県立美術館
1982	昭和57					中曽根 康弘		
1983	昭和58				TDL開園	中曽根 康弘		
1984	昭和59					中曽根 康弘		福島県立美術館
1985	昭和60				NTTグループ・日本たばこ産業株式会社民営化	中曽根 康弘		
1986	昭和61				バブル景気	中曽根 康弘		福島県立博物館
1987	昭和62				バブル景気・JRグループ民営化	竹下 登		
1988	昭和63				バブル景気・ふるさと創生事業	竹下 登		
1989	平成1				バブル景気・ふるさと創生事業	宇野 宗佑・海部 俊樹		
1990	平成2				バブル景気	海部 俊樹		博物館の整備・運営の在り方について・社会教育審議会社会教育施設分科会報告
1991	平成3				バブル景気	宮澤 喜一		
1992	平成4					宮澤 喜一		

郡山女子大学紀要 第60集(2024年3月)

年代	元号	博物館法	博物館規則等	関連法規	社会事象	首相	世界遺産 (記載年)	戦後の博物館に 関する施策の推移
1993	平成5					細川 護熙	法隆寺地域の 仏教建造物・ 姫路城・屋久 島・白神山地	
1994	平成6					羽田 孜・ 村山 富市	古都京都の文 化財	
1995	平成7				阪神・淡路大震 災	村山 富市	白川郷・五箇 山の合掌造り 集落	
1996	平成8					橋本 龍太郎	原爆ドーム・ 厳島神社	行政改革の推進にとも ない、規制緩和、地方 分権の推進、民間活力 の活用がなされる。
1997	平成9		博物館法施行 規則の一部改 正(学芸員資格 取得に必要な、 大学において 習得すべき博 物館に関する 科目及び単位 数の整備等)			橋本 龍太郎		
1998	平成10				長野オリンピッ ク・KDDI株式会 社民営化	小淵 恵三	古都奈良の文 化財	公立博物館の設置及び 運営に関する基準の一 部改正告示(学芸員定数 規定の廃止)
1999	平成11					小淵 恵三	日光の社寺	
2000	平成12				「行政改革大綱」 独立行政法人	森 喜朗	琉球王国のグ スク及び関連 遺産群	地方自治法の一部改正 施行(博物館の登録・博 物館相当施設の指定な どの事務が、国の機関 委任事務から都道府県 の自治事務に)文化財保 護法の一部改正施行(地 方公共団体による埋蔵 文化財の発掘、埋蔵文 化財の都道府県帰属等)
2001	平成13			文化芸術振興 基本法 (文化庁)	USJ開園	小泉 純一郎		岩手県立美術館・文部 科学省を設置・国立美 術館、国立美術館、国 立科学博物館などの16 独立行政法人の設立
2002	平成14				サッカー WC共 同開催	小泉 純一郎		
2003	平成15		公立博物館の 設置及び運営 上の望ましい 基準	地方自治法244 条改正による 指定管理者制 度(総務省)		小泉 純一郎		
2004	平成16					小泉 純一郎	紀伊山地の霊 場と参詣道	国立大学法人、大学共 同利用機関法人の発足 (国立民族学博物館、国 立歴史民俗博物館を包 摂する人間文化機構の 発足)
2005	平成17					小泉 純一郎	知床	九州国立博物館開館

博物館法改正とこれからの学芸員補教育

年代	元号	博物館法	博物館規則等	関連法規	社会事象	首相	世界遺産 (記載年)	戦後の博物館に 関する施策の推移
2006	平成18			観光立国推進 法(観光庁)教 育基本法改正 (文科省)		安倍 晋三		青森県立美術館
2007	平成19				国立文化財機構 設置・日本郵政 グループ民営化	福田 康夫	石見 銀山遺跡 とその文化的 景観	国立新美術館開館・国 立文化財機構の発足(独 立行政法人国立博物館 と同文化財研究所の統 合)、地方教育行政の組 織運営に関する法律改 正(文化施設の特例化)
2008	平成20	博物館法の一部改正(文部科 学大臣・都道 府県教育委員 会による学芸 員等に対する 研修の努力義 務、博物館に よる運営状況 の評価とその 結果の活用 の努力義務)		社会教育法改 正・歴史まち づくり法 (国交省)	国土交通省観光 庁設置	麻生 太郎		教育振興基本計画 (閣議決定)
2009	平成21		博物館法施行 規則改正(大幅 な学芸員資格 取得に必要な、 大学において 習得すべき博 物館に関する 科目及び単位 数の改正等)			鳩山 由紀夫		
2010	平成22					菅 直人		
2011	平成23		博物館の設置 及び運営上の 望ましい基準		東日本大震災	菅 直人	小笠原諸島・ 平泉－仏国土 (浄土)を表す 建築・庭園及 び考古学的遺 跡群	
2012	平成24					野田 佳彦		
2013	平成25				アベノミクス日 本再興戦略：観 光立国の実現 (安倍内閣)	安倍 晋三	富士山－信仰 の対象と芸術 の源泉	
2014	平成26					安倍 晋三	富岡製糸場と 絹産業遺産群	
2015	平成27				日本遺産認定開 始(文化庁)新・ 観光立国論(ア トキンソン)	安倍 晋三	明治日本の産 業革命遺産 製鉄・製鋼、 造船、石炭産 業	
2016	平成28					安倍 晋三	国立西洋美術 館本館	
2017	平成29			文化芸術基本 法(文化庁)	山本幸三・地方 創生相「一番の ガンは、文化学 芸員」	安倍 晋三	「神宿る島」宗 像・沖ノ島と 関連遺産群	文化庁に「文化経済戦略 特別チーム」設置

郡山女子大学紀要 第60集(2024年3月)

年代	元号	博物館法	博物館規則等	関連法規	社会事象	首相	世界遺産 (記載年)	戦後の博物館に 関する施策の推移
2018	平成30			文部科学省設置法の改正(博物館が文化庁の管轄)		安倍 晋三	長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産	文部科学省設置法改正(博物館行政は文化庁に移管)により博物館行政は「生涯学習政策局社会教育課」から「文化庁」に移管され、博物館法審議の場が「中央教育審議会社会教育分科会」から「文化審議会」へ移る。
2019	令和1				国際博物館会議(ICOM)京都大会	安倍 晋三	百舌鳥・古市古墳群	「地教行政法」改正及び「地域の自主性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律」により博物館、図書館、公民館など地方公共団体の判断により首長部局への移管が可能。
2020	令和2			文化観光推進法(文化庁)	コロナ	菅 義偉		
2021	令和3			改正文化財保護法(文化庁)	コロナ・東京オリパラ	菅 義偉	奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島・北海道・北東北の縄文遺跡群	
2022	令和4	改正博物館法公布			コロナ	岸田 文雄		
2023	令和5	改正博物館法施行	博物館法施行規則改正			岸田 文雄		

【翻訳】ゲルト・アルトホフ「デモンストレーションと演出 ーヨーロッパ中世の公共圏におけるコミュニケーションのルール」(1)

Übersetzen und Erklärung : Gerd Althoff, Demonstration und Inszenierung.

Spielregeln der Kommunikation in mittelalterlicher Öffentlichkeit

桑 野 聡

Satoshi KUWANO

Dieser Artikel ist eine Übersetzung von Gerd Althoff, *Demonstration und Inszenierung. Spielregeln der Kommunikation in mittelalterlicher Öffentlichkeit*, in : *Ders., Spielregeln der Politik im Mittelalter, Kommunikation in Frieden und Fehde*. Darmstadt, 1997. S.229-257. (*Frühmittelalterliche Studien* 27. 1993. S.27-50.). Dieses Manuskript sollte ursprünglich im Jahr 2006 veröffentlicht werden, konnte aber aufgrund der Umstände nicht realisiert werden. Obwohl seit seiner Veröffentlichung mehr als ein Vierteljahrhundert vergangen ist, dachte ich darüber nach, wie wichtig es ist, es auf Japanisch lesen zu können, und hatte die Gelegenheit, es zu präsentieren. Ich danke Prof. Dr. G. Althoff und Prof. Dr. W. Drews für ihre freundliche Zustimmung zur Übersetzung.

【解題】

本稿はGerd Althoff, *Demonstration und Inszenierung. Spielregeln der Kommunikation in mittelalterlicher Öffentlichkeit*, in : *Ders., Spielregeln der Politik im Mittelalter, Kommunikation in Frieden und Fehde*. Darmstadt, 1997. S.229-257. (初出は*Frühmittelalterliche Studien* 27. 1993. S.27-50.)の翻訳である。本翻訳は、2002年より東京大学の相沢隆教授の呼び掛けで「ドイツの中世史研究の最新動向を伝えよう」と集まった研究者グループが2007年に出版予定だった翻訳論文集『ヨーロッパ中世史研究の新潮流』に掲載するために用意されたものである。事情によって刊行が実現しなかったが、発表から四半世紀を過ぎた現在でも邦語によってこの論文を読めることには意義があると考え、発表の機会を得ることとなった。

著者ゲルト・アルトホフは、1943年生まれ。ミュンスター大学とハイデルベルク大学で学び、1981年にフライブルク大学で大学教授資格を取得。同大学のカール・シュミートのもとで中世ドイツ国制史・貴族史研究に携わり、祈禱兄弟盟約者名簿やネクロロギウムを用いた実証研究を蓄積した。ギーセン、ボン、ミュンスター各大学の教授を歴任した後、1997年からミュンスター大学教授となり、同大学の初期・盛期中世研究所所長を務められ、名誉教授となった現在も精力的な研究活動を展開している。90年代からは「儀礼・象徴・コミュニケーション」に着目して、中世社会の政治的構造の特徴を明らかにし、従来のドイツ国制史研究の構築した「中世像」

の再検討に積極的に取り組んでこられた。その旺盛な研究活動は欧米諸国にとどまらず、2004年10月9日には私たちの研究グループが準備した東京大学駒場キャンパスにおけるシンポジウム「ヨーロッパ中世史研究の新潮流」、および翌日の東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究室(DESK)主催「ヨーロッパ中世史国際シンポジウム 新しい中世像を求めてー西洋文化における他者の生成」の招待を受けて日本にも来日した(シンポジウムの記録はhttp://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/d_041010.html)。近年の研究活動は、Althoff, G. *Spielregeln der Politik im Mittelalter. Kommunikation in Frieden und Fehde*, 2. um Nachwort ergänzte Aufl., Darmstadt 2014 ; Ders., *Kontrolle der Macht. Formen und Regeln politischer Beratung im Mittelalter*, Darmstadt 2016. などにまとめられている。

また同氏の翻訳には『中世人の権力ー「国家なき時代」のルールと駆引』(柳井尚子訳、八坂書房、2004年)、「中世盛期の戦士貴族社会における紛争ルール」(服部良久訳、笠谷和比古編『公家と武家の比較文明史』思文閣出版、2005年)、「紛争行為と法意識ー十二世紀におけるヴェルフェン家」(服部良久訳、同編『紛争の中のヨーロッパ中世』京都大学学術出版会 2006年)がある。また本論文の紹介を意図した政治的コミュニケーションと儀礼、中世の公共圏などの注目すべきテーマに着目して、アルトホフとその後の関連研究領域の動向を邦語で伝える最良の文献として、服部良久『中世のコミュニケーションと秩序ー紛争・平和・儀礼』(京都大学学術出版会 2020年)所収の諸論文、特に第1章「ヨーロッパ中世史研究における「コミュニケーション」」1～25頁を参照することを推奨する。

アルトホフは本論文で、中世の限定的な公共圏において人びとが言葉以上にコミュニケーション手段として象徴的・儀礼的な行為を重要視していたことを指摘し、そこに近代社会とは異なる独特な秩序維持のための行動ルール(Spielregeln)が存在することをハインリヒ1世とシャルル単純王とのボン条約締結、コンラート2世の国王即位式の事例やオットー3世のティボリ包囲、ハインリヒ4世のカノッサ事件、フリードリヒ・バルバロッサとイタリア都市との紛争の仲裁・降服・和解の結びつき過程などを例に解説する。更にこれらの公然での「見せつける」行為(Demonstration)の前提として、事前の打ち合わせの存在を確信し、第2回十字軍への参加をめぐるエピソードなどを例に「演出」(Inszenierung)の問題に言及する。明文化されない行動文化の分析には少なからず困難が伴うが、アルトホフは現在もなお自ら修正点を模索しながら、この遠大なテーマに取り組んでいる。それ故、同氏の本論文に類似する著作は多数あり、それらが相互補完の関係にあったり、後に修正が加えられたケースも見出すことが出来る。本論文は今となっては決して最新のものではないが、そうした中で彼の中世社会における公的・政治的なコミュニケーションの在り方に関する全体像を概観するに最も適したものと判断して翻訳を試みた次第である。また本論文も所収するアルトホフの研究意図を理解する上で重

要な論文集 *Spielregeln der Politik im Mittelalter*, については、西川洋一氏の紹介(『(東京大学) 大学院研究年報』第116巻9・10号、2003年、157～161頁)も参照されたい。加えて、近年の関連研究領域との関係については、上記の服部良久氏の研究と共に以下の日本の論文も有益である。西川洋一「中世前期のレーン制に関する研究動向ー西洋法制史」(『国家学会雑誌』128-5・6、2015年)、同「『パフォーマティブ・ターン』の中の中世国制史」(『国家学会雑誌』131-1・2、2018年)。

最後に、お蔵入りしていた原稿を日本における中世史研究のために活用することをご助言いただいた大妻女子大学名誉教授の森義信先生に感謝申し上げたい。そして2004年の来日の際にご挨拶して以来の唐突なお願いにも拘わらず、アルトホフ教授は迅速で丁寧なお返事を頂き、現ミュンスター大学初期・盛期中世研究所所長ヴォルフラム・ドリュース教授に連絡して頂いて今回の翻訳論文の公表に対して快諾をいただいた。お二人のご好意に、改めて心より感謝申し上げます。

尚、本論文は1回での掲載を希望したが分量規定によって叶わなかった。それ故、今回は本文部分の翻訳のみの掲載となり、次号に詳細な註を別途掲載予定となったことをご了解いただきたい。規定を越える翻訳論文の掲載を検討いただいた郡山女子大学紀要編集委員会の皆さまのご配慮に感謝申し上げますと共に、読者の皆様には一部不便をお掛けすることとなることをお詫びしたい。

【翻訳】

この論文の題名には、普通ヨーロッパ中世には用いられないさまざまな概念が一堂に集められている¹。ユルゲン・ハーバーマスやルキアン・ヘルシャーの説を信じるならば、ヨーロッパ中世には公共圏(Öffentlichkeit)とは全く存在しないか、あるいは存在したとしても限られたものに過ぎなかった²。国家的権力の担い手たちを持続的に統制することに努め、その権力に真っ向から向き合う形で存在する「社会を秩序づける原理」と解される公共圏とは18世紀以前には存在せず、それが啓蒙思想から生み出されたものと言うことは、ハーバーマスたちにおいても、また他の場所でも読むことが出来る³。ヨーロッパ中世には、ただ「代表的具現の公共性」(repräsentative Öffentlichkeit)というものを見出すだけだ。そこでは「封建的権威の威光」が「人民」(Volk)に見せつけられ、彼らの権威を人民にしっかりと認識させる効果をもった⁴。だからこそ、この「見せつける」(Zur-Schau-Stellung)という機能と、ヨーロッパ中世における政治的コミュニケーションとの関係が問題となるのだ。

確かに政治的コミュニケーションの担い手と形態が中世と近代で同じままだとまでは、主張することができないだろう。しかし、しばしば史料中に確認される内々の空間(Vertraulichkeit)、いやむしろ内密とさえ言うことができる圏域と並存する公の場というもの

の存在は疑いを容れない⁵。そして、宮廷会議、部族集会、教会の重要な祝祭や国王選挙といったこの中世の公共圏においてなされ、そして確かに別の地平でもまたなされたコミュニケーションは少なからず政治的なものだったが、事情によっては高度に政治的でさえあった。但し、そのコミュニケーションは、公に意見が戦わされ、問題が言葉による対決と論拠の重みを通じて解決に導かれる討論によって必ずしも特徴づけられるものではなかった。

ヨーロッパ中世という時代にあつて公の場では、むしろ言語を用いないコミュニケーション行為が優位を占めていた。我々が儀礼やセレモニーという概念で呼ぶ行為の中で何かが示され、見せつけられ、具体的に表現されたのだ。そうした行為の例には、修道院や都市への荘重な国王の入城式(adventus・Entrées)と彼らの儀式張った出立⁶、厳粛な叙任式、我々にはおぞましい国王廃位の儀式⁷、教会に出入りする際の行列があり、支配者集団の序列がそこにおいて表現された⁸。酒宴と祝宴もそうで、そこでは同じことが行われ、あるいはまた参加者の同格性が誇示され、平和と友好の樹立と持続が示されると共に知らしめられた⁹。国王や聖俗権力の担い手たちといった中世の有力者たちの活動を概観するならば、彼らは、私たち現代人が「政治的コミュニケーション」と理解しているもの——それは、まずもって言葉による行為と考えられているが——よりも、そうした行為によってはるかに強く規定されている。勿論、中世の公共圏においてもまた言葉は使われていた——例えば、臣下による助言(*consilium*)を想起できる。これは、彼らにとって最も重要で気高い仕事のひとつであり、原則として公的に行われた¹⁰。しかしながら、中世において言葉による意志の伝達は、公的なコミュニケーションの中心ではなかった。レプレゼンタツィオン(Repräsentation)を——これは代表の意味ではなく「見せつける」という意味で——中世の公共圏において、支配や統治の担い手たちの行動は目指した¹¹。しかし、この事実の発見で立ち止まっているわけにはいかない。この種のコミュニケーションの機能とそれがいかなる役割を果たしたかが問われなければならない。

この種のコミュニケーションの機能と働きを問おうとすると、作法・習慣・慣例・風習・規則に関する識見を得ること——簡潔に言えば、この分野で適用され、守られたり破られたりし、あるいはまた変更されたルールを研究するという——に向かわざるを得ない。率直に言えば、こうした目論みは相当な範囲を研究対象とすることとなる。というのは、身ぶり・仕草・儀礼・セレモニーといったものが、中世の生活のあらゆる領域で表れてくるからで、修道院や教会の領分でも世俗におけると同様の頻度で遭遇する¹²。また中世の法秩序も、この秩序の根本的な構成要素であつた法儀礼的・法象徴的な行為によって特徴づけられていた¹³。しるし・シンボル・行動のパターンによる複雑なひとつのシステムを中世の人々は自由に用いていた。このシステムによって中世人は、言葉を使わずに地位・身分・階級、友好関係と歓喜・敵対関係と憤懣といったその時々相手の相手に対する関係を表現できたのである。これは一般に知られていることであり、そして20世紀の人間がこの潜在能力を、たとえ異なった形であれ、更に引き

続き利用していることは言うまでもないことである¹⁴。従って、中世史研究においても多くの先駆的研究が存在する。想起されるべきは、パーシ・エルンスト・シュラムの『支配表象と国家象徴』、ハインリヒ・フィヒテナウ、ジャン・クロード・シュミット、あるいはジャック・ル・ゴフの諸研究、カール・レイザー、ジャネット・ネルソンやジョフリー・コジョルによる英語圏の研究である¹⁵。それにもかかわらず、そうした諸研究は、とりわけドイツの中世研究においては、実際にはほとんど定着してはいない。その際、上述したルールに関する知識の欠如と無視が時代錯誤的な判断を助長していることは明らかである。遠く過ぎ去った時代における行動の枠組みとなる諸条件を研究テーマとしない者は、十分に考えることもなく、諸条件を今日と同じだと見なす危険を冒す。これは危険な誤りと言えよう。それゆえ、行動の枠組みとなった諸条件が研究され、判断の際に尊重されねばならないことは明らかであろう。むしろ問題なのは、その方法である。なぜならば、以下のことは確かだからである。ここで問題とするルールは、規範的資料ではどこにも文字に書き留められてはいない。むしろ、このルールは具体的な事件や出来事の描写から推論されなければならず、それは決して容易なことではないのである。

ここではそれ故に、この広範な領域に対する全般的な概観ではなく、このテーマのひとつの、しかし中心的な観点に焦点を絞ることが求められる。論述の中心には、どのように中世の公共圏でこれらのしるしや行動様式がデモンストレーションと演出にまとめられたのか、という問題が据えられる。演出の中では中世における支配の表象が本当は行われていた¹⁶。特定の事柄のデモンストレーションと演出は——言葉による告示ではなく——、中世において決定を公にする場合のより重要な形態だった。これを理解するには、表象と見なすことが出来る幾つかの事例を詳しく紹介しなければならない。まず、国王推戴という枠組みでの演出を見てみよう。

国王に選出された後、国王聖別式に向かうザーリアー朝の創始者コンラート2世の前には、一群の邪魔者たちが立ちはだかった。これについては、彼の伝記作家ヴィーボが詳述している¹⁷。マインツ大聖堂での聖別のための行列の途上、特別な願いをもった人々が彼の行く手には待ち受けていた。まずマインツ教会のある農民が、続いて一人の孤児が、そして三人目には未亡人が、戴冠のための行列を引き止めたのである。コンラートに付き従う諸侯が先を急ぐようにせき立てたにもかかわらず、彼は立ち止まり、三人それぞれに公平に接して話を聞いた。更に数歩進むと無実にも拘わらず故郷を追放されたと訴える者が国王の足を止め、行列はさらに遅くなった。コンラートはその手を取ると彼を玉座まで連れて行き、そこで諸侯の一人にこの件の処理を委託した¹⁸。コンラートが乗り切らねばならなかった試練は、これでも終わらなかった。教会ではマインツ大司教アリボが、訓辞を長々と語って聞かせ、コンラートにキリスト教の君主としての責務を想起させたのである。訓辞の終わりに大司教は、以下のような非常に具体的な話をした。「それでは国王陛下、聖なる教会全体は我々とともに、これまで汝に罪をはたら

いたり、何らかの無礼によって汝の恩恵を失ったすべての罪人に対して汝の恩恵を請う。汝に無礼を働いた高貴なるオットーもまた、その一人である。彼とその他のすべての罪人に対し、我々は汝の寛大な振る舞いを請い願う。本日、汝を新しい人間とした神の愛の故に、彼らを許したまえ……。』更にヴィーボは以下のように語っている。「この訓辞を聴く間に、憐れみから心打たれた国王は溜息をつき、筆舌に尽くしがたいほどの涙を流した。その後、司教や大公たち、そしてすべての人民の求めに応じて、彼に背いた者たちの罪のすべてに許しを与えた。国王の紛うことなき敬虔さを目の当たりにして、全員が嬉しさのあまり声をあげて泣いた¹⁹。」ここで自発的に国王に近づいたように見える貧者や未亡人、孤児たちは、あたかもカロリング朝期の君主鑑から現れ出たかのようである。というのも、そこでは、まさにこの人間集団に属する者たちが、特別な方法で国王の寛大さと公正さに委ねられているからである²⁰。三人が独断で彼らの運命を切り開こうと戴冠行列を引き止めたなどとは、とても考えられない。むしろ彼らは、コンラート2世が君主として彼の能力を示し、寛大さと公正さを証明する対象なのだ。このことは、思いがけずに新国王の恩赦を贈られたように見える高貴なオットーについても言える。コンラート2世にとってこれらの試練は、ほぼ間違いなく予期せぬことではなく、むしろそれらは国王との申し合わせ事項だったのだ。言い換えれば、あらかじめ綿密にその行動のひとつひとつが決められていた演出だったのである。それらは、その結果と成果がわかっているのに、自発的な行動のように実行されたのだった。

こうした解釈はどうして出来るのだろうか。事前の許しを得ずに国王へ願いを伝えることは明らかに不可能であり、少なくとも滅多に行われなかったのだが、上記以外の事例でこの行為が、どれほど内々で隠密裡に準備されたのかを詳しく説明しなければ、この解釈の正しさを説明することにはならないだろう²¹。そのように非公式に国王に接近できなかった者たちの憤慨は様々に証明される。そしてこの彼らの憤慨は、準備なしに国王——あるいは王以外の主君の場合でも——に願い出ることが重大なルール違反を意味していたことを証明する²²。しかしながら、この事情については指摘するだけにとどめ、前述の解釈を裏付けるために比較可能で特にこれまでの成果が豊富な研究領域を取り上げたいと思う。中世における降伏の儀礼に関する研究領域がそれである²³。ここでもまた常に、自発的な行動であるかのように見せる演出が行われていた。コンラート2世の国王登極時とは異なって、降伏の事例はさまざまであり、その多くから儀礼の細目が事前に決められていたこと、そしてその細目がどのようなものであったかを知ることが出来る。降伏儀礼は、それが中世における紛争の終結に中心的役割を果たしたが故に、非常に頻繁に確認できるのである。この儀礼は通例、できる限り多くの公衆の前(Öffentlichkeit)で催されたが、これには十分な理由があつてのことであつた。つまり、敵対者の降伏は、勝者にとって紛争でこうむった被害の補償を意味し、この「補償」(*satisfactio*)こそが、紛争を終結させる機能に他ならなかった。ゆえに降伏儀礼を見る公衆の数が多ければ多

いほど、補償の効果はそれだけ大きくなったのである²⁴。

論述のはじめに多くの事例の中のひとつを詳細に紹介して、史料においてそうした儀礼がどのように描かれているのかを見てみよう。1001年に皇帝オットー3世は、ローマ近郊の都市ティヴォリを包囲した。ヒルデスハイム司教ベルンヴァルトは皇帝の軍にあって包囲に参加し、その際に少なからぬ活躍をした。そのため、彼の伝記にはこの包囲に関する詳細な記述が見出される²⁵。伝記に従えば、ベルンヴァルトは皇帝に以下のような助言を与えた。

「故郷に帰りたいのはやまやまだが、神の恩寵によって都市とその住民たちが皇帝の足下に平伏すのを見るときまで、私はここから離れないだろう。」(そして彼がそう伝えた結果、オットー3世は包囲をいっそう強化した。その後、以下のことが生じた。)[数日後、ベルンヴァルトと教皇が市門の前に姿を現した。神の僕たちが近づいて来ると、市民たちは彼らを丁重に受け入れ、彼らを懇慫に市内へ招き入れた。しかし平和の使者たちは、神の助けによって市民全員が皇帝の要求に沿った平和を受け入れるまで、一步も引かなかった。後日、司教たちは記憶に残る凱旋行列を引き連れて皇帝のもとに立ち戻った。というのは、すべての名望ある市民たちが付き従ったからである。彼らは腰布(Lendenschurz)だけを身につけ、右手に剣、左手に鞭を携えて宮殿にやってきた。彼らはその全財産を放棄し、何も要求せずに、命すらいらないと皇帝に語り、皇帝が有罪と見なす者の首を斬っていただきたい、もし哀れんでいただけるなら、その者をさらし柱に繋いで鞭でさんざんに打っていただきたいと嘆願した。皇帝が市壁を撤去させようと望むならば、市民たちはこれを自ら進んで実行するし、今後皇帝陛下の命令には一生逆らわないと述べた。皇帝は平和の立て役者である教皇と司教ベルンヴァルトに対して目一杯の最高の賛辞を贈り、そして彼らの願いで敵だった市民たちに恩赦を贈った。話し合いの結果、都市を破壊しないことが満場一致で決議された。住民は、再び皇帝の寵愛を受けるようになり、平和を守り皇帝から二度と離反しないように強く訓戒された²⁶。]

一見すると、報告はとくに信用するほどのものではないように見えるが、いずれにしてもこの話は、報告と似たようなかたちで進行した可能性が比較的高い。つまりこの話は、中世の長い数百年間に成立した大量の降伏譚——そこには細目まで全く同じものもあれば、ほとんど類似のものもある²⁷——のコンテクストの中に位置づけられるのである。個人や軍隊、あるいはある都市の代表者は無条件に降伏し、争いの勝者のもとに裸足でやって来て、結果がどうだろうと己の身を委ねた。細かい点では部分的に異なっていたものの、降伏には確固たるルールが存在していたのである。相応の服装というものもそのようなルールのひとつだった。敗者は贖罪者の服装や腰布を着用して裸足で現れ、剣を首に当てたり、鞭を手に携えた。これらの剣や鞭によって罪が償われるのである。相手の前で地面に平伏して彼の足下に屈すると、「汝の好きにするがよい」というような意味の何か儀式めいた言葉を口にした。そのような場面を印象的に描く叙述はいくつもある。例えば、12世紀のフリードリヒ・バルバロッサとミラノの間の

戦い²⁸、11世紀のハインリヒ4世へのザクセン部族の降伏²⁹などである。10世紀にしばしば見られるのは、国王の敵対者たちが教会に参詣する君主に人知れず近づき、衆人の前で足下に平伏して憐れみと許しを懇願したことである³⁰。降伏した者は即座に許され、地面から抱き上げられて接吻された。降伏儀礼が行われ——明らかに頻繁に実践されたようだが——、勝利した相手がミサへ向かう途上だったならば、その後一緒に教会に入り、共にミサを祝った。

しかし、降伏した者が拘留されたり、追放されるということもまた生じた。程度の差はあれ、拘留される者は丁重な扱いを受けた——最も好意的な場合には、拘留はほとんど象徴的な性格しか持たず、ほんの短期間で終わった。そうした拘留の終了を知らしめる作法については、後述しよう。降伏のしるしと見なされた別のさまざまな行動もまた、事情によっては象徴的な性格を持っていた。城塞の破壊が城壁の一部だけの破壊に限定されたり³¹、1188年にフリードリヒ・バルバロッサがケルン市民と和平を結んだ際に契約として取り決めたように、以下のことが合意されたのもまた、象徴的な意味を持っていた。「ケルン市民は、市門のひとつを丸屋根にいたるまで破壊し、四ヶ所の濠を400フィートの長さにわたって埋める³²。」ケルン国王年代記がバルバロッサとの協定を引用する限りでは、更にこう続いている。「しかしこの件については、もし彼らが望むなら、この防壁を後日以前の状態に修復することが出来ると和らげられた。そして修復は実行された³³。」ここでより大切だったのは、他の事例と同様に、都市の防御施設の長期的な弱体化よりも、勝者に満足感を与える視示的な身ぶりの方だった。しかし我々の問題設定にとってとりわけ重要なのは、降伏の儀礼の事例において、行動のすべての細目とその結果が事前にしっかりと決められていたことをうかがわせる文言に頻繁に出くわすことである。こうした任務を請け負っていたのが調停者たち (*mediators*) であり、彼らの役割は演出を行う監督と言うことが出来よう。彼らは手順と個々の行動を討議して決め、宣誓をして関係者にすべてが申し合わせ通りに運ぶことを保証した。もっともこの過程が公にされることはほとんどなく、普通は協議された取り決めに対して意見の不一致がある場合にだけ明みに出た。例えば、シュピーアにおいて1075年にザクセン部族が降伏した後、国王ハインリヒ4世が取り決められた協定に反してザクセンの有力者たちを拘留したとき³⁴、あるいはまた、これと同じ君主とオットー・フォン・ノルトハイムの和平締結が極めて困難な状況になったときがそうであった。こうした場合に史料は、調停者がどのように活動し、話し合いの場でどのような申し入れをしたのかを比較的詳細に語ってくれるのである³⁵。常に高位の者で、国王自身であることもしばしばであった調停者の威信は、原則としてルールの遵守を保証するに十分であった。

ここで述べてきたことを、ある有名な降伏儀礼の事例に即して更に具体的に述べてみよう。もとより、これに関する研究はティモシー・ロイターのものだけだが、彼はこの事件が「降伏」(*deditio*)の伝統の中で検討されなければならないことに注意を促したのであった³⁶。この事件とは、ハインリヒ4世の「カノッサ行」のことであり、とりわけドイツ人の歴史意識に深く刻み

込まれた劇的なあの場面で最高潮に達する降伏行為である。国王は裸足で悔悛の衣装を纏い、三日間に渡って許しとキリスト教共同体への再度の受け入れを嘆願した³⁷。この行動は教会の贖罪の伝統からではなく、「降伏」(*deditio*)の儀礼からの方がよりよく理解できるということを、最も重要な史料の記述が非常に明確に示している。事件の成り行きについては、二つの異なった見解を区別することが出来る。ひとつは、ランペルト・フォン・ヘルスフェルトの国王側の証言である³⁸。彼は調停者の働きを強い調子で詳細に叙述している。中でも、トスカナ辺境伯マティルダ、ハインリヒの義母トゥリンのアーデルハイド、クリュニー修道院長フーゴー、エステ辺境伯アッツォが調停者として際立っている。彼らは免罪の条件について教皇と協議し、ハインリヒ4世によるこの条件の遵守を保証した。彼らの主張には重みがあり、また彼らが粘り強く主張したため、グレゴリウス7世は提案された手順——まさしくあの悔悛行(*Bußgang*)——を受け入れ、その結果ハインリヒ4世は破門から解放されたのだった³⁹。それゆえ、ランペルトの記述に従えば、すべての行為は前もって取り決められており、その道筋は確定していたのだった。調停者は、二人の主役に相応しい行動を保証していたのである。そうしたことはたびたびあったから、慣例どおりだったと言うことが出来る。

これに対して、事件に関する自身の見解を大司教・司教と帝国の有力者のすべてに書簡で伝えたグレゴリウス7世の叙述は、若干異なっている⁴⁰。まず彼は、適切な「補償」(*satisfactio*)について交渉するための使節をハインリヒ4世が彼(教皇)に送ってきたことを認めている。また彼は幾度も使節が行き来し、相当に詰めた交渉が行われたことをも認めている⁴¹。しかし彼は——この点がランペルトと決定的に異なるのだが——、彼が申し出をその度ごとに退けたと記している。教皇によれば、こうした状況下でハインリヒ4世が突然裸足で毛織りの衣装を纏って城門の前に現れ、そこで三日間辛抱したのである。それによってハインリヒ4世は、居合わせたすべての人々に哀れみの気持ちを抱かせ、自分の破門を解くよう教皇にせがませたのであった。この圧迫に教皇は抗しきれなかったと言う⁴²。ランペルトの叙述との相違は明白である。後者(ランペルト)では、行為の申し合わせと結果を保証する演出とが描かれていたのに対し、前者(グレゴリウスと彼に倣った他の叙述)では、ハインリヒ4世によるルール違反に関する報告が核になっている。つまり、教皇の主張では、彼(ハインリヒ4世)は交渉の結果をあらかじめ見越して、申し合わせなしに「補償」(*satisfactio*)を企て、それによって——きっと十分に計算した上で——教皇に圧力をかけたとされる。その圧力の強さゆえ、教皇は——彼自身の政治的意図に反して——国王が望んだ免罪を与えなければならなかった。真実はどうだったのかはここでは決められないし、また決めるべきでもない。我々の問題関心にとっては、むしろ以下のことがより重要である。すなわち、二つの見解はともに、「降伏」(*deditio*)や「補償」(*satisfactio*)の詳細が話し合われたこと、そして討議されて決定された内容が、その後実行されなければならなかった、という点では同じ見方をしていたということである。事前にすべて

をきちんと申し合わせることもなく、また代償に関して合意することもなしに降伏行為を実践し、この分野のルールを破ることもできた。そうした事実を、我々は他の事例からも知っている⁴³。グレゴリウスが「補償」(*satisfactio*)を受諾する用意がまだないうちに、ハインリヒ4世が教皇をカノッサで事実上既成事実を作って逃げられない状況下に立たせたというのは十分にあり得ることである。

カノッサ事件の終わりには、主役たちによる宴会が催され、それが両者の和解の証となった⁴⁴。一緒に食事をとることは、一種の慣例行事と見なされていたのであり、中世においてその「見せつけ効果」(*demonstratives Potential*)は、さまざまな観点で用いられた⁴⁵。宴会はまさに中世の公共圏において相当に重要なコミュニケーションの手段であったから、ここで若干補足しておかなければならない。一緒に食事をする、おそらくもっと重要なのは一緒に飲むことだが、それらは平和的で友好的な関係を結ぶ用意のあることを相手に示した。それ故に、中世の集団生活における「宴会」(*convivium*)とは儀礼的・視示的な場だった。それはある種の結合関係や同盟関係、勿論また同盟をも意味する友好関係、あるいは仲間関係(*Genossenschaft*)といった結びつきのはじまりだった。そしてさまざまな集団の共同生活の中には、常に宴会が存在していたのである。この点についてもまたひとつの具体例に即して明らかにしてみたい。その事例からは、同盟関係の締結に際して儀礼的・視示的なさまざまな行為があったことが浮かび上がってくる。

11世紀後半にイオクンドゥスなる者が、マーストリヒトでとりわけ崇拜されていた聖セルバティウスの奇跡伝を書き記した⁴⁶。この関連で彼は、西フランク国王ロータルと大公ハインリヒの間の同盟についても言及している。この同盟はケルンで結ばれ、国王ロータルがロートリンゲンを大公(*dux*)ハインリヒに委ねたというものであるが、学界の通説ではこれは、シャルル単純王と国王ハインリヒ1世の間で921年に結ばれたボン条約のことを取り違えたものであろうと考えられている⁴⁷。間違いや不正確さは、しかしながら我々の問題設定にとってこの話の価値を損なうものではない。イオクンドゥスは、以下のように会見と同盟の様子を記している。「彼らが誠実と愛の証をもって参集したということを示すために、彼らは相互に素晴らしく高価な贈り物をした。しかし、大公の方がより大きくて素晴らしい贈り物をした。それというのは、彼の方が財産や家臣の点でも西フランク国王よりずっと豊かだったからである⁴⁸。」ただし、若干指摘しておかなければならないが、贈り物の交換に際しては「強者がより豪華な贈り物をする一方で、自分に送られた物からは僅かしか手にしない」というのが、よく見受けられるルールである⁴⁹。本来ならば下位の身分の者としてより多くの贈り物をするなど許されなかった大公(*dux*)の行動が示すように、こうした方法で自分の地位を示すことも出来たのである。作者は更にこう続ける。「大公がそれほどまでに強大であったにもかかわらず、彼はまるで賤民でもあるかの如く、彼(つまり国王)にへりくだった態度をとった。国王の軍隊はこ

の様子を見て非常に喜んだ⁵⁰。]恭順の意を示した振る舞いがどのようなものであったかは具体的に述べられていないが、従者たちはそれを見て理解したのだった。おそらくそれは、手を取っての接吻、片膝をつくようなものであったかもしれないし、単にお辞儀しただけだったのかもしれない。

ケルンから後、エーヌ川までは一緒に移動した。この行列の際に、大公(*dux*)ハインリヒは国王の太刀持ち、彼の長男オットーは国王の盾持ちを演じた。この儀礼的な奉仕によって、彼らは国王への恭順の意を公にしたのだった。その後、彼らは河畔に三日間共に滞在した。「彼らは寝食をともにした⁵¹。」彼らはこのように共同生活をして見せたのだった。トゥールのグレゴリウスは二人の交渉相手が一つのベットで眠ったという同じような事例を伝えているし、寝食を同じ家で行ったことを伝える他の事例もある⁵²。この儀礼的・視示的な行為の後に——話は更に続くが——、国王は大公(*dux*)にロートリングェンを授封した。そしてその後に彼らは「キリストに従順な兄弟や友人、親類のような忠誠と本当の平和の中で」(*cum pace et fide non ficta, ut cognati, ut amici et fraters in Christo devotissimi*)別れた。この別れにもまたしるしがあった。両者が滝のような涙を流すというのがそれである⁵³。

勿論この話は、ことと次第がこの通りに行われたことを示しているわけではないが、同盟締結や授封のための会談というものが11世紀にどのようなものとして考えられていたのかを知るには十分である。つまり会談は、見せるという行為から徹頭徹尾作り上げられていた。この行為によって、当事者が相互の関係をそれまでどのように秩序づけ、今後どのように作り上げようとしたかを、とりわけ軍隊に、そして同時に衆人に見せたのである。従属関係や平和的態度、友好関係を表現するためにはしるしが存在していたのである。またきっと存在していたであろう交渉、要求や談合については、この話(=奇跡伝)の中では言及されていないが、それはこの著作だけに限らない——それらは[まったく別の]内々(*Vertraulichkeit*)の領域に属していたからである⁵⁴。

ただ付け加えておきたいのは、主に国王の宣誓文と同席した有力者たちの署名を伝える921年のボン条約のテキストの中に、この友好条約が結ばれる際の儀礼的行為に関する申し合わせについてのヒントが含まれているということだ。事前交渉について伝える短い叙述の中に注目すべきことが見出される。それによれば、二人の国王はボン近郊のライン河畔にやって来ると、前もって交渉人たちが申し合わせていたかのように、それぞれ川の兩岸に陣取り互いににらみ合うことで最初の一日をもっぱら過ごしたという⁵⁵。この申し合わせは、双方の信頼を築くための措置と考えてほぼ間違いないだろう。国王たちがライン川の真ん中に停泊した船に乗り込み、彼らの友好同盟を結ぶ前段階において、この措置はきっと重要だったのである。境界となる川の真ん中に船を繫留することはよく行われたことだったが、それはまたやっておかなければならない必要な作業でもあった。それというのも、どちらかが対岸に行けば、その人の体面

が損なわれることとなり、そのようなことをいずれの側も望まなかったが故である⁵⁶。

和解や友好を示すための宴会や他のデモンストレーション的行為についてはここまでにして、降伏の儀礼に話を戻そう。「補償」(*satisfactio*)というものには、降伏儀礼だけでなく、敵対者の拘留も少なからず含まれていた。他のことと同様に、その期間は調停者によって交渉で決められ保証された。それゆえ、演出に基づく中世のコミュニケーションを評価するには、そうした拘留がどのようにして終わらされるかという手段とやり方が重要である。先に引用した高貴な出自のオットーに許しを与えるようにコンラート2世に訓戒したマインツ大司教アリボの説教は、特殊な例ではない。司教たちが国王たちに公式の説教の中である特定の囚人を解放するように訓戒する事例を我々はたくさん知っているが、そうした場合、その願いは涙を流しながら認められるのが常だった。この囚人の解放は、教会の大規模な祝祭日の祝祭ミサの折に行われることが多かった。例えば皇帝ハインリヒ2世は、マリアの誕生祭の日に、彼の相談役にして師であったフライジング司教ゴットシャルクにミサ曲を歌い、説教を行うように求めた⁵⁷。司教は主君へ公式に訓戒を行える機会を利用して「彼(皇帝ハインリヒ2世)が存命中に・・・尊敬と成功のうちに受け取ったもののすべては、自身の功績以上に神の恩恵に帰するものである⁵⁸」と語った。更に彼は、「救済のための唯一の方法たる慈悲について」語り、皇帝が辺境伯ハインリヒ・フォン・シュヴァインフルトを拘留から解放することにこの慈悲を用いるよう彼に促した。これを受けてハインリヒ2世は、訓戒を受け入れることを誓約したのだった⁵⁹。ハインリヒ4世の相談役であったハンプルク・ブレーメン大司教アーダルベルトは、ハインリヒ4世が大公オットー・フォン・ノルトハイムに再び寵愛を与えるまで、その主君にかなり長時間にわたって懇願し続けたが、それはミサの間と聖霊降臨祭の際に行われている⁶⁰。

ここであらためてどうしても論じておかなければならないのは、これらの事例において国王はほとんど何も知らされていなかったのかという問題、すなわち彼が本当にまったく予期していないことが訓戒されたのかという問題である。そうした決定が内々に(*Vertraulichkeit*)なされるとするならば、事前情報なしに、より適切には伝言なしにそうした訓戒というものが国王に伝えられたとは、恐らく考えられない⁶¹。むしろ、次のような別の解釈の方が説得力がある。いずれにせよ決定されている拘留者の釈放を国王の寛大さを誇示するために利用したのである。この行為は演出されたものであり、さめざめと流される涙などは行動の儀礼的構成要素なのだ。

こうした観点から見ると、ハインリヒ4世の「カノッサ行」とほとんど同じくらいに有名な、あの場面もまた新たに解釈されるだろう。シュパイアーにおける1146年クリスマスのあの出来事のことである。その時、クレルヴォーのベルナルドは公式の説教によって、それまで乗り気でなかった国王コンラート3世に十字架を取らせることに、つまり第2回十字軍に参加させることに成功した⁶²。有名な説教者の言葉の威力によって——今日でもそう理解されている

が——国王はその宗教的感情をもはや抑えられなくなり、政治的にはどう考えても賢明とは言えない方向へ動かされたといわれる⁶³。バイエルン、ザクセンの両大公領の問題をめぐるヴェルフエンとの長く続く紛争を前にして、長期間本国を不在にすることは、シュタウファーにとって実際には問題だったはずである。クレルヴォーのベルナルの説教はこの点で、きわめて重要な状況下では宗教的な駆動力を前に現実政治的な考慮が後退することもあり得た、ということを見事に示している。中世の人々に対する聖職者の影響を、否それどころか聖職者の力というものが、ありありと目の前に浮かんでくる。しかしながら私の考えでは、中世の人々にとって宗教的駆動力がもっていた価値の大きさは疑問の余地がないとしても、描かれている場面を自発的な行為と見なし、他にも例のある中世の演出という次元で見ないとしたら、それは誤りである。

同年のクリスマスの祝祭で、コンラート3世の主たる政敵であったヴェルフ6世が遠くバイエルンのパイティングで同じように宗教的感情を抑えられなくなり、国王と同様に十字軍への参加を約束したことは、確かにもう当時からいぶかしがられたはずだ⁶⁴。現実政治的な問題は、ヴェルフ6世とコンラート3世が同時期に十字軍に参加したために、事実上まったく先延ばしされた。実際に史料の述べるところでは、国王の決心に先立って、コンラート3世の十字軍参加を可能にする解決策をめぐって数週間に涉って綿密な交渉が行われた⁶⁵。クレルヴォーのベルナル伝には、交渉の後に国王が翌日に決意を表明することを予告していたことが、明確に述べられている⁶⁶。これに対して、更に続けられた申し合わせについては一言も述べられていない。叙述が強調するのは、むしろ決定をめぐって表面化した国王とベルナルの間の確執である。ベルナルは、決定の日にあらかじめ国王を説教攻めにし、コンラート3世に対し、彼が最後の審判に臨んで弁明をしなければならないと迫った。キリストが審判の場で彼に「私が汝のためにしてやらなかったことが何かあろうか」と問うであろう、と。王冠・富・思慮深さ・健康・その他多くの主の恩恵が列挙され、漸くコンラートは譲歩した。そして彼(国王)は皆の前で「余は、彼(ベルナル)によって戒められ、今や神に仕える所存なり⁶⁷」と宣言したのだった。この場面はベルナル伝の中でも劇的で、確かに印象深く描かれた箇所であり——ただしそれは、他にも例のある説教による訓戒の伝統を踏襲しているだけである——、ハインリヒ2世、コンラート2世、そしてハインリヒ4世もまた公式の説教の中で訓戒を受け、その訓戒が要求したことを涙を流しながら実行に移した⁶⁸。こうした考察や同時期のヴェルフ6世の心変わり、シュパイアーの場面が既に事前に申し合わせた決定を効果的に周知させた場に違いないことを強く確信させる。コンラート2世の国王選挙や降伏の儀礼の場合と同様、演出は完璧である。その演出が、あたかも事件がまだ未決定で、公にされた決断がいかにも自発的であったかのように見せるのだ。だが、数多くのこれと同じような事例が演出ではないかという疑いを裏付けるし、当事者の一人が取り決めを守らず、そのために申し合わせの細目が史料の

中で取り上げられているとすれば、この演出という疑いは確信へと強まっていくのである。

中世の人々は、デモンストレーションと演出を人間同士のコミュニケーションにだけ用いたのではなかった。彼らは、この方法で神や聖人とも関係をもっていたのである。この重要な分野については、一つの例だけを引用しておこう。『ザンクト・ガレン修道院の事跡』(*Casus St. Galli*)の中で、著者であるザンクト・ガレンの修道士エッケハルトは、明らかに怒りを込めてこう書いている。「アウクスブルク司教であった聖ウルリヒの伝記作者たちは、くだらないことばかり誇張して書いているくせに、広く人口に膾炙している肝心の別のことについては黙して何も述べていない。それはやはり不思議と言わざるを得ない」⁶⁹。後者の事柄として彼が特別に取り上げたのは、ハインリヒ1世の時代にウルリヒが、彼が司教を務める都市アウクスブルクをいかにしてハンガリー人による包囲と破壊から守りきったか、という話だった。すなわち、既にハンガリー人の侵入が迫り、彼らの入城が阻止出来ないものとなった時、彼は「すべての乳飲み子たちを母親の胸から奪い取り、祭壇の前に立つ自分をぐるりと囲むように地べたに向けてその子らを放り出せ」と命じた。そして、「子どもたちの震え泣く声の中に彼の涙と悲嘆の声とを混ぜ合わせて、彼は第二のエゼキヤス(ヒゼキヤ)となって、あの恐ろしい敵を追ひ払った。というのも、野蛮なハンガリー人が都市を放棄し、他の地方に散っていった原因は、その祈禱以外にはないからである⁷⁰。」ここでもまた、話が本当にその通りに行われたか否かは問題ではない。いずれにせよこの話が示しているのは、神との関係であってさえも何が可能で効果的なものと見なされていたか、ということである。すなわち、主に言葉をもって救いを乞うだけでなく、困窮の程度をはっきりと主に見せるということがそれである。司教の祈りと嘆きの声は、乳飲み子たちの震え泣く声——批判的・合理的な見地からすれば、その泣き声は子どもを乱暴に扱ったから生じたとなろう——とひとつになった。二つの声の合一は、神が救いを実際に拒めないほど事態が深刻であったことを示している。

これまで取り上げた様々な事例には、ひとつの共通点がある。それは、それぞれの演者たちが衆人の前で(*Öffentlichkeit*) 新しい状況や新しい事実関係を示したことであり、具体的に言えば、降伏の受諾、君主としての寛大さや公正さといった新国王の素質、あるいは友好的な同盟関係の締結がそれである。そうした変化の局面は、たしかにデモンストレーションと演出がもたらす重要な領域のひとつである。だが、それ以上に忘れてならないのは、中世のコミュニケーション様式が日常においてもまたデモンストレーションの特徴を著しく有していたことである。地位や身分、重用と拒否、寵愛と不興を示すために極めて多様なしるしの体系(*Zeichensystem*)が存在し、これらを利用することが、中世の生活秩序を少なからず巧く機能させていた。これを利用すれば、反応や行動様式は個人の任意の範囲から法習慣の領域へと高められ、そしてそれをますます計算可能なものにした。それが故意によるものであれ過失によるものであれ、ある人物の地位や身分を軽んじれば相手の反発を招き、その応酬は即座にエス

カレートした。それ故、おそらくまさにしるしに対する反応が計算可能になるということは重要であり、必要だったのである。したがって、「名誉をもって (*honorifice*) 受け入れられた」であるとか、「溢れんばかりの贈り物で敬意を表された」であるとか、「名誉をもって (*honorifice*) 送り出された」といった、しばしば史料に現れる文言を読む時には、そこに一連の象徴的な行為様式を、相手の地位や身分を認め評価するしるしを思い描かねばならないのである⁷¹。同じことは、ある人物の供揃えを伝える文言についても言える。煌びやかな甲冑を身につけた1500の騎士を引き連れて宮廷の祝祭に現れる者は、それだけで十分に自らの「誉れ」(*honor*) を表現したのであって、そのお出ましをことさらに重大事と告げるラッパや太鼓などは、きつとまったく必要としなかったことだろう⁷²。それに対して、宮廷会議に大勢の随伴者を伴って出向くならば、これは即座に威嚇と思われた⁷³。

食事の場合であれ会談の場合であれ、あらゆる席順は、これまた地位や身分を裏書していた。それゆえ、しるしとデモンストレーション行為の体系は、ここでは示唆するだけにとどまるものの、一方では中世的諸秩序の機能を高め、安定的に作用させる特徴をもっていた。

しかし、他方で見落とすことが出来ないのは、儀礼とデモンストレーションが秩序の阻害要因にもなって、後々にまで悪影響をもたらしたことである。しるしは公共圏で用いられるので、大勢の人がそれを見ることになる。したがって、一方に敬意を示す何がしかの行為が他方を不快にさせたとしても、それは驚くに値しない。史料が頻繁に伝える「嫉妬」(*invidia*) は、誰かがあまりにこれみよがしに別の連中から際立って引き立てられた場合の反応のひとつである⁷⁴。
デモンストラターフ
 しるしの使用はそれゆえ、決して個々人の恣意に委ねられていたわけではなく、それぞれのグループ毎に発達してきた序列の観念に従って行われなければならなかったのである。この序列に関してすべての人々が必ずしも同じ観念をもつことがなかったため、これは全くもって厄介な道具であったが、これを用いるしかなかった——中世の多くのいわゆる席次争いは、この問題から火がついた⁷⁵。

重用の特別なしるしが、はじめに詳しく述べた[コンラート2世の戴冠式の]説話によれば、密談であったことは偶然ではない。「国王はしばしば司教を傍らにおいて、助言を求めた」というのは、司教伝の中で出会うほとんどお決まりの文言であるが、それはその時々の司教たちの重要性を強調するものである。しかし、君主が側にとりたてて密談するといった重用を表すしるしを、あまりに一方的に序列を無視して用いたならば、その君主は軽んじられたと感じたすべての者たちの猛烈な反発を引き起こした。そうなれば、すぐさま「寵臣の失脚」という結果がもたらされた⁷⁶。

しるしのもつ拘束力は、まずもって相互に相手の反応を確信できるようにした。特定のしる

しはそれに対応するきまった反応を要求したから、もしこの習慣に従わないならば、それはきっぱりと「ほされる」(Aus-der-Rolle-Fallen)ことを意味した。ある種の場合には、習慣に従わないことなどおよそ不可能であった。これについては、これまで同様に事例を挙げてみよう。例えば皇帝ハインリヒ2世はバンベルク司教座を設置しようと計画したが、当初ヴュルツブルク司教の頑強な抵抗に遭遇した。史料が伝えるところでは、教会会議が自分の意図から外れた判決を下そうとした時はつねに、国王が会議で平伏して嘆願することで結果的に審議が継続されることとなった⁷⁷。膝を折って懇願した国王の願いを拒絶することが出来ない、というのが慣習であった。君主は自身を^{おとし}貶めることで、自らの威信のすべてを委ねたのであり、それだからこそ事態が彼に有利になることは必至であった。また他の有力者も、何かを達成したいと思う時に、この手法を用いることを十分心得ていた。

——それは他の者たちにはまったくもって腹立たしいことであったが、この習慣にあっては、たとえ負けても嫌な顔をすることは許されなかったのである⁷⁸。そしてまた、そうした懇願のために膝まづくという行為は、キアヴェンナの重大場面におけるハインリヒ獅子公の前のフリードリヒ・バルバロッサによっても伝えられている。ただし彼は、いくつかの史料の証言に従えば、ここで目的を達成することはできなかった。事実がどうであったにせよ、このような主張がハインリヒ獅子公に対する激しい非難を含んでいたことは明白である。不文律に対する違反の中でも、跪いて嘆願する国王の願いを聞き入れなかったことほどひどい違反はない、と獅子公は非難された⁷⁹。

中世の公的なコミュニケーションにおけるしるしと儀礼的行動様式の偏在し価値が大きいということを視野におさめるには、これまでの説明で十分明らかになったことだろう。しかし、最後にもうひとつだけ重要な問題を提示しておきたい。すなわちそれは、公的なコミュニケーションの上述の規則や習慣において、口にされた言葉が実際にいかなる意味を持っていたのか、という問題である。これについてはまだ十分に応えることが出来ない。しかしながら、公共圏における一連の口頭表現はすべて、ある程度の態度や決断をはっきりと確実に表現する機能を持つ儀礼的発話行為(rituelle Sprechakte)である、という指摘は重要である。だからこそ、多くのそうした表現があらゆる点で誇張され、ほとんど収拾がつかないと言えるほどに極端な印象を与えるのである。そうした表現は、軍事的衝突の際に見ることが出来る。臨戦態勢になると、自分の強さを褒めたたえ、敵の弱さや臆病さを露骨にこきおろした。「間もなく矢の雨で空が見えなくなるだろう」、「軍馬の群れがライン川を飲み干すだろう」、「我々が打ち負かされるのは、ただ天空が崩れ落ちる時だけである」といった文言はこうした事例である⁸⁰。「何か決められたことをするくらいならば、十人の息子を失う方がましだ」であるとか、「何かが起こるまでは、もう髭を剃らない」といった表現やこれに類似の表現は、ある特定の状況におかれた人間が、これらの事態をどれほど真剣に考えていたかを示している⁸¹。逆に、人が「悪しき野心」

(*ambitio mala*)をもっていない、ということも強い言葉で示されている。例えば「拒み、つよく異議を申し立てる」(*Renitens ac valde reclamans*)という常套句は、聖職者が司教職への招聘をかたちの上で謹んで辞退したことを示唆している⁸²。彼が辞退の理由を事細かに申し述べることは、それが本当に司教職を断ることを明確にしなければならない場合にだけ重要だった。紛争の場合にも同じことが言えた。補償を求める時にほとんど型通りに行われたのは、「一方でおもねり、他方で脅迫する」(*partim blanditiis, partim terroribus*)というやり方であり、和解の約束をちらつかせて敵を誘うとともに脅しを掛ける方法であった。つまり、自分の友となるか敵となるかの選択を迫ったのである⁸³。それ故に明確さが期待された。すなわち、譲歩した和解の返答か、さもなければ威嚇的な拒絶の返答かのどちらかである⁸⁴。たとえどんな決断が下されようとも、それが言い渡される時は、これ以上ないほど明確に、我々には誇張しすぎと思えるほどの方法で行われた。しかしながら我々は、そうした表現を儀礼、デモンストレーション、そして公的なコミュニケーションの演出といった文脈の中に位置づけ、それらをこの文脈から理解する必要がある。

これまで論じてきたささやかな事例をもとにして、中世の公共圏におけるコミュニケーションの若干の基本ルールとその特徴を、最後にまとめておこう。中世のコミュニケーションの多くは、言葉を交わすことよりもデモンストレーションによって行われていた。中世社会は身ぶりや儀礼、セレモニー的な行為が持っている大きな可能性というものを自由に使いこなし、それは手間のかかる演出と結び付けられることとなった。この種のコミュニケーションの前提となるのは、——[本番の]光景をイメージできるように——共に演じ、台本や演出家の指示に従うという心構えであった。これと同様に、演示されたものを相応の仕方理解し、それを公にするに適切な形態として受け入れる公衆(*Öffentlichkeit*)の能力と心構えも明らかに存在していた。政治的な力の駆け引きの場では、この公共圏(*Öffentlichkeit*)は、支配・統治の担い手自身、およびその封臣やミニステリアーレンから構成された。つまり、彼らが「人民」(*Volk*)だったのである⁸⁵。そうしたデモンストレーションと演出は空虚な見世物では決してなく、ある極めて実質的な機能を果たしていた。すなわち、それらが演技者たちを結びつけ、誠実宣誓・授封・降伏・恩赦・友好関係・和平締結、あるいはあるグループ内の序列の中で占める地位といった公的に示されたものを守ることを義務付けたのである。その時々当事者自身がこの行動を見て、彼らが将来においてその主君や親族、仲間に助言や援助を与えたことを思えば、公的なデモンストレーションによって得られた拘束力の強さは軽視できなくなるだろう。

しかし、デモンストレーションと演出はすべて、事前の連絡と合意、つまり言葉によるコミュニケーションを必要としている。これは、直接個人的なやりとりの中で実現されるか、あるいは——特に意見が分かれる場合には——仲介者を介して伝えられた。この支配秩序と生活秩序が巧く機能する上で、この仲介者の重要性を強調してもしすぎることはない。ともかく、この

言葉によるコミュニケーションの特徴は、それがまったくもって分かり難い内々の領分に属していることである。あらかじめ路線が定められ、結論が用意されて、デモンストレーションと演出によって公表する計画が立てられたのは、その内々の談合でのことだった。この領分を明瞭にしようとはしなかったことが、中世と近代の相違である。内々に事前の話し合いをもつという領分は、衆人(Öffentlichkeit)の前で行われるデモンストレーションを重視する中世のコミュニケーション様式に本質的に欠かせないものである——この内々の領域がなければ、この中世のコミュニケーション様式など成り立たなかっただろう。これに対して公共圏で話がされる時には、この話は通例儀礼的な性格を持つこととなった。自主的に意見を述べることは、中世のルールには入っていなかった。

何故そうしたルールが発達したのか、そしてそれは諸秩序が巧く機能するためにどれだけの働きをしたのか。最後にこの問題をごく簡潔に論じよう。発展の主要な原因はきっと、アルカイックな社会において地位と「名誉」(*honor*)が持っていた意味の中にある。あらゆる状況で威厳と地位を重んじ、体面を守ろうとする必要性が、少なくとも上層身分に属する者たちにおいては自発的な行動を厳しく制限したのだった。行動は予測できなければならず、予期せぬ出来事は歓迎されなかった。体面を失う恐れがあったからである。このような限定条件が儀式張った行動と演出、セレモニーを助成し、そしてさまざまな問題解決や譲歩を引き出そうとする試みを秘密裏な内々の領分に追いやるのである。しかしながら、誰もがこのルールを受け入れて共に用いる限り、これは諸々の生活秩序が巧く機能することを保証した。この諸々の生活秩序の本質的な限定条件は、中世から近代、そして現代へと変化した、それにもかかわらず中世がわれわれの中にいまなお強く息づいていることは、日頃の経験から知ることが出来る。中世のルールの多くは、必要な変化を加えた上で今もって機能しているのである。我々は、政治やその他の分野で演出やデモンストレーション行動をとる傾向があることも知っている。透明性が求められているにもかかわらず、さまざまなレベルで内々の根回しを行う傾向がある。そして、公職にある人や統治に携わる人を公衆の面前で予期せぬ現実と直面させることは、依然として喜ばれないし、やっかいがられている。そのようなことをすれば、彼らは不意打ちと感じるからである。今日そうした暗黙のルールを犯す者は、「寵愛を失う」(*Huldverlust*)とか「不興を買う」(*Ungnade*)といった中世的概念を当てはめるのが適切な状況に自身がいることを即座に悟るのである。近代化と合理化の過程を経てきたにも拘わらず、近代の公的コミュニケーションの「ルール」は、また「中世が現代に生きている」ことを明瞭に示している。

※ 本論文の註部分の訳は、次号『郡山女子大学紀要』第61集に掲載されます。

福島市立図書館(第一次)の成立と明治後期の 殖産興業政策の関連を探る

Exploring the relationship between the establishment of the Fukushima Municipal Library
(the first) and the policy of reproduction and development in the late Meiji period

和 知 剛

Tsuyoshi Wachi

はじめに

現在の福島県立図書館の成り立ちは少々複雑である¹⁾。まず福島市立図書館(第一次)として、1908(明治41)年に当時の皇太子嘉仁親王(のちの大正天皇。本稿では「皇太子行啓」を除き、即位以前は「嘉仁親王」に統一する)が、1908(明治41)年9月に東北地方を行啓したことを記念して、「行啓記念福島図書館」として福島市腰ノ浜(現在の福島市松木町)に開館する²⁾。その年の9月15日に開館式を行い10月11日より閲覧に供したという³⁾。この図書館を、本稿では1985年に再開館した福島市立図書館と区別するために、「福島市立図書館(第一次)」とする。

福島市立図書館(第一次)はのち1927(昭和2)年に福島市本町の福島ビルディング(福ビル)に移転し、1929年に福島県立図書館に一切を譲って廃止された⁴⁾。その後しばらく「福島市立図書館」は存在しなくなる⁵⁾。現在の福島市立図書館(こちらを「第二次」とする)が福島県立図書館の再移転に伴って、それまでの福島県立図書館の建物を利用して再開館するのは1985年のことである。

本稿では、福島市立図書館(第一次)の開館に際して「皇太子行啓」が何らかの役割を果たしたのか、あるいは開館を彩る要素のひとつに過ぎなかったのか、残された資料からその痕跡を探っていく。

1908年頃の国内公共図書館の状況⁶⁾

1908(明治41)年頃のこの国の公共図書館の状況をかいつまんで述べると、1897(明治30)年に東京図書館から改称した帝国図書館の新館が落成したのが1906年のことである。また、1902年に開館した私立図書館である南葵文庫⁷⁾の新館が落成したのが、この嘉仁親王の東北巡啓直後の1908年10月である。1907年には日本文庫協会が「図書館雑誌」を創刊し、さらに1908年2月には日本文庫協会は日本図書館協会に改称する。

福島県内の公共図書館は、1897(明治30)年に日本組合若松基督教会が若松市内に開館した私立若松図書館がその嚆矢である。その後、私立川辺図書館(石川郡泉村⁸⁾、1894年)、私立郡山金透図書館(郡山町⁹⁾、1895年)がこれに続いた。公立の公共図書館は1904年2月に開館した会津図書館が福島県内で初めての公立図書館だった。福島市立図書館(第一次)は、会津図書館に次いで福島県内で2番めに開館した市立図書館であった。

1908年の皇太子(嘉仁親王)による東北巡啓(福島県行啓)

さて1908年の東北巡啓については、『大正天皇実録』¹⁰⁾に訪問先が詳細に記録されており、また大正天皇の伝記類¹¹⁾でも東北巡啓が取り上げられているが、福島市のみならず東北6県においておおよそ公共図書館(当時の呼称では「通俗図書館」か)を訪問した、という記事が管見の限りでは見当たらない。そもそも、原武史『大正天皇』¹²⁾によれば嘉仁親王の行啓は、表向きは「授業で学んだ地理歴史を実地に見学する」ことを目的としており、1908年の福島県行啓においても『大正天皇実録』には、白河において「福島県知事西沢正太郎、戊辰戦役東西両軍交戦の状況に就きて説明するを聴かせらる。」、会津若松において「西沢知事より戊辰戦役若松城攻囲の状況に就きて説明を聴き給ふ。」などの記述が見られる。

嘉仁親王が戊辰戦争に関する歴史を聴くのは、この「皇太子行啓」が開始された当初は嘉仁親王自身の地理歴史の勉強の一環であったこともさることながら、加えてこの行啓が東北地方の人心の慰撫(嘉仁親王の訪問により、東北地方の住民における、薩長藩閥政治に対する不平不満を、なだめておだやかにする)をも目的としていたからではないかと考えられる。

また、学校への訪問もそこかしこで行われており、この行啓において福島県内では、福島県立会津中学校、福島県立工業学校、福島県師範学校、福島県立養蚕学校、県立福島中学校、県立福島高等女学校(それぞれ名称は『大正天皇実録』による)をそれぞれ訪問している。

これらの訪問先から、教育に対して「皇太子行啓」が熱心だったことは間違いないと考えられるが、教育以上に皇太子行啓が重視していたのは、歴史の教科書にも「明治政府のふたつの目標」と紹介される「富国強兵」と「殖産興業」だったのではないと思われる。本稿が考える対象としている福島県内の行啓でも、嘉仁親王は軍事について、会津若松や福島で「馬匹」を見物したり、会津若松に駐屯していた「歩兵第六十五聯隊」の教練を見学したりしている。

馬匹については、この頃は、まだまだ馬が軍用(軍馬)として重視されていた時代だった¹³⁾。福島県行啓でも猪苗代、湖南、福島市と馬匹を見物した旨、『大正天皇実録』に記載があり、これは当時の福島県が馬産地であったことに加えて、嘉仁親王自身が馬の見物に入れ込んでいたのではないだろうかと思われる。のちに首相を務めた原敬が嘉仁親王の馬の鑑識眼に吃驚した話が『原敬日記』にあるのが参考になる。

また工業については、会津若松では福島県立工業学校における「漆工科の木地漆・丸物漆・

板物漆の実習、蒔絵科実習、染織科の機械及び色染実習、窯業科の轆轤・模型・陶画等の実習並び若松市及び会津五郡物産陳列所等」、二本松では「旧二本松城なる双松館製糸場」、川俣では川俣絹布精練株式会社・日本絹布精練株式会社、福島では福島県立養蚕学校の「同校生徒の成績品陳列室・標本模型陳列室・養蚕実習室・蚕兒解剖顕微鏡実習室及び製糸実習室」、福島県工業試験場の「試験部・製糸講習部・製糸伝習部・模範工場部」および合資会社共同生糸荷造所の「入荷検査部・捻造部・生糸試験室・品位鑑別室・荷造場」をそれぞれ見学している。

殖産興業と言っても、重工業は国家全体がその端緒についたばかりで、当時の日本の主要な産業は第一次産業(農業)であり、そして第一次産業の生産品を原料とする製造業であり、重要な輸出品は生糸であり絹織物であった。馬と同じように、こちらもまた福島県は有力な生産地のひとつであり、嘉仁親王の行啓もそのことを踏まえてのものだと推察される。

福島市立図書館(第一次)の成立と1908年の皇太子巡啓

開館当初の福島市立図書館(第一次)は、2023年6月まで福島地方気象台のあった場所(福島市松木町。旧町名は福島市腰ノ浜)に建設された。その建物は当時、「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」¹⁴⁾開催の機会に改めて新築された福島県庁の、それまで使用していた旧庁舎の玄関・応接室・宿直室等は無償で譲渡され移築したものであった。それは「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」開催にあわせて、ルネサンス様式の福島県庁舎を1907年に新築した際、福島県に県庁舎の新築のために福島市が提供した3万円の見返りだった¹⁵⁾。また、図書館の建物とは別に書庫が建設されたが、こちらは日露戦争時に設立された「軍事義会」における剰余金を寄付されて建設されたため「戦捷記念書庫」と称された。

そして嘉仁親王は、9月12日から15日まで福島市に滞在しているが、連合共進会が開催された跡地を訪れた記載が『大正天皇実録』にはあるものの、福島市立図書館(第一次)の開館式があった9月15日には福島駅から次の訪問先である米沢に向かって鉄道で移動しており、福島市立図書館(第一次)を訪問したわけではないし、もちろん開館式に臨席してもいない¹⁶⁾。その一方で、文部省の調査に基づく『全国図書館に関する調査一九二二年』¹⁷⁾掲載の一覧表では、他県の図書館が例えば「行啓記念山形県立図書館」「御即位記念西村山郡立図書館」などと名乗っているなかで、福島市立図書館はただ「福島図書館」として掲載されている。

東條文規はその著書『図書館の政治学』¹⁸⁾で図書館(公共図書館)と天皇制・皇室との関係について「国家的慶事を利用し、皇室の威光を借りた」¹⁹⁾とし、その例証として「大正大礼」(1915[大正4]年)、「昭和大礼」(1928[昭和3]年)、「紀元2600年」(1940[昭和15]年)についてそれぞれ論じている。しかし1908年の皇太子行啓(東北巡啓)および福島市立図書館(第一次)の開館は1908年という、東條が取り上げている3つの国家的行事より以前の時期に行われたことである。『福島県立図書館三十年史』によれば、福島市立図書館(第一次)は1907年2月に予算化され、同年

7月に工事が始まり12月に竣工している。当時の公共図書館は図書館令により、開館には文部大臣の認可を必要としたが、福島市立図書館(第一次)の認可は1908年2月27日である。そして原武史『大正天皇』によると嘉仁親王の東北巡啓が決定したのは1908年7月7日のことだった²⁰⁾。少なくとも福島市立図書館(第一次)の建設は、「国家的慶事を利用し、皇室の威光を借りた」と言い切れるような実態を伴っていたわけではないと考えられる。

むしろ、福島市立図書館の建物が「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」の開催にあわせて福島県庁舎が新築された際に、福島市が福島県に提供した3万円の見返りであったことと、書庫建設のための資金提供を「軍事義会」から受けたことの方が、福島市立図書館(第一次)の成立を推進する、何らかの役割を果たしたものと考えられる。そこで、ここでは「共進会」および「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」について概観を試みる。

「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」について

「共進会」とは、現在でも肉牛などに関して盛んに開催されているイベントである²¹⁾。『国史大辞典』によれば「共進会」とは

明治初年以来殖産興業政策の一環として各地で開催された産業技術交流のための展示会、集会。明治政府は立ちおくれたわが国産業の発達を促進する目的をもって明治初年以来海外の万国博覧会に参加し、国内でもしばしば博覧会・共進会を開催した。最初の共進会は明治十二年(一八七九)九月横浜で開催された製茶共進会である。(後略)

というものである。東北地方においても主に農林水産業産品およびその加工品に関する共進会が明治10年代より何度も開催されている。

福島市立図書館(第一次)の開館直前(1908年5月)に開催された「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」については『第一回奥羽六縣聯合馬匹共進會事務報告』²²⁾(以下『事務報告』と略)という冊子が残されている。以下この『事務報告』を参考に、この共進会が開催された背景について確認してみる。

『事務報告』の「第一章 沿革」によれば、それまで5回にわたり開催されてきた「奥羽六縣聯合共進會」においても馬匹の出品があり、また各県において開催された共進会でも馬匹の改良発達に努めてきたところだがなお不足のあるところ、日露戦争の大陸戦では馬匹の重要性が再認識され、政府も内閣総理大臣直属の直轄機関として馬政局を新設し、改めて産馬を奨励し始めた²³⁾。そこで、東北六県もこれまでの共進会における小規模な出品ではなく、独立した大規模な馬匹共進会を開催することとした。これが「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」である、ということになる。筆者は先に「殖産興業」の奨励が皇太子行啓の主な目的のひとつ、としたが、こ

の馬匹共進会は軍馬の生産という、殖産興業のみならず明治政府のもうひとつの目標であった「富国強兵」政策にも寄与する重要な役割を担わされていたものだったことが確認できる。

第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會の会場は福島市仲間町三十三番地であり、ここに約五千坪の敷地を福島信託会社より無償で借り入れ、14棟の施設を建て馬場を整備していた。『事務報告』に掲載されている会場の図面によると、馬場や厩舎はもちろんのこと、牛舎や煮炊場、喫茶店も設えられていた。なお、皇太子が訪れた「共進会跡」を『大正天皇実録』は仲間町ではなく、現在の国道115号線を挟んだ東側の「豊田町」としている²⁴⁾が、こちらも江戸時代は「馬喰町」と言った宿場町であり、馬の仲買人で賑わっていた町であるので、記録者の勘違いでもあったろうか。なお豊田町内を南北に、信達軌道(のちの福島交通飯坂東線[路面電車])が1908年4月より開通していたのも、馬匹共進會の開催と何らかの接点があったのだろうか。

この共進会跡地が福島市立図書館(第一次)の建設地であれば、さらに興味深いことになったのだが、共進会の跡地とは異なる場所(現在の福島市松木町)に、福島市立図書館(第一次)は建設されたのだった。この立地については、『福島県立図書館三十年史』では「公会堂隣」と述べており²⁵⁾、福島市公会堂の隣接地であったことが選ばれた理由のようである。

取り敢えずの結語

本稿では『大正天皇実録』『第一回奥羽六縣聯合馬匹共進會事務報告』などの資料を見ながら、福島市立図書館(第一次)の成立と、皇太子行啓や富国強兵・殖産興業との関連を探ってきたが、現在のところ「福島市が共進会絡みで寄付した3万円の見返りに旧県庁舎の建物を無償譲渡された」以外の、明確な関連を見出すことができていない。とはいえ、福島市立図書館(第一次)の建物が文教政策の見返りではなく、富国強兵・殖産興業に絡むイベントの見返りであったことは間違いなく、このことは現在の公共図書館を取り巻く状況に照らしても、経済状況の好転あるいは悪化が公共図書館の運営基盤に影響をもたらすことが、その萌芽期から現在に至るまで続いていること(そしてそのことは公共図書館が「皇室」「天皇制」という権威にすがって箔付けたところで何のご利益も得られないこと)を示唆しているのではないか。

今後は、さらに調査を進め、今回参照できなかった当時の新聞記事などを博捜しつつ、明治後期における福島県下の公共図書館を支える基盤について考察を深めていきたい。

注記：

1) 福島市立図書館の成立については、次の文献を参考にした。

- ① 福島市史 福島市史編纂委員会編、福島市教育委員会、1968.
- ② 福島県立図書館三十年史 福島県立図書館、1958.11

- 2) なお当時の図書館令により認可されたのは1908年2月なので、同年7月に公表された嘉仁親王の東北巡啓(皇太子行啓)を当て込んで建設されたのかどうかについては疑義無しとしない。開館式を福島市行啓に合わせただけなのかもしれない。
- 3) 福島市立図書館(第一次)の開覧開始日は『福島市史』が10月1日、『福島県立図書館三十年史』が10月11日とする。
- 4) 市立図書館から県立図書館に移管された公共図書館としては、他に同じく1908年に開館した福井市立図書館がある(1950年に福井県に移管され福井県立図書館となる)。
- 5) のち1985年、福島県立図書館の現在地への移転に伴い、空いた建物が福島市に無償譲渡されて福島市立図書館(第二次)が開館する。その土地は福島市が福島県に貸与していたものだった。本稿では1928年に廃館になった福島市立図書館を「第一次」、1985年に再開館した福島市立図書館を「第二次」と付して区別する。
なお福島市立図書館(第一次)の建物は、福島市立図書館の福島ビルディング移転後は福島県立福島測候所(のち福島地方気象台)に転用され、1970年代に取り壊された。写真が『図説福島県史』207ページなどに掲載されているが、鷹野弥三郎が『都市経営上から見た市福島』(1916)で述べているように「図書館とはこんなものかと、思わしむ様な権威のないもの」と評価されても仕方のないような建物だった。
- 6) この項目は主に次の文献を適宜参照した
 - ① 近代日本公共図書館年表：1867～2005. 奥泉和久編著. 日本図書館協会, 2009.9.
 - ② 福島県教育史 / 福島県教育委員会編. 福島県教育委員会, 1972-1975.
- 7) 南葵文庫については以下。
南葵文庫 | 東京大学附属図書館
<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/collectionall/nanki>
- 8) 現在の玉川村の一部。
- 9) 郡山市の市制施行は1924(大正13)年。
- 10) 大正天皇実録. 宮内省図書寮編修. 補訂版. ゆまに書房, 2016.12-2021.2.
- 11) 後述の原武史著以外では
 - ① 大正天皇. 古川隆久著. 日本歴史学会編集. 吉川弘文館, 2007.8.(人物叢書新装版; 通巻247)
 - ② 大正天皇：一躍五大洲を雄飛. F・R・ディキンソン著. ミネルヴァ書房, 2009.9.(ミネルヴァ日本評伝選)がある。
- 12) 大正天皇. 原武史著. 朝日新聞社, 2000.11.(朝日選書; 663)
- 13) この頃は、まだまだ馬が軍用(軍馬)として重視されていた時代で、福島県は全国有数の馬の産地だった(その名残りが東北唯一の中央競馬である福島競馬場)。皇太子は軍人としての地位も持ち合わせていたため、繁殖・飼育された馬を見物することは軍務の勉強の一環であった。
- 14) 「共進会」の表記は、「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」のような特定の共進会を指すときは、旧字体で「共進會」とする。
- 15) 福島市は、福島県庁舎新築への3万円の拠出とは別に、「第1回奥羽六縣聯合馬匹共進會」に2万円を拠出している(『事務報告』による)。
- 16) 『大正天皇実録』によれば「十五日、午前八時十分御旅館福島県庁御出門、福島停車場にて汽車に御搭乗」とあり、福島市立図書館(第一次)の開館式に出席した形跡は認められない。『福島市史』の「その開館式は東北行啓の東宮殿下(のちの大正天皇)を迎えて九月十五日に「行啓記念福島図書館」とし

- て挙行されたものである。」という記述は、今更ながら「嘉仁親王が開館式に臨席した」という誤解を招くのではないか。
- 17) 全国図書館に関する調査. 大正10年3月現在. 文部省編. 日本図書館協会, 1978.7.(復刻図書館学古典資料集).
- 18) 図書館の政治学. 東條文規著. 青弓社, 2006.1. (青弓社ライブラリー; 44).
- 19) 注18. 9ページ
- 20) 嘉仁親王の東北巡啓(皇太子行啓)は1902年に一度計画されていた(北関東巡啓に続けて予定されていた)が、嘉仁親王の体調不良により中止になっていた。
- 21) 例として第12回全国和牛能力共進会は2022年10月6日から10月10日まで、鹿児島県霧島市において開催されている。
全国和牛能力共進会 | 全国和牛能力共進会は和牛の能力と斉一性の向上を目指して開催される共進会です。
<http://cus4.zwtk.or.jp/zenkyo/>
そして第13回は、2027年に北海道十勝地方で開催される予定である。
第13回全国和牛能力共進会北海道大会 | 北海道十勝 音更町
<https://www.town.otofuke.hokkaido.jp/keizai/noringyosha/oshirase/chikusanjoho/2027wagyuzenkyo.html>
ところで共進会は、国内で開催されていた「勸業博覧会」と同種のイベントであるが、「共進会」という名称の由来や採用された理由、勸業博覧会という名称との棲み分けは調べてもよくわからなかった。なお後考を待つ。
- 22) 奥羽六県聯合馬匹共進会事務報告 第1回—国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/841603>
- 23) 『事務報告』によれば、「第1回奥羽六県聯合馬匹共進会」に際して馬政局長官は韓国出張中、馬政局次長は病氣療養中のため、ふたりとも臨場することはなかった。
- 24) なお『大正天皇実録』では「豊田町馬匹共進会跡に臨み、馬匹を御覧あり」とある。豊田町は、国道115号線を挟んで仲間町の東側に位置する。豊田町はもと馬喰町といい、奥州街道の宿場として名前の通り馬の仲買人で賑わっていた地域である。現在の町域北端には仙台北口枡形がおかれていた。また、町域の西側(現在の国道115号線の上)に馬場が設置され、馬競りが行われ賑わっていた。北側に隣接して馬頭観音堂が設けられていた。
- 25) 注1)の②. 1ページ

パパインによる絹タンパク質フィブロインの消化性

Digestibility of Silk Protein Fibroin by Papain

源 川 博 久

Hirohisa Minagawa

The raw silk protein from the cocoons of silkworms, *Bombyx mori*, is composed of sericin (20-30%) and fibroin (70-80%). Fibroin, the protein of silk threads, has been used mainly in the textile industry. Recently, it has been used in other industries as well, particularly in the food industry, where silk fibroin degraded to amino acids has been used. In order to use silk fibroin as a food material, the digestibility of silk fibroin and the functionality of peptide derived from fibroin are important. In this study, I determined that the digestibility of water-soluble silk fibroin and silk fibroin by papain *in vitro*. The results showed that papain was highly digestible to water-soluble silk fibroin, but not to silk fibroin. It is suggested that the digestibility of silk fibroin is greatly affected by its physical properties. These results indicated that papain can easily prepare degradation products from water-soluble silk fibroin. Furthermore, peptides derived from water-soluble fibroin by papain are expected to be used as food materials.

はじめに

古来より、日本では主にカイコガ科の蚕である家蚕(*Bombyx mori*)の繭を製糸、繰糸した生糸を利用してきた。福島県では江戸時代から養蚕が盛んにおこなわれており、福島県農林水産部により作成された「令和4年度ふくしまの蚕糸」によると、福島県における上繭量は2022年度では全国第3位の8700kgである¹⁾。生糸は主にタンパク質で構成されており、家蚕の生糸のタンパク質はセリシンが20-30%、フィブロインが70-80%を占め、2本のフィブロインの周りをセリシンが覆った構造である²⁾。この生糸を精練にてセリシンを除去すると絹糸が得られる。絹糸を構成するタンパク質はほとんどがフィブロインであり、繊維状タンパク質に分類されるため水に不溶である。

日本における絹糸は、古来より主に繊維分野で用いられてきたが、近年では絹フィブロインの粉末が化粧品や食品分野などの非繊維分野で利用が拡大され、年々市場が拡大傾向にある³⁾。しかし、絹フィブロイン粉末の製造法やコスト面などの問題から、絹フィブロインを酸などで加水分解したアミノ酸分解物⁴⁾を使用しているのが現状である。

絹フィブロインの消化・吸収性に関する研究報告は少なく、陳らによる加水分解した絹蛋白

質の消化⁵⁾、平尾らによる気泡性フィブロインの消化性⁶⁾ならびに著者らによる水溶化した絹フィブロイン(以下、水溶性絹フィブロインと略す)のヒトタンパク質分解酵素の単独ならびに連続消化率が報告⁷⁾されているにすぎない。また、絹フィブロイン自体の消化性は報告されていない。

そこで、未だ不明である絹フィブロインと水溶性絹フィブロインの消化性を明らかにするために、植物由来タンパク質分解酵素の一つであるパパインによる消化性を*in vitro*にて検討した。

実験方法

1. 水溶性絹フィブロイン粉末ならびに絹フィブロイン粉末の調製

水溶性絹フィブロインの調製条件についてはいくつか抽出条件が報告されているが⁸⁾⁹⁾、収量的な問題と不溶物混入の問題を改善した著者らの抽出条件にておこなった⁷⁾。すなわち、10gの家蚕生糸(下村ねん糸、京都)を250mLの0.05%炭酸ナトリウム溶液にて60分精練をおこない、セリシンを除去した。絹糸を乾燥させた後、100mLの50%塩化カルシウム溶液にて45分間煮沸抽出し、抽出液を水道水で4日間透析して塩化カルシウムを除去した。透析内液を25,000×g、15分間、4℃にて遠心分離することで不溶物を除去し、凍結乾燥した上清をブレンダーにて粉末化したものを水溶性絹フィブロイン試料とした。

絹フィブロイン粉末の作製は、精練後の絹糸をハサミで1～2mm程度に切断したものを絹フィブロイン試料とした。

2. *In vitro*における人工消化試験

*In vitro*における人工消化試験は、小谷らの方法に準じておこなった¹⁰⁾。すなわち、ねじ口試験管に試料を100mg精秤し、pH7.0のリン酸緩衝液を9mL加えて攪拌した。これにパパイン(和光純薬)をリン酸緩衝液(pH7.0)に溶解した酵素液1mL加え、55℃、100rpmにて振とうしながら反応させた。反応終了後、50%トリクロロ酢酸 2mLを加えてよく攪拌し、氷水にて酵素反応を停止させ、全ての反応液を25,000×g、15分間、4℃にて遠心分離により上清と沈殿に分離した。この上清と沈殿をそれぞれセミマイクロ改良ケルダール蒸留法にて酵素反応後の未消化残渣窒素量を求め、その比率から消化率を算出した。

酵素量の検討では、水溶性絹フィブロインを基質として酵素液中のパパイン量を0、0.1、1、2、4、8mgとなるようにリン酸緩衝液で調製し、反応時間を180分でおこなった。また、消化時間の検討については、反応時間を0、10、15、30、60、180分でおこなった。

絹フィブロインの消化性の検討は、リン酸緩衝液(pH7.0)に16時間浸漬し、酵素量1mg、消化時間は0、15、30、60、180、300、1440分でおこなった。

なお、全ての消化試験は3連でおこない、結果は平均値で示した。また、同一の消化試験を2回おこない、再現性についても確認した。

結果および考察

1. 人工消化試験における酵素量の決定

水溶性絹フィブロインを基質とし、酵素量 0、0.1、1、2、4、8 mg、反応時間180分の消化率は酵素量 0 mgと比較していずれの酵素量においても高く、各酵素量における消化率は、0、77、83、86、86、91%であった(表 1、図 1)。酵素量0.1mg における消化率は77%で酵素量の増加に伴い消化率は若干増加がみられたが、ほぼ横ばいであった。そのため、酵素量0.1mg でも消化はほぼ終了していると考えられたが、消化率のばらつきがより小さい 1 mgを酵素量に決定した。

表1 消化時間180分における水溶性絹フィブロインのパパインによる消化率

Papain concentration (mg/10 mL)	0	0.1	1	2	4	8
Digestibility (%)	0	77	83	86	86	91

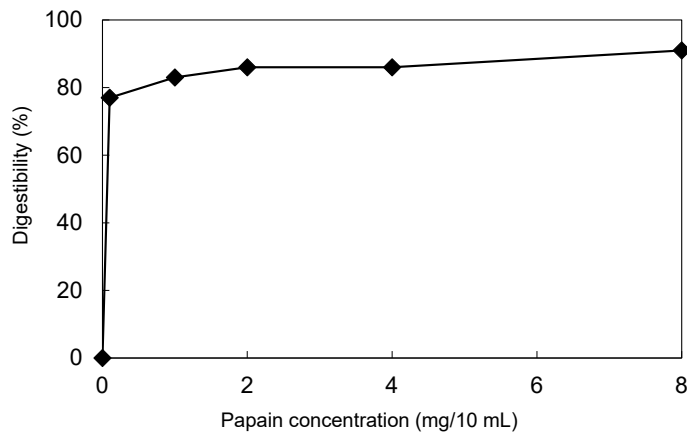


図1 消化時間180分における水溶性絹フィブロインの消化率と酵素量

2. 水溶性絹フィブロインにおけるパパイン消化性の経時的变化

酵素量 1 mg、反応時間 0、10、15、30、60、180分における水溶性絹フィブロインの消化率は、消化時間 0 分と比較していずれの消化時間においても消化率が高かった。各消化時間における消化率は、0、73、77、80、86、83%であった(表 2、図 2)。

表2 水溶性絹フィブロインのパパインによる消化率

Reaction time (min)	0	10	15	30	60	180
Digestibility (%)	0	73	77	80	86	83

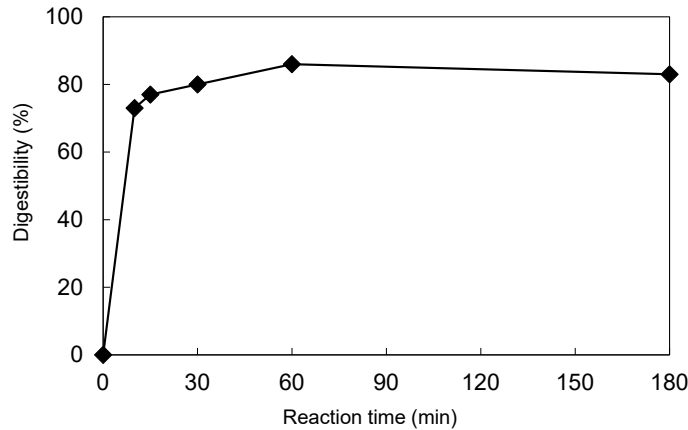


図2 水溶性絹フィブロイン消化率の経時的変化

3. 絹フィブロインにおけるパパイン消化性の経時的変化

酵素量 1 mg における絹フィブロインの消化率は、消化時間 0 分と比較していずれの消化時間においても消化率に差は認められず、各消化時間における消化率はいずれも 0 % であった (表 3)。

表3 絹フィブロインのパパインによる消化率

Reaction time (min)	0	15	30	60	180	300	1440
Digestibility (%)	0	0	0	0	0	0	0

近年、絹糸は繊維分野以外にも様々な分野で利用されている。しかし、絹糸のタンパク質であるフィブロインを食品素材として利用する上で重要となる消化性については、ヒトのタンパク質分解酵素以外の報告は極めて少ない。また、植物由来のタンパク質分解酵素で広く利用されているパパインによる消化性の研究報告はなされていなかった。そこで、パパインによる水溶性絹フィブロインと絹フィブロインの消化性を明らかにするために、*in vitro*における人工消化試験にて検討した。初めに消化試験の条件として酵素量の決定をおこない、酵素量を 1 mg と決定した。

パパインによる水溶性絹フィブロインの消化性は、消化時間 10～180 分において消化率は 73～86% であった。最大消化時間の 180 分においても消化率に大きな変化は認められず、消化時間 10 分以降の消化率がほぼ横ばいであることから、最長 30 分でパパインによる水溶性絹フィブロインの消化が終了したことが推察される。著者らは、ペプシン 10 mg、消化時間 180 分における水溶性絹フィブロインの消化率が約 28% と報告している⁷⁾。パパインによる消化はペプシンと比較して少ない酵素量と短い反応時間で終了したことから、パパインの水溶性絹フィブロイ

ンに対する消化性が高いことが示唆された。

一方、絹フィブロインにおけるパパインの消化性は、消化時間0～180分で0%であり、1440分においても0%であった。また、ヒトの生体内に存在するタンパク質分解酵素である、ペプシン、トリプシン、キモトリプシンによる消化も同様であった(未発表)。これらのことから、絹糸のフィブロインはパパインやヒトのタンパク質分解酵素による酵素反応に対して非常に強い抵抗性を持つことが考えられ、絹フィブロインの消化性の低さは、基質である絹糸を構成するフィブロインの物理的構造や物理的性状の影響が大きいことが推察される。

また、パパインはヒトのタンパク質分解酵素であるペプシン、トリプシン、キモトリプシンと同じエンド型のタンパク質分解酵素であるため、基質の内部の切断部位を認識して切断する。しかし、パパインの基質切断部位はペプシンなどとは異なる。パパインは基質特異性が広く、なかでも塩基性アミノ酸、グリシン及びロイシンと続くアミノ酸とのペプチド結合を切断するのに対し、ペプシンは酸性アミノ酸、芳香族アミノ酸残基と続く配列のN末端側を切断する¹¹⁾。水溶性絹フィブロインの構成アミノ酸は、グリシン35.8%、ロイシン1.1%、芳香族アミノ酸7.2%であるため⁷⁾、水溶性絹フィブロインにおけるパパインの切断部位はペプシンなどよりも多く存在することが示唆される。

さらに、家蚕は絹糸腺よりフィブロイン分解酵素であるフィブロイナーゼを分泌し、体内の残余フィブロインを分解することが知られている。フィブロイナーゼはカテプシンL様システインプロテアーゼであるが¹²⁾、パパインもシステインプロテアーゼである¹³⁾。そのため、絹糸を構成するフィブロインは、システインプロテアーゼによる消化性が高いことも考えられる。パイナップルのタンパク質分解酵素として知られるブロメラインもシステインプロテアーゼであるため、フィブロインのシステインプロテアーゼによる消化性を明らかにするにはフィブロインにおけるブロメラインの消化性を確認することも重要であると考えられる。

以上、パパインは絹フィブロインを消化することはできなかったが、水溶性絹フィブロインに対する消化性が高いことを明らかにし、その消化性の高さはパパインの切断部位がペプシンなどのタンパク質分解酵素よりも基質である水溶性絹フィブロインに多数存在すること、パパインがフィブロイナーゼと同じシステインプロテアーゼであることが推察される。今後はパパインの消化により派生するペプチドの栄養機能性を明らかにすることで、新たな食品素材としての利用が期待される。

参考文献

1. 福島県農林水産部：令和4年度ふくしまの蚕糸、<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/567121.pdf>(2023年9月アクセス可)

2. 皆川基：絹の科学、関西衣生活研究会、大阪、p29-45(1981)
3. シルクサイエンス研究会編：シルクの科学、朝倉書店、東京、p.7-9、p.113-23(1984)
4. 陳開利、高野亮、平林潔：塩酸加水分解による水溶性絹粉末の作製とその物性、日本蚕糸学雑誌、60、358-362(1991)
5. 陳開利、井浦克弘、相沢龍司、平林潔：加水分解した絹蛋白質の消化、日本蚕糸学雑誌、60、402-403(1991)
6. 平尾和子、塚越幸子、五十嵐喜治：絹フィブロイン起泡粉末の給与がラットの血清コレステロール濃度に及ぼす影響、日本栄養・食糧学会誌、52、219-223(1999)
7. 源川博久、前川昭男、山本祐司、田所忠弘：水溶性絹フィブロインの消化・吸収性、日本栄養・食糧学会誌、57(5)、215-220(2004)
8. 平林潔：絹の可溶化とその応用、Bio. Ind.、6、749-754(1989)
9. 安田勝利：絹蛋白質の新利用技術に関する試験(第1報)、岐阜蚕糸研要報、6、46-56(1996)
10. 小谷スミ子、粟津原宏子、加藤征江：未変性および熱変性オボアルブミンのペプシン、トリプシン、キモトリプシン消化による抗原性の変化、日本家政学会誌、48(8)、717-722(1997)
11. 森原和之：プロテアーゼの種類と基質特異性、日本醸造協会雑誌、70(9)、632-636(1975)
12. Pengchao Guo, Zhan Wang, Qian Wang, Huawei Liu, Yunshi Zhang, Haiyang Xu, Ping Zhao, Fibroinase and its physiological inhibitors involved in the regulation of silk gland development in the silkworm, *Bombyx mori*, Insect. Biochem. Mol. Biol., 106, 19-27 (2019)
13. Kamphuis IG, Drenth J, Baker EN, Thiol proteases. Comparative studies based on the high-resolution structures of papain and actinidin, and on amino acid sequence information for B and H, and stem bromelain, J. Mol. Biol., 182, 317-329 (1985)

スポーツ栄養研究所新設

Establishment of Sports Nutrition Research Facility

紺野 信弘 [※]	岡部 聡子 [※]	水野 時子 [※]	諏訪 雅貴 [※]
Nobuhiro Konno	Satoko Okabe	Tokiko Mizuno	Masataka Suwa
伊藤 央奈 [※]	金子依里香 ^{※※}	西山 慶治 [※]	
Teruna Ito	Erika Kaneko	Keiji Nishiyama	

キーワード：有酸素運動、余暇活動、貧血、食行動、公認スポーツ栄養士

要旨

健康寿命を延伸させる良い方法の一つに高血圧や糖尿病といった生活習慣病を減らすことが挙げられる。そのためには食や栄養の摂取状況に加えて運動習慣にも注目する必要がある。食の専門家を養成する本学においては、学生に対して「食、栄養」のみならず「運動(スポーツ)」の重要性を今以上に教授する必要がある。地域住民に対する食事指導や運動部活動の選手たちの栄養サポートなどにも「スポーツ栄養」の知識を役立てることができる。「スポーツ栄養研究所」を開設するにあたり、関係教員がこれまで行ってきたスポーツ・栄養関係の研究成果の概要を紹介する。

Reduction of lifestyle-related diseases such as hypertension and diabetes mellitus is a good way to extend healthy life expectancy. Therefore, it is necessary to pay attention to regular exercise in addition to food and nutritional intake. At our university, which trains food specialists, it is necessary to teach the students not only about food and nutrition, but also about the importance of sports. Sports nutrition knowledge can be used to provide nutritional support to athletes and also used to provide dietary guidance to local residents. The establishment of the Facility of Sports Nutrition will allow us to give an overview of sports and nutrition related research conducted by the related faculty members so far.

※ 郡山女子大学家政学部 食物栄養学科

※※ 郡山女子大学短期大学部 健康栄養学科

1. 目的

福島県民の健康状態はある指数でみる限り全国的にみて必ずしも良好とは言えない。令和3年(2021)の人口動態統計にある、死因別の死亡率(人口10万対)の全国順位(高位順、男女一括)は脳血管疾患6位、心疾患9位、糖尿病13位であった。また3.11の災害以降、子供たちにも健康影響が現れた。多くは放射線の影響を避けるため「屋内」で生活する時間が増え、運動不足になり、肥満傾向児が増加したといわれている。さらにここ2～3年は新型コロナウイルス感染症の影響で再び外出を自粛するという状況が続き、肥満や運動不足が懸念されるところである。

わが国は平均寿命の上昇(2022年：男性81.48歳、女性87.57歳)で世界有数の長寿国になっているが、2019年の健康寿命(WHO定義：健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間)は男性72.68歳、女性75.38歳であり、十分な状況とはいえない。健康寿命の延伸には生活習慣病の予防や改善が重要である。そのためには食や栄養の摂取状況に加えて運動習慣にも注目する必要がある。

食の専門家を養成する食物栄養学科や健康栄養学科においては、学生に対して「食、栄養」のみならず「運動(スポーツ)」の重要性を今以上に教授する必要がある。

それは現在直接スポーツに関わっていない女子大学生であっても将来管理栄養士や栄養士として施設や病院あるいは福祉の現場などで、スポーツ(運動)と関わりを持つことは十分想定される。大学においてスポーツと栄養について深く学ぶことは従来の知識にさらに広い知見を加えることになる。地域住民に対する食事指導や運動部の選手たちの栄養サポートなどにも「スポーツ栄養」の知識を活用することができる。

この度「スポーツと栄養」、あるいは「運動と健康」を有機的に結び付けた研究と教育の充実、発展をはかるためにスポーツ栄養研究所を開設することにした。以下に、本研究所の今後の方向性を示すために、関係教員がこれまで行ってきたスポーツ・栄養関係の研究成果の概要を紹介する。

2. 公認スポーツ栄養士・健康運動指導士とは

近年、競技選手だけでなく、健康の維持・増進を目的としたスポーツ愛好家、学校などの教育機関において体育の授業がある児童・生徒、メタボリックシンドロームなどの疾病改善や予防のために運動を実施している人など、活動量の多い人たちの栄養管理や栄養サポートに特化したスポーツ栄養(スポーツ栄養士)¹⁾が脚光を浴びている。

スポーツ栄養士として栄養サポートに携わるには、活動量が多く、それに見合ったエネルギーや栄養素の摂取量を対象者に対して適切な食生活を指導している管理栄養士(栄養士)でも無論可能であるが、スポーツ栄養の専門家として高い実践力を有する人材として、公益社団法人日本栄養士会および公益財団法人日本スポーツ協会の共同認定による「公認スポーツ栄養士」資格

がある。「公認スポーツ栄養士」資格を得るためには、管理栄養士であり、スポーツ栄養指導の経験があること、またはその予定があることなどの条件をクリアし、さらに講習会の受講後、検定試験に合格する必要がある²⁾。スポーツ栄養士はその専門性の高さから、多岐にわたる職場での活躍が囑望されている。

他方、生活習慣病を予防し、健康を維持・増進する観点から、昭和63年から厚生大臣の認定事業として、生涯を通じた国民の健康づくりに寄与する目的で「健康運動指導士」の養成事業が創設された。「健康運動指導士」は、個々人の心身の状態に応じた、安全で効果的な運動を実施するための運動プログラムの作成及び指導を行う者として育成されていることから、管理栄養士が、健康運動指導士としての知識・技能等を修得することで、栄養と運動の両面から健康づくりを支援でき、活躍の場が更に広がっている³⁾。いずれにしても上記の資格取得については、管理栄養士の幅広い知見を前提としたものである。

健康の維持・増進、糖尿病を初めとした生活習慣病の発症予防・重症化予防には、バランスのとれた栄養・食生活と適度な運動習慣が重要である。管理栄養士・栄養士は食のスペシャリストとして、専門的な知識と技術を持って栄養指導や給食管理、栄養管理に寄与する資格として関わっている。

3. 余暇活動(運動・スポーツ)や労働活動と健康

身体活動は、「骨格筋の収縮活動によりもたらされるあらゆる身体的な動き」として定義されており、余暇活動としての運動やスポーツだけではなく、家事、通勤などの移動、労働などの生活活動も含んでいる⁴⁾。身体活動が多いことが、死亡リスクや慢性疾患リスクを低減することはよく知られている。これらに関する研究のさきがけは、1953年のロンドンの2階建てバスの車掌と運転手の狭心症による死亡に関する研究である⁵⁾。この研究では、狭心症発症後の3か月以内の死亡率を比較したところ、勤務中の座位行動が多い運転手よりも、2階建てバスの中で動きまわっている車掌の方が、死亡率が低いことが示された。この勤務中の身体活動量の差が、狭心症発症後の症状に影響を及ぼしている可能性がある、との解釈がなされている。その後も、身体活動が死亡や慢性疾患などのリスクを低減することを示す報告が多数発表されており、これらの結果をもとに日本の厚生労働省は2013年に「健康づくりのための身体活動基準2013」を示した⁶⁾。この指針には、1週間当たりの総身体活動量の基準値が示されている。このような経緯もあり、日本では、余暇活動としての運動だけではなく、職域、家事、通勤などで生じる身体活動も、健康づくりに有益と考えられていると思われる。

一方で、身体活動をスポーツや運動といった余暇活動と労働活動に分けて解析した研究報告では、労働活動が多いことが死亡や慢性疾患罹患のリスクを高める可能性が報告されている。例えば、コペンハーゲンの地域住民を対象とした10年間の追跡研究では、労働活動量と余暇活

動量のそれぞれにおいて、最も少ないグループから最も多いグループまで四分位に分け、総死亡リスクを調べている⁷⁾。労働活動でみた場合、最も労働活動が多いグループでは、共変量で調整後の総死亡のハザード比は最も少ないグループに対して1.27であった。一方、余暇活動でみた場合には、最も余暇活動が多いグループのハザード比は0.60であった(図1)。すなわち、労働活動が多いことと、余暇活動が少ないことが総死亡のリスクとなることが示された。また、この研究では、主要心血管イベントでも同様の結果が示されている。上述のロンドンパスの研究⁵⁾を振りかえって確認すると、車掌の方が狭心症の罹患率が高いことも示されている。つまり、労働活動が多いことが疾患のリスクであることを示した最初の研究でもある。また、196編の論文のメタアナリシスでは、1日11分以上の早歩きは、心疾患、がん、総死亡のリスクを下げることを報告している⁸⁾。この研究では、非職業的身体活動で評価すると、総身体活動を評価した場合よりも少ない量で、脳心血管疾患のリスクを低減することを示している(図1)。

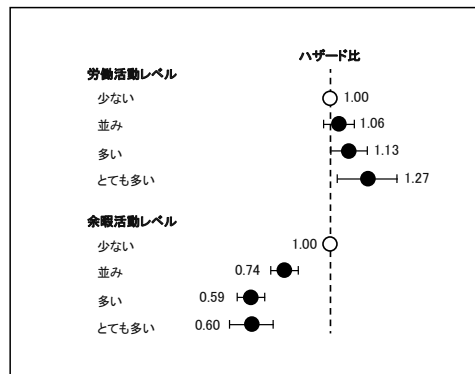


図1. 労働活動または余暇活動と総死亡の関連⁴⁾。

コペンハーゲン在住の男女(n = 104, 046)を対象とした10年間の追跡研究。労働活動と余暇活動をそれぞれ四分位に分け、COX比例ハザードモデルによりハザード比を示した(年齢、性別、BMI、喫煙状況、修学年数、糖尿病、収縮期血圧、食事癖、飲酒、COPD、LDL-コレステロール値、トリグリセリド値、で調整)。

死亡や慢性疾患以外でも、高強度の労働活動が、身体機能の低下を助長することや⁹⁾、筋持久力の低下と関連することも示されている¹⁰⁾。このように、労働活動が多いことは、総死亡、慢性疾患、身体機能低下などのリスクであると考えられる。

日本におけるこのような研究は少ないが、例えば、自動車製造業従事者の男性(35～59歳、n=885)を技能職(現業系)と事務・技術職に分け、技能職労働者はさらに作業内容により6つに分類し、勤務時間内の身体活動を三軸加速度計によりに計測し、労働活動量と体力の関連性を確認した¹¹⁾。最も労働活動量が多く、典型的な肉体労働である組み立てラインの従事者は、握力、足把持力、反復立ち上がり、2-ステップテスト、座位ステッピングにおいて最も低値を示し、デスクワーク従事者は相対的に体力が高いことが示された。同じコホートにおいて、

労働活動量で四分位に分けて高血圧症の罹患を比較したところ、第二・四分位のオッズ比を1とした場合、第一(最も労働活動が少ない)、第三、第四(最も労働活動が多い)の各四分位のオッズ比はおおよそ2であった¹²⁾。すなわち、労働活動が多いことも少ないことも高血圧罹患の上昇と関係していた。しかも、第一・四分位の高血圧症有病者には、もともと工場の作業員であった者が、デスクワーク系の職場に異動していたケースが多くみられた。これらの結果から、自動車製造業においては、ライン作業などで労働活動量が多いことは、体力が低いことや、高血圧症の有病率が高いことと関連していることがわかる。

日本人大学生を対象とした報告では、身体活動量が多いことは、睡眠の質が低いことやメンタルヘルスが低いことと関連することが示された¹³⁾。この研究では、アルバイトによる身体活動量が睡眠の質やメンタルヘルスが低いことと関連していた。つまり、大学生においては、アルバイトでの労働活動が、睡眠やメンタルヘルスを悪化させる要因の1つである可能性がある。

このように、余暇活動とは異なり、労働活動が多いことが、総死亡、疾患罹患、心身の機能低下のリスクとなる可能性があり、労働活動が余暇活動と同様に心身への好影響があるとは考えにくい。

余暇活動と労働活動の心身への影響が一致しない現象は、「身体活動パラドックス」と呼ばれている。Holtermannらは、身体活動パラドックスの原因を、運動強度、24時間心拍数、24時間血圧、疲労回復期間、自己制御、炎症反応、の観点から指摘している¹⁴⁾。運動強度は、余暇活動では心肺持久力の向上が期待できる水準にも到達するが、労働活動はそれよりも低い水準で行われる。24時間心拍数や24時間血圧は、余暇活動の影響をうけないが、労働活動はこれらを高めてしまう。これには、労働活動は余暇活動よりも睡眠中の交感神経活動が副交感神経活動に対して優位な状態を導くことが関与している可能性がある¹⁵⁾。疲労回復期間は、余暇活動では十分な期間を確保しやすいが、労働活動の場合は回復期間が不十分になりやすい。また余暇活動は身体的な安全状態の自己制御が容易であるが、労働活動では作業のきつさ、スケジュール、防護服、心理ストレス、温度や湿度などの環境、といった点で自己制御がしにくい。炎症反応では、余暇活動は短時間であるため、慢性疾患と関連する炎症反応マーカーの上昇が少ないが、労働活動は長時間活動であるため炎症反応マーカーの上昇が大きい。

このように、労働活動は、心身に対して悪影響を及ぼしている可能性がある。健康づくりにおいては、運動、スポーツ、その他地域などでの余暇活動を主に行うことが望ましいと考えられる。また、健康指導の従事者は、「活動的な労働者は健康的」ではないことを認識する必要がある。さらに、身体活動量や、エネルギー消費量を高めることだけに着目するのではなく、対象者の過去および現在の労働活動特性を把握したうえでの運動指導や生活指導を行うことが望まれる。

4. 有酸素運動としてのウォーキング

最大酸素摂取量は全身持久力(全身持久性体力)の有力な指標であり、1分間に体重1kgあたり取り込むことができる酸素の最大値(ml/kg/分)を示し、「VO₂max」(Volume[量]、O₂[酸素]、max[最大値maximum])と略記する。全身持久力はスタミナや粘り強さのことをいい、VO₂maxを測ることによって全身持久力が評価できる。VO₂maxは、心臓のポンプ機能や血液運搬、骨格筋、肺拡散能力などが関連するため、いわば全身組織の総合力を示し、重要な「健康指標」にもなっている。VO₂maxの測定法には直接法と間接法があるが、私たちは、自転車エルゴメーターを用いた簡便な間接法で測定した。郡山女子大学生と短期大学部生(n=133)に行った測定結果によると平均値で35.4 mL/kg/minであり¹⁶⁾、「健康づくりのための運動基準2013」(厚生労働省)の女性18～39歳で33 mL/kg/minより、本学学生はやや高い値を示した。さらに60～69歳の女性では平均26 mL/kg/minといわれており、加齢とともに低下する傾向にある。循環器系疾患の罹患率や死亡率にも関連するといわれており、できるだけ高い値を保つことが健康維持のためにも重要である。

有酸素運動とは、軽～中程度の負荷を継続的にかける運動のことである。酸素を使って筋収縮させるためのエネルギー(ATP)を体内の糖や脂肪を燃焼させて作り出すことから有酸素運動という。脂肪を消費するため、体脂肪の減少や高血圧の正常化などが期待できる。

また運動することにより、血糖値を下げる唯一のホルモンであるインスリンの力を借りずに糖を細胞に取り込む(血糖値を低下させる)機構が働き、そのためインスリンの消費が抑えられ、2型糖尿病の予防効果が期待できるとされており、運動により骨格筋量を増加(維持)させることは重要である。

有酸素運動には、ウォーキングやジョギング、エアロビクス、サイクリング、水泳など、があるが、手軽な運動としてはウォーキングが挙げられる。ウォーキングは場所を選ばず年齢を問わず若者から高齢者まで行える利点があり、市民参加のウォーキング大会など各地で開催されている。能勢¹⁷⁾らは効果的なウォーキング法として「インターバル速歩」を提案している。インターバル速歩とはVO₂maxの70%以上の早歩きと40%以下のゆっくり歩きを繰り返すというもので、週に60分以上実施すれば効果があるとされている。詳細な方法については文献を参照のこと。私たちが女子大生を被験者にして行った「スロージョギング」『1回あたり1時間、週3回の速歩(15,000歩/時程度)の負荷をかけ6週間継続』実験では3名のうち2名に有意のVO₂max増加を見ている¹⁸⁾。有酸素運動に適したウォーキングの効果を上げるためには、歩き方や靴にも注意を払う必要がある¹⁹⁾。

5. 貧血とスポーツ

『何をどのくらい食べたら必要量が取れるのかわかりづらい栄養素：鉄』

日本の貧血率はWHOの2019年の貧血調査によると平均で19%²⁰⁾といわれる。福島県の2011年の調査によると16～39歳の女性で貧血率は13.2%であった²¹⁾(WHOの基準であるHb値12.0 mg/dL未満で貧血者と判定)。本学附属高等学校の2015年の調査では同様の基準で貧血率は18%であった²²⁾。スポーツ選手においては貧血が競技力の低下をもたらすと懸念し、陸上選手に対して適切な検査をせずに、鉄剤を静脈注射している慣例が社会的な問題となった。これを受け、2019年に公益財団法人日本陸上競技連盟は『不適切な鉄剤注射の防止に関するガイドライン』²³⁾を策定した。鉄は食事で取る場合、不要であれば吸収されずに排せつされるが静脈で注射されると否応なく体内に取り込まれてしまう。過剰な鉄はフリーラジカルを発生し、肝臓を攻撃するため人体に悪影響を及ぼす恐れがある。鉄欠乏性貧血の第一選択薬は経口薬であり、静脈注射は限定的とした。そして、2019年の高等学校駅伝大会から選手全員に血液検査結果を提示することとし、不適切な静脈注射の根絶を計るとした。

体内の鉄は赤血球に70%含まれ²⁴⁾、全身に酸素を運搬する働きがある。そのためスポーツの世界では、血色素が高い方がパフォーマンスを高くすることが言われており、先述の事件を招くこととなった。この背景には、鉄がどのような食品に多く含まれていて、吸収を促進する栄養素は何なのか、どのくらいの食事を摂る必要があるのかの知識が乏しいことが要因に上げられる。小学校から三色食品群を基に、学校給食を6年間食べることで、日本の栄養教育は他の国に比類しない栄養教育の地盤がある。日本の栄養士人数は世界一を誇るため、学校や家庭、病院、地域のあらゆるところで栄養を学ぶ機会があることは誇らしい限りである。しかし、鉄についての教育は十分とは言えない現状がある。まず、ミネラルの教育は主に中学校の家庭科指導要領に規定されているが、限られた時間内であるため、限界がある。鉄の教育には何を(どの食品に鉄が含まれているか)どのくらい(摂るべき量)を食べたらいいのかを伝える必要がある。現在、鉄の摂取量を知る方法として、食物摂取頻度調査法がある。しかし、この調査は鉄以外の主要の栄養素を網羅的に測定するため回答項目が多く、その上、パソコンのアプリ上で集計して出力する必要がある、時間と費用を要する。そこで、教育用に簡便に回答し集計でき、自身の鉄摂取量を把握するツールとして、鉄摂取尺度票を作成した²⁵⁾。この質問票をもちいて、学生や一般市民に向けて教育を行っている。最近では小・中学校でも次世代の食の選択力の強化として、貧血予防の鉄摂取向上の取り組みを行っており、児童版の鉄摂取尺度を開発中である。

貧血予防の知識を得て貧血を予防し、安心した競技生活やスポーツをしない人でも不定愁訴がなく快適な生活が送れることを期待する。

6. 高校生アスリートにおける怪我と食行動との関連

高校生は成長期であり、心身ともに大きく成長し、成長が完成する最も重要な時期である。成人期のアスリートに比べ、高校生アスリートはエネルギー量及び栄養素の不足を起こしやすい状態にあると言われている。

相対的エネルギー不足は、様々な健康問題を誘発させ、怪我や競技パフォーマンス低下に繋がることが示唆されている²⁶⁾。健やかな体を保ち、健康的に競技を行うためには、日々、栄養素バランスのとれた食生活を送ることが必要不可欠となる。そのため、食生活において過不足なく栄養素を摂取することで怪我の予防や競技パフォーマンスの向上につながると考えられる。

私たちは、全国で活躍する運動部員が多く、そのほとんどが寮で生活しているG高校の男女の生徒を対象に怪我と食行動に関する調査を実施した。G高校の寮の食事状況については、管理栄養士によって栄養管理された食事を食べているが、バイキング形式のため食事を取り分ける量によっては栄養素バランスに偏りが生じる可能性があることや食べ物の好き嫌いが多いことが課題となっている。

先行研究より、栄養・食事について、高い意識を持ちバランスの良い摂取を心がければ、より強い怪我のないチーム作りに繋がっていくことが示唆されている²⁷⁾。そして、怪我と食行動との関連を把握し、高校生アスリートに怪我の予防につながる食生活のあり方を共有することで充実した競技生活を送るための一助とすることを目指した。

調査は、怪我と食行動に関する自記式質問紙調査に行った。対象者は、調査の協力を得られたG高校の寮で生活している男子236名、女子44名の合計280名で、有効回答率は100%だった。また、研究に先立ち郡山女子大学の倫理審査委員会の承認を受けて調査を実施した(2020-105：2020年9月28日)。

男女それぞれ、高校に入ってから怪我をしたことがある群(男子：113名、女子：28人)、高校に入ってから怪我をしていない群(男子：119名、女子：16名)の2群に分けて食行動に関連する項目(好き嫌いはあるか、嫌いな物も残さず食べるか、サプリメント、怪我と栄養摂取については関係あるか、怪我予防のためにはバランスのとれた食事は大切か)についてカイ二乗検定を行った。

女子では、高校に入ってから怪我の有無と嫌いな物も残さず食べるかについて、高校に入ってから怪我をしたことがある人の方が嫌いな物を残す人の割合が有意に多いことが認められた($P<0.05$)。その他の項目については、男女ともに有意差は認められなかった。

女性アスリートの三主徴は、1997年にアメリカスポーツ医学会によって発表された²⁸⁾。2007年に現在の項目に変更され、①利用可能エネルギー不足、②視床下部性無月経(運動性無月経)、③骨粗鬆症が三主徴とされている²⁹⁾。この三主徴の始まりは、相対的エネルギー不足だと考えられている。

本研究の結果から、女子では、怪我をしたことがある人は、嫌いな物を有意に残していたことから、十分に栄養素を摂取することができず、相対的なエネルギー不足に陥る可能性があり、このままこの食生活を続けていくと、三主徴等の症状が現れる可能性が高いと考えられる。そこで、嫌いな物は別の食べ物で栄養素を補うなど、バランス良く栄養素を摂取できるように栄養教育などを行う必要性があることが示唆された。

本調査の自由記述から、「栄養について詳しく知りたい」、「栄養教育を受けてみたい」、「プロテインの摂り方を知りたい」などの意見がみられたため、健康的に競技生活を送り、競技力に向上に貢献するために栄養教育を実施していきたい。

おわりに

郡山女子大学スポーツ栄養研究所新設にあたり、食物栄養学科・健康栄養学科の関係教員のこれまでの研究成果や興味あるスポーツ・栄養関係論文を総説的にまとめた。ここで報告した内容は、「健康運動指導士・公認スポーツ栄養士」、「余暇活動(運動・スポーツ)や労働活動と健康」、「貧血とスポーツ」、「有酸素運動としてのウォーキング」及び「高校生アスリートにおける怪我と食行動との関連」であり、これらはスポーツ栄養研究の一つの方向性を示していると考えられる。年少者から高齢者まで幅広い年齢層が研究の対象になる。

文献

- 1) 鈴木志保子：スポーツ栄養マネジメントの構築，栄養学雑誌，Vol.70(5)，275-282，2012.
- 2) 公益社団法人 日本栄養士会HP
<https://www.dietitian.or.jp/career/specialcertifications/sports/> (2023.08.20アクセス可)
- 3) 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団HP
<https://www.health-net.or.jp/shikaku/shidoushi/index.html> (2023.08.20アクセス可)
- 4) C.J. Caspersen, K.E. Powell, G.M. Christenson : Physical activity, exercise, and physical fitness : definitions and distinctions for health-related research. Public Health Rep, 100, pp126-131, 1985.
- 5) J.N. Morris, J.A. Heady, P.A. Raffle, C.G. Roberts, J.W. Parks : Coronary heart-disease and physical activity of work. Lancet, 262, pp1053-1057, 1953.
- 6) 厚生労働省：「健康づくりのための身体活動基準2013」及び「健康づくりのための身体活動指針(アクティビティガイド)」について。 <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002xple.html>
- 7) A. Holtermann, P. Schnohr, B.G. Nordestgaard, J.L. Marott : The physical activity paradox in cardiovascular disease and all-cause mortality : the contemporary Copenhagen General Population Study with 104 046 adults. Eur Heart J, 42, pp1499-1511, 2021.
- 8) L. Garcia, M. Pearce, A. Abbas, A. Mok, T. Strain, S. Ali, A. Crippa, P.C. Dempsey, R. Golubic, P. Kelly, Y. Laird, E. McNamara, S. Moore, T. Herick de Sa, A.D. Smith, K. Wijndaele, J. Woodcock, S. Brage : Non-occupational physical activity and risk of cardiovascular disease, cancer and mortality outcomes : a dose-response meta-analysis of large prospective studies. Br J Sports Med, 57, pp979-989, 2023.
- 9) P. Leino-Arjas, S. Solovieva, H. Riihimäki, J. Kirjonen, R. Telama : Leisure time physical activity and strenuousness of work as predictors of physical functioning : a 28 year follow up of a cohort of

- industrial employees. *Occup Environ Med*, 61, pp1032-1038, 2004.
- 10) A. Møller, S. Reventlow, Å.M. Hansen, L.L. Andersen, V. Siersma, R. Lund, K. Avlund, J.H. Andersen, O.S. Mortensen : Does physical exposure throughout working life influence chair-rise performance in midlife? A retrospective cohort study of associations between work and physical function in Denmark. *BMJ Open*, 5, e009873, 2015.
 - 11) M. Suwa, T. Imoto, A. Kida, M. Iwase, T. Nagami : Association of 7 types of physical fitness and occupational activity level in workers of car manufacturing industry. *J Phys Fit Sports Med*, 8, 367, 2019.
 - 12) 諏訪雅貴 : 労働と健康経営 ～最新の研究から見えること～. *Core Cond J*, 77, pp5, 2020.
 - 13) H. Shimamoto, M. Suwa, K. Mizuno : Relationships between Depression, Daily Physical Activity, Physical Fitness, and Daytime Sleepiness among Japanese University Students. *Int J Environ Res Public Health*, 18, 8036, 2021.
 - 14) A. Holtermann, N. Krause, A.J. van der Beek, L Straker : The physical activity paradox : six reasons why occupational physical activity (OPA) does not confer the cardiovascular health benefits that leisure time physical activity does. *Br J Sports Med*, 52, pp149-150, 2018.
 - 15) D.M. Hallman, B.M. Jørgensen, A. Holtermann : On the health paradox of occupational and leisure-time physical activity using objective measurements : Effects on autonomic imbalance. *PLoS One*, 12, e0177042, 2017.
 - 16) 金子依里香, 紺野信弘 : 女子大学生の最大酸素摂取量に影響をおよぼす形態・体力指標の検索について, 郡山女子大学紀要, 48, 153-159, 2012.
 - 17) 能勢博 : ウォーキングの科学, ブルーバックス, 第9刷(講談社, 東京), 2023.
 - 18) 金子依里香, 紺野信弘 : 女子大学生におけるスロージョギングの身体活動量と形態指標におよぼす影響, 郡山女子大学紀要, 52, 307-322, 2016.
 - 19) アシックス スポーツ工学研究所 : 究極の歩き方, 講談社現代新書, 第3刷(講談社, 東京), 2019.
 - 20) WHO. "Prevalence of anaemia in women of reproductive age."
[https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/prevalence-of-anaemia-in-women-of-reproductive-age-\(-\)2023.08.26](https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/prevalence-of-anaemia-in-women-of-reproductive-age-(-)2023.08.26)アクセス可)
 - 21) Kawasaki, Y., Hosoya, M., Yasumura, S., Ohira, T., Satoh, H., Suzuki, H., Sakai, A., Ohtsuru, A., Takahashi, A., Ozasa, K., Kobashi, G., Kamiya, K., Yamashita, S., Abe, M., Fukushima Health Management Survey, G. The basic data for residents aged 16 years or older who received a comprehensive health check examinations in 2011-2012 as a part of the Fukushima Health Management Survey after the great East Japan earthquake. *Fukushima J Med Sci*, 60, 159-169, 2014.
 - 22) 岡部聡子, 水野時子, 深谷純子, 柳沼和子, 本間杏菜, 吉田朱里, 佐藤圭 : 女子高校生における貧血の程度と女子卓球部の栄養教育の実際について, 郡山女子大学紀要, 55, 145-155, 2019.
 - 23) 公益財団法人日本陸上競技連盟, "不適切な鉄剤注射の防止に関するガイドライン."
https://www.jaaf.or.jp/files/upload/201905/%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%89%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%B3_%E3%83%91%E3%83%B3%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%882019.pdf
 (2023.08.26.アクセス可)
 - 24) 張秀郎 : 鉄代謝と貧血, 日本内科学会雑誌, 107, 1921-1926, 2018.
 - 25) 岡部聡子, 伊藤慎也, 高橋徹, 星千歳, 弓屋結, 本間杏菜, 根本絢香, 後藤あや : 若年女性を対象

- とした簡便な「鉄摂取尺度」の改訂および再現性の検討, 家政学雑誌, vol.72, 251-259, 2021.
- 26) Mountjoy M, Sundgot-Borgen J, Burke L, Carter S, Constantini N, Lebrun C, Meyer N, Sherman R, Steffen K, Budgett R, Ljungqvist A. The IOC consensus statement: Beyond the Female Athlete Triad—Relative Energy Deficiency in Sport (RED-S). *Br J Sports Med* 48:91-497, 2014.
- 27) 加藤恵子、小田良子、小濱絵美、大西潤：小・中学生男子サッカー選手の生活調査・栄養調査からみた栄養摂取の現状(1)－生活調査からみた現状－名古屋文理大学紀要 第14号, P25～31, 2014.
- 28) Otis CL, Drinkwater B, Johnson M, Loucks A, Wilmore J. : American College of Sports Medicine position stand. The Female Athlete Triad. *Med Sci Sports Exerc.* 29 (5), 1997.
- 29) Nattiv A, Loucks AB, Manore MM, Sanborn CF, Sundgot-Borgen J, Warren MP : American College of Sports Medicine. American College of Sports Medicine position stand. The female athlete triad. *Med. Sci. Sports Exerc.* 39, 1867-1882, 2007.

分析値を用いた学校給食の栄養摂取量把握の試み

～中学生一人ひとりのナトリウム摂取量に着目して～

An Attempt to Determine Nutrient Intake of School Lunches Using Analytical Values

～ Focusing on the sodium intake of each junior high school student ～

亀田 明 美

Akemi Kameta

菅野 美 穂

Miho Sugano

柳 沼 和 子

Kazuko Yaginuma

The purpose of this study was to analyze the nutritional composition of school lunches using physicochemical methods and to determine the relationship between the distribution of sodium intake and the weight of each dish consumed by each student based on its value.

The results showed that sodium (salt equivalent) intake from school lunches ranged from 566 mg (1.43 g) to 1812 mg (4.6 g), with the maximum value being 3.2 times the minimum value, indicating a large individual variation. Sodium intake was strongly correlated with total lunch weight ($R^2=0.845$) and with miso soup intake ($R^2=0.655$). It was suggested that in addition to the amount of food served, increases or decreases in the amount of miso soup, including second helpings and leftovers, had an effect on sodium intake.

はじめに

学校給食は、児童及び生徒の心身の健全な発達、食に関する正しい理解と適切な判断力を養う上で重要な役割を果たすものとされている。学校給食の栄養管理は、文部科学省より全国的な平均値として「学校給食摂取基準」が示されている¹⁾。この基準策定の根拠となった、児童生徒の栄養摂取状況調査から、食塩と脂質の摂取過剰、食物繊維の摂取不足など、生活習慣病に関連する栄養素に不適合の割合が高く、特に食塩は、給食以外の家庭の食事から1日の目標量を上回る量を摂取しており、給食の有無にかかわらず摂取過剰であることが指摘されている²⁾。これを受け、学校給食の栄養管理者には、家庭においても摂取量をできる限り抑制するよう、学校給食を活用し、望ましい摂取量について指導することが求められている³⁾。

学校給食は、個別に配膳される病院給食とは異なり、食缶に配食された料理を、給食当番が一人ひとりの器に盛り付けて提供される。盛り付け時の調整(量を増やしたり減らしたりする行為)や喫食中のおかわりにより、摂取量に個人差が生じる。学校給食の一人ひとりの摂取量

に関する先行研究はまだ少ない。小島らは小学生の給食の食べ残しと、体格、栄養摂取量には関連性があることを明らかにしている^{4,5)}。これらは研究者が事前に一定量を盛り付けており、盛り付け量の調整は考慮されていない。吉川らは、児童による盛り付け量とエネルギー摂取量について検討し、盛り付け量の差がエネルギー摂取量に大きな個人差を生じさせていること、学校給食が望ましい食事の見本としての役割を十分に果たしていないことを指摘している⁶⁾。

エネルギー摂取量は多くの栄養素量と正相関を示す^{7,8)}とされていることから、給食摂取量の差が、食塩摂取量の個人差に関連していることが推測される。一人ひとりの給食からの食塩摂取量は、料理ごとの摂取重量と100g当たりのナトリウム量を用いて算出できる。前述の先行研究では栄養摂取量の算出には計算値が用いられている。計算値は日本食品標準成分表(以下：成分表)を用いて計算される値であるが、より精度を高めるためには、加熱調理の影響を考慮して算出することが推奨されている⁹⁾。しかし、実際の学校給食の現場で、この方法を採用している施設はまだ半数以下であると報告されており¹⁰⁾、適切な栄養管理の観点から対策の検討が望まれている。一方、給食の栄養成分値を理化学的な成分分析(以下：分析値という)により評価した先行研究^{11,12,13)}からは、複雑な調理工程の影響を受けずに給食の栄養量を評価できる点において有効性が報告されている。こうした報告はあるものの、学校給食の一人ひとりの栄養摂取量を分析値によって評価した報告は管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、分析値を用いて一人ひとりの学校給食からのエネルギー及び栄養素(以下：栄養素等という)の摂取量を把握することを試みた。さらに、ナトリウム摂取量に着目し、過剰摂取が指摘されている食塩摂取量の個人差や、料理の摂取重量と食塩摂取量の関連性について明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 方 法

1. 給食施設と対象者

(1) 給食施設の概要

本研究における給食施設は、研究者が勤務する福島県N村学校給食センターとした。N村学校給食センターは、幼稚園1園、小学校5校、中学校3校に、計1日約1900食の給食を提供している。平成19年より食育推進検討委員会が設置され、給食センターを中心に学校給食を活用した食育が継続的に行われてきた。栄養教諭が2名配置されており、受配校と連携しながら給食指導や食に関する指導を行っている。

(2) 対象者

対象者は、受配校のA中学校の生徒31名(男子20名、女子11名)とした。31名は同一の食缶より給食当番が配膳し、生徒の自由意思により喫食前の量の増減や欠席者分のおかわりが行われている。

生徒の身長と体重のデータは、4月に実施した身体測定の数値を使用した。男女別に、学校保健統計調査の算出方法による肥満度¹⁴⁾を用い、-20%未満を痩身、-20%以上20%未満を普通、20%以上を肥満とし、体格の分布を求め身体的特性を把握した。

(3) 倫理的配慮

調査への参加は生徒の自由意思とした。生徒の体格のデータ及び摂取量調査の結果は、個人が特定できないようID番号にし、研究者が管理した。本調査については、N村学校給食センターの食育推進事業の一環として実施し、郡山女子大学ヒトを対象とする研究に関する倫理委員会に審査を依頼し、承認を得た。(課題番号2023-115)

2. 給食の栄養成分分析

調査日の献立は、雑穀入りご飯(以下：ごはん)、さわらの香味焼き(以下：さわら)、しょうがえ、玉ねぎのみそ汁(以下：みそ汁)、牛乳であった。各料理の栄養価は、計算値(栄養量/提供重量×100)及び分析値の100g当たりの栄養素等(エネルギー、たんぱく質、脂質、ナトリウム)の量を用いた。

分析用の試料は、調査施設において調理された各料理について、検査の採取方法に準じて200g程度採取した。分析は、株式会社江東微生物研究所食品分析センターに依頼し、試料の特性などを考慮し、近赤外線分光法及び化学分析法を組み合わせで行った。近赤外線分光法は、非破壊によって、迅速で簡便に成分を測定できる利点を持つ一方で、水分の多いものはエネルギーを過大に評価すること^{15,16)}が指摘されている。これを考慮し、みそ汁は化学分析を採用した。みそ汁以外の料理は近赤外線分光法で、エネルギー、タンパク質、脂質を、ナトリウムは、原子吸光度法で値を求めた。水分の多いみそ汁は日本食品標準成分表に準じた分析方法(以下;化学分析)で、エネルギー(計算法)、タンパク質(窒素定量換算法)、脂質(溶媒抽出一重量法)、ナトリウム(原子吸光度法)の値を用いた。本研究で着目したナトリウムの値は、どちらも原子吸光度法で分析した。

なお、牛乳は加熱調理を行わないことから分析を行わず計算値を採用することとした。

3. 摂取量調査

調査は2023年4月中の給食時に研究者らが調査校へ出向き実施した。事前に教職員に調査の趣旨や方法を説明し、調査が円滑に行えるよう協力を依頼した。

生徒には学級担任より、事前に調査方法と、普段通りの量を食べるよう説明した。給食当番には、各食器に料理を1種類のみ盛り付けよう指導した。配膳後に、盛り付け量の調整を各自の自由意思で行った。喫食前に食器に盛り付けられた料理を、それぞれ電子秤を用いて測定し重量を記録用紙に記入した。食事中のおかわりや、食べ残しがあった場合もそれぞれその重量を記録した。学級担任や研究者は盛り付け量について指導を行わず、生徒の自由意思で調整させた。



図1 盛り付け量の計量と記録用紙への記入の様子

4. 摂取重量と栄養素等摂取量

研究者は生徒が記入した記録用紙を回収後、料理ごとの値より食器の重量を引いて摂取重量とした。一人ひとりの栄養素等の摂取量は、各料理の摂取重量に分析値を乗じて、100で除して求めた。 $(\text{摂取重量} \times \text{分析値} / 100)$ 料理の摂取重量と栄養素等の摂取量の男女差について、マン・ホイットニのU検定を用いて検討した。さらに、料理の摂取重量とナトリウム量の分布も確認した。なお、食塩相当量は、計算式 $(\text{ナトリウム (mg)} \times 2.54 / 1000)$ より求めた。

5. 摂取重量とナトリウム摂取量の関係

料理の摂取重量を説明変数、ナトリウムの摂取量を目的変数として、単回帰分析を用いて、関連について検討した。

6. 集計及び解析

集計はMicrosoft Excelを、解析にはエクセル統計を使用し、有意水準は5%とした。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の身体的特性

対象者のうち、欠席者6名及び参加を希望しない生徒、調査に参加したが調査項目に記入漏れのあった者を除いた、22名(男子13名、女子9名)を分析対象者とした。

分析対象者の体格を表1に示す。対象者の体格では、男子は普通が85%、肥満は15%、女子は痩身11%、普通67%、肥満22%であった。

表1 分析対象者の体格

	男子 (n = 13)		女子 (n = 9)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
身長 (cm)	160	± 4.2	153	± 6.2
体重 (Kg)	54.1	± 15.9	49.1	± 13.3
肥満度 (%)	8.3	± 28.3	3.7	± 20.1
体格人 の() 分 % 布	瘦身	0 (0)	1 (11)	
	普通	11 (85)	6 (67)	
	肥満	2 (15)	2 (22)	

2. 給食の栄養成分

各料理の100g当たりの栄養成分を表2に示した。ナトリウム量の分析値は、ごはん、しょうがえ、みそ汁が計算値の87%～104%と概ね近い値であった。一方、さわらは172%と計算値を大きく上回っていた。

表2 各料理の計算値及び分析値・分析値の分析方法

料理名	エネルギー:E (kcal)		タンパク質:P (g)		脂質:F (g)		ナトリウム:Na (mg)		Na:分析値 /計算値 ×100 (%)	分析値の分析方法
	計算値	分析値	計算値	分析値	計算値	分析値	計算値	分析値		
雑穀入りごはん	162	138	2.7	2.8	0.4	0.2	1	1	100	E,P,F:近赤外線分光法
さわらの香味焼き	191	156	22.1	22.3	10.5	6.1	122	210	172	Na:原子吸光光度法
しょうがえ	19	27	2.5	3	0.2	0.5	345	360	104	
玉ねぎのみそ汁	28	39	1.8	2.7	0.8	1.7	206	180	87	E:計算法,P:窒素定量換算法、 F:溶媒抽出一重量法, Na:原子 吸光光度法
牛乳	61	-	3.3	-	3.8	-	41	-	-	八訂食品成分表の値

*牛乳は加熱調理しないことから食品成分表の値を示した。

3. 料理別摂取重量と栄養素等摂取量

生徒の記入した記録用紙を基に、料理別に摂取重量と栄養素等摂取量を算出した。その結果を表3に示す。摂取重量の男女別中央値は、ごはんは男子259g、女子198g、さわらは56g・53g、しょうがえは62g・73g、みそ汁は251g・252g、牛乳が206g・206gで、摂取重量の合計

(給食全量)は男子858g・女子787gであった。男子が女子に比べ、ごはんを多く摂取していた($p=0.021$)。また、給食全量も男子の方が、多く摂取していた($p=0.018$)。エネルギー摂取量の中央値は、男子760kcal・女子564kcalで、男子が女子に比べ多く摂取していた($p=0.008$)。たんぱく質の摂取量は男子42.4g・女子30.9gで、男子が女子に比べ多く摂取していた($p=0.012$)。これらには有意差が認められた。脂質とナトリウム(食塩相当量)も男子が女子に比べ多く摂取していたが、有意差はなかった。

4. ナトリウム(食塩相当量)摂取量の分布

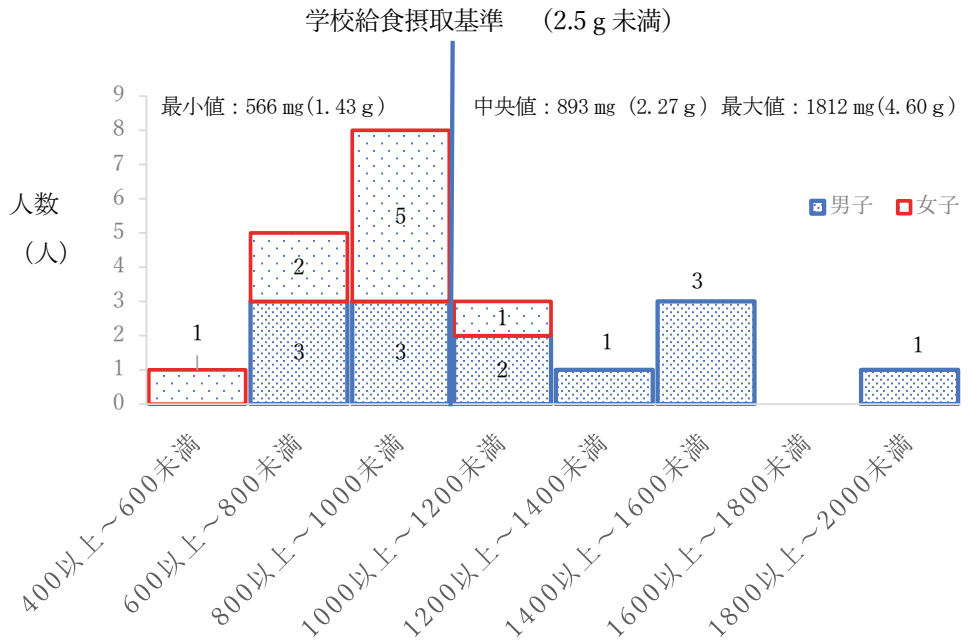
給食からのナトリウム摂取量の分布を図2に示した。ナトリウム(食塩相当量)の摂取量の分布は、最小値566mg (1.43g) 中央値は893mg (2.27g) 最大1812mg (4.60g) であった。最も分布が多かった区分は、800mg (2.03g) 以上から1000mg (2.54g) 未満であった。学校給食摂取基準の食塩相当量の目標量は2.5g未満で、目標とする範囲にとどまっている生徒は13名(59%)であった。目標量から逸脱する者のほとんどが男子であった。

5. 給食の摂取重量とナトリウム摂取量の関係

給食の摂取重量とナトリウムの摂取量の関係を図3に示した。給食全量の摂取重量とナトリウムの摂取量は $R^2=0.845$ で、給食全体の摂取重量が多くなるとナトリウム摂取量が増加する傾向が確認された。ごはん、しょうがあげ、みそ汁、牛乳の摂取重量とナトリウムの摂取量の間には有意な正の相関があった。(すべて $p<0.01$)。特にみそ汁は、 $R^2=0.655$ で他の料理に比べ相関が高かった。

表3 料理別摂取重量とエネルギー及び栄養素摂取量

項目	料理名	男子 (n=13)			女子 (n=9)			p
		平均	標準偏差	中央値	平均	標準偏差	中央値	
摂取量 (g)	雑穀入りご飯	299	± 118	259	213	± 42	198	0.021
	さわらの香味焼き	76	± 45	56	54	± 19	53	0.070
	しょうがあげ	71	± 49	62	81	± 23	73	0.548
	みそ汁	319	± 124	251	247	± 58	252	0.385
	牛乳	215	± 101	206	160	± 86	206	0.306
	合計	979	± 294	858	756	± 162	787	0.018
エネルギー (kcal)	雑穀入りご飯	420	± 157	360	282	± 53	266	
	さわらの香味焼き	124	± 70	87	75	± 16	80	
	しょうがあげ	21	± 14	18	20	± 4	19	
	みそ汁	125	± 48	100	95	± 22	98	
	牛乳	131	± 62	126	98	± 52	126	
	合計	822	± 256	760	570	± 96	564	0.008
たんぱく質 (g)	雑穀入りご飯	8.5	± 3.2	7.3	5.7	± 1.1	5.4	
	さわらの香味焼き	17.8	± 10.0	12.5	10.8	± 2.3	11.4	
	しょうがあげ	2.3	± 1.5	2.0	2.2	± 0.4	2.1	
	みそ汁	8.7	± 3.3	6.9	6.6	± 1.6	6.8	
	牛乳	7.1	± 3.3	6.8	5.3	± 2.8	6.8	
	合計	44.4	± 14.7	42.4	30.6	± 4.8	30.9	0.012
脂質 (g)	雑穀入りご飯	0.6	± 0.2	0.5	0.4	± 0.1	0.4	
	さわらの香味焼き	4.9	± 2.7	3.4	2.9	± 0.6	3.1	
	しょうがあげ	0.4	± 0.3	0.3	0.4	± 0.6	0.4	
	みそ汁	5.5	± 2.1	4.4	4.2	± 0.3	4.3	
	牛乳	8.2	± 3.8	7.8	6.1	± 0.4	7.8	
	合計	19.5	± 6.1	19.6	14.0	± 0.03	15.5	0.066
ナトリウム (mg)	雑穀入りご飯	3	± 1	3	2	± 0.4	2	
	さわらの香味焼き	167	± 94	118	101	± 21	107	
	しょうがあげ	276	± 186	238	263	± 3	256	
	みそ汁	577	± 222	463	440	± 2	450	
	牛乳	88	± 42	84	66	± 2	84	
	合計	1112	± 361	1065	872	± 0.2	893	0.243
食塩相当量 (g)	雑穀入りご飯	0.0	± 0.0	0.0	0.0	± 0.0	0.0	
	さわらの香味焼き	0.4	± 0.2	0.3	0.3	± 0.1	0.3	
	しょうがあげ	0.7	± 0.5	0.6	0.7	± 0.0	0.6	
	みそ汁	1.4	± 0.6	1.2	1.1	± 0.0	1.1	
	牛乳	0.2	± 0.1	0.2	0.2	± 0.0	0.2	
	合計	2.8	± 0.9	2.7	2.2	± 0.0	2.2	0.243



※()内は食塩相当量

図2 給食からのナトリウム摂取量の分布

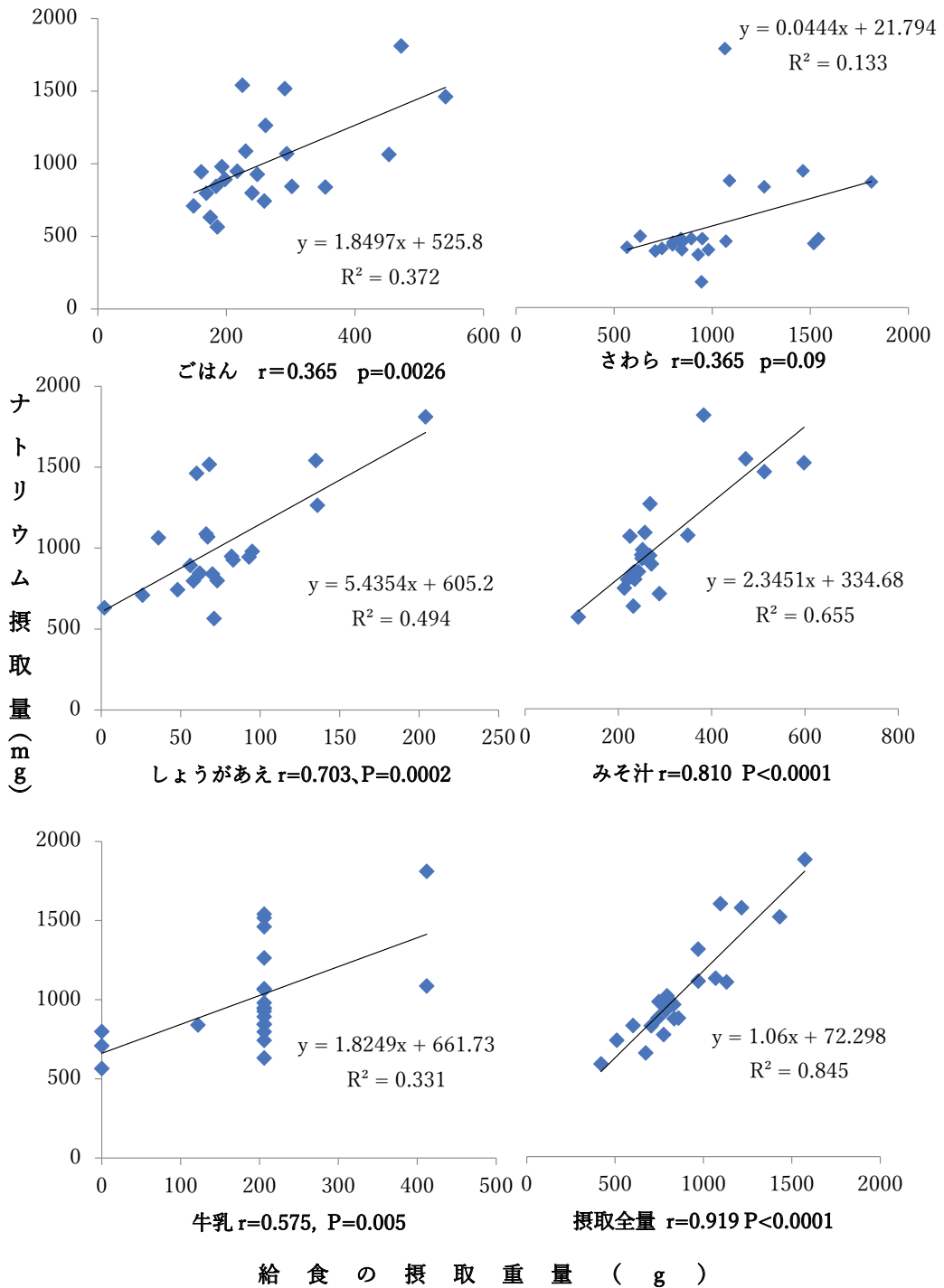


図3 給食の摂取重量とナトリウム摂取総量の関係

IV. 考 察

本研究では給食の栄養成分を、理化学的な方法で分析し、その値を用いて生徒一人ひとりの食塩摂取量について、分布や料理別の摂取重量との関連性について明らかにすることを目的とした。

一人ひとりの給食からの栄養摂取状況を把握するために、各料理の摂取重量とその料理の100g当たりの栄養価を求める必要がある。これまでの先行研究では計算値が採用されてきたが、本研究では、分析値を採用した。なお、分析値は近赤外線分光法と化学分析法を用いたが、本研究で着目したナトリウムの値は、どちらも原子吸光度法で分析されているため、結果の解釈には影響しないものと考えた。

今回の分析対象者の身体的特性は、肥満傾向者の出現率が全国の約10%と比較して高い割合であった。各料理の計算値及び分析値の結果では、さわらの香味焼きのナトリウムの分析値が計算値の172%と他の料理に比べ大きな差がみられた。食品成分表を基にした計算値は、食材の個体差や、調理工程における廃棄率、加熱による重量変化などの影響により値に誤差が生じることが推定される。適切な栄養管理の観点から、こうした誤差をできる限り少なくしていくことは重要である。野原らは、給食の栄養成分を計算値だけでなく、実際の調理現場で生産された料理の分析値と比較することが必要であると示しているが¹⁰⁾、本研究からもその必要性が確認された。

いずれにしても、一人ひとり栄養摂取状況を把握するためには、料理別の100g当たりの栄養価を求める必要がある。計算値の算出には、食材ごとの正味重量などのデータ収集を要するが、実際の調理現場では給食の生産と並行して行わなければならない。これに比べ分析値は労力が軽減できるうえ、計画段階と調理加工後の栄養価も比較できる。こうした点から、本研究に分析値を採用した意義は大きかったと考える。

生徒一人ひとりの摂取重量の分布には、ばらつきがみられた。料理別では、男子のごはんと給食全量が、女子に比べ有意に多かった。学校給食からのナトリウム(食塩相当量)の摂取量は、最小値566mg(1.43g)から最大1812mg(4.60g)の範囲で、最大値は最小値の3.2倍と個人差が大きかった。学校給食摂取基準が目標とする食塩相当量2.5g未満の範囲にとどまっている生徒は13名(59%)であったが、目標量から逸脱する者も確認でき、ほとんどが男子であった。給食から最も多くナトリウムを摂取していた生徒は、1日の目標量(男子7.0g)の66%を給食から摂取していることになる。給食の摂取重量とナトリウムの摂取量の関係には相関がみられ、給食全体の摂取重量が多くなるとナトリウム摂取量が増加する傾向が確認され、料理別ではみそ汁が他の料理に比べ高い相関がみられた。主食量とエネルギー摂取量の関係を検討した先行研究においても、児童の喫食前の主食の増減は、主食配食量とエネルギー摂取量に影響を及ぼすことを指摘している⁶⁾が、本研究においては、配食時の盛り付け量に加えおかわりや食べ残しも含め

たみそ汁量の増減は、ナトリウムの摂取量に影響を及ぼすことが示唆された。

児童生徒の食塩摂取状況においては、過剰摂取が指摘されており、学校給食を活用して摂取量をできる限り抑制することが求められている。しかし、本研究から給食の摂取量の多い一部の者にとっては、学校給食そのものが、食塩の過剰摂取を助長させてしまう可能性が示された。こうした結果を踏まえ、学校給食の栄養管理者は学校給食を活用して、一人ひとりがそれぞれの課題を解決できるような、指導内容を検討していく必要があると考える。

本研究の限界点として、分析対象者がN村給食センターの受配校である中学校1校に在籍する22名のみであり、他の調査に比べ分析対象者が少ないこと。調査を複数回行うことが難しく、1回のみの実施であったため、献立内容による偏りのある可能性が否定できないこと。

以上のような限界点があるが、分析値を用いて一人ひとりの給食からの栄養摂取状況を把握した点が本研究の長所であるとする。

本研究から得られた結果より、今後は以下の3点について検討したい。1点目は、定期的に分析値と計算値を比較し、計画通りに給食が生産されているかを検証したり、食材料の選定や調理工程の見直しをしたりすることで、学校給食の適切な栄養管理や品質管理を行うこと。2点目は、給食時間の児童生徒への配食について具体的な方針を検討し、教職員と共通理解を図りながら給食指導を行うこと。3点目は、本研究で得られた個々の栄養素等の摂取量を生徒にフィードバックすることで、自己の食事のとり方を振り返り、望ましい栄養摂取となるよう改善に向けた方策を自ら考え実践できるような指導内容を検討すること。以上3点について、今後も継続して研究を進めていく予定である。

本研究により、実際の学校給食の現場において、一人ひとりの栄養摂取状況を客観的な数値で把握し、そのデータを活用して個々の栄養改善につながるような実践的な指導が展開されることを期待している。

V. 結 論

本研究では給食の栄養成分を、理化学的な方法で分析し、その値を用いて生徒一人ひとりのナトリウム摂取量について分布や、料理別の摂取重量との関連性について明らかにすることを目的とした。

その結果、給食からのナトリウム(食塩相当量)摂取量は566mg(1.43g)～1812mg(4.60g)で最大値は最小値の3.2倍と個人差が大きかった。またナトリウム摂取量は給食全体の摂取重量との相関($R^2=0.845$)がみられ、料理別では、みそ汁の摂取量と強い相関($R^2=0.655$)がみられた。配食時の盛り付け量に加え、おかわりや食べ残しも含めたみそ汁量の増減は、ナトリウムの摂取量に影響を及ぼすことが示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきました、生徒の皆様、学級担任の先生方、学校給食センターの皆様
に心より感謝申し上げます。

- 1) 文部科学省：学校給食実施基準の一部改正について(通知)
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1407704.htm, (2023年9月25日)
- 2) 佐々木敏：食事摂取基準を用いた食生活改善に資するエビデンスの構築に関する研究，平成27年度
総括・分担研究報告書，<https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/25310>, (2023年9月25日)
- 3) 文部科学省：学校給食摂取基準の策定について(報告)，学校給食における児童生徒の食事摂取基準
策定に関する調査研究協力者会議(令和2年12月)
- 4) 小島唯・阿部彩音・安部景奈・赤松利恵：学校給食の食べ残しと児童の体格との関連，栄養学雑誌，
71(1)，37-43，2013
- 5) 小島唯・阿部彩音・安部景奈・赤松利恵：学校給食の食べ残しと児童の栄養摂取状況との関連，栄
養学雑誌，71(2)，86-93，2013
- 6) 吉川達哉・小林由依・中西朋子・樋口良子・鈴木志保子：小学校給食における主食の配食状況とエ
ネルギー摂取量の関係，神奈川県立保健福祉大学誌，16-1，25-35，2019
- 7) 田中平三監訳：食事調査のすべてー栄養疫学ー，284頁，第一出版(東京)，1996
- 8) 高山裕子：成人の食塩摂取の現状，聖霊女子短期大学紀要，39，76-86，2011
- 9) 香川明夫監修：八訂食品成分表2021，口絵12-17，女子栄養大学出版部，2021
- 10) 野原健吾・石田裕美：学校給食施設における栄養計算方法および調理によるビタミン類，ナトリウ
ムの損失考慮の実態，日本給食経営管理学会誌，16-1，35-43，2022
- 11) 綴順子・中島けい子：学校給食の食塩量の計算値と実測値，椋山女学園大学研究論集，第24号(第
1部)，1993
- 12) 名倉秀子・山崎芳江・栗崎純一・志村二三夫・橋本真・八巻公紀・尾崎健市・白砂正明・大村相
哲・松村千香・堀江寿美・中林富嗣・河西康太・岩下隆：学校給食における5献立の品質管理の検
討，日本食育学会誌，11-1，25-34，2017
- 13) 加藤チイ・吉田侑加・佐藤幸子・奈良一寛：給食の栄養量評価についてー近赤外分光法の有用性に
関する検討ー，実践女子大学 生活科学部紀要，57，1-7，2020
- 14) 文部科学省：学校保健統計調査～令和3年度(確定値)の結果の概要，
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa05/hoken/kekka/k_detail/1411711_00006.htm
(2023年9月25日)
- 15) 高田和子・別所京子・三浦克之・沢隆裕・小田桐英夫：近赤外分光法による料理のエネルギー評価，
日本栄養・食糧学会誌，62(2)，75-83，2009
- 16) 工藤美奈子・峯木真知子，近赤外線分光分析法によるコンビニエンスストア市販弁当の栄養価の評
価，東京家政大学研究紀要，57(2)，1-9，2017

2023年度幼稚園教育実習後のアンケート結果分析

～教育実習事前事後指導の内容の向上へむけて～

Analysis of the Results of the Questionnaire After the 2023 Kindergarten

Teaching Practice : Toward Improving the Content of Pre-ost

Guidance for Teaching Practice

佐々木 郁 子

Ikuko Sasaki

柳 沼 真美子

Mamiko Yaginuma

Kindergarten teaching practice is an opportunity for universities to commission outside institutions to learn the practical knowledge of kindergarten teachers. Learning at the university is formal knowledge, while learning in educational practice is tacit knowledge. Learning by going back and forth between formal knowledge and tacit knowledge is the pre-post educational training guidance. In this report, we obtained basic data for pre-service and post-service guidance at universities by understanding the current situation of kindergarten education practice.

1. はじめに

幼稚園教育実習は大学が外部機関(幼稚園等)へ委託して幼稚園教諭の持つ実践知を学ぶ機会である。西之園(1999)は、教育における実践知を形式知と暗黙知に分類している。形式知は「明示的な知であり、形式的論理的言語により伝達可能な知」であり、暗黙知は「特定の状況に関する個人的な知識であり、形式化したり他人に伝えたりすることが難しい知」である。

三橋ら(2020)は、形式知と暗黙知という言葉を用いて、保育者養成校の授業における学びは形式知の伝達であり、教育実習における学びは暗黙知の伝達であり、教育実習事後指導は暗黙知から形式知の学びであるとしている。したがって、教育実習事後指導では、教育実習では暗黙知をどのように学んでいるか把握し、それを形式知へつなげる必要がある。

教育実習における学びを調査した研究は様々にある。山田(2012)は、幼稚園教育実習で責任実習を行なった学生の実習後レポートから保育実践力について、具体的にどのようなことを学んでいるかを調査している。その結果、指導計画を作成する力として、活動設定の理由、教材研究、事前準備、導入時の工夫・説明、時間配分について学び、保育を展開する力として、援助について学ぶことができていたことが報告されている。

他にも、効果的な教育実習指導の内容と方法について検討した田中ら(2017)の研究や、教育

実習の現状を調査して課題を明らかにした杉山ら(2020)の研究、幼稚園教育実習の振り返りを通して学生の意識を調査した永野・香崎(2021)の研究がある。

2. 目的と方法

教育実習における学びを調査した研究は様々にあるが、いずれも研究論文の著者が所属する保育者養成校における教育実習の様子を把握しようとするものである(例えば、高橋ら, 2011; 松尾, 2018; 増井, 2018; 井上・町井, 2019; 藤井, 2020; 山本, 2022)。しかしながら、教育実習の現状や指導上の課題については、各大学の指導上の理念や方法、地域特性や学生の気質など、様々な要因により異なると考えられ、先行研究における調査結果は、他大学の教育実習指導における参考となるものの、そのままの形で適用することはできない。したがって、本研究においても筆者が所属する保育者養成校における教育実習の様子を把握する必要がある。そこで、教育実習では暗黙知をどのように学んでいるか把握し、それを形式知へつなげるために、幼稚園教育実習における学生の学びの現状、及び教育実習における学生の学びの特徴を把握することにより、筆者が所属する保育者養成校における事前事後指導の基礎資料を得ることを目的とする。

方法は、まず、幼稚園教育実習における学生の学びを把握するために、実習に関する基礎情報に関する質問と、実習に関する記述内容から構成される調査内容を検討する。

次に、調査結果をもとに、実習に関する基礎情報についてまとめる。また、実習に関する記述内容については、学生の記述データから共起ネットワークを生成して学生の学びの特徴に関する傾向を読み取り、その傾向に着目して、学生の記述内容を分析する。

3. 調査内容

小屋(2010)は、保育士養成課程の学生が参加する保育実習においてどのような内容をどの程度体験しているかを調査している。幼稚園教育実習における学習内容については、佐々木(2021)や真下・小林(2023)の研究がある。特に、佐々木(2021)は、幼稚園教育実習においてどのような内容を体験しているか、もっと練習しておきたかったこと、自分で準備したこと、どのような内容を大変であると感じたかを調査している。その結果、子ども達の前で実演することを想定した練習を促すこと、年齢に応じた絵本・紙芝居の選定、教育実習で読むことが想定される絵本の内容を理解したうえで、子ども達の前で実演することを想定した読み聞かせを促すこと、指導案や実習日誌を書くために、実際の映像や資料などを用いて「実習生としての気づき」を考える練習を授業で行なうこと、普段の授業から記述内容を見直す習慣を身につける必要があること、教育実習前の自発的な準備を促すために、学生に対してどのような準備ができるかを具体的に示すこと、教育実習中のストレスコーピングに関する事例を知らせることが

示唆されている。また、事後指導への示唆として、教育実習で体験していない内容については、事後指導などでフォローして、保育現場における実践へ向けて実習後も練習等を継続させる必要があることが示唆されている。本研究では、筆者が東京経営短期大学実習センター長の職にあった時に開発した教育実習振り返りシートを参考に調査項目を構成した(表1)。

表1. 調査内容

1	学籍番号	17	配属クラス
2	氏名	18	エプロン着用に関する指定
3	ゼミ担任の教員の氏名	19	エプロンを1日に何枚使用したか
4	実習園名	20	名札や三角巾の使用状況
5	実習期間	21	通勤着
6	実習で体験した主な活動	22	通勤手段
7	質問6「その他」を選択した場合の内容	23	通勤時間
8	部分実習実施の有無	24	給食の有無
9	配属クラス(何歳児か)	25	清算日について
10	指導案を書いたか	26	各配属クラスの実習日数
11	部分実習の内容(選択式)	27	実習園に関する自由記述
12	質問11「その他」を選択した場合の内容	28	子どもに教わったことについて記述
13	部分実習の回数	29	保育者に教わったこと、発見、気づき
14	部分実習の場面	30	自分自身の課題を記述
15	質問14「その他」を選択した場合の内容	31	成長したことや意識の変化について記述
16	責任実習実施の有無	32	今後実習を行なう後輩へのアドバイス

質問1から質問7は実習に関する基本情報、質問8から質問15は部分実習に関する内容、質問16及び質問17は責任実習に関する内容、質問18から質問26は実習に関係する他の内容、質問27から質問32は観点別に自由記述する内容である。

4. 結果

調査は筆者の勤務する幼稚園教諭養成校において、以下の要領で実施した。

調査対象：2年次に在籍し、教育実習を終えた学生93名

調査日時：2023年6月21日(水) 14:40～17:50

調査項目：表1に示す32項目

調査方法：Microsoft Formsを用いたWEB調査

本調査は授業科目「教育実習事前事後指導」において行なう実習の振り返りの一環として実施したものであり、学生には、本報告書に掲載すること、個人が特定できないように個人情報の取り扱いに配慮することを説明している。平均回答時間は57分18秒であった。そのため本報告では調査6以降の結果について述べる。

(1)実習で体験した主な活動(質問6、質問7)

実習で体験した主な活動について、表2に示す結果が得られた。「その他」を選択した学生は、その内容を回答する質問7において、行事への参加、保育参観、送迎バス乗車、プールの準備、遠足、運動会の練習、などを記述している。

表2. 実習で体験した主な活動 (N=93, 複数回答可, 括弧内は割合)

配膳	69 (74.2)	特別な配慮必要とする子の対応	59 (63.4)
食事補助	55 (59.1)	早番	17 (18.3)
午睡時の添い寝	24 (25.8)	遅番	7 (7.5)
絵本の修理	7 (7.5)	おもちゃなどの消毒	11 (11.8)
行事準備	58 (62.4)	部分実習	93 (100.0)
砂場起こし	8 (8.6)	責任実習	92 (98.9)
掃除	91 (97.8)	保護者とのかかわり	30 (32.3)
排泄補助	54 (58.1)	その他	20 (21.5)

(2)部分実習について(質問8から質問15まで)

部分実習は全員が行ない、配属クラスは、5歳児に配属された学生は59名(63.4%)、4歳児に配属された学生も55名(59.1%)、3歳児に配属された学生は22名(23.7%)であった。

また、指導案を書いた学生は93名中92名、書かなかった学生は1名であった。さらに、部分実習で体験した主な活動(質問11)の結果は、表3に示す通りである。「その他」を選択した学生(42名)は、その内容を回答する質問12において、スケッチブックシアター(17名、18.3%)、各種あそび(14名、47.3%)、朝の会(10名、10.8%)等と回答している。

表3. 部分実習で体験した主な活動 (N=93, 複数回答可, 括弧内は割合)

絵本	82 (88.2)	手遊び	69 (74.2)
紙芝居	20 (21.5)	エプロンシアター	1 (1.1)
ピアノ	59 (63.4)	ペープサート	20 (21.5)
ゲーム	31 (33.3)	パネルシアター	11 (11.8)
製作	28 (30.1)	その他	42 (45.2)

(3)責任実習について(質問16及び質問17)

93名中92名が責任実習を行ない、1名は行なわなかった。配属クラスは、5歳児に配属された学生は54名(58.1%)、4歳児に配属された学生は45名(48.4%)、3歳児に配属された学生は15名(16.2%)であった。

(4)実習に関するその他の内容について(質問18から質問26まで)

93名中80名(86.0%)がエプロンを着用し、キャラクターがついたエプロンが許可されていたのが68名(73.1%)、不許可が12名(12.9%)であった。また、13名(14.0%)がエプロンを着用しなかったと回答している。また、1日において使用したエプロンの枚数は、1枚が最も多く(76名、

81.7%)、次いで2枚(16名、17.2%)、3枚(1名、1.1%)であった。

名札について、自分で製作した名札を使用した学生は21名(22.6%)、園の名札を使用した学生は3名(3.2%)、その他の名札を使用した学生が64名(68.8%)であった。

三角巾を着用した学生は21名(22.6%)であり、キャラクターがついた三角巾が許可されていたのが16名(17.2%)、許可されていなかったのが5名(5.4%)であった。また、60名(64.5%)が三角巾を着用しなかったと回答している。

通勤着について、スーツが54名(58.1%)、ジャージが31名(33.3%)、普段着が12名(12.9%)であった。

通勤の手段について、自転車が17名(7.5%)、徒歩が38名(40.9%)、その他が56名(60.2%)、電車またはバスが1名(1.1%)であった。また、通勤時間については、92名(98.9%)が30分未満であり、残りの1名(1.1%)は、30分以上1時間未満と回答している。

給食があった学生は55名(59.1%)、お弁当を持参した学生は38名(40.9%)であり、白米のみ持参した学生はいなかった。給食費の清算日は、実習前が3名(3.2%)、実習初日が8名(8.6%)、実習最終日が25名(26.9%)、その他が19名(20.4%)であった。

配属されたクラスと実施した日数は、4歳児クラスへ10日間配属された学生が最も多く、次いで5歳児クラスへ10日間、5歳児クラスへ5日間、4歳児クラスへ5日間であった。

5. 自由記述の結果と考察

本章では、自由記述の結果に基づいて、教育実習における学生の学びの特徴について考察する。学生に記述してもらったのは、「実習園に関する自由記述」、「子どもに教わったこと」、「保育者に教わったこと、発見、気づき」、「自分自身の課題」、「成長したことや意識の変化」、「今後実習を行う後輩へのアドバイス」に関して、文字数に制限を設けずに記述してもらった。各内容について、全員分の記述データをまとめたファイルを用いて共起ネットワークを生成する。

共起ネットワークは、KH Coder(ver.3)で作成し、抽出語の最小出現数を30、最小文書数を10、Jaccard係数を0.2以上に設定して生成している。例えば、質問30の記述内容に対する共起ネットワークを図1に示す。ただし、

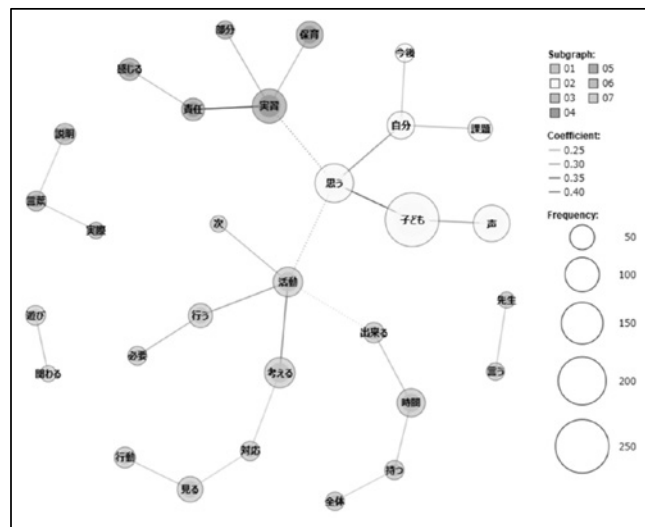


図1. 質問30の記述内容に対して生成された共起ネットワーク

共起ネットワークは、複数の抽出語が共に出現する関係性からテキストの全体像を把握するだけであることから、Jaccard係数をもとに関係の強い語どうしに着目して、学生の記述内容を分析する。

(1)実習園に関する自由記述(質問27)

質問27は、実習園に関する自由記述である。学生の記述内容をもとに共起ネットワークを生成した。Jaccard係数が特に大きい0.4以上の抽出語のペアは、「庭ー広い」、「給食ー美味しい」、「子どもー思う」、「理想ー保育」、「保育ー子ども」である(以下、同様にして抽出語のペアを考える)。抽出語のペアのうち、最初の語がクラスターの中心にある。共起ネットワークにおいて、これらの抽出語の組を含むクラスターも留意しながら、学生の記述内容を改めて読んで分析し、さらに代表的な文章として、「子どものして欲しいこと、求めることに応える保育をしていた」、「他クラスの子どもを保育者みんなで対応していて、保育者どうしの情報共有がきちんとされていた」、「理想の保育者ばかりで優しかった、就職したいと思った」を抽出した。

抽出した文章から、学生は、これまでの実習を通して、様々な園の保育・教育方針や特色を踏まえた活動を経験してきた。また、指導担当の保育者がもつ保育観や教育観に触れてきた。そういった体験を通して、学生は、自らの保育観や教育観を醸成してきたと考えられる。

さらに、今回の実習では、就職も視野に入れていることから、このような園で働きたい、こんな先生方と一緒に働きたい、といったように、自らが園で働く姿を具体的に想像することができていたのではないだろうか。

(2)子どもに教わったことについて記述(質問28)

質問28は、子どもに教わったことについての自由記述である。共起ネットワークを生成して得られた抽出語のペアは、「できるー子ども」、「保育ー気づく」、「声ー子ども」、「声ー聞く」、「先生ー実習」である。ここでも、抽出語のペアのうち、最初の語がクラスターの中心にある。共起ネットワークにおいて、これらの抽出語の組を含むクラスターも留意しながら、学生の記述内容を改めて読んで分析し、さらに代表的な文章として、「子どもたち同士のケンカにおいて、双方から話を丁寧に聞く事、その上で良くなかったところを整理して子どもの気持ちを受け止めつつ伝えることが大切だと気が付きました。子どもたち同士がもやもやした気持ちのまま終わらないよう、状況を整理してダメなところはダメと伝えて、きちんとその場で解決できるよう声掛けや関わりを行なう必要があると思いました」を抽出した。

抽出した文章は、学生が5歳児の喧嘩の仲裁に入った時のエピソードである。喧嘩の仲裁は、子どもの年齢や特性、さらにその時の状況によって保育者の子どもへの対応は様々である。かわり方を間違えてしまった場合、その後の子どもたちの人間関係にも影響することから、保育者の子どもへの対応は実習生自身も大切であることを実感していたことがわかる。学生は、まずは自分たちだけで解決できるように見守り、状況を客観的に把握していること、子どもた

ちが自分の気持ちをうまく言葉で表現できない場合は、お互いの言動を冷静に整理し伝えること、さらに、お互いの気持ちに共感し受容しながら、本当の気持ちを引き出そうとしている。最後に、子どもたちはお互い納得して自分から謝罪したとのことで、学生は、強制的に謝罪を促すのではなく、5歳児の発達段階を理解したうえで、子どもたちが納得できるような援助をしていた。このエピソードから大学の授業では学ぶことのできない暗黙知を学生が学んだことが伺える。

(3)保育者に教わったこと、発見、気づき(質問29)

質問29は、保育者に教わったこと、発見、気づきについての自由記述である。共起ネットワークを生成して得られた抽出語のペアは、「保育ー自分」、「大切ー学ぶ」、「子どもー伝える」である。ここでも、抽出語のペアのうち、最初の語がクラスターの中心にある。共起ネットワークにおいて、これらの抽出語の組を含むクラスターも留意しながら、学生の記述内容を改めて読んで分析し、さらに代表的な文章として、「ノリを使う製作のときにやりたくなくて手が止まっている子どもや、昼食のときに手が止まっている子どもがいたときに、どうしたいかを子どもに聞き、やりたくないときは「また今度やろう」と声をかけたり、苦手だから食べたくないときには、一口頑張ったら「頑張ったね」と声をかけて残してよいことを伝えたりしているところを見て、無理に他の子どもと一緒に動くように声をかけたり、全部食べるように声をかけたりするのではなく、子どもからどうしたいのか気持ちを聞き、無理に他の子どもと同じことをやらせないことが大切だと学びました。」を抽出した。

抽出した文章から、保育者が一人ひとりの子どもの実態を理解し、声をかけていることがわかる。目の前の子どもの特性を踏まえた言動から、子どもの気持ちを引き出す工夫をしたり、問いかけることで子どもに考えさせたりし、その子どもに適した必要な援助をしていることがわかる。学生は、困っている子どもに対して、保育者がどうするかを決めるのではなく、保育者は人的環境として、子どもが主体的に動けるような環境を整えることが大切であることを学んでいる。また、食物アレルギーや肌が敏感な子どもがいるため、保育者は特に対応に気を遣わなければならない、無理に他の子どもたちと同じことをすることが正しいことではなく、一人ひとりの特性を理解することが重要であることも学んでいることがわかる。

(4)自分自身の課題を記述(質問30)

質問30は、自分自身の課題についての自由記述である。共起ネットワークを生成して得られた抽出語のペアは、「実習ー責任」、「活動ー考える」、「自由ー遊ぶ」、「計画ー立てる」、「活動ー考える」、「臨機応変ー対応」である。ここでも、抽出語のペアのうち、最初の語がクラスターの中心にある。共起ネットワークにおいて、これらの抽出語の組を含むクラスターも留意しながら、学生の記述内容を改めて読んで分析し、さらに代表的な文章として、「一斉活動での子どもたちへの関わり方と、計画の立て方についてです。制作を行った際に子どもたちの進捗に

差が大きくあり、すぐにできてしまう子どもは飽きてしまい、時間がかかる子どもは満足できるまで制作に取り組むことができませんでした。そのため、一人ひとりの全て子どもが、満足して活動ができるよう考え、そのためにどのような子どもの姿があるか、しっかり予想をして計画を立てることが大切だと感じました。そのため、一斉活動を考える際には、どのような順番で行えば子どもたちが満足できるか、一人一人の子どもの違いを考えて計画を立てることが大切であり、活動を行うクラスのそれぞれの子どもの行動が予測できるよう、一人ひとりの子どもについて理解を深められるよう観察し、関わることを大切だと考えます。」を抽出した。

今回は責任実習ということで、学生は指導計画を立て実習に臨んでいる。主活動が製作の場合、事前に準備しておくことはないか、必要な材料はいつ、どのような形で子どもたちに配布するのか、ノリやハサミなどの道具はどのように準備するのか、道具に関する注意点はいつ、どのような言葉で説明するのか、ごみはどのように処理するのか等、細かい部分の計画が必要になる。また、その製作は、子どもたちが興味関心をもって主体的にできる内容なのか、子どもたちの発達段階によって工程をどのように工夫するのも考えなければならない。そのためには、子どもたちが普段どのような遊びをしているのか、特性や月齢による個人差はあるのか、園で製作を行っている頻度はどの程度かを理解しておく必要がある。集団を動かしながらも個別に援助が必要になる子どもがいることも十分想定し、計画を立てる必要があると考えられる。

(5)成長したことや意識の変化について記述(質問31)

質問31は、成長したことや意識の変化についての自由記述である。共起ネットワークを生成して得られた抽出語のペアは、「子ども一声」、「実習一前」、「実習一思う」、「責任一部分」、「自分一保育」である。ここでも、抽出語のペアのうち、最初の語がクラスターを中心にある。共起ネットワークにおいて、これらの抽出語の組を含むクラスターも留意しながら、学生の記述内容を改めて読んで分析し、さらに代表的な文章として、「飽きている姿があっても無理に続けたりしていたが、予定していた活動が子どもたちにとって思ったよりも難しくてできなくなったときや飽きてしまっていると判断できたときにルールを少し変更して活動を続けたり、違う活動に変更したり子どもたちの様子を見て臨機応変にたいおうすることが少しできるようになった。また、ろうかを走っていたりする子どもに対して「走らないよ」と伝えていたけど「歩こうね」や「ここは歩くとこだよ」と伝えたり、大きい声で話している子どもになにも言えていなかったけど「らいおんさんの声でみたいだからみんなお耳痛いかもね。優しい声だとみんな嬉しいね」などいろいろな場面で否定的ではなく肯定的な声掛けをできるようになった。」を抽出した。

学生は、これまでの実習により、すべて指導計画通りにいかないことを経験していると思われる。今回の実習では、子どもたちの表情や言動をよく観察し、計画通りにやりきることを目標とするのではなく、子どもたちにとって楽しく充実した活動になっているかを最優先し、臨

機応変に対応できたと考えられる。また、子どもたちに対する声かけについては、注意してその行為を強制的にやめさせるのではなく、子どもたちが自分の行為を客観的に捉えた上で考えられるように伝え、さらに具体的な提案をしていることがわかる。学生は、肯定的な声かけによって、子どもが自分で考え、主体的に行動に移せることを学んだと考えられる。

(6)今後実習を行なう後輩へのアドバイス(質問32)

質問32は、今後実習を行なう後輩へのアドバイスである。共起ネットワークを生成して得られた抽出語のペアは、「実習－子ども－保育」、「実習－責任」、「時間－メモ」、「日誌－書く」である。ここでも、抽出語のペアのうち、最初の語がクラスターの中心にある。共起ネットワークにおいて、これらの抽出語の組を含むクラスターも留意しながら、学生の記述内容を改めて読んで分析し、さらに代表的な文章として、「メモの取り方は日誌を書くことを踏まえると具体的に書きたくなってしまいがちだが、具体的に書くとしてもコンパクトにまとめてメモを取ることやメモを取ることあまり時間をかけないことが重要だと学んだ。その理由としてはメモを取っている間に子ども同士の会話を聞き逃してしまったり、子どもの動きを見落としてしまうことになるから気をつけた方がいい点だと思う。そして、実習ということもあり緊張や不安な気持ちでいっぱいだとは思いますが、とにかく失敗を恐れずに部分実習や責任実習では堂々と言うということに尽きると思う。」を抽出した。

抽出した文章から、日誌を書く上で、メモを取ることは必要だとしながらも、メモを取るタイミングやポイントを事前に十分理解しておくことが大切であることがわかる。メモを取ることよりも、積極的に子どもとかかわり、些細な表情や言動は視覚で記憶しておくことが必要であると考えられる。また、実習を経験していない後輩に対して、自分は実習生という立場であることを忘れず、間違いや失敗を怖がらずに、積極的に子どもたちとかかわるとよいことを伝えている。

6. 結論と今後の課題

前章で考察した学生の記述内容から、今回の実習を通して、学生が目前の子どもたちに適した指導計画を立て、実践することにより、これまでの学びがさらに深まったと思われる。特に、子どもたちや保育者とかかわる中で、自分自身の保育観や教育観を醸成し、保育者としての自覚や責任が生まれたことが多くの記述内容から伺い知ることができた。

今後は、本研究で得られた知見を、教育実習事前事後指導にどのように役立てることができるとのか検討し、実践することが課題である。

参考文献

- 1) 西之園晴夫：教育実践の研究方法としての教育工学，日本教育工学誌，23(2)，67-77，1999.
- 2) 三橋功一・木村美佐子・三島裕一・三上香澄：幼稚園教育実習の学びの省察に焦点をあてた短期大学幼稚園教育実習事後指導のプログラムの開発，函館短期大学紀要，47，7-83，2020.
- 3) 山田秀江：幼稚園教育実習における保育実践力の学びに関する一考察－責任実習の実践報告から－，四條畷学園短期大学紀要，45，51-61，2012.
- 4) 田中公一・坂喜美佳・鈴木純子・飯塚有紀・芳賀哲：効果的な教育実習指導の検討－教育実習Ⅱ事後アンケートと自己評価の分析を通して－，研究紀要青葉Seiyo，第9巻第2号，123-132，2017.
- 5) 杉山浩之・長澤希・牧亮太：教育実習Ⅲ(幼稚園，2019年度)の現状と課題～実習生のアンケート調査から～，広島文教大学教職センター年報，8，41-47，2020.
- 6) 永野典詞・香崎智郁代：幼稚園教育実習における学生の学びに関する意識調査，心理・教育・福祉研究，第21巻第1号，1-12，2021.
- 7) 高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美：幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について－「教材研究」「子どもの気持ちの読み取り」「満足度」の観点から－，東京家政大学研究紀要，第51集(1)，7-13，2011.
- 8) 松尾智則：幼稚園教育実習に関する意識調査2016，中村学園大学・中村学園大学短期大学部紀要，50，39-46，2018.
- 9) 増井啓子：アンケートから見える教育実習指導の学びと課題－実習事前指導・実習・事後指導を通して－，奈良佐保短期大学研究紀要，特別，87-101，2018.
- 10) 井上清子・町井富子：幼稚園教育実習のストレスとストレスコーピングについて，文教大学教育学部紀要，52(別集)，25-33，2019.
- 11) 藤井美津子：保育者の専門性を育てる実習指導へ向けて－実習事前事後指導の在り方を探る－，滋賀文教短期大学紀要，22，1-16，2020.
- 12) 山本房子：幼稚園教育実習日誌の実際，中国学園紀要，21，11-20，2022.
- 13) 小屋美香：保育実習中の学生の乳児保育体験に関する研究，育英短期大学研究紀要，27，33-44，2010.
- 14) 佐々木郁子：教育実習における学生の幼児教育体験を基にした事前事後指導内容の検討，東京経営短期大学，29，55-66，2021.
- 15) 真下知子・小林君江：幼稚園教育実習における学習内容の検討－実習園との連携に向けて－，京都文教短期大学研究紀要，61，137-145，2023.

「チーム発想法概論」の授業実践における マインドマップ導入効果の評価

Evaluation of the introduction of mind maps in the “Introduction to team thinking method” class.

山口 猛[※]

Takeshi Yamaguchi

In 2022, there was a tendency for students to have a low understanding of illustrating and describing cause-and-effect relationships in the KJ method in “Introduction to team thinking” a subject that teaches methods for solving problems in teams. In 2023, we will report on the effects of improving the method of introducing mind maps in order to solve this problem.

1. はじめに

地域創成学科では、チームで課題解決を行うための手法を学ぶ科目「チーム発想法概論」を開講した。授業目的である、チームでアイデアを創出しまとめる力を身につけるための手段として、マインドマップは有効であると考えている。マインドマップは、自己調整スキルを育てるためにも、グループによる学びの可視化が必要であり¹、アクティブラーニングの評価にループリックの導入例²もある。マインドマップを用いることで思考プロセスが明らかとなり、パフォーマンス評価に使用されることが妥当とされる傾向が強い³。

筆者の2022年度の研究では、学修過程が見えにくい問題の解決手法に、KJ法B型を元にしたテキストマイニングにより、チームの学修過程の可視化と共有の将来性を実感することができた⁴。しかし、ループリック自己評価によると、KJ法における因果関係の図解化と叙述化の理解が低い傾向が確認され、授業改善の課題が残った。ブレインストーミングの結果を構造化する手段となりうるものがKJ法であるが⁵、ブレインストーミングで秩序なく発散されたアイデアを改めて構造化することは、学生にとっては難しいようである。マインドマップとループリックを用いた学修評価の研究⁶では、マインドマップが学修者の思考実態の可視化に役立つことが明らかになっている。また、ループリック自己評価の妥当性検証の証拠としてマインドマップ⁷が有効であることも知られている。よって、マインドマップの効果的な導入による、授業改善を図ることを目指した。本稿では、2022年度と比較して、2023年度の授業でマインド

※ 地域創成学科

マップの授業回数を増やした効果を報告する。

2. チーム発想法概論の授業内容

2. 1 マインドマップの実施回数を増やした経緯

報告対象の授業は、2023年度地域創成学科Ⅲ期開講の「チーム発想法概論」である。履修者は34名であった。授業形式は履修者をランダムに8つのチームに分割したグループワークを前提としたアクティブラーニングで実施した。テーマは「スマートフォンの次に来るデバイスを企画する」としたことや、最終プレゼンテーションなどの基本構成は2022年度と変わらないが、授業の一部見直しを行なった。授業の流れを表1に示す。網掛けで示した7回目と8回目が、2022年度からの変更箇所である。

2022年度の授業実践の結果、KJ法B型は因果関係の図解化と叙述化が困難で、作業に時間を要することが明らかとなった⁴。2022年度の7回目と8回目の授業では、マインドマップの実施後にPDCAの考えと、課題整理手法であるマンダラートの紹介を行っていたが、発想法に直接的な関わりがないことを考えて削除した。代わりに、KJ法B型までの達成度確認や、課題を明らかにすることを目的として、7回目に中間発表を設けた。8回目にマインドマップの手法解説を1回分追加した。マインドマップを用いた因果関係の図解化には苦手意識はないことがわかっていた⁴。よって、KJ法B型で対応が不足していた因果関係の整理について、マインドマップによる解決を図った。また、授業のグループワークにおけるマインドマップの活用はメンバー間の理解や解釈の共通認識に有効⁸であるため、グループワーク自体の促進も期待した。

表1：チーム発想法概論 授業の流れ

回	項目	授業内容
1	ガイダンス・チーム編成	授業内容を解説するとともに、授業の最も重要なチーム編成を決定する。
2	アイスブレイク	チーム編成直後は、お互いを知らないために、チームワークを発揮することが難しい。そこで、さまざまな方法でチームメンバー間の信頼や緊張感緩和を促すアイスブレイクが有効である。授業では、いくつかのアイスブレイク方法の解説と、実践を行う。
3	ブレインストーミングの理解・実践	アレックス・F・オズボーン氏が考案したチーム発想法「ブレインストーミング」を学ぶ。ブレインストーミングのルールを学んだ後、チームで実践を行う。以降の授業で実践するチーム実践は、共通テーマの課題解決を想定し、行っていく。テーマは授業内で説明する。
4	ブレインストーミングの実践・まとめ	前回の授業から継続し、ブレインストーミングの実践を行う。また、実践後には、ブレインストーミング手法のメリット・デメリットを理解するための、まとめ作業を行う。
5	KJ法の理解・実践	川喜多二郎(かわきた じろう)氏が考案した情報をまとめる手法「KJ法」を学ぶ。KJ法のルールを学んだ後、チームで実践を行う。KJ法には、前回の授業までに実施したブレインストーミング実践結果を用いる。

6	KJ法の実践・まとめ	前回の授業から継続し、KJ法の実践を行う。また、実践後には、KJ法のメリット・デメリットを理解するための、まとめ作業を行う。
7	中間発表	KJ法までの途中成果について、進捗報告を行う。
8	マインドマップの理解	トニー・ブザン氏が考案した思考手法「マインドマップ」を理解し、例題を用いてマインドマップのルールを学ぶ。
9	マインドマップの実践・まとめ	前回の授業までに実施したブレインストーミングおよびKJ法の実践結果を用いる。
10	マインドマップのまとめ	前回の授業から継続し、マインドマップの実践を行う。また、実践後には、マインドマップのメリット・デメリットを理解するための、まとめ作業を行う。
11	プレゼンテーション準備	ブレインストーミング、KJ法、マインドマップ、マンダラートの実践結果を踏まえて、チームで議論した結果を、プレゼンテーションするための、準備を行う。
12	プレゼンテーション準備(続き)	前回の授業から継続し、プレゼンテーション準備を行う。
13	プレゼンテーション実施	プレゼンテーションを実施する。プレゼンテーション実施チームは、全体の半分とし、残りは、次の発表とする。プレゼンテーションを行わないチームは、評価者として、プレゼンテーション内容の採点を行う。
14	プレゼンテーション実施(続き)	前回の授業から継続し、実施する。
15	総合まとめ	授業内で学んだチーム発想法を振り返る。

2. 2 授業の様子と成果物の紹介

今回は8つのチームで活動を行なったが、そのうちの1チームの様子と成果物を紹介する。前述の通り、チームメンバーはランダムで決定されるため、必ずしも普段から話した学生同士ではない。アイスブレイク後の3回目と4回目の授業では、付箋へのアイデア出しを行なった(図1)。5回目と6回目の授業では、ブレインストーミングの成果を引き継ぎ、KJ法A型(図2)に因果関係の図解化を行なった後、KJ法B型(図3)として叙述化の作業を行なった。7回目にはKJ法に基づいた中間発表を行なった。荒削りの状態ではあるが、教室全体で初めて他チームのアイデアや進捗が共有された。構造化が十分に対応できなかったKJ法の成果について、マインドマップによる整理とまとめの作業を行なった(図5)。マインドマップの結果を基にして、最終プレゼンテーションを行なった(図6)。

各発想法の実施後には振り返りシートを用いた自己評価を行なった。ブレインストーミング自己評価では、自分と他者のアイデアの肯定や、安心した意見出しができた(図7)。KJ法自己評価では、アイデアの構造化や叙述化に苦勞し、思うようにチームのアイデアがまとめられなかった(図8)。マインドマップ自己評価では、KJ法に比べると意見のまとめができるようになったとの感想が見られた(図9)。

15回目には、授業全体を通したルーブリック自己評価を実施した(図10)。自己評価の2022年度と2023年度の比較は、次節で触れる。



図1：ブレインストーミング

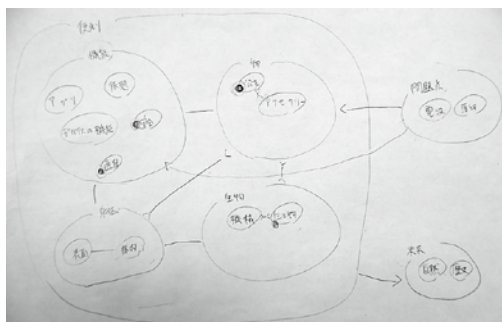


図2：KJ法A型

問題は、2つの観点から考える。
 1つ目が観望。これを解決するために、自分専用の回線を可視化・使用し、プライバシーを保護し、自分から他の
 人々へ情報を伝える。建物自体をWi-Fiにして、通信の効率を上げる。公共の空間にもWi-Fiで通信情報を伝える。
 2つ目が観望。これを解決するために、デバイスの活用として、シェアする。共有のデバイス、パーソナルデバイス。
 アドバイザーとして身に付ける。手元にチェックを兼ねたデバイスとして、自分自身をデバイスにする。
 これらを解決するために、デバイスが活用し、歴史の遺産として、建物自体に活用される。

図3：KJ法B型



図4：中間発表



図5：マインドマップ



図6：プレゼンテーション

チーム発表記録 2023/4/18 配布

1. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

2. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

3. プレインストーリーのアイデアに対する自己評価をしてください。
※「できた・どちらでもない・できなかった」のいずれかに○をつけましょう

アイデア	できた	どちらでもない	できなかった
1. 自然と人間	○		
2. 自然と人間		○	
3. 自然と人間			○
4. 自然と人間	○		
5. 自然と人間	○		
6. 自然と人間	○		
7. 自然と人間	○		

4. プレインストーリーのアイデアを自由に書いてください。

アイデア1: 自然と人間
アイデア2: 自然と人間
アイデア3: 自然と人間
アイデア4: 自然と人間
アイデア5: 自然と人間
アイデア6: 自然と人間
アイデア7: 自然と人間
アイデア8: 自然と人間
アイデア9: 自然と人間
アイデア10: 自然と人間

図7：ブレインストーミングの振り返り自己評価の例

チーム発表記録 2023/5/25 配布

1. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

2. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

3. プレインストーリーのアイデアに対する自己評価をしてください。
※「できた・どちらでもない・できなかった」のいずれかに○をつけましょう

アイデア	できた	どちらでもない	できなかった
1. 自然と人間	○		
2. 自然と人間		○	
3. 自然と人間			○
4. 自然と人間	○		
5. 自然と人間	○		
6. 自然と人間	○		
7. 自然と人間	○		

4. プレインストーリーのアイデアを自由に書いてください。

アイデア1: 自然と人間
アイデア2: 自然と人間
アイデア3: 自然と人間
アイデア4: 自然と人間
アイデア5: 自然と人間
アイデア6: 自然と人間
アイデア7: 自然と人間
アイデア8: 自然と人間
アイデア9: 自然と人間
アイデア10: 自然と人間

図8：KJ法の振り返り 自己評価の例

チーム発表記録 2023/7/6 配布

1. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

2. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

3. マインドマップのアイデアに対する自己評価をしてください。
※「できた・どちらでもない・できなかった」のいずれかに○をつけましょう

アイデア	できた	どちらでもない	できなかった
1. 自然と人間	○		
2. 自然と人間		○	
3. 自然と人間			○
4. 自然と人間	○		
5. 自然と人間	○		
6. 自然と人間	○		
7. 自然と人間	○		

4. マインドマップのアイデアを自由に書いてください。

アイデア1: 自然と人間
アイデア2: 自然と人間
アイデア3: 自然と人間
アイデア4: 自然と人間
アイデア5: 自然と人間
アイデア6: 自然と人間
アイデア7: 自然と人間
アイデア8: 自然と人間
アイデア9: 自然と人間
アイデア10: 自然と人間

図9：マインドマップの振り返り自己評価の例

チーム発表記録 2023/7/6 配布

1. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

2. 自分が出したアイデアの中で思いと想う上返す事を書いてください。

アイデア1: 自然と人間	アイデア2: 自然と人間	アイデア3: 自然と人間
--------------	--------------	--------------

3. マインドマップのアイデアに対する自己評価をしてください。
※「できた・どちらでもない・できなかった」のいずれかに○をつけましょう

アイデア	できた	どちらでもない	できなかった
1. 自然と人間	○		
2. 自然と人間		○	
3. 自然と人間			○
4. 自然と人間	○		
5. 自然と人間	○		
6. 自然と人間	○		
7. 自然と人間	○		

4. マインドマップのアイデアを自由に書いてください。

アイデア1: 自然と人間
アイデア2: 自然と人間
アイデア3: 自然と人間
アイデア4: 自然と人間
アイデア5: 自然と人間
アイデア6: 自然と人間
アイデア7: 自然と人間
アイデア8: 自然と人間
アイデア9: 自然と人間
アイデア10: 自然と人間

図10：授業全体のルーブリック自己評価

3. マインドマップ導入効果の確認

3. 1 ルール点数とループリック点数の比較

ルール点数とは、振り返りシートを用いて、各チーム発想法のルールに対して「3：できた、2：どちらでもない、1：できなかった」を自己評価したもの(図7、図8、図9)である。ループリック点数とは、ループリックを用いて「3：授業を超えた学修成果がある、2：授業目標に達している、1：授業目標に一部未達成である、0：学修努力がみられない」を自己評価したもの(図10)である。振り返りシート及びループリックは、2022年度と2023年度で同じものを用いた。

ブレインストーミング法(図11)及びKJ法(図12)は、わずかではあるが、2022年度に比べて2023年度が、全体的に評価ポイントが低い結果となった。授業実施者の立場として授業の様子を見ていても、苦労している様子を見る機会が多かったように感じる。マインドマップ(図13)は、「メインブランチごとに色は変える」の項目が0.95ポイント向上し、明らかな改善があった。マインドマップでは、色のルールは創造力の刺激に重要である^{9,10}。KJ法までのアイデアや関連性の整理や新たな発想が促されたと期待できる。

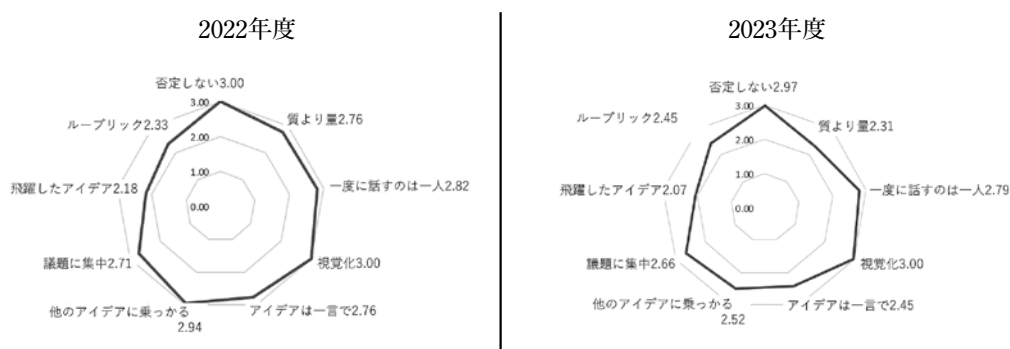


図11：ルールとループリックの全体平均(ブレインストーミング法)の年度比較

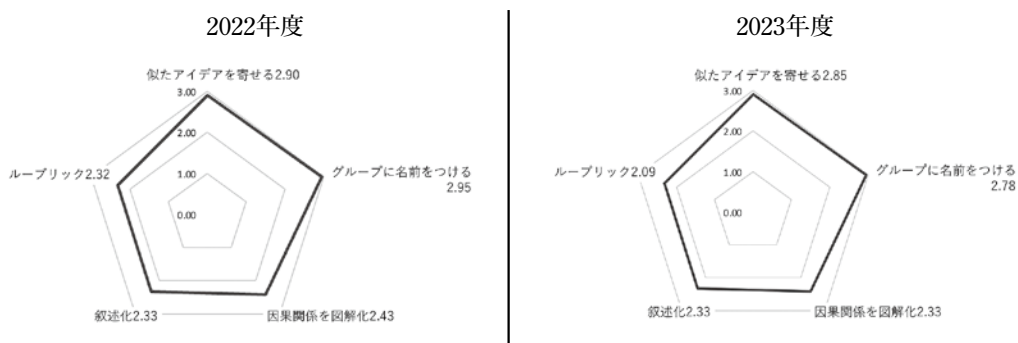


図12：ルールとループリックの全体平均(KJ法)の年度比較

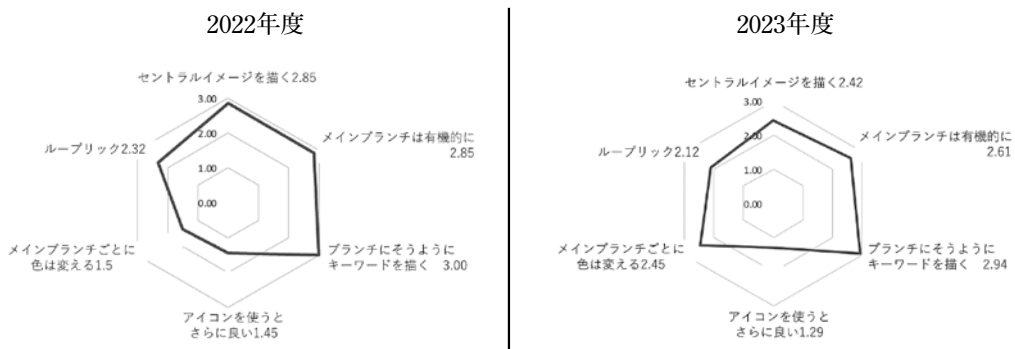


図13：ルールとルーブリックの全体平均(マインドマップ)の年度比較

3. 2 マインドマップのブランチ数比較

マインドマップのブランチ数の計測が、学修成果の計測に役立つことがわかっている⁴。そこで、実際に各チームで作成したマインドマップには差がないか確認を行った。最終的なチームの提案方針を表す「ビジョン」のメインブランチ配下のブランチ数を比較した。結果を表2に示す。最大ブランチ数は2023年度が上回ったものの、平均ブランチ数と最小ブランチ数では、2023年度が下回る結果となった。

表2：「ビジョン」のメインブランチ配下のブランチ数の年度比較

年度	平均ブランチ数	最大ブランチ数	最小ブランチ数
2022	37.2	50	29
2023	32.8	53	17

4. おわりに・今後の展望

マインドマップの導入拡大がチーム発想を促すことを期待し、年度比較を行った結果を報告した。マインドマップに限った自己評価は高かったものの、チーム発想の成果物である「ビジョン」のメインブランチ配下の平均ブランチ数が減少したことは、アイデア減少や構造化不足が懸念され、原因究明が課題となった。授業実践後のグループワーク研究の調査で、グループワークの最適人数は5人であり、4名以下の場合は協調性の影響が強く現れることが判明した¹¹。授業実践におけるグループ人数を振り返ると、2022年度は「4名以下が3チーム、5名が1チーム、6名が1チーム」であった。また、2023年度は「4名以下が6チーム、5名が2チーム」であった。チームによって人数にばらつきが生じた主な原因は、授業途中の履修放棄が原因である。4名以下の割合が高い2023年度は、2022年度よりも協調性の問題が悪い方向に現れた可能性もある。2024年度以降のチーム人数は5名を基本として、グループワークの環境を整えたい。

グループ学習においてブレインストーミングを複数回実施することの提案例¹²もあることや、

ブレインストーミング自体にマインドマップ活用が効果的である¹³ことを踏まえ、マインドマップの効果的な導入手法の検討を継続していく。

研究データの扱いについて

郡山女子大学・郡山女子大学短期大学部における人を対象とする研究に関する倫理委員会の審査を受け、2023年7月18日に承認を得た。課題番号2023-103。また、履修者より成果物の研究データの利用と公開について、2023年7月27日に承諾を得た。

参考文献

- ¹ LB ニルソン：学生を自己調整学習者に育てる アクティブラーニングのその先へ，pp.60-61，北大路書房，2017
- ² 田中博之：実践事例でわかる！アクティブ・ラーニングの学習評価，p.74，学陽書房，2017
- ³ 松下佳代：パフォーマンス評価 ―子どもの思考と表現を評価する―，p.18，株式会社日本標準，2007
- ⁴ 山口猛：「チーム発想法概論」の授業実践における学修過程の可視化と共有～マインドマップとテキストマイニングの使用から～，pp.285-294，郡山女子大学紀要第59集，2023
- ⁵ 川喜田二郎：発想法 創造性開発のために 改版，p.62，中公新書，2017
- ⁶ 山口猛：マインドマップとループリックの組合せによる学修過程評価，pp.93-105，郡山女子大学紀要第58集，2022.
- ⁷ ダネル スティーブンス・アントニア レビ：大学教員のためのループリック評価入門，p.84，玉川大学出版部，2014
- ⁸ 関田一彦・山崎めぐみ・上田誠司：授業に生かすマインドマップ アクティブラーニングを深める パワフルツール，p.22，ナカニシヤ出版，2016
- ⁹ トニー プザン：マインドマップ超入門，p.42，株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン，2014
- ¹⁰ 4と同じ，p.73.
- ¹¹ 藤野秀則ら：大学生のグループワークにおけるグループの人数と参加者の性格特性が意見発出への抵抗感に与える影響，pp.51-62，ヒューマンインタフェース学会論文誌 Vol.22，2020
- ¹² 新井和広・坂倉杏介：グループ学習入門 学び合う場づくりの技法，p.57，慶應義塾大学出版株式会社，2013
- ¹³ 塚原美樹：マインドマップ戦略入門 視覚で身につける35のフレームワーク，p.200，ダイヤモンド社，2009

執筆者一覧

知	野	愛	郡山女子大学短期大学部教授	(家族関係学・女性史)
安	部	高 太 朗	郡山女子大学短期大学部講師	(教 育 学)
吉	田	直 哉	大阪公立大学大学院人間社会システム科学研究科准教授	(教 育 学)
折	笠	国 康	郡山女子大学短期大学部教授	(教 育 心 理 学)
佐	々 木	郁 子	郡山女子大学短期大学部講師	(幼 児 教 育 学)
横	溝	聡 子	郡山女子大学短期大学部教授	(音楽教育・ピアノ)
宇	治	和 子	郡山女子大学短期大学部准教授	(臨 床 心 理 学)
深	谷	悠 里 絵	郡山女子大学短期大学部講師	(音楽教育・ピアノ)
會	田	瑞 樹	郡山女子大学短期大学部非常勤講師	(打 楽 器 ・ 音 楽 史)
松	田	理 香	郡山女子大学短期大学部准教授	(基 礎 デ ザ イ ン)
武	地	誠 一	郡山女子大学家政学部非常勤講師	(食 品 学、土 壤 学)
金	子	依 里 香	郡山女子大学短期大学部准教授	(生 理 学)
郡	司	尚 子	郡山女子大学家政学部准教授	(食 品 学)
影	山	志 保	郡山女子大学家政学部准教授	(環境学、食品衛生学)
安	田	純 子	郡山女子大学家政学部教授	(英語教育・家政学)
大	泉	由 美	郡山女子大学家政学部助教	(生 活 経 営 学)
坂	倉	剛	郡山女子大学附属高校常勤講師	()
會	田	容 弘	郡山女子大学短期大学部教授	(考古学・博物館学)
桑	野	聡	郡山女子大学短期大学部教授	(西 洋 史)
和	知	剛	郡山女子大学短期大学部講師	(図 書 館 情 報 学)
源	川	博 久	郡山女子大学短期大学部教授	(生化学・栄養化学)
紺	野	信 弘	郡山女子大学家政学部教授	(健 康 生 活 論)
岡	部	聡 子	郡山女子大学家政学部教授	(栄 養 学)
水	野	時 子	郡山女子大学家政学部教授	(栄 養 学)
諏	訪	雅 貴	郡山女子大学家政学部准教授	(運動生理学・運動疫学)
伊	藤	央 奈	郡山女子大学家政学部講師	(公衆衛生学・栄養疫学)
西	山	慶 治	郡山女子大学家政学部教授	(解 剖 学)
亀	田	明 美	郡山女子大学家政学部准教授	(給 食 管 理 論)
菅	野	美 穂	西郷村立西郷第一中学校栄養教諭	(給 食 管 理 論)
柳	沼	和 子	郡山女子大学家政学部助教	(給 食 管 理 論)
柳	沼	真 美 子	郡山女子大学短期大学部助教	(保 育 学)
山	口	猛	郡山女子大学短期大学部准教授	(教 育 工 学)

郡山女子大学大学院修士論文要旨

(令和5年度)

第28集

郡山女子大学大学院

人間生活学研究科

修 士 論 文 題 名

令和 5 年 度

1. 福島県における雪害対策に関する基礎的研究
ー落雪事故発生時の気象要因についてー
..... 高 橋 真 里 271
Countermeasures against Snow Damage in Fukushima
- Investigating weather factors when a snowfall accident occurs -
Mari Takahashi
2. 建築設計製図教育における学生の思考プロセスの実態
..... 松 本 みさと 279
A Study on the Thinking Process of Students in Architectural
Design and Drafting Education
Misato Matsumoto

福島県における雪害対策に関する基礎的研究

－落雪事故発生時の気象要因について－

高 橋 真 里

Countermeasures against Snow Damage in Fukushima

- Investigating weather factors when a snowfall accident occurs -

Mari Takahashi

The purpose of this study is to investigate the weather factors and regional characteristics relating to the occurrence of personal injury due to snowfall accidents in Fukushima Prefecture, and to propose a new method for preventing snow damage using those factors.

A principal component analysis was conducted using seven weather factors to extract the factors affecting the occurrence of personal injury accidents due to falling snow. The results showed that there was a very high correlation between temperature and snow depth at the time of the accident, which contributed to the occurrence of the accident.

However, since the relationship between temperature and snow depth at the time of the accident was wide-ranging, additional analyses were conducted, and the pattern of snow depth before the accident was categorized into seven groups. As a result, in each seven groups, the main areas where accidents occurred were identified as well as certain regional characteristics were observed. The author will conduct numerical analysis to quantify these characteristics in the future.

1. はじめに

福島県は東北地方の南部に位置し、面積は北海道、岩手県に次ぐ全国第三位である。面積が広く、奥羽山脈と阿武隈高地の二つの山系が存在するため、気候が東西で異なり、山系で隔てられた地域が概ね「会津地方」、「中通り地方」、「浜通り地方」に合致している。それぞれの区域の気候は会津地方は日本海側の気候、浜通り地方は太平洋側の気候、中通り地方はその中間的気候となっている。

福島県には現在13の市、31の町、15の村があるが、そのうち豪雪地帯が20市町村、特別豪雪地帯が14市町村存在している。また、会津地方は年間降水量の約半分が雪によるもので、区域のすべてが豪雪地帯もしくは特別豪雪地帯に分類されている¹⁾。

豪雪による被害状況をみると、人的被害や建築物の倒壊または雪崩等によるインフラ設備の寸断などが発生しており、本研究の対象となる平成14年度から令和3年度の20年間では、平成23年を除き毎年、雪害による人的および物的被害が発生している状況である。その中で、人的

被害における事故原因は屋根からの落雪によるものおよび雪下し中の転落が6割以上を占めており、中でも屋根からの落雪によるものについては気象要因による影響をより多く受けているものと考え、事故発生時の気象要因を把握することは雪害対策に寄与するものであり、重要な基礎資料を得ることとなると言える。また、これら人身雪害の発生状況については、豪雪地帯指定都市においても地域によって差異が生じると考えられるため、福島県内の人身雪害についての特性を検証する必要がある。これらのことから本研究は、落雪事故による人身雪害発生時の気象要因と地域特性を明らかにし、これを用いて福島県内の新たな雪害対策手法を提案することを目的とする。

2. 研究方法

人身雪害の原因は、屋根からの落雪、雪下し中の転落、除雪機によるもの、除雪中に川等に転落、除雪中に一酸化炭素中毒、積雪による建物倒壊、雪崩によるもの、除雪中に病死、その他があるが²⁾、本研究は気象要因が大きく影響する屋根からの落雪による人身雪害について調査・分析するものとする。

事故発生時のデータについては、福島県警察本部地域部総合運用指令課および福島県災害対策課の、平成14年から令和3年の20年間の人身雪害および、建物被害について記録した資料(非公開資料)に基づき分析する。なお、対象のn年度とはn-1年11月～n年5月を示す。また、落雪による人身事故発生時の気象要因を明らかにするため、アメダスによる事故発生時の気象状況を確認し、資料整理を行う³⁾。分析に用いる気象因子は、「平均気温」・「最高気温」・「最低気温」・「降雪量」・「最深積雪深」および「事故発生時の気温」・「事故発生時の積雪深」の7因子とする。

次に発生した落雪事故ごとに、事故発生日までの7日間降雪量をグループ分けし、降雪パターンをモデル化することを試みる。分類した降雪パターンについて、地域特性やその他の気象要因との関係を分析・検討する。

3. 結果

3-1 福島県の人身雪害について

図1に示す通り、福島県内での落雪による人身事故は、平成18年豪雪時が最も多く14件であった。次いで平成24年度に11件、平成30年度に10件の順となっていた。平成24年度、平成26年度では豪雪地帯の会津地方以外にも中通りの川俣町、郡山市、天栄村、浜通りのいわき市、川内村でも落雪事故が発生している(図2)。平成19年度から平成23年度の間は平成22年度の1件を除き落雪による人身事故は発生していない。

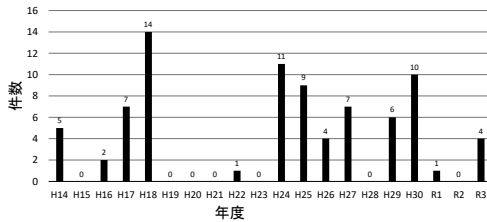


図1 年度ごとの落雪による人身事故発生件数(H14～R3)

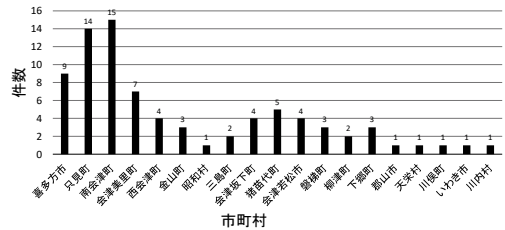


図2 市町村ごとの落雪による人身事故発生件数(H14～R3)

3-2 主成分分析

落雪による人身事故発生に影響する気象要因を抽出するため、7つの気象因子を用いて主成分分析を行った。分析結果では、表1に示すように第三主成分までの累積寄与率が80%を超えた。図3に7因子の変量プロットを示す。主成分負荷量では第一主成分で事故発生時の気温が高く、第二主成分では事故発生時の積雪深が高くなっていた。このことから、始めに事故発生時の気温と積雪深の関係について検討した。落雪による人身事故発生時の気象状況について、事故発生時の気温と積雪深の関係を図4に示す。事故発生時の気温は-7.9℃から7.9℃の範囲

表1 累積寄与率

7変量の総分散	6.89
第一主成分の寄与率	0.48
第二主成分の寄与率	0.22
第三主成分の寄与率	0.17
累積寄与率	0.87

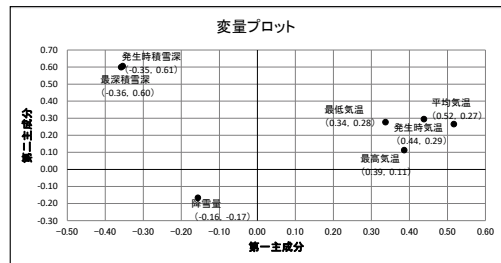


図3 7因子の変量プロット

図で、-5℃から3℃の範囲で事故が多く発生している。また、事故発生時の積雪深は5cmから300cmと広範囲であるため、気温との関係を見ると0℃を超えると14cmから70cm程度の比較的少ない積雪深であっても事故が発生していることが分かる。また、非常にばらつきがみられた事故発生時の気温と事故発生時の積雪深の関係であったが、図4、右図のように事故発生範囲を直線エリアとして着目すると、どちらのエリアも相関係数が-0.94、-0.95と非常に高い相関がみられることが分かった。

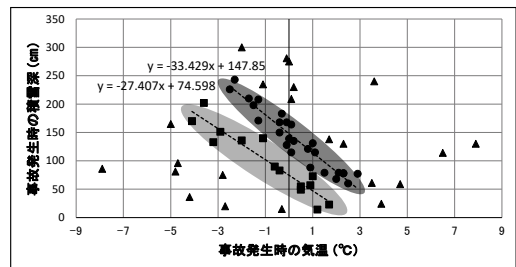
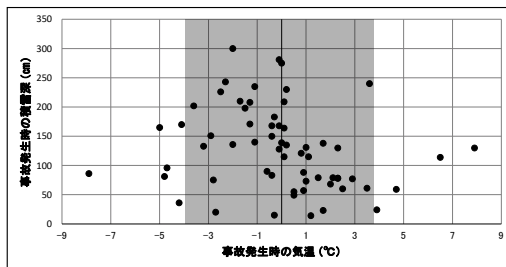


図4 落雪による人身事故発生時の気象状況

3-3 降雪パターンのグルーピング結果

前述の様に、事故発生時の気温と積雪深の関係は広範囲であるため、より詳細な検討が必要であることから、各事故事例について落雪による人身事故発生日までの7日間の降雪量を分析し、この結果を図5に示す。図のように波形の形状毎にモデル化することで7種類にグルーピングすることができた。

分類結果のグループ1について
は、只見町に多く見られた波形で、事故発生6日前の降雪量は比較的多く、下降上昇した後、事故発生日の降雪量は10cm以下となるところが特徴的であった。グループ2の波形形状で発生する事故については、会津地方全体に分布されており、中でも南会津町に多く存在した。7グループの中で最もサンプル数が多く、福島県会津地方の基本波形モデルと言える。特徴としては、事故発生6日前および事故発生日の降雪量は少ないが、事故発生1～5日前の間で降雪量が増え、二山を形成している。グループ3については、グループ1の反転モデルとなり、上昇下降し

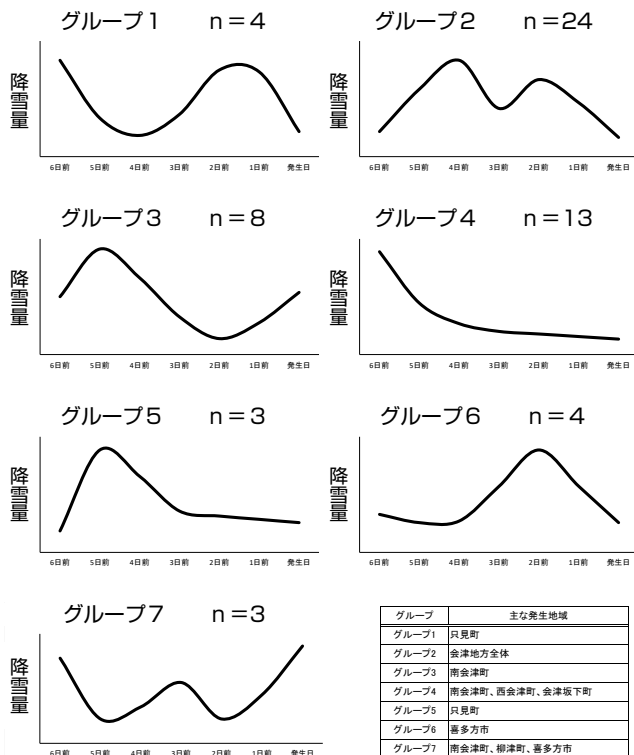


図5 事故発生7日間降雪量のグルーピング結果

た後に事故発生日には降雪量が上昇する特徴が見られた。主として南会津町に多く見られた降雪量のパターンである。グループ4は、事故発生6日前が一番降雪量が多く、その後事故発生日まで下降していくのが特徴的である。南会津町に一番多く見られたが、西会津町や会津坂下町などにもこの降雪量のパターンで事故が発生していることが分かった。グループ5は、グループ4と類似し下降していく特徴を持つが、事故発生6日前の降雪量が少なく、全体として一山を形成している。只見町に多く発生していることが分かった。グループ6については、後半で一山を形成しており、喜多方市に多く見られた波形であった。グループ7は、全てのグループにおいて一番サンプル数が少なく珍しい波形形状であった。事故発生6日前および事故発生日の降雪量が高くW型となる波形である。南会津町、柳津町、喜多方市に見られた。

さらに、分類した7つの降雪パターンの6日前降雪量と事故発生日の降雪量に着目し3グ

ループに絞ることを試みた。6日前の降雪量が多く、事故発生日の降雪量が少ないグループ1・グループ4を合わせてタイプA、6日前の降雪量が少なく、事故発生日の降雪量も少ないグループ2・グループ5・グループ6を合わせてタイプB、事故発生日の降雪量が多くなる、グループ3・グループ7を合わせてタイプCと分類した。図6は3タイプごとの降雪量の箱ひげ図の平均値をとったものである。タイプAは6日前が最大となり、徐々に下降していく形状、タイプBは6日前から上昇し、事故発生日にかけて下降する形状、タイプCは6日前から上昇、下降した後、事故発生日に降雪量が多くなる波形となった。

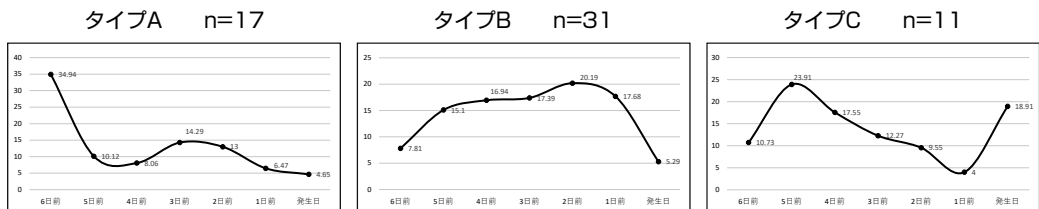


図6 3グループにおける事故発生7日間降雪量の平均値

図7は、タイプごとの降雪量の平均値と平均気温の平均値を並べた図である。降雪量の波形と平均気温の波形が概ね逆の形状となっていることが窺える。

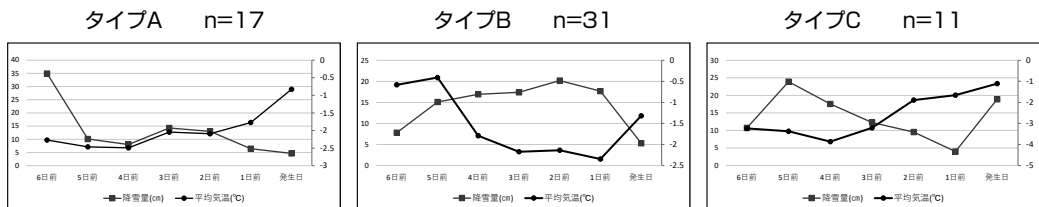


図7 7日間降雪量の平均と平均気温の関係

次に図8は、タイプごとの降雪量の平均値と最低気温の平均値を並べた図である。降雪量の波形と最低気温の波形が概ね似た形状となっている。

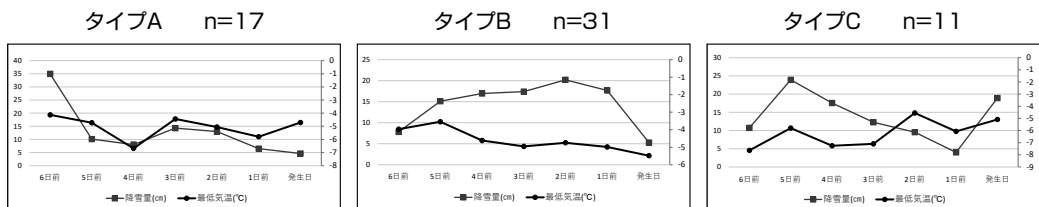


図8 7日間降雪量の平均と最低気温の関係

図9は、タイプごとの降雪量の平均値と最高気温の平均値を並べた図である。平均気温の波形と同様に、降雪量の波形と最高気温の波形が逆の形状となっている。

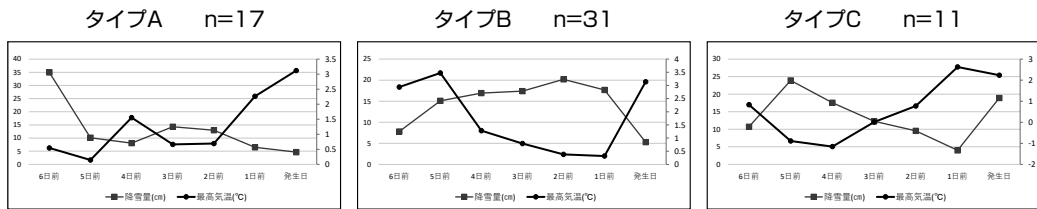


図9 7日間降雪量の平均と最高気温の関係

4. まとめ

本研究の内容をまとめると以下となる。

1. 落雪による人身事故発生状況は、福島県内での落雪による人身事故は、平成18年豪雪時が最も多く14件であり、次いで平成24年に11件、平成30年に10件、そして平成25年に9件の順となった。福島県内の市町村で、落雪による人身事故数が最も多いのは、南会津町で15件、只見町で14件の順であり、平成24、26年度には会津地方以外にも中通りの郡山市、川俣町、天栄村、浜通りのいわき市、川内村で落雪事故が発生していることがわかった。
2. 事故発生時の気温は-7.9℃から7.9℃の範囲であり、-5℃から3℃の範囲で事故が多く発生している。また、事故発生時の積雪深は5cmから300cmと広範囲であるが、気温との関係に着目すると0℃を超えると14cmから70cm程度の比較的少ない積雪深であっても事故が発生していることが分かった。
3. 7日間降雪量と気温の関係については、事故発生日前7日間の降雪パターンごとに7つにグルーピングし、6日前の降雪量と事故発生日の降雪量に着目し、さらにAからCの3タイプにグルーピングを行った。降雪量の平均値と平均気温との関係は、逆の波形形状となった。最低気温との関係は、類似の波形形状となった。最高気温との関係は、逆の波形形状となった。
4. 分類した事故発生の降雪パターンと地域ごとの特性については、7グループの主な事故発生地域を知ることができ、一定の地域特性をみることにできた。中でもグループ2の波形形状で最も多くの事故が発生しており、会津地方全体に分布していることから、福島県会津地方の事故発生基本モデルであることが分かった。これらの特性から今後は定量化を試みるための数値解析を行う予定である。

参考文献

- 1) 国土交通省 地方振興：豪雪地帯対策の推進
(http://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chisei/crd_chisei_tk_000010.htm)
- 2) 沼野夏生：雪害—都市と地域の雪対策—，森北出版株式会社，p.4，1987年2月
- 3) 国土交通省 気象庁：過去の気象データ
(http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/select/prefecture.php?prec_no=36)

本研究に関係する既報論文

- 1) 福島県における雪害対策に関する基礎的研究－人身雪害発生時の気象状況について－, 雪氷研究大会(2021・千葉)講演要旨集, p.92, 2021年9月
- 2) 福島県における雪害対策に関する基礎的研究－人身雪害発生時の気象状況について(その2)－, 雪氷研究大会(2022・札幌)講演要旨集, p.60, 2022年10月

建築設計製図教育における学生の思考プロセスの実態

松 本 みさと

A Study on the Thinking Process of Students in Architectural Design and Drafting Education

Misato Matsumoto

This study presents a statistical analysis of the design process of university students studying architecture.

The findings suggest that most architecture students in lower grades tend to design with partial ideas, while as their grades increase, more students develop whole ideas, indicating that education fosters the ability to create architecture.

Engineering students tend to be more whole-oriented, and many of them design architecture through a similar design process. On the other hand, students in the Faculty of Home Economics tend to be more subjective in their approach, and often incorporate their individuality and personal ideas into their architectural designs. The study revealed that the design process of architecture students varies significantly depending on the design education policy of their respective universities.

1. はじめに

大学等の高等教育機関における建築教育の中で、「建築設計製図」は、建築構造や法規、デザインなどの様々な専門知識の総合力が求められる科目として、最も重要なものと位置づけられている。デジタルツールの発展をはじめとする建築学生の設計手法を取り巻く環境の変化は著しく、学生の現状に合わせた建築設計製図教育を展開するためには、学生の設計時の思考プロセスの実態を把握することがきわめて重要である。

学生の設計思考プロセスについての先行研究では、北川ら¹⁾は、建築学生の「想像力」の低下や、建築家の芦原義信がとなえた「全体発想」と「部分発想」の視点のうち「部分発想」への偏りがみられると指摘する。本研究では、これまでの先行研究を参考に、建築学生が建物を設計する際の設計過程の実態把握や学生の想像力について定量的な分析を行い、新たな切り口から設計思考プロセスの実態把握を目指す。この思考プロセスの実態把握は、今後の建築設計製図教育の実践と学生指導において大きな意義を持つ。本研究を基礎とし、学生の思考プロセスについての現状把握を進めていくことで、建築を取り巻く環境が著しく変化している学生の現状に合わせた指導アプローチの実践に繋がり、根拠に基づいた有効度の高い教育を展開することが可能になるだろう。

2. 方法

本研究では建築設計の課題時の学生の思考プロセスの実態を二つの調査を用いて明らかにする。調査Ⅰは、建築教育がまだ熟達していない学生の設計思考プロセスの把握を目的とする。小説解説型課題を用いた分析を行う。北川ら¹⁾の研究を参考に、学生の提出物である図面類と学生の回答したアンケートをもとに分析を行う。調査Ⅱは、学年が上がり建築教育を経た学生の設計能力の成長と設計思考プロセスの変化傾向を明らかにすることを目的とする。調査は、思考プロセスを大まかに把握する第一段階と、多数の学生の思考プロセスからその傾向の実態をみる第二段階に分けて行う。第一段階では設計製図課題への取り組み方についてヒアリング調査を行い、第二段階では、第一段階のヒアリング結果をもとに作成したアンケートを実施する。

調査終了後、調査Ⅰと調査Ⅱの結果を比較し、建築教育を重ねた学生の思考プロセス傾向を分析する。同時に調査Ⅱ内の2つの段階で得たデータを比較し、学校ごとの教育方針による思考プロセスの違いを明らかにする。調査Ⅱのそれぞれの段階でデータの取り方が異なっていることから、本分析では思考プロセス傾向の大まかな確認を目指す。

3. 小説解説型課題を用いた建築初心者設計手順と創造性(調査Ⅰ)

(1) 小説「寺内貫太郎一家」と設計課題について

この課題は、郡山女子大学家政学部生活科学科建築デザイン専攻(課題時は人間生活学科建築デザインコース)において、1年次後期に受講する建築設計製図Ⅰの4番目の課題として取り組まれているもので、物語の文章から建物を二次元的または三次元的に把握していく能力を養うことを目指して実施されている。使用する課題小説は向田邦子著『寺内貫太郎一家』(サンケイ新聞社出版局、1975年)で、戦前の家庭や住まいを描いた作品である。前時代的な住まいを舞台としており、学生が生まれ育った環境とは大きく異なる環境が描かれているため、学生の想像力が求められる課題である。課題提出物は、平面図兼配置図、立面図、パース図、住宅模型で、課題提出後にアンケートの記入が指示されている。

表1 部屋の登場回数

分類	項目		回数	最初に 考えた項目
共有空間 (62%)	茶の間		47	10
	居間			17
	台所		20	
	縁側		19	
	廊下		12	
	母屋		8	
	玄関		7	4
	風呂		5	
	脱衣所		3	
便所		2		
仕事空間 (27%)	仕事場		29	2
	事務所		21	6
専有空間 (10%)	隠居所	隠居所	7	11
		きんの部屋	4	
	ミヨ子の部屋		6	4
	周平の部屋		1	
計			191	44

(回)

(人)

文章から建物や部屋に関する用語を抜き出すと、表1に示す14種類が確認できる。空間により用語を分類すると、「共有空間」と「専有空間」、「仕事空間」の3つに分けられる。空間別で見ると、「共有空間」は123回(62%)、「仕事空間」は50回(27%)、「専有空間」は18回(10%)であり、圧倒的に「共有空間」の描写が多い。部屋名や建物名の他に、空間を想像させる用語としては、

16種類が確認でき、複数回登場した用語のうち最多は事務所にある「神棚」9回、次に「木戸」3回、「跳ね橋」3回、「物干し」2回となっており、「木戸」や「跳ね橋」は建物形状に結び付く用語である。

(2) 学生の回答にみる設計手順と空間創造の方法

調査Ⅰにおける学生の設計思考プロセスを把握するため、北川ら¹⁾の研究を参考に、建築設計製図Ⅰの提出物の図面類45人分、アンケートを用いて分析する。

まず、設計時にどの部屋から想起するかを把握するため、初めに考えた部屋を集計した。結果は表1に示すとおりであり、最も回答が多かったのは「居間」の18人であった、この質問の回答形式が記述式であったため、小説に登場しない「居間」が登場している。空間分類でみると、「共有空間」から考えた人は70%(31/44人)「仕事空間」から考えた人は18%(8/44人)、「専有空間」から考えた人は11%(5/44人)であった。小説内に登場する回数の割合と似た数字となっており、小説での登場回数によるイメージ形成の影響がうかがえる。

課題図書における室の頻出数と空間想像の関係をみると、アンケートで回答数が多かった「茶の間」は小説内での出現回数も最も多く、登場回数が学生のイメージ形成に影響したことが推測できる。また、作中について多く登場していた仕事空間や「隠居所」、「ミヨ子の部屋」についても、初めに考えた部屋としての回答が多く上がっていることから、小説での登場回数がイメージのしやすさに影響していることがうかがえる。

次に、空間創造の方法を提出課題におけるイメージ順についてのアンケートの回答を用いて検討する。課題提出の際は平面図兼配置図と立面図、イメージ図の提出締め切りが同時に行われており、学生が思考を始めた順序は図1に示す5パターンがみられた。結果をみると、半数以上の学生が設計の際に平面のプランニングからはじめ、立体へと順番に持ち上げ、最後に空間をイメージすることがわかる。今回の課題が文章の読み取りを軸とするものであることによる影響はある

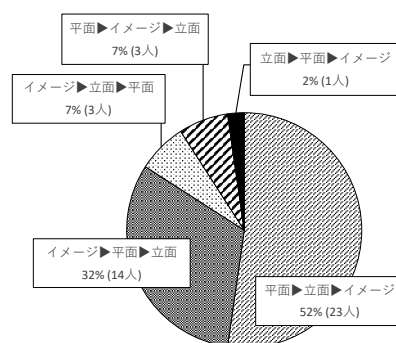


図1 設計を進めた工程

ものの、空間描写のばらつきにより必要諸室が単位化しており、結果として空間イメージを浮かべるより先に与条件をパズルのように二次元的に組み合わせていく「部分発想」的な設計思考が発生していると推測できる。これは、平面と立面を考える際に難しかったことに関する設問の回答でも裏付けられ、「部屋の繋がり」を考えることが難しかったと答えた人が61%(27/44人)と最も多かった。部分発想から全体発想へ思考を移行させることの難しさがうかがえる。

一方、次点となった回答はイメージ図を最初に創造する学生であり、中でもイメージ図から平面図、立面図の順番に取り組む学生がほとんどであることから、三次元的思考を二次元に落

とし込んで設計する学生が建築の初心者レベルで一定数存在することが注目される。ただし、イメージする上で困った事を尋ねた設問では、「イメージは浮かぶが絵にできない」と答えた学生が54%(24/44人)であり、空間イメージを形に起こす「創造力」に対する学生の苦手意識の存在が推測できる。

4. 建築学生の設計製図課題にみる設計プロセスと全体発想(調査Ⅱ)

(1) 調査対象と方法

調査Ⅱでは、二段階に分けて調査・分析を行い、建築教育を重ねた学生の設計思考プロセスの実態を分析する。第一段階では学生の設計プロセスの大まかな傾向を探ることを目的にヒアリング調査を行った。調査の対象は郡山女子大学建築デザイン専攻に在籍する3・4年生とした。調査は建築設計製図の授業内で行い、各学年それぞれ2課題について、現在取り組んでいる課題の中で行っている設計の流れや空間認知、模型への取り組み方等について尋ねた。3年生の課題は「こども園」「美術館」であり、4年生の課題は「100年住宅」「卒業設計」である。ヒアリング調査では設計の流れについて延べ42件のデータが得られた。第二段階では、学生の思考プロセス傾向について幅広いデータを集めることを目的に、第一段階のヒアリング調査の結果をもとに作成したアンケートを用いて調査を行った。調査の対象はA大学工学部建築学科の学生2・3・4年生とした。アンケートは第一段階で行ったヒアリング結果をもとにGoogleフォームにて作成した。質問は11項目あり、設計の流れや設計の際の空間認識、図面や模型の作成などについて尋ねている。アンケート調査では計156件のデータが得られた。調査終了後、第一段階と第二段階の調査結果を統合した計156件のデータを用いて、全体傾向や学年ごと・大学ごとの傾向を分析した。

表2 設計プロセスの傾向

(2) 学生の設計プロセスの傾向と全体発想との関係

設計の流れを尋ねた設問の回答について、項目別に回答した人数を示したものが表2である。回答時の順番ごとに上位3つの項目をみると、「コンセプト」「情報収集」「必要な空間を挙げる」の3つの項目が設計時の初期段階で行われる思考手順といえる。設計中期は「必要な空間を挙げる」の他に、「ゾーニング」や「平面計画」「ブロックプラン」などの二次元的プランニングが多く、5番目以降はこれらに加えて「立面計画」や「断面計画」、「動線計画」「配置計画」が主流となり、立面や断面などの立体的に設計するパターンと、動線や配置などの二次元的な計画を考

分類	項目	全体 発想 目	設計の流れ							
			1 番 目	2 番 目	3 番 目	4 番 目	5 番 目	6 番 目	7 番 目	8 番 目
方針 決定	コンセプト		86	46	17	3	2		3	2
	情報収集		71	45	14	6	1	1		3
	必要な空間を挙げる		13	55	50	13	3	2	2	
二 次 元	各空間の規模を検討(3D)					2	4	2	12	11
	各空間の規模を検討(CAD)			2	3	4	4	9	5	4
	各空間の規模を検討(紙面)		2	4	8	4	8	11	7	4
	ゾーニング	◆	6	13	30	37	18	2	2	1
	ブロックプラン			1	11	21	25	4	1	1
	平面計画		3	12	30	42	34	41	17	11
三 次 元	配置計画	◆	3		9	10	14	12	17	14
	断面計画			3	2	4		21	15	21
	外観イメージ	◆	4	2	1		13			
	空間イメージ		3	1	2					
	立面計画		3	4		11	24	20	28	16
	動線計画	◆	1	2	5	17	12	22	23	12
そ の 他	レイアウトの検討		2	7	10	10	12	6	10	16
	法的規範			1		3	1	4	6	4
	採光計画	◆	1		2	2	7	14	12	15
	設計未完了					3	9	16	27	38
	設計完了					1				23

凡例：黒塗り白文字は上位3項目

n=198 (人)

えるパターンに分かれること傾向がみられる。詳細にみると、課題に対して情報収集やコンセプトの決定、必要な空間の把握などの「事前準備」を初めに行う学生の割合が88%(175/198人)と非常に高くなっている。設計を始める前段階で行う事前準備を必ず行う学生が多く、設計製図教育において指導されているサーベイやモチベーションの把握によるコンセプトの決定が習得されているのがわかる。

次に、各学生の全体発想に関わる項目の有無をみると、半数が全体発想をしていることから、1年次では能力不足がみられていた全体発想の思考が建築教育の積み重ねにより培われたといえる。これを学校別に学年ごとでみると表3に示す通りとなる。A大学では思考プロセスを全体発想にむけるための教育指導が行き届いており、一律な教育方針で学生の設計能力育成に取り組んでいると読みとれる。4年生で割合が減少する点については、3年生までの間に設計技術を習得させ、4年生では技術習得以降、ある程度の設計プロセスについての自由度が加わってきている可能性が考えられる。一方郡山女子大学では、全体発想を行う学生の割合が全体的に低く、部分発想を用いて設計を行う学生が多い。これは、建築教育の特色の違いや教育方針によるものと推測する。郡山女子大学の建築教育は工学部の建築とは異なり、生活者視点を重視したものである。部分設計を用いて詳細な単位で空間を検討することで、利用する側にマイナスが少ない、生活者が使いやすい設計を行うことが可能となることから、部分発想を重視した設計こそ「生活者視点の建築」であるといえ、少人数制教育のため、個性に合わせた教育活動が展開したことも理由と考えられる。

表3 全体発想を行う学生

大学	学年	全体発想		割合
		なし	あり	
A大学	2年	43	25	36%
	3年	2	51	96%
	4年	10	23	69%
郡山 女子大学	3年	13	13	50%
	4年	11	5	31%

(人) (人)

(3) 学生の空間把握タイプと傾向

設計過程の回答を空間認識別に分類し、思考パターンを二次元的・三次元的な観点に分けて、およそその思考プロセスを考察した結果、学生の思考パターンは大きく3つに分けられた。思考パターンの種類とその内訳は表4上部に示すとおりである。この思考パターンをさらに細分化し、学生の設計プロセスを表4下部に示す3タイプに分類し、各タイプの特徴と学校ごとの傾向をみた。パターンAの「二次元完結型」の学生は、部分発想の積み重ねによる設計プロセスを持っており、設計教育の際には立体間隔や空間把握に繋がるような想像力の育成的指導が求められる。パターンBの学生並びにパターンCかつ全体発想に至っていない学生は、部分発想又は平面を用いた全体発想を起点に立体物や空間を想像しており、「足し算型」の思考プロセスを用いて設計を行っていると考えられる。パターンCかつ全体発想を用いた設計を行っている学生は、想像性、創造性がともに高く、設計物の全体像を把握しながら設計を行うタイプであると考えられ、芦原のとなえる全体発想を兼ね備えた「建築家型」の設計を行うことのできる学

生であるといえる。各学校での思考パターンの分布は表4の通りである。分布が一様であるA大学では均一な最低限度の設計教育を受けることができる環境が整っている反面、集団教育による個性の伸ばしにくさが教育課題である可能性がある。分布にばらつきがみられる郡山女子大学においては、「建築家型」の学生の高さから個性や自由な発想を伸ばす教育が行き届いていることがうかがえる。

表4 大学・学年別にみる空間把握

		[パターンA] 二次元のみ	[パターンB] 二次元から 三次元	[パターンC] 三次元から 二次元
全体数		108 (52)	74 (34)	16 (11)
A大学 n=156	2年	28 (12)	41 (13)	
	3年	37 (22)	17 (9)	
	4年	15 (8)	13 (10)	5 (5)
	小計	80 (42)	71 (32)	5 (5)
郡山 女子大学 n=42	3年	17 (7)		9 (6)
	4年	11 (3)	3 (2)	2 (0)
	小計	28 (10)	3 (2)	11 (6)

二次元完結型 足し算型 建築家型 (人)

※ () は全体発想を行っている学生数

5. まとめ

建築教育の積み重ねの少ない1年生の段階における設計プロセスには「部分発想」的な設計思考がみられ、「全体発想」的な設計思考の不足がみられたが、2～4年生の設計過程では「全体発想」を行う学生が多くみられることから、建築設計教育により全体発想の能力が身につについていくことが明らかになった。同時に、受けた建築設計製図教育の方針により「思考プロセスに」顕著な違いがみられた。

工学的な視点で建築教育を受ける学生は、一様な方針で「全体発想」を養う教育の実践から、学生の思考プロセスの一律化の傾向がみられた。均一な最低限度の設計教育を受けることができる環境が整っている点が利点であり、集団教育による個性の伸ばしにくさが教育課題である可能性がある。家政学を基礎とする郡山女子大学においては「部分発想」を中心に設計をする学生が工学部の学生と比較して多く、部分発想の利点を生かした設計が「生活者視点」に重きを置いた設計に繋がる可能性がみられる結果となった。個性や自由な発想を伸ばす教育が行き届いている利点がある反面、二次元を三次元に立ち上げる「創造力」の底上げが課題であると推測できる。したがって、今後の建築教育の更なる質の向上に繋げるには、各学校の特色に合わせながら、二次元から三次元へ空間を広げる教育方針を検討していくことが必要であろう。

【参考文献】

- 1) 北川圭子・山形敏明・阿部恵利子：建築製図教育における思考プロセスに関する実験的観察—解読型課題への取り組み—, 郡山女子大学紀要, Vol.46, pp31-40, 2010.3

【既発表論文】

- 1) 松本みさと, 山形敏明, 阿部恵利子：設計製図教育における思考プロセス—解読型課題への取り組みから—, 日本建築学会大会 (2023・近畿) 学術講演梗概集, 教育, pp13-14, 2023.7

郡山女子大学研究紀要規定

郡山女子大学研究紀要委員会

郡山女子大学研究紀要規定

目 的

第1条 本学に於いて行われた重要な研究成果・結果の記録保存と関係諸学会への寄与を目的とする。

名 称

第2条 本学の紀要を郡山女子大学研究紀要とする。

内 容

第3条 本学教員の行った重要な人文科学, 社会科学, 自然科学等の各分野にわたる研究成果・結果の発表をその内容とする。

編集委員会

第4条 研究成果・結果の論文の採否を審議し, 併せて編集・発刊の事務を遂行するために編集委員会を設ける。

- (1) 構 成 員 委員長 本学学長
委 員 学長委嘱による専任教員若干名
- (2) 委 員 会 委員会に提出せられた各研究成果・結果の論文を検討し, その採否を決定し, また紀要の体裁等について審議決定する。
- (3) 編集事務 本委員会の委員が遂行する。
- (4) 原稿の募集及び締切
5月に学内公募する。原稿締切は9月30日とする。

著作権と公開

第5条 紀要は印刷物と電子データにより公開する。紀要電子データは郡山女子大学付属図書館リポジトリで公開される。紀要に掲載された著作物の著作権は紀要編集委員会に帰属する。

発刊期日

第6条 毎年1回とし定期(3月)に発刊する。

郡山女子大学研究紀要投稿規定

1. 郡山女子大学研究紀要は年に1回発行するものとする。但し、大学で記念行事・事業等がある年はその限りではない。
2. 論文の投稿は原則として本学専任教員・非常勤講師・大学院生および本学退職教員に限り、共同・分担執筆者についてもそのいずれかであるものとする。尚、これ以外のものについては、紀要編集委員会での協議の上、委員長(学長)が決定する。
3. 投稿論文は、他雑誌等への未発表のものに限る。
4. 投稿論文の種類は原著論文、研究ノート、報告とする。
5. 論文募集については毎年5月に知らせる。投稿希望者は論文タイトルと抄録(和文または英文等)を添えて紀要編集委員会まで提出する。
6. 原著論文枚数は和文横書きワープロ原稿で42字33行(A4判)(紀要様式)の15枚(15ページ)以内とする。タイトル、文献註、欧文要旨、図表はこの15ページの中に含まれる。研究ノート、報告は和文横書きワープロ原稿で42字33行(A4判)(紀要様式)の10枚(10ページ)以内とする。タイトル、文献註、欧文要旨、図表はこの10ページの中に含まれる。
7. 論文提出締切は9月30日とする。
8. 論文は「執筆要領」に従い、和文論文は、英文(或は独文・仏文等)の抄録、英文、独文、仏文の論文については和文抄録を論文巻頭に添えて提出する。
9. 論文執筆者は当該論文全てに責任を負うものとし、共同・分担執筆者についても同様に当該論文全てに責任を負うことのできる者とする。
10. 論文審査はレフェリー制とし、原稿の取捨選択、加除訂正、掲載順序の指定(校正については執筆者)などは原則として紀要編集委員会が行うが、場合によっては、他に査読委員を選出する。その場合、紀要編集委員会での協議のうえ、委員長(学長)が決定し任命する。
11. 論文執筆者には『郡山女子大学研究紀要』1部と、当該論文の「抜き刷り冊子」20部を贈呈する。共同・分担執筆者には『郡山女子大学研究紀要』1部を贈呈する。
12. 論文原稿は郡山女子大学研究紀要編集委員会に提出する。

〒963-8503 福島県郡山市開成3丁目25番2号

TEL 024(932)4848 FAX 024(933)6748

郡山女子大学研究紀要編集委員会

「研究紀要」執筆・校正要領

1. 原稿は和文横書きワープロ原稿で42字33行(A 4判)(紀要様式)の15枚(15ページ)以内とする。タイトル、文献註、欧文要旨、図表はこの15ページの中に含まれる。
研究ノート、報告は和文横書きワープロ原稿で42字33行(A 4判)(紀要様式)の10枚(10ページ)以内とする。タイトル、文献註、欧文要旨、図表はこの10ページの中に含まれる。
論文採択決定後、執筆者は決定稿及び図表原稿とともに、レイアウト原稿を提出する。
これらの原稿は基本的に電子データで編集委員会まで送付または持参する。
2. 原稿には表紙をつけ、表題、著者名(フルネーム)(以上英文付記)、所属名を書く。
3. 欧文要旨は100語程度でまとめる。但し、国文学等の縦書きの論文においては、英文表題、英文抄録を取り除いてもよい。
4. 文献は引用順とし、末尾文献表の番号を片括弧をつけて右上肩に記す。

例：柴野ら¹⁾によれば・・・。

文献引用例

雑誌の場合は、著者名：表題、雑誌名、巻数、頁-頁、年号の順に記す。

- 1) 柴野昌山：社会化論の再検討，社会学評論，107，21頁，1977.
- 2) 古屋野正伍：現代家族の構造と機能，教育社会学研究，21集，5-13頁，1966.
- 3) A.W.Gouldner：Metaphysical Pathos and the Theory of Bureaucracy，American Political Science Review，68，pp.496-507，1955.

1)－3)の註：原則として号数は記載しないが、通巻頁のない場合は号数を記すこと。

雑誌名は、その雑誌が使用している略名とする。

単行本の場合は、編・著者名、書籍名、頁、発行所、発行年の順に記す。

- 1) 小笠原浩一編：行政とボランティア，58頁，中央法規出版，1996.
- 2) 川北 稔：工業化の歴史的 premise，115-116頁，岩波書店，1983.
- 3) C.Nakane：Japanese Society，Berkeley and Los Angeles，University of California Press，p.16，1972.
- 4) F.Grundy：Preventive Medicine and Public Health，H.E.Lewis Co.Ltd.，pp.32-33，1960.

1)－4)の註：引用箇所の頁数を記すこと。但し、全般的に引用する場合は頁数を略してもよい。

5. 紀要論文は締め切り提出後、査読を行い、採択の可否判定が行われる。査読には修正条件が加えられることもあり、投稿論文がそのままの形で掲載されるとは限らない。よって、投

稿論文は紀要に準じたタイトル，欧文タイトル，欧文要旨，本文，図表をレイアウトした印字原稿として1部提出する(提出先はグループウェアの紀要編集委員会 提出用紀要編集宛とし，ワードで添付ファイルとして提出する)。

6. 紀要掲載採択後に，決定原稿は電子メディア原稿(本文，図表)とレイアウト原稿の両者を指定日まで提出する。
7. 校正は再校までとする。
8. 校正段階での大幅な文章直しや内容変更は，原則として認めない。
9. 初校から校了(責了)まで執筆者は，担当編集者と常に連絡できる状態にしておく。

郡山女子大学研究紀要編集委員会

編 集 委 員

編集委員長 関 口 修 (郡山女子大学及び郡山女子大学短期大学部学長 教授)
編集委員 紺 野 信 弘 (郡 山 女 子 大 学 教 授)
山 本 裕 詞 (同 教 授)
小 林 徹 (同 教 授)
會 田 容 弘 (郡山女子大学短期大学部 教授)
山 上 裕 子 (同 教 授)
藤 田 健 (郡山女子大学附属高等学校 教 諭)

令和6年3月29日 発 行

(非売品)

紀 要

第60集

発 行 者 郡 山 女 子 大 学
郡山市開成3丁目25番2号
印 刷 所 株式会社 日進堂印刷所
福島市庄野字柿場1-1

BULLETIN
OF
KORIYAMA WOMEN'S UNIVERSITY
VOL. 60

Articles
Research Notes and Reports